
KAMUI

優女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KAMUI

【Nコード】

N8286Q

【作者名】

優女

【あらすじ】

春雨に快援隊が商談！？その理由とは！？それは一人の男が友達の為に果たす約束だった――。その他、高杉の陰謀とか銀さんが記憶を改竄され春雨の幹部になるとか家族喧嘩の行く末とか、更に地球そっくりの不気味な惑星とか、かぶき町主催の運動会とか

第一話

最近3Dとか言ってるけどアレって高いの？エロポイント？っていつ

「テガミ魂」に引き続き、第二作目です。一作目に比べてかなり意味が分からない内容です。

第一話 最近3Dとか言ってるけどアレって高いの？エロポイント？っていつ

剛なる者の血をもって初めて俺の魂は潤う

「団長オ、お前さん…また侍相手と派手にやらかしたらしいじゃないかい」

「んゝ。そんなことどうでもいいじゃない。それともただ阿伏兔がお節介なだけ？」

春雨の雷槍と恐れられる宇宙海賊春雨の第七師団団長、神威。神に威とかいて「かむい」って言うの？なーんて思ったりもしたけど今じゃどうでもいい！このクダリを話してる俺でもくだらなーい！

「阿伏兔、余計なナレーションはいらないから本題を簡単に言ってるナレーション…。この物語の主人公は団長であるのに対して雑魚キヤラ、映画にもちよろつとしかでてない俺がナレーションを務めているのか、…謎である。」

「別に用なんてないけどねエ。…まアつまり…」

「分かってるよ。遠回しに仕事しろって言うてんでしょ」

よ、読められたアアアア！！

なんと言った。このガキ、ただの考えなしとてつきり思っていたが…なるほど。もうこれだけの付き合いがあるから腹を読まれるのも時間の問題か。

おっと、そういえば今俺たちの状況を説明していなかった。

「ねエ阿伏兔。この鉄格子、力を合わせたらはずせれるんじゃない？」

相変わらずのニコニコな顔。

「この鉄格子は俺たち夜兎でも折ることができない超合金でできんだ。ここは大人しく反省するしかないさ」

「俺に反省という文字は頭にないになア」

「辞書で調べてマーカー引いときなさいって学校の先生ですか」

そう。春雨宇宙船の鉄格子の中。捕まっちゃったんだよ。え、何でって？言っとくが俺は何にもしていない！団長が高杉っていう侍とお偉いさんやっちゃっただけで俺は関係ない！連帯責任だって？ふざけるのも大概にしてくれよ。俺はやらかしたの”や”の字もない！

「お腹すいたなア。…まアいざとなったら阿伏兔。お前を食う」

なーんて言われたら普通驚くだろ？でも俺は驚かない。だって5284回目だもの。日常茶飯事にはいちゃったよ。

「好きにしてくれや、団長。だが、仕事は真面目にやってくれよ」
うん、の返事もない。

「オイ。お前らもう出ていいぞ」

見知らぬ看守の天人が鉄格子の鍵をあけた。

「さア、地球にでも行つて銀髪のお侍さんと一戦加えてくるか」

「団長オオ!!」

春雨第七師団団長、神威は全く人の話を聞かない。金輪際聞かない!!

第二話

えっ、ちょっと待ってよ。勝手に遂行しないでよー！おじさん困るか
とんでもない話になっています。
壊れました。私が。

第二話

えっ、ちょっと待ってよ。勝手に遂行しないでよ！おじさん困るから

宇宙最凶とも呼ばれる宇宙海賊春雨。その第七師団団長が神威である。己の欲求を満たすまで追求する、男の中の男…って格好良く言ったらそうだけど違う！ただの暴徒だよったく。

「ねエ阿伏兔。早く地球に行つてあの銀髪のお待さんと一戦交えたいなア」

これも2548回目である。知らねーよ。俺は面倒事は御免被る。

「いい加減にしてくれよ団長、銀髪の侍だア？あの鳳仙を倒した？無理無理。あの夜王鳳仙に勝るような男に団長はかなうわけないさ」

アンタでも勝敗付かずに終わっちまったんだからよ。なーんて言いたかったけどそこまで言ったら抹殺されるから押さえましたよおじさん。

…まア、団長の事で人生相談を受けたいと日々この頃思う。

はあっとため息をつく。

「お前らいいか。ここは公平だ。勝手も負けても文句なしだ」

「はい！」

「おうネ！」

ここはかぶき町にある、どこにでもある万事屋。今俺たちは一世一代の絶体絶命な危機に陥っている…！

こんにちは。万事屋なんてどこにもはないんですけど…。

オス！オラ悟空！今なんやかんやで絶体絶命のピンチにわくわくしてっぞ！

「ちょっと待ったアアア！このクダリ、絶対どっかで見たことがある…！」

「うつせーな。もう読者の皆様は忘れてるって」

「そうネ！重い過去は引きずらない。明るい未来を夢見て進めばいいだけアル！」

つーわけで、ここからはこの坂田銀時の提供でお送りします。

「真面目にやれエエエエ！」

うし。じゃあこの絶体絶命の状況をお教えしよう。

「おせーよ！」（新八）

実は一人の依頼人が万事屋にやって来た。そいつは宇宙最強とうたわれる宇宙海賊春雨第七師団団員、阿伏兔と言う奴だ。コイツがどうにも病んでいて……。

オス！オラ悟空！阿伏兔とは同族絡みで知り合いだ！オラ、ドキドキすっぞ！

神楽ちゃん、うるさい。

「頼むよオ、万事屋の旦那ア！銀髪の旦那ア！」

「あの、どっちかにしてください」

依頼の内容は新しい転職先を紹介すること。

「…あのオ、確かお兄さん…春雨の団員じゃなかったっけ」

「まア上司が神威だもんな。身勝手な正確に頭にきたアルか？分かる分かるヨ」

「そういうことなんだけどねエ…。おじさん疲れちゃったよ。お家でメガドライブしてー気分だ」

病んでるウウウー！めっちゃくちゃ病んでるー！ヤバイよ！違う意味でヤバイよー！メガドライブなんてそんなこと今時する奴なんていねーよ！？任天堂に移行しようー！！？

「…新八、お前が案内してやれ。お前がこの3人の中で最も人間らしい」

「何言ってますか！ここは同族の神楽ちゃんがいいでしょー！」

「夜兎2人で町にでるなんて危険アル。おっさんにはおっさんがいいネ」

「僕も銀さんがいいと思いまーす」

コイツら…？

「や、もういいさ。銀髪の旦那」

「結局そっちにしたの」

「俺もバカだよ。団長は銀髪の旦那狙ってるのに、部下の俺がアంతに接触しちゃうんざ……。でもフラッと勝手に万事屋に来てしまった。…どうかしなかったア。こいつア本当にヤベーや。あ

りがとよ、万事屋の旦那。……帰ってメガドライブでもやるか」

つつこみどころが満載なんですけどオオオオ!!

結局どつちなのか!? もうメガドライブはやめようや!! なんかかわいそうになってきた…。泣いていい?

「ちょっと待つアル」

「もっと…僕らを頼ってください」

「え…?」

新八と神楽の目からは涙が流れていた。

「…ってあの銀髪が言っていました」

俺エエエエ!!……!!……!!???

言ってな…

「ありがとう、天パの旦那ア」

だアカアら、言ってねエってエエエエ!!
それから一つに統一しろオオオオ!!!!!!

第二話

えっ、ちょっと待ってよ。勝手に遂行しないでよ！おじさん困るから止まりませんね…（笑）

文字多くて読みにくいですね…、そのへんはすいませんと中座して手を床に付いて頭を深く下げたいと思います。

第三話

3DSってアレ本当に立体なの？飛び出てるの？しっかり説明してよ

提供とはナレーションのことです。

第三話

3DSってアレ本当に立体なの？飛び出てるの？しっかり説明してよ

「阿伏兔の奴、どこいつちやったのかな？」

俺は一人団子屋で団子ではなく飯を食っていた。ここからは神威の提供でお送りするよ。

「やっぱ地球のご飯は美味しいね」

「アンタ何合食べれば気が棲むんだい！ウチは飯屋じゃないんだよ！団子屋なんだよ！団子食いな！！」

と言うおばちゃんは鬼のように怖かったけどそんなの関係ない。腹が満たさせるのなら、多少のお説教も気にしない。

「おばちゃん、お勘定」

「はいはい」

俺は適当に金を出し、団子屋を後にした。ビジネスで地球に来てるけど俺は銀髪のお侍さんに会う。そっちの方が俺にとってはビジネスの一貫だ。

「アレ？」

そっぴや阿伏兎の姿がない。

「ま、いつか」

阿伏兎なんかどこに行こうが関係ない。
銀髪のお侍さんに会えればいいだけ。

「晋助様ア！ちよつ、晋助様は！？」

こつからは私、晋助様率いる鬼兵隊の紅一点、来島また子の提供で
お送りするっス！

「アレこれはまた子殿」

「武市先輩！晋助様はどこにいるっスか？」

「私も分かりませんねエ」

「たく、こんな非常時の時にどこに行ってるんスカア」

「なんかあつたんですか？」

「春雨第七師団団長がみえてるんス！」

「ほう」 武市先輩は腕組みをしたっス。てか、提供少くないっスカア？

「でも晋助様は今いないし……」

「万濟殿もいませんねエ」

どこにいったんスカね。これは溜め息をつくしかないっスね…。

第四話 東京に住んでる人って、なかなかデイズニーじゃないんじゃない？

「いい転職先つてもねエ」

「なんやかんやで俺はこの阿伏兎つーおっさんと転職先を探していた。」

「はつきり言って歩きづらい…。刺さるような視線、夜兎特有の傘、そして立派な巨漢！戦闘本能丸出しだろ！！そこら中のガラ悪そう。な奴がジロジロ見てるよ！！」

「あ、あの…ご希望とかございますう？」

「やっべエ！手汗びっしょりイイ！！」

「希望ねエ、銀髪の旦那がいいと思う職場とかあります？」

「俺がいいと思つた職場アアア！？…白い粉とか運ぶアレ的な職場っていうの？そんな所が一番溶け込める…ってそれ職場関係ねエエエ！！」

「工場とか？」

「工場ねエ、おじさんメガドライブとか製造する所だったらいけるかもだけどなア」

「メガドライブ製造工場オオオ！！？」

「聞いたことねーぞ！！今までジャウタウェイとかパトリオットとか訳の分かんねー工場ならやったことあるけども！！」

「メガ…？ドライバーとか向いてるんじゃないんですか？」

「メガドライブだって」

メガドライブから離れるオオオオ！！

「今ならバーチャルコンソールで携帯とかにダウンロードできんでしょう？銀髪の旦那」

いや、分かんねーよ！！

そんな80年代物のセガのゲームなんて！！

「あ、や、でも…やつぱり今はDSとかWiiじゃない…？ホラ今メガドライブはちょっと…」

「もういいよ。銀髪の旦那。もう一度団長と話つけてくる」

「あつオイ！」

「タカスギシンスケはどこだい」

こつからは神威の提供でお送りするよ。
はつきり言つてこの小説の主人公は俺なんだからずっと俺の提供でいいんじゃないかな。

「待たせたな」

「おっ来た来た」

相変わらずの殺気漂う風貌がなんとも言えないね。あの目を見てると…修羅が血、夜兎の本能がうずくね。

「…アンタが地球に来たってことは…なんかまた春雨でしかしたか？」

「なーんも？」

「じゃあ大量殺戮兵器でも開発したのか？」

「んーまあそんなところかな」

タカスギシンスケは俺をジロジロ見るなり、席を外した。

「お前のことだからまたあのバカとやり合おうって考えてるかもしれないが…。せいぜい気をつけるこつたな」

バカ…？バカって誰だろう。確か前にも言ってた気が…ま、いつか。

地球征服とか、宇宙制覇とか俺は全く興味ない。

俺が興味あるのは強者のみ。

第五話 パトリオットの意味を妹は知らなかった（前書き）

今更ですが訂正です。

第2話

正確↓正確

第3話

ジャウタウェイ

↓ジャスタウェイ

以上です。

本当に申し訳ございませんでした。

それでは本文をどうぞ

（・・・）

第五話 パトリオットの意味を妹は知らなかった

「ったく、あの夜兔のおじさんどこ行っちゃったんだよ」

日も暮れかかり、夜兔のおじさんもどっか行っちゃったから…しゃーねえ帰るか。

いつの間にか家から結構離れた所まで探しに来ていた。

「あ、新八に米炊いとけって言うときゃよかった」

今日の夕飯担当は確か…俺か新八だったよな。あー、それも聞いときゃよかった。

ん…？

何か気配を感じた。

似蔵ん時と似たような…

「阿伏兔の奴、いないなア」

俺はタカスギシンスケっていう奴の家を出てから今まで、江戸の街をブラブラしていた。

理由は一つ、銀髪の侍探し。ようやくさっき阿伏兔のことを思い出した。

日も暮れてきたし、お腹も空いたし…今日はこの辺で帰ろっかな、と思っていた時だった。

…——いた。

俺の口元が横に歪んだ。

見たことある背中。

銀色の髪を靡かせ死んだ魚のような目をした男。——銀髪のお侍さん…。

「好物は後でとっておくタイプなんだけど…今が潮時かな？」

銀髪のお侍さんはようやく俺が誰だか気づいたようだ。

「お前、吉原ん時の…！」

彼は目を大きく見開いていた。その表情が俺にとってどれだけ醜く滑稽だったか…。

だが彼はなかなか戦闘態勢に移らなかった。

―読めない。

俺はそう悟った。

「オイオイ、久しぶりじゃねーか兄ちゃん。今からやるってか？前菜の前にメインディッシュ出しちゃっていいのかな？いや、そいつを通り越してデザートか？」

彼は薄く笑った。

流石。言葉を選んでついてくる。

「今夜は…豪華なディナーになりそうだ」

血が騒ぐ。体が熱くなる。うずうずする。俺の”渇き”が徐々に潤

ってくる…。

体はもう行動を起こしていた。

彼は持っていた木刀をやっと構えた。

「夜兎は文字通り夜の兎。俺にとって夜は…修羅が血、最高のシヨ
ータイムだ」

腕ならしに殴りかかったがいとも簡単に交わされた。

その後も蹴りやみぞおちを突いたりしたが、コレも交わされる。流
石夜王鳳仙を倒しただけある。よく見えている。

だが俺だってそんなに簡単に負けちゃいけない。

彼の背後に回り、思いつ切り横腹を蹴った。

「ぐっ…」

ドサアアアア

彼は倒れてしまった。

「アレえ？お兄さん、こんなに弱かったっけ？まあいいや。お腹空いてるから今日はこの辺にしてあげるよ。…またね、

……白夜叉」

彼は二つ名だったらしい。

本名は坂田銀時。

だけでもう一つ呼び名があつて、銀色の髪に血を浴び、戦場を狩る姿はまるで夜叉…白夜叉って。

確か…タカスギシンスケが言ってた。

奴は敵味方関係なく恐れられていた攘夷戦争の伝説の武神…と。

俺は彼の本当の力をまだ知らないんだ。

第六話 ホント…何やってんだ自分…同じ間違いすんな!! (前書き)

訂正の訂正です。

正確↓性格です。

本当に申し訳ございませんでした！

第六話 ホント…何やってんだ自分…同じ間違いすんな…！

「…さん！」

「銀さん…！」

誰かの声がする。

新八…か？

アレ…

俺、どうなっちまったんだっけ…。

分かんねー…。

「大丈夫ですか！？」

やっぱり新八だった。

俺は体を起こしたが横腹に激痛が走った。

「つつう…」

「無理しないでください！」

「大丈夫だつて…こんくらい…」

「銀ちゃん昨日の夜何があつたネ」

俺は神楽の顔を見て、初めて昨夜の出来事を思い出した。

こいつらには話すべきではない、そう思った。

「…なんもねエよ。車にはねらただけだ」

「いや、嘘ですよね」

腹に巻かれた包帯は、赤く滲んでいた。

「…神威、今日はやけににやけてるな。何かあつたか？」

俺は今日もタカスギシンスケの家にいた。
やっぱり地球のゴハンは美味しいね。

「…ちよつとね。久しぶりにこの血がうずくのを感じたよ」

「フン、強者にでも会ったか？」

「まあね。でも君には教えないよ。アレは俺の獲物だからね」

白夜叉…。分かってるんだろ？俺の獲物。

「…奴は戦場を生き延びた。…武神、いや鬼神と言った方が妥当か。力任せに己の欲求を満たすのは構わねエが…少しは吟味することだな。奴を甘く見ちゃいけねーよ。とうに腐ってると思ったが…奴の牙はまだ神々しい鋭い光を放っている」

牙…ねエ。

昨夜の彼は本気じゃないってことは分かる。

「そいつア、…楽しみだなア」

「ククク、いずれにせよ奴を殺すのは俺だ、神威…。でしゃばった真似はするなよ」

俺は箸を止めた。

「何があつたのかは俺は関係ないけど…手は出さないでね。君に借りは作りたくないんだ。そっちだって嫌だろ？」

「春雨第七師団団長がどういう見だい。…お前が興味あるのは奴のみってことか」

タカスギシンスケは不気味な笑みを浮かべると部屋を出て行った。

「さてと」

俺は手を合わせた。

「いじちそつちま」

第七話　お願い！誰か私に勉強しろと言ってEEEEH！！

万事屋

ピンポン

昨日、銀髪の旦那から急に消えたことを詫びに来た。

そしてあることを伝える。

敵として…いや、命令だなこりゃ。

「あつ、昨日の…」

玄関を出たのは小柄なメガネ少年だった。

「銀髪の旦那は？」

「銀さん…酷い怪我をしていて…」

「怪我？」

こりやまたたまげたな。俺と会って早々、誰かに襲撃でも受けたか？あの命令の内容が漏れたか？いや、それはないな。

「何か…用件でも？」

「ああ、旦那に昨日はすまなかったと伝えておいてくれ」

そう言うと俺は万事屋を後にした。

すまねエ…銀髪の旦那。夜兔^{ケモ}には戦場しかねエ。アンタの人情味はありがたくもらい受けたつもりだよ。

「阿伏兔、こんな所にいたのか」

あーあ、ついに見つかっちまったか。

「団長…」

兔は夜へ帰るとするか。

痛い。

何がつてか？

横腹だ。

具体的にどういふ感じの痛みかって？

そつだな…、圧迫されたようにズキズキと脈を打つように痛いな。

「つて医者かよ俺ア！！」

ズキッ

「いでっ！」

今日は朝から布団の中。だから体が鈍くなっていけねーや。

今日は水曜日だからジャンプの発売日じゃない。

暇なう。

少し体を起こした。

血の滲んだ包帯を見た。その時、星^{ハゲ}海坊主の言葉を思い出した。

『そうさ、奴は吉原になど興味はない。奴が興味があるのは…お前だ』

『神楽は奴を救いたいと思っている。憎まれ口を叩いても奴が以前のような兄に戻ることを望んでいる。お前が奴と対峙するときがきても、きつと…。お前ならどうする。神楽の前で奴に命を狙われた時、お前ならどうする』

「……」

兄妹喧嘩になんぞ首突っ込みたくねーってんだ。

第八話 ムカつく奴の9割が。。。。。(笑)

某月某日

春雨元老幹部会にて

「やあ、よくぞ来てくれましたな。高杉殿」

高杉、それが俺の名だ。鬼兵隊を牛耳り過激攘夷志士として恐れられている男だ。

「またアホ提督と密約を締結しようってか？悪いがそーいう話にや
ノらねーぜ」

「そーいうんじゃないんですよ。今回は」

「なんだ？」

「春雨師団を増やそうと思ひまして…いや、幹部を足そうと…」

俺は目を背けた。

「言ったはずだ。俺はそーいうのはお断りだ。鬼兵隊を牛耳らない
といけねーから」

「違いますよ。…高杉殿の他にも攘夷戦争で武神と恐れられた侍…。

つまり我々が目を付けているのは白夜叉」

「…銀時か」

元老は続けた。

「奴の身柄を確保するために第七師団団員を数人地球に送っています」

「やめとけ。無理だ。…奴は俺に殺されるからな」

「どこに行つてたんだよ阿伏兔」

「んにゃ、江戸巡りだ」

「ふーん…いい地獄廻りはできた？」

「俺アピュアなおじさんだ、すつとこどっこい」

阿伏兔…なんか隠してるみたいだね。まさかとは思つけど…

「阿伏兔、俺の好物は捕らないでよ」

「…団長の好物は全て俺の嫌いなモンさ」

分かつてるじゃない。

確か…俺たちが地球に来た本当の理由は白夜叉を捕らえること。恨みがあるとかで公開処刑にでもするのかな？そこまでの深い理由は知らない。…でも、サシで勝負するのはこの俺だ。元老に逆らおうと、俺の獲物は俺が狩る。

「また会いたいなア、銀髪のお侍さん」

翌朝

「銀ちゃん！電話アルよ!!」

「うつせーよ、なんだ」

俺は受話器を取った。

軽い気持ちで出た。

「……………」

ガチャン

「どうかしたんですか」

「イタ電アルか？」

… 言えるはずがねエ。

「あー？塾の勧誘」

ごまかした。

電話の声は太かった。

相手は宇宙海賊春雨師団元老幹部と名乗る男。

「…俺には関係ねエ」

そう呟くしかない。

第九話 義和団事件と義和団の乱って同じなの？（前書き）

Macからの投稿でございます！

テガミ魂の感想、ありがとうございます！<

第九話 義和団事件と義和団の乱って同じなの？

今日も俺は江戸の地獄廻りをしていた。

街行くチンピラが烏合の衆のように俺をジロジロ見てくる。まるで四面楚歌だ。でも気分がいい。

「……」

匂いがした。

夜兎の匂い。阿伏兎じゃない、違う…。

目の先には見知った顔がいた。

今はもう関係ないことだけだね。弱い奴に興味はない。このまま素通りでいいかな。

「…神威！」

奴は目を丸く見開き、こっちを見た。

夜兎の匂い…いや、奴にはもうそんな剛気は漂っていない。ただの弱い奴。

「なんで…地球こゝにいるアルか」

「お前には関係ないだろ？ 邪魔はしないでくれ」

「神威！」

「いくら血の繋がった兄妹って言っても…殺しちゃうぞ」

街中でコイツと鉢合わせするなんて予想外だったけど…夜兎は強者を呼び寄せる、本能かな。

「お前…銀ちゃんに何かやったアルか？」

銀ちゃん？ああ、銀髪の侍か。

「知らなんだ？おととい…やり合ったんだよ」

「やっぱりな」

意外に察しがいいところあるんだ。

「銀ちゃん車にはねられた言ってたけど…あの深い傷、やっぱり隠してたネ…どういふつもりアルか？」

街行く人の流れが早く感じ、俺だけ時間に取り残されたようにスロ―モーションだった。

「お礼をしに来たんだ。だが、最もな理由は言わないよ。企業秘密」
こんな奴に構ってる暇はない。

「…銀ちゃんに近づくなヨ」

俺はせせら笑った。

バカじゃないの？

「ズルズル」

「ズルズル」

「…エリザベス、お前箸が持てるようになったのか！」

ゴホン。申し遅れたが俺は狂乱の貴公子と言われている攘夷志士、桂小太郎だ。オイ、その貴様。ヅラと言ったな。ヅラじゃない、桂だ！いや、違う桂だ！もっとインスピレーションを大切にしろ！！

「桂さん、落ち着いてください」

「そ、そうだな。うん。だが…コレと言って話すことなどない」

「ひっこめよ」

「む…？」

蕎麦の箸を置いた。

宇宙戦艦の気風を感じた。

「アレは…宇宙海賊春雨の戦艦ではないか。…そう言えば江戸に来ると言っておったな」

俺は蕎麦を啜った。

「何かやっかいなことでも起きぬといいのだが」

第十話 おっと、そこまで！…何が？

「なア聞いたかオイ。元老達が言つてた話なんだが…大幹部が一人増えるらしい」

「ほう、どっかの傭兵一族の台頭か何か？」

「いや、どうやら地球人らしい。攘夷戦争の蛮人で伝説の武神と恐れられた侍だつてよ」

「侍？ガハハ、野蛮な猿共が？笑わすな」

「……オイオイ、ずっとこどつこいだなこりゃ。
なーんでこんなところまで噂が広がってんだか。」

「阿伏兔、どうかした？」

「いや？なーんも」

アホ提督が逃亡してはや1ヶ月。新しい提督を就任させるより、大幹部を一人増やした方が師団の軋轢が鎮圧するとか元老の案を一番最初に聞いたのは俺たち第七師団。内密だったのに…どういうことかいな。

「実は新しい幹部が増えるんだ。地球の侍でね」

俺は団長の頭を叩いた。

「団長オオオオ！！アンタが火の元か！！」

「いいじゃないの。どうせなるようになるんだしさア。ま、でも俺が殺しちゃうからね」

「いい加減にしてくれよオ。アンタのせいでまた鉄格子に入れられるのは御免だ」

俺はため息を付いた。

また元老に目をかけられたら次は…あんだけじゃ済まされないだろう。

「大丈夫だよ。バレないように上手く白夜叉を殺る。…俺は言いなりにになったり束縛されたりするのは嫌いなんだ」

「上手くやれるかこっちは皆目見当つかねーよ、こりゃ」

団長は俺の肩に手を置いた。

「阿伏兎はちゃんと元老の命令を仰いでよ。俺の独断専行なんだから」

…こういう風の吹き回しかね。今回は真剣にサシで勝負したいらしい。

ま、俺も幹部が増えようが関係ないこった。

俺は原チャリを走らせていた。

パチンコに行くからだ。だけど後ろに神楽が乗っている。未成年者がパチンコに入れねーことくらい知ってるからな！！アレ、保護者同伴ならいいんだっけ？分かんねーよ！

「銀ちゃん、私ここで待ってるアルからな。しっかり稼いで来いよ」
「うっせーな！当たり前じゃなかった時は俺ア謝らねーからな！！」

俺は店内に入った。

神楽は入り口とここで立ち往生していた。物凄い目つきで俺に視線を送っている。酢昆布買いに帰ってきてからあんな調子で…迷惑な野郎だ。

神楽はガラス越しに指で指示を出した。”ここ！ここに座れ”と俺を一番端の窓側に座らした。すぐガラスの向こうには神楽が物凄い目つきでこっちを見ている。

「オイオイ、俺の勘が当たってたらハズレだぞ」

チクチクと視線が刺さる。こんなに落ち着かねーパチンコ初めてだ！

俺は神楽の方を見た。

げっ！警備員の人と何か喋っている！神楽は身振り手振りで何か俺の方をチラチラ見ながら喋っている。てゆーか、警備員のおっさんめっちゃ怖いんですけど！！めっちゃこっち見てるんですけど！！

中入ってきたアアア！

「ちょっと、そこのお兄さん。あのね、困るんだよオマナー守ってもらわないと。こういう所に子供を連れて行くなんで、親として許されざる行為だよ」

「いや、そうじゃなくて……」

「パパなんかキライ！働きもせずパチンコで学費払おうなんて考えるからママに逃げられるのよ！」

「……？オイ、俺がいつパチンコで学費払った？いつママに逃げられたア？んな学費が払えるくらいの大勝ちなんざしたことねーよ！」

「まあまあ、とりあえず子供さん連れて帰りなさい。……それと、ちゃんと働いてください。子供がかわいそうです。今からでも……間に合いますから」

警備員のおっさんは俺の肩に手を置いて涙ぐんでいた。殴っていい？

「ったくよー、テメーのせいで赤字だぞ」

「これでよかったネ。もうパチンコになんか行っちゃダメアルよ」

「テメーに言われる筋合いはねエ」

と言うと、神楽は更にぎゅっと俺にしがみついた。

「いでで、傷に響くから優しくしろ」

それでも力を抜こうとはしない。

「銀ちゃん」

「あ？」

「…どこにも行ったりしないでヨ」

「……」

その声は静かで、どこか悲しげがあった。

「…行かねーよ、どこにも…」

第十一話 なんてかな、日曜日って嫌だ…（泣）

―真選組屯所―

「―分かった。山崎、奴を徹底的に洗え」

ライターに火をつけ、煙草に点火しふかす。

鬼の副長ならではの風貌だ。このスタイルを変えることはないだろう。鬼に乘じ相手の懐から奥深く斬り、恐れられる。それが土方十四郎だ。

「…そろそろ、”手洗い鬼”に名を替えたらどうですかイ。今の土方さんぴったりの愛称ですぜ」

襖から出てきたのは真選組一番隊隊長、沖田総悟。組一番、剣が達つ。

「それ、ただの鬼だろーがよ」

「して、奴とは？」

立場が悪くなるとすぐに話をすり替える…相変わらず憎たらしいガキだ。

「今内密に調査を行っている。あんまり他言されちゃ困るんで総悟、テメーにだけは話さねエ」

「あつ、なるほどね」

総悟は山崎に聞いていた。

「てめエ山崎イイイ！―後で絶対斬る！！」

「まアまア土方さん。聞いちまったモンはしょーがないですぜ」

「お前が言っな！」

「…面白そうじゃないですかイ。…万事屋の旦那を洗おうなんて」

総悟は顔の影を濃くした。

「奴は高杉との隠蔽があるらしい…もしかしたら陰謀…いや、そうにちげーねエ」

「旦那が攘夷志士だ、と？」

「いや、その話は別だ。実は宇宙海賊春雨と盟約を締結してる可能性がある。これも秘匿に…」

「春雨？なんでまた旦那が」

俺は煙を吐いた。

「…以前鬼兵隊が春雨と手を結んで闘争が起きただろう…たしか紅桜」

「ああ…、あん時は俺たち真選組は全く活躍しませんでしたからね

「イ」

「あのバカの考えてることは想像がつかない。事実無根かもしれないが…洗う必要性がある」

「…もし陰謀とやらが発覚したら？」

「そんな時はそんな時だ」

「けっ、土方コノヤロー俺は旦那がそういう事するなんて思いませんぜ？水魚の交わりを持つアンタが一番よくしつてまさア。呉越同舟とか言いますけど、本当は仲良くなりたんでさア」

「誰があんな糖分野郎と仲良くなりたいかアホ！」

「素直になれ土方！じゃないと気になるあの子は逃げて行く」

「総悟！てめエマジでぶっ殺すからな！！覚えておけよ！？」

第十二話 まずは行動するべし！（前書き）

会話文がかなり多いです！

第十二話　まずは行動するべし！

「うぜーよ、お前さア、厠くらい一人で行かせるよ！」

「ダメアル！だって銀ちゃん、どこにも行かない言ったアルよ！」

「それはだけー範囲のことだろ！？なんでこんな範囲が小さいの！？」

俺は厠の中で神楽と談義中……。バカバカしい。

ジャアアアア

水を流し、扉を開けると神楽が蔑んだ目で俺を見た。

「…なんだよ」

「銀ちゃん、臭いアル。手洗ってヨ」

「言われんでも洗うわアアア！…たく、何なんだよ。いきなり過保護ですかコノヤロー」

そう言った途端、神楽は黙り込んだ。

「二人とも厠で何やって…神楽ちゃん？」

新八が来た。新八も神楽の浮かない表情を察した。

「…なんかあつたんだろ？言ってみ」

少し黙った後、神楽の口が開いた。

「……神威に会ったネ」

「「！？」」

「銀ちゃん、その傷…車にはねられたって嘘でしょ？…全部神威にやられたんでしょ？」

「え…、銀さん、なんで黙っていたんですか」

二人の表情が険しくなった。俺は何も言えなかった。

「…すまねエ」

「いや、謝らないでくださいよ…」

新八は続けた。

「銀さんが強がりなことはよく知っています。他人に求めないで、全て背負い込んでしまうことも……。でも！僕たちをもっと頼ってくださいよ！」

涙ぐむその目は、真剣だった。

「…すまねエな」

出る言葉はコレだけだ。感謝の言葉も口クに出ねエ……。

昨日来た電話の内容は、ガキ二人を人質に俺の身柄と交換のこと。
3日後に実行。

一人で片をしに行くつもりだったが……。新八にあんなこと言われちゃったから……。

――春雨師団会議――

「神威よ、白夜叉の身柄はもう確保しただろうな」

鳳浪星の団長が言う。

俺はにこやかに返した。

「まだだよ。……正直言つと、俺は白夜叉には借りがあるんだ」

「何かしでかしたのか」

「鳳仙の旦那の時にね。まア気にしないで、俺の私情だから」

「元老の命令は絶対だぞ？分かってるのか」

俺は薄く笑った。

「その時は元老だろうが皆殺しにするよ……なんてね」

俺は席を立った。みんな遠回しに俺に白夜叉をとっと捕まえろっ

て言ってるようだ。かいつまんでそれ、この場にいてもいなくても一緒だろ？

「軋轢の元凶になりそうなことしか言わねーもんな、第七師団の団長は」

「今回はちゃんとやるだろうよ」

「元老を皆殺しにする…少し本望かな。」

第十三話 牛肉の食べ過ぎには注意を。(前書き)

10話の訂正です

当たり屋↓当たり台

その他諸々ございますが、どうか流して下さい。申し訳ございません。

第十三話 牛肉の食べ過ぎには注意を。

視線を感じる。

ム力つきたくなるような、視線が。

コレは裏でコソコソ嗅ぎ回るタイプだな。

ということは…

「…オイ山崎。さっきから何俺の後付いてってんだよ」

「アレ、旦那、バレてます？ いや、察しがいい」

「なんだよ」

「いや、特にないですけど……」

あるな。

「じゃあ付いてくんな」

「旦那、これからどこへ？」

俺はため息をついた。

「スーパーに買い物だ」

山崎は離れようとしなない。

「いい加減にしろよ。テメーもストーカーかコノヤロー！しつこい男は嫌われるぞ。気になるあの子が逃げて行くぞ」

アレ、このフレーズどつかで聞いたぞ。ま、いつか…。

「説けました！」

「は？」

「真選組とかけまして万事屋と説きます、その心はどちらも…」

俺は山崎の謎かけを無視して歩き出した。

つたくよー、俺が何したってんだ。

「ん……」

見覚えのある二人のシルエットが見えた。うざったい長髪と白いオバQみたいな怪物。

今日は厄日だな…。

ま、こっからの距離じゃ気づかぬーな。だが、奴を侮り過ぎた。

ヅラは俺をじっと見つめている。気づかれたか。絶対気づかれない距離にいるにもかかわらず、アイツどんだけ視力いいんだよ。あ、俺もか。

素通りつつー訳にはいかねエか。だからアイツの為に違う道を通り

たくなー。しゃーねエな。
俺は歩き出した。

ちょうどヅラの横を通りかかった時だった。

「銀時ではないか！」

「今気づいたのかよ！！さっきからずっと俺のこと見てたじゃねーか！！」

「いや、猫を見たものでな。アレはホウイチ殿かもしれぬ」

「どーでもいいわア！！じゃーな」

電波バカに構ってるところちまでバカになりそうだ。

「待て、銀時」

「あ？」

「…貴様」

ヅラは少し強張った顔をした。

「何」

「さてはスーパーで買い物だな」

……………

「間違いない！貴様の懷からエコバックが見える！」

一発KOをお見舞いした。

第十四話　そろそろ本気で行くのか

今日は厄日だ。

あの後山崎はヅラを追いかけて行った。

俺は店に入った。

「あら銀さん、お買い物ですか？」

まな板みたいな胸をした新八の姉貴が買い物カゴを片腕に持っていた。

「まアな、冷蔵庫がカラだからよ」

「たまにはそっちに行ってお料理でも作って差し上げましょうか。卵焼きとか」

ダークマター…

「いや…いいです」

変な汗が噴き出る。

「でも銀さん、大変ですよ。毎日家事洗濯仕事……」

「…別に、三人で分担してっから」

白菜を手にとった。

「銀さんもいい歳ですし…結婚とかも考えてます?」

「…そーだな」

もう少し艶のあるやつにするか。

「あと…無茶はしないでくださいね」

「…そーだな」

エノキ、舞茸、シメジ…どれがいいかな。

「あの…舞茸、安いですよ?」

「…そーだなんてうるせーよ! 親戚のオバサンかコノヤロー!」

だが俺はお妙の言った通り舞茸をカゴに入れていた。

適当にいるものをカゴに入れ、レジへ歩いた。

「やっぱ二度目の再会はなかなか難しいもんだ。一期一会ってやつだね」

「だから団長があ晩にとっとと捕まえときゃよかった話だろ? すつとごどつこい」

今日も江戸中を巡回したけど手がかりなし。

「ねエ阿伏兔、本当は知ってるんでしょ？銀髪の侍の在処を」

「ん？」

阿伏兔、隠しているんだね。分かってたけど、今の今まで言わなかった。

「…なんか、借りでもあるのかい？だから向こうから現れるのを待っている…」

「あの侍…俺には手に及ばないよ。”殺し”は嫌だよ、俺ア」

阿伏兔は俺の数歩前を歩いた。あえて追求はしないよ。

「ん…」

俺はふと上を見上げた。

”万事屋銀ちゃん”

「…なるほどね」

——*——*——*——

数日前、春雨師団団長会議にて――

「神威、お主白夜叉という侍を知っているか」

「知ってるよ」

俺はあっさり豚蕩星の第二師団団長に返した。

「高杉っていう侍に教えてもらったんだ」

「…高杉だと？隠蔽でもあるのか」

「ないよ。借りがあるだけ」

笑って見せた。

「まあいい。それより白夜叉だ。あいつは地球人の中で極めて高い危険性がある。前も春雨の船ごと潰されたからな。用心せねばならない…だが殺すのにはもったいない」

「利用するつもりですか」

「利用ではない、勢力にするのだ。彼が春雨に入れば…良い仲介役になるだろう」

仲介役……

「闘争は嫌いなんですか。これだから貧弱なんですよ。…そんなん

じゃ、アンタの師団は潰されますよ」

弱い奴なんか消えればいい。仲間だろうが、役にたたないのなら俺が全て潰す、それだけ。

「一つ言っておきますけど、白夜叉は絶対話にノリませんよ。それでも連れてこいと?」

「必ず捕まえる」

「はいはい」

――*――*――*

そう、元老からの命令を受けたすぐに豚蕩星の団長から言われた。裏から聞いていたのか。そこで、俺がしっかり命令をこなすよう後押しを……。そんなに元老に好かれたいのかな。

ま、でも俺は己の欲求が満たされるままでいい。

会えば即効殺し合い。

” 万事屋銀ちゃん ”

白夜叉は目の前だ。

血がうずく

魂が潤う

体中の精神が震える

事の出来事は始まったばかりだ。

第十五話 振り向けば奴がいる（前書き）

神威全開！

タイトル、懐かしいと思いませんか！？

第十五話 振り向けば奴がいる

いつから”白夜叉”なんて呼ばれちゃったのだろうか…。

戦争始めた時から…？

血で真っ赤に染まった時から…？

そもそもなんで俺ア攘夷戦争に参加してたんだ？

あの戦争は…意味のあるものだったのか？

いや、違うだろ。

手に取ったモン全てすり落ちてしまい、何も持てなくなる。

失う。

なんのために戦っていた？

国のためか？

仲間のためか？

己の魂のためか？

いや、違うだろ。

血が欲シイダケダ…

「！！！」

目が覚めた。

夢だったみてーだな。

まだ心臓が激しく脈を打っている。そして何より胸が痛い…。

「うつ…」

二日酔いか？頭もズキズキ痛む。…いや、昨日は酒なんか飲んでねエ。

時刻は深夜二時過ぎ

身の毛もよだつ丑の刻ってか？笑わせんな。言つとくがホラーとギヤグは紙一重だって。あー、んなこたアどうでもいい。薬を飲むため、布団から出た。

フラフラする…。めまいか？ヤベ…、体が前に進まねエ…。

「ぐっ…ああ」

…こりやヤベーな。重傷かも…。

ドサアアア

倒れてしまった。

考えるのも…めんどくせエ…。

万事屋の玄関―

「以外に楽勝だなア。効き目2日後、うん。効いた効いた」

「効いたって何が」

阿伏兔、まだ解ってないみたいだね。

俺は薄く笑った。

「2日前、銀髪の手とやり合った時に飲ませておいたんだよ。あー

いう風に、意識がなくなっちゃう薬をね」

「団長、ただの考えなしかと思っただら…」

「言っただろう？ コレは俺の独断専行だって。このお侍さんが一番強くなるのは彼が”白夜叉”に染まった時だよ。俺はそれまで待つ」

「連れのガキ二人は」

「人質に、春雨へ送つといたよ」

「そんな中の一人は確か団長の…」

「関係ないよ」

実の妹、なんて言いたかっただろうけど今の俺には全く無意味な存在だ。バカな管轄にせっかく持って生まれた能力を制御するなんて金を溝に捨てるようなもんだ。

そんな軟弱、必要ない。俺はお侍さんを片腕で担いだ。

「早く… 真の強さを手に入れて、俺と勝負しようね。… 白夜叉」

今日は新月だった。

第十五話 振り向けば奴がいる（後書き）

万事屋トリオは拉致られてしまいました！
さアどうなりますかいの！

第十六話 結局進む方向って同じじゃない？なんて思わせないから

真選組屯所―

朝から雨が降っている。雨だとかかしら気が下がる。煙草も、湿気のせいでか上手く点火しねーしマヨネーズも味が落ちる。

「副長！大変です！！」

山崎が勢い良く入ってきた。

「なんだよ、もつと静かに入って来ねーか」

「じつ実は！今朝方未明、万事屋の三人の姿が行方不明になりました！」

「何？」

興味深い話だ。

「出てつたと見られる痕跡もなく…鍵も開いていて……不自然だと思いません！？」

「…何者かに浚われた可能性があるな」

「春雨ですよ、土方さん」

総悟はいつの間にか襖にもたれかかっていた。

「……どーいう事だ」

「やっぱり隠蔽があっただんですよ。でも旦那にはねエ……春雨の陰謀が」

俺は煙草をくわえた。

春雨の陰謀に万事屋が関係していることが……。

「旦那たちは今回の件については全くの無関係……ようやく主旨が見えてきましたゼイ」

「……オイ総悟、ヤケに仕事熱心だな」

総悟はニヤリと微笑んだ。

「もちろんでさア。俺の悠長な働きっぷりを近藤さんに見せつけて、副長の座を頂く魂胆でさア」

わざわざ俺に言うか？

「話は聞いたぞトシ」

「近藤さん……！」

「よし！隊士を集めろ……！」

「……おお……！」

「待ってくれ、近藤さん。言っとくが俺たち真選組は幕府の犬だ。」

春雨相手に騒動を起こしたら…」

「心配いらん。俺たちは国民の平和を守る義務がある。目の前にあるものを助け、護るのが真選組だろう」

「近藤さん…」

「万事屋には借りがあるからな」

近藤さん…俺たちは一生アンタについて行く。
その真っ直ぐな目をしている限り…。

「お手柄だったな、神威」

そう言ったのは鳳浪星の団長。でも俺はご飯に無我夢中である。

「白夜又は今気を失っている。強度の曲がり性格と高杉殿から聞いているが…その心配はないだろう。ガキ二人を人質にとっているかな」

鳳浪星のご飯も美味しいけどやっぱり地球のご飯の方が俺好みだな。

「ちょ、神威殿？聞いている！？神威殿！！」

「あつ、なんでしたっけ」

「聞いてなかったのか！！いちいち話すの面倒だから読み直して！！」

「はいはい」

読み直さないけど（笑）

「鳳浪の旦那、目が覚めたら…白夜叉はどうなっちゃいます？」

「どうなるって…覚醒とかしてて自我を忘れてその上物凄い殺気を出していつてこんな都合のいいことは起きないな、普通に意識戻して…どうなるかね」

「俺、面白いモノ手に入れたんですよ」

俺は箸を止めた。

「ほう」

袋に入った赤い粉を出した。

「”赤憶郷”と言う精神安定剤です。この薬の効能は記憶の捏造…つまりいたわりの記憶に移し換えることができるんです」

「いい薬ではないか！！」

「おっと、タダでは言いませんよ？」

「分かっておる！いくらでも出す！」

「でも…この薬、一度記憶を捏造すると、もう二度と以前の記憶を取り戻すことができなくなっちゃうから…くれぐれも気をつけて。思い出は大事だからね」

赤憶郷を鳳浪の旦那に渡した。そしてその場を後にした。奥で阿伏兔が待っていた。

「いいのかい、団長」

「いいんだよ、アレで。…ハハハ、さよなら……鳳浪の旦那」

結局、生き残るのは強者のみなんだよ。

弱い奴はいらない。

第十七話 体が欲しければ見つけりゃいい

バカな鳳浪星の団長。

俺は笑うしかない。

なんだ？

ここ…真っ暗で分かんねエ……

新八と神楽は…？

アレ、なんでこんな事になったんだっけ…

思い出せねえ……

「ククク、コイツが坂田銀時…白夜叉なる侍か」

は…？…白…夜叉？

どっかで聞いたことあるけど…なんだっけ…

「今樂にしてやろう」

目を瞑った。

瞼を閉じた方が明るかった…。

夢…か。

プチン

—*—*—*—*—*

「屍を喰らう鬼が出ると聞いたが…君がそう？」

その人は太陽の様に微笑んでいた。

「また、ずいぶんとカワイイ鬼がいたものですね。…それ剣も屍から剥ぎ取ったんですか」

それ、と聞かれたものだから慌てて刀を抜いた。

「くれてやりますよ」

そう言って自分の腰にさしていた刀をヒョイと投げた。

ついてって…よかった…

「銀時、銀時はずっと銀時のままでいてくださいな。この先辛いことがあると、自分らしく…魂を貶さず…生きていくのですよ」

＊――＊――＊――＊――＊――

「ありやありや。白夜叉あろう侍がこんな鉄格子の中にくたばってるたア…虚しいね」

奴は以前の俺が知っている奴ではなかった。

…なんというか、生気を感じない。

目は座っていて、何を見ているのかはたまた何も見えてないのか…。

もう人間ではないかのようだった。

「あ、こっちには仲良し二人？」

隣の蟬には人質にとってあるガキ二人。強い睡眠薬を投与しており、ビクともしない。

鳳浪星の旦那がやって来た。

「ガキ共はともかくまだ白夜叉は起きんのか」

鳳浪星の旦那はじつと彼を見つめた。

「薬はもう投与したんですか」

「当たり前だ。元老の命令でもあるからな、事は早い方がいい」

白夜叉はまばたきすらしない。闇に吞まれそうな瞳は動かない。
彼の瞳に輝きは戻って来るのだろうか…。

ドサッ

「！」「！」「！」

彼は座った姿勢から横に倒れてしまった。
そのまま手を頭に抱えた。苦しそうだ。

「…ぐっ、ああああ！！」

奇声を上げる。

「効き始めたか…」

彼は鉄格子を握った。口元が緩んだ。

「ここア……どこ……だ、俺ア……誰……だ」

鳳浪星の旦那はにやけていた。

彼は一時的な記憶喪失になっている。落ち着いたら捏造なりすればいいさ。

「哀れな男め……」

「……せ、ここから出せ」

彼の目は急にキツくなっていた。死んだ魚のような目ではない。

「落ち着け、白夜叉」

彼は次第に荒い息も落ち着いてきた。自我を取り戻したらしい。以前の記憶はないけどね……。

「白夜叉ア？……それが俺の名前か」

声のトーンは以前と変わらない。

「そうだ。お前は我ら宇宙海賊春雨の幹部を勤めていたんだ」

「春雨？あー……なんかそんなだった気がする」

（バカな奴だ）

忘れてしまったのは周りの環境と関わりの持つ人物か。

俺は白夜叉を鉄格子の外へ出した。

彼はガキ二人が入れられている蟻を見た。
そして無言で通り過ぎて行った。

第十八話 いくつになっても魂は真っ直ぐでありたい

「銀時を利用するたア、宇宙最強と馳せられた春雨も随分と軟弱になつたもんだ」

俺はクククとせせら笑い、煙管を咬んだ。
前方の席には豚蕩星の団長が座っている。

「神威の手柄だ。簡単に仕留めたらしい」

「神威がねエ…。ククク、何を企んでいるのか」

煙を吐いた。

「…銀時には会えねーのか？」

「会えるけど…今の奴に以前の記憶はない。たとえ竹馬の仲の高杉殿でも覚えているまい」

竹馬ちくばの仲…か。

「構わねーさ。奴には変わりないんだろ？」

「じゃあ、ついてくるがいい」

言われるがままに、後をついて行つた。

：

でけー部屋に連れて行かれた。赤い絨毯の敷いてあり、いくつか椅子が並べてあった。
なるほど…ここが幹部の集う場か。

「オイ」

聞き覚えのある声がした。

背後から靴の鳴り響く音がする。

「なんだよオメーら。ここは豚や浪人が入って来ていい所じゃねえんだよ。とつとと出て行きやがれ」

幹部を示す制服に身を包み、白夜叉なる銀時がそこに立っていた。
俺を見て動揺しねエってことは…本当に忘れてんだな。

「銀時、口だけは達者なんだな」

「あ？んだよテメー。こんな奴春雨にいたか？」

銀時はジロジロ俺を見る。風貌は以前と対して変わらねー。赤憶郷で記憶を捏造して”坂田銀時”を忘れてしまったのか。

「オイなんか言えや」

目の前にいるのはすっからかんになった”白夜叉”…戦時代の記憶の塊。

お手並み拝見といこうか。

素早く鞘を抜き、白夜叉に襲いかかった。

刹那

ガキイイイン

一瞬にして俺の一太刀を止められた。
…なるほど、奴は俺の剣筋の二倍も三倍もの速さで動いているわけか。

そして顔色一つ変えない冷静さ…。その癖は変わらねーのな。墓穴を掘る…その冷静な態度から理性がぶっ飛び縦横無尽に殺しまくる…悪い癖が面々に出ちまったな。

「白夜叉様アア!!」

もう様呼ばわれされてんのか。流石、幹部だ。

「白夜叉様！元老が呼びです！」

「チツ、しゃーねエ。いつでも来いよ、相手してやっから」

そつ言つと幹部たちの方へ戻ってしまった。

第十八話　いくつになっても魂は真っ直ぐでありたい（後書き）

神：…記憶喪失になっても結局、銀ちゃんは銀ちゃんアルか。ぱつとしないネ。

新：まアまア、いいんじゃないの。

銀：俺的にはもっとシリアスな感じがよかったな。渡辺謙みたいなさア！

神：じゃっ、引き続き本編をよろしくアル！

銀：アレ？俺スルーされてる！？

第十九話

毎回の口癖が心を締め付けるわ（前書き）

訂正です！

17話

蠟↓牢です><

第十九話 毎回の口癖が心を締め付けるわ

ここはどこだろ…

冷たい

隣にいるのは…神楽ちゃん………？

ダメだ…何も思い出せない………

「白夜叉様、コイツらどうしましょう」

白夜叉？どっかで聞いたような…

「ほっとけほっとけ。俺アガキ殺すのは嫌なんだ」

この声は…

銀さん？

「でもこのガキたちは白夜叉様のお連れなの……」

「連れだア？ 知らねーよ、こんなガキ共」

その声は確かに銀さんだ。

なのに

なんか冷たい

また

意識が遠くなる……

ターミナル――

「エリザベス、誰にも跡を追われてないか？」

「大丈夫です」

ツラじゃない桂だ！

今こいつツラか？って思っただろう？

ピンポーン

「お客様、もう一度検査をお願いいたします。只今テロ対策で厳重注意を行っておりますから」

「お客様ではない！エリザベスだ！！それにエリザベスは何も持っていない！金。ならあるのかもしれないが！」

「お客様、黙りやがらねーと殴りますよ？」

「お客様ではない！桂だ！」

銀時、そこにいるのは分かっておるのだぞ…。

（桂が見ていた先は男子トイレ）

「団長オ、俺たちまた無駄に利用されちまったな」

「白夜叉狩り？」

春雨の集う宙船そらふねに俺たちは乗っていた。行く先なしのオンボロ船つてワケだ。

「ああ、利用されているあの白髪の旦那もかわいそうだなア」

「じゃあ助けてあげれば？阿伏兔が」

「冷たいねエ」

俺には俺なりの策がある。誰にも邪魔されず白夜叉とサシで勝負する方法がね…。

第二十話　ぼっかり隙間の空いた心

「白夜叉様、貿易相手の星なんですが…」

「んー」

「その書類なんですけど…」

「んー」

「あの白夜叉様、聞いてます？」

「んー」

「聞いてませんよね!？」

「んー」

「ちょっと!」

白夜叉、それが俺の名前らしい。なぜか昔の記憶はない。だけど春雨の幹部を勤めていたらしい。実感とかない…。

どこで生まれて、自分は一体なんなのか…分からない。

でも

心にだけー穴が空いた気がする…

「白夜叉様、第七師団団長がお呼びです」

「んー」

ガチャ

俺は幹部室に入った。

目の前には白夜叉がいる。

「なんだよ」

「お暇ですか？」

彼は頭を掻いた。

応答がなかったが別に長居してもいいという空気だ。俺は気にせず話を切り出した。

「…いつから幹部に昇進したんですか」

「知らねーよ」

全て事実を話したくなった。いや…彼ならいずれ思い出すんじゃないかな

「何か、大切なこと…忘れてません？」

「…」

返事がない。なんか思い当たりある節があるのかな…。

「…知らねーよ」

「もし…俺が謀反を企てたら、どうします？」

「なんもしねーよ。勝手にしろってんだ」

相変わらず読めない男。何がしたいんだ。

このとぼけ面、いつまで見せてるんだ。このままじゃ俺の魂は渴いたままだ。

単刀直入に言ってしまおうか。

でも今はお腹空いたからご飯でも食べたいなア。

「いい暇つぶしにもならないよ。趣味が合わないね」

「合う必要ねーだろ」

だから言っちゃおうかな。

ガチャ

「白夜叉殿、いいかね」

鳳浪星の旦那が入って来た。

ちょうどいいや。

「鳳浪星の旦那、一つ…あの”薬”で言うておかないといけないことがありました」

「はア？」

息を吸い込んだ。

「実はあの薬、飲ませた人は飲んだ人に殺されちゃうんです」

「は？何バカなこと言っている」

構わず続けた。

「簡単ですよ。赤憶郷は二度と記憶は戻らない。だが他人から事実を伝えたと飲んだ人は極度な拒否反応を示す。そして理性がぶっ飛び自我を忘れ覚醒する、まさに鳳浪星の旦那、アンタが望んだ通りになるんですよ」

旦那は怖じ気づいた。

白夜叉に殺される。その恐怖が増大していくかのように見える。

「くーだらねエ」

白夜叉は席を立った。

逃がさない。

彼が覚醒した時の力は相当なはずだ。

血を求めるだけの夜叉に……

第二十一話

血なんて鉄の味しかないなんていうけど…鉄、食べたことある

血を求めるだけの夜叉に……

「白夜叉の旦那、アンタは本当はここにいてべき人間じゃない」

俺は話す。

彼が狂うまで。

彼が殺すまで。

白夜叉は急に頭を抱え、もがき苦しめ始めた。
その無様な姿、本当面白い。

「う……があっ……」

「神威殿、やめるのだ!」

さらにさらにと俺はにやける。やめるわけないだろう…?

「白夜叉、アンタの本当の名前は——」

目を大きく開き、異様な程噴き出る汗、そして辛苦の奇声……。

「ぐっ、ぐあああああああああ……！」

ドオオオオオン

白夜叉の迫力に、部屋が吹き飛んでしまった。

「ククク……」

不気味な笑みを浮かべ、刀を抜き、鳳浪星の旦那に刃を向けた。

「し、白夜叉殿！……や、やめて……くれエ……！」

ひい、と後ずさりする鳳浪星の旦那。

白夜叉の今の目は、夜兎に似た凄い殺気を感じる強烈な目をしている。

「やつちやえ、やつちやえ」

高みの見物客かのようにはしゃぐ。

バカな鳳浪星の旦那…。まアでも軟弱は消えた方がいい。

白夜叉の一太刀

ズサアアア

呆気なく旦那は倒れた。10秒も経たずに白夜叉にやられるたア、弱すぎにも程がある。

ドサッ

その場に白夜叉も倒れてしまった。
ありやりや、気を失ったか…。

ま、でもこれで白夜叉が覚醒する可能性は低くなったし、よかったよかった。あとは何かの拍子で理性がぶっ飛び覚醒することがある

かないくらいだ。

その時は幹部も春雨も関係ない…。一騎打ちにしてやるよ。白夜叉の全てを――。

とりあえず起こしておくか…。面倒ことになるのだけは嫌なんだ。

「旦那、白夜叉の旦那！」

「ん」

目が覚めたようだ。
何事もなかったかのように、俺は話す。

「こいつア…」

彼は鳳浪星の旦那の死体を見て漠然とした。
そりゃそうだ。覚醒時の記憶はないはず…。

「俺が殺したんですよ。コイツ、謀反を企ててましたからね」

白夜叉は冷静に戻った。

「…俺がやったんだよ。気が狂っちゃった」

「！」

覚えてるたア…ね。

「本当、俺どーかしてるぜ。本当のこと知りてエのに…体が言うこととかねエ」

「下僕人殺しただけで…そんなセンチメンタルで器の小さい男じゃないはずです。旦那は情になんか熟れない。旦那は血を求め剛なる夜叉…」

「…分かんねーよ、やっぱり」

白夜叉は出て行った。

今の彼は血なんか求めてない。求めているのはすっぱり空いた心の中身。

だけど赤憶郷のせいで体が拒み覚醒する…。
皮肉な男だ…。

やっぱり彼には血に染まり夜叉として生きていくのが一番合ってるんじゃない？

本当の彼は”坂田銀時”じゃなくて”白夜叉”なんじゃない？

第二十二話　大統領、いい加減気付いたら？

冷たい

暗い

そんな所で僕は気を失っていた。

銀さんは？

神楽ちゃんは？

うつすら目が開いた。

そこにいたのは神楽ちゃんだった。自分もだけど手足を拘束されていた。一体誰が…。

牢の中には僕と神楽ちゃんしかいない。

銀さんは？

誰か歩いてきた。

「オイ聞いたか？鳳浪星の団長、横領がバレて幹部の一人に斬られ

たらしいぜ」

「横領だア？春雨も廃れたもんだな」

春雨？春雨って宇宙海賊春雨…！？

ここは春雨のアジトなのか…！？

「その幹部、最近入った地球人でさア、バカ強いんだとよ。若僧のクセに白髪で天然パーマ」

「おまけに全く働かない腑抜けだとか？」

「ガハハ、ちげーねエ」

白髪で天然パーマ？

銀さん！？銀さんが！？

僕は奴らが去っていった後、神樂ちゃんを起こした。

「神樂ちゃん！起きて…！」

「…ん、何アルか…もう少し寝かせるヨ」

「呑気でいいよなア！ちよつと！起きて…！」

「うつさいアルなア…」

神樂ちゃんはやつと起きた。

そしてやっと状況を理解した。

僕らは何らかの出来事があって春雨に捕まった。そして銀さんは今いない。

「神威ネ。神威に違いないアル」

「そうと決まったわけじゃない。一体誰がこんな…銀さんもいないし」

神楽ちゃんは鉄格子を握りしめた。

「ぬぐおおおー!!」

力尽くで鉄格子を外そうと試みるがビクともしない。

「ここから出すアル! 銀ちゃん! いたら返事しろ! 銀ちゃん
!」

「無理だつて! 銀さんは多分ここにはいないと思う…」

カッーン

カッーン

足音が近づいてくる。

ターミナル

「桂さん！ たった今入った情報なんです…」

「ツラじゃない、桂だ！」

「読兄の諸君が「あつツラだ！」と心の中で呟いたこと、後悔するがいい！」

「どうした？」

「桂さんの知り合いのあの3人が春雨に連れ去られたとのことですよ！」

「あい、そんなこと端から知っておる」

「そうでしたか！」

「俺たちを何だと思っている。竹馬の仲であり攘夷戦争時代、背中を預け合った盟友だぞ」

「さすが桂さん！」

「さア出てこい銀時！ お前はここにいる…！」

俺は自信たっぷりにトイレを指差した。

「桂さん…！ 頭大丈夫ですか…！」

（そのまますたすたトイレに向かう桂）

「ちよっ、聞いてます！？桂さん！！」

第二十三話 本当めちゃイケ率高いよね（前書き）

この話、大切なんで、あえて短いです。

第二十三話 本当めちゃイケ率高いよね

「やつ、また会ったね」

「フン、最近会いたくねー奴によく会うもんだ」

前にアホ提督の件で世話になった高杉晋助と偶然宙船で鉢合わせした。

「まあいいじゃないの。でもまさか、まだアンタが春雨に携わっていたんだね」

「こっちの勝手だろ。…いや、今このオンボロ船に顔見知りがないからな…」

「白夜叉だね」

高杉は薄く笑った。

「言っとくけど奴は俺の獲物だ。勝手に手出しちゃあ…」

「勝手にしろ。俺と奴はもう関係ねえ」

高杉は煙管を加えた。ム力つくけど様になる。

「神威、…お前も気付いてるかもしれねーが」

俺は笑顔のまま。

「…また派手に暴れちゃう?」

「くくく、銀時を使ったア奴もお前の性格を見抜いてる」

「いいよ。俺の目的は白夜叉と殺り合うことだからさ」

「気をつけろよ。…今回の件、…黒幕がいる」

第二十四話 夢と現実が分からなくなると人は夢に生きる

幹部室――

「神威をまた公開処刑？」

「ああ。謀反を他の団長になすりつけたとかで」

「白夜叉殿はどう思います？」

「…別に」

神威…。確かあん時部屋にいたガキだな。

それにあのガキ…俺のこと色々知ってそうだし。

『アンタの本当の名前は――』

思い出せそうで思い出せない…。深く考えるとあん時みたいに気が狂っちまう。

でも…

凄く大切なことを忘れてる気がする…。

「じゃあ神威の処刑の件につきましては白夜叉殿にお願いして正しいですか？」

「悪い、聞いてなかった」

カッーン

カッーン

足音がする。

僕は音の方に目をやった。

「おや、目が覚めたか」

そいつは豚に似た天人だった。

「アンタら…僕らをどうするつもりだ！」

「銀ちゃんは！？銀ちゃんどこにやったネ！！」

天人はむせ笑いした。

「あの銀髪の侍か？アイツはお前たちの知っている、以前の奴ではない」

僕は固唾を呑んだ。

「どーいうことだ」

「白夜叉」

「「！」「」」

その言葉に驚いた。白夜叉とは銀さんの二つ名と言っていていいほど知名度が高い呼び名――。

「どーいう…」

「奴は以前の記憶、つまり”坂田銀時”を失っているのだ。今の奴は地を求めるだけの夜叉」

「そんなはずないネ！！銀ちゃん、銀ちゃんは銀ちゃんアル！鬼になんかなったりしないネ！！」

「…いくらお前たちが足掻こうが奴の記憶は蘇らない。奴の体は”坂田銀時”に戻ることを拒んでいる。記憶を求めたいと同時に理性を失い、覚醒し、夜叉と化す」

”夜叉と化す”って…。
理解できない。

「お前たちは白夜叉が春雨の幹部として留めるための餌なのだ。死

にたくなかったら…おとなしくしてるんだな」

そう言うと天人は去っていった。

おとなしくしてろ…だア？

「「ふざけんじゃねエエエエエエエ！！」」

バキイン

手足を縛っていた縄が、ブチッと裂かれた。

「ほわたアアアア！」

ドオオオン

神楽ちゃんの怪力キックで鉄格子が曲がり、出られる状態になった。

「銀さんを探しに行こう！神楽ちゃん！」

「おつネー！」

第二十五話 期待されないことが、一番辛いんだよ

ターミナル―

「総悟、一番隊はゲート西口から頼む。こっちは宇宙船を用意する。どーぞ」

俺はトランシーバーを片手に指示を出す。

「こちら沖田。只今バズーカを土方に向けました、どーぞ」

えっ？と、後ろを振り返ると総悟がバズーカを俺に向けていた。

「総悟オオオオ！！何やってんだ！！どーぞ」

「土方さん、あの世へどーぞ」

「総悟オオオオ！！」

「いい加減にしないか、トシ、総悟」

「近藤さん！！」

近藤さんは俺の肩に手をおいた。

「いいか、今回の相手は宇宙最強の海賊春雨だ。いくらとっつあん

に了承は得たとしても慎重にな。あつちは武力だがこっちは頭脳だ。敵を斬るのに夢中すぎて連中を助けることを忘れるな」

「…ああ、分かっているさ」

幹部室―

俺は一体誰なんだ？

前もこんな風に過ごしていたのか？

分かんねーや。

『神威公開処刑』

その言葉が頭を過ぎった。はつきり言って奴は何も犯していない。周りが氣にくわねーから消す。

意味分かんねー。

なんかイラつく。

刀を右手に、部屋を出た。今日が処刑の日。

俺が斬るんだって。

他の奴は自分の手を汚したくないってか。

：

「残念だなア。白夜叉とやり合うことなく死ぬなんて」

奴はヘラヘラと俺に向かって笑う。

「では白夜叉様、お願いします」

俺は刀を抜いた。

斬るのか？

「白夜叉様？」

俺は刀を鞘に収めた。

斬れねエ。斬る理由がねエ…。

「斬る必要がねエってんだ。コイツを解放しろ」

そこで初めて神威から笑顔が消えた。

「…どうやら白夜叉も高杉と似通っている部分があるみたいだね」

周りの天人がブーイングを出した。

「白夜叉様！」

「うつせーんだよ。コイツはぬれぎぬ着せられたただだ。俺は斬らねエ」

「ちょっと白夜叉殿！？」

豚蕩星の団長が呼ぶ。

「なんならお前らを斬ってもいいんだぜ？俺ア昔の自分はしらねーが、道理は通すらしい」

神威公開処刑は中止になった。

第二十六話 人はそう簡単にならないものだよ。(前書き)

テスト終わったー！

…え、テスト中だったの？テスト中なのに投稿しまくってたの？ってか。

フフフ…

私をナメるんじゃないですよ。

第二十六話 人はそう簡単に変わらないものだよ。

なんてことをしてくれたんだ、白夜叉。
あの場で覚醒させようと思ったのに。

「団長、まさか白髪の日那に助けられるたアね」

虫の居所が悪い。

どうして斬らないんだ。殺さないんだ。奴には地を求める能しかな
いはずなのに…。

心のどつかに、まだ記憶が残っているのか？

でも…

『俺は斬らねエ』

そう言った白夜叉は弱々しく感じた。
俺が求むのは剛なる者だ。奴は…。

「阿伏兔」

「ん？」

「…銀髪のお待さんとの勝負は…次に持ち越されちゃったね」

「団長が借りなんか作るからだ、すつとこどっこい」

阿伏兔は薄く笑った。いや、単なる苦笑いか。

「斬ればよかったのに」

白夜叉、坂田銀時…。

掴みどころのない男だよ。

白夜叉とやり合えなくなった。じゃあ白夜叉が春雨^{こり}にいる理由がなくなった、俺にとって。俺を斬らなかったからきつと他の師団も幹部も全て敵となった。

相変わらず続く派閥争い。そんなこと白夜叉は考えていない。坂田銀時は考えていない。一匹狼でもきつと己の武士道とやらを貫くはず。

借りを作るのは嫌いだ。

きつちり返すよ。

「銀ちゃん！どこアルかー!!」

僕たちは抜け出し、銀さんを探していた。襲いかかる天人を倒し進まなければならぬ。

僕はもう息が上がっていた。

「気張るネ！ぱつつあん！もう少しアル!!」

「いや、もう少しじゃないでしょ!!きりが無い!!」

敵の武器を使い、倒していく。
銀さん！どこですか！

その時、奥の方で突風があった。何かの大群がこっちへやって来る！

「！！！」

「真選組だア！！」

「土方さん！沖田さんに近藤さんまで！！」

僕は安堵した。

「大丈夫か、新八君にチャイナ娘！」

「どうしてここに！？」

「話せば長くなる！万事屋は！？」

「銀さんはー…」

その後は言いにくかった。

「そうか…」

近藤さんは僕の表情を見て、何も問わなかった。

「とにかく俺たちはお前たちを助けに来たんだ。一刻も早くここか

ら逃げるぞ！迎えの船も来ている」

「銀さんは…！」

「大丈夫だ。俺たちに任せとけ」

一瞬考えたけど…

「ダメです！僕たちも行きます…！」

「危険だ！これ以上君たちを危険にさらすわけにはいかん…！」

近藤さんの表情は真剣だった。

「…銀さんは…今記憶を失っているんです…。理由は分からないけど…。春雨にも加担していて」

「加担…だと！？」

「想像ですけど…きっと捏造されてるんだと思うんです！じゃないと銀さんがこんなこと…」

「…分かった。無茶はするなよ」

「はい…！」

第二十六話 人はそう簡単には変わらないものだよ。(後書き)

前書き、調子こいてすみませんでした！

第二十七話

戦争となりや話は別だ。コイツらなア、一騎当千の玄人揃いだ。

「まったく、白夜叉が他の幹部そそのかして神威の死刑執行を止めるたア…。計画がガタ崩れじゃねーか」

「くくく、ちげーねエ。あんたらの謀反は全て神威行きだ。その計画が白夜叉にぶち壊されるたア…奴、本当に記憶を失っているのか」
煙管に火をつけた。

「高杉殿…やはり我々はあなたが必要です。武力はともあれ頭脳も備わっている」

頭脳ねエ…。

「それは丁重にお断りするぜ。俺はお前ら春雨とは流儀が違エ」

豚蕩星の団長…。

第何師団だっけか？…フン、どうでもいいか。どうせ…潰れちまうからな。

「…そろそろか」

さア俺は高みの見物でもするか。楽しい戦^{ケンカ}、俺は関係ねエが。

「匂っぜ、一騎当千の玄人揃いが」

「真選組だと！？なんで幕府の犬が春雨に！？」

「どうやら白夜叉様と連れのガキ2人を助けに来たようです！」

「天人が猿如きに負けてたまるか！ええい、一網打尽にするのだ！」

「そうはせん！！」

「！！！」

「桂ア！！」

桂じゃないヅラだ！

あ、間違えた

「桂じゃない！！キャプテンカツーラだアアア！！くらえエエエエ！！」

俺は爆弾を奴らにお見舞いする。

「ーあ！！」

僕らはある人物を目にした。

「桂さん！！」

「桂だと！？なんで奴がここに…！！」

土方さんは驚いていたっていうかここにいた全員が驚いていた。

「真選組ではないか！！てか桂じゃない！！キャプテンカッターだ！！」

「どーでもいいわア！！」

「ヅラア、なんでこんなとにいるネ」

「いや、実は俺の仲間が銀時とお前たちを連れ去られた現場を見てな、心配になって来たら…まさか真選組と鉢合わせするなんて…」

「近藤さん、こんな場で恐縮ですがここで桂をしょっぴきますか？」

沖田さんは桂の後ろに回って刀を向けた。

「恐縮すぎるだろ…！！」

「やめとけ総悟。今は万事屋を助けることが優先だ。桂をしょっぴくのは事が全て終わったらだ」

「チッ」

舌打ちをすると沖田さんは刀を鞘に収めた。

「ヅラア、お前銀ちゃんのことでなんか知ってるアルか？」

「銀時は記憶を捏造され、春雨の幹部となっている。俺たちの事など覚えているまい」

「やっぱり…」

その場の空気が急に重たくなった。
そこを切り出したのは神楽ちゃんだった。

「大丈夫ネ。銀ちゃんはまた私たちのこと思い出すアル！銀ちゃんは銀ちゃんアル。私たちが信じないで誰が信じるネ」

…そうだよネ。諦めたらダメだよネ。
ありがとう、神楽ちゃん。

第二十八話

できないなんて決めつけんじゃねエよ。決めつけたらそこで終わ

銀：なア、今思っただがなんでこの小説のタイトル「KAMUI」なんだ？

なんで「GIN TOKI」じゃねエの？俺が主役じゃねーの？

神：今気づいたアルか。私もその件についてはかなり前からムカついてたネ。「KAGURA」にしてヨ！

銀：んだよ、まア確かに今回の銀さんはカッコ悪イよ。記憶なくしてさまよってるだけの、家に帰れなくなったガキですか俺は！！迷子の銀さんですか俺は！！

神：今時「ここはどこ？私は誰？」なんて流行らないアル！！時代は変わったネ！じゃ、本編をどうぞアル。

第二十八話

できないなんて決めつけんじゃねエよ。決めつけたらそこで終

『斬る必要ねエよ』

あの時、なんでこう思ったのか。

その意志は本当に自分なのか…？

分からねエ…。

俺は人から”白夜叉”なんて呼ばれてるけど、どうも気に入らねエ。
嫌な感覚を覚える。

「白夜叉殿、いいか？」

豚蕩星の団長が入って来た。神威の死刑執行を言い出した天人…。
天人…その言葉にピンときた。今まで考えてなかったのに。

「明日の元老会の時間だが…」

「なア、俺は天人なのか…？」

「え…」

自分でもなんで聞いたか分かんねーが…。

「春雨の人物は全て天人だ。白夜叉殿はまさに”夜叉（鬼）”…。
血を求め戦場に生きる鬼」

「鬼…。俺が鬼に見えるか？血を求めてるか？」

「た、建て前じゃないんですか？」

建て前…か。

机に肘をついて窓から見える宇宙を眺めた。
俺には記憶がない。

だが記憶を呼び覚まそうとすると体が拒んで気が狂い、何もかも殺そうとする。体が熱くなることをまだ覚えている。

その姿が白夜叉（俺）なのか？その姿が本当の俺なのか？

やっぱり分かんねー。

こんな風だったらいつそのこと…

「お前さ、昔の俺のこと知ってるか？」

「白夜叉殿の？…さア」

「俺、なんか大事なこと忘れてる気がすんだよ。心にでっけエ穴が空いてんだよ。春雨^{こし}にいてもその穴…ふさがらねエ。でも思いだそうとすると体が拒む。どっちも恐怖だよ。…知ってんなら言え」

自分では分からないが俺は今とても怖い顔してんだなって分かる。
相手の様子が震えている。

「…分かんない」

「なら、どうして俺は記憶をなくしたんだ。知ってんなら言え」

「…分かんない」

俺は舌打ちした。

やっぱり神威に聞くしかねーのか？またあんな風に化け物になって
も？

”真実”が知れてエ。

今の俺は、納得できねエ。

第二十八話

できないなんて決めつけんじゃねエよ。決めつけたらそこで終わ

神：なんか記憶ないクセに銀ちゃんの登場率高いアルム力つくネ！

銀：それはいいんじゃないの？普段は聞けない銀さんの叫びが聞けたんだよー。

神：銀ちゃんの雄叫びなんて聞きたくないネ。気持ち悪いアル。

銀：そっちじゃねーよ。

第二十九話 何を埋めるかが重要

俺は白夜叉がいる部屋にいた。向こうから呼ばれたのだ。

「アンタの方から呼ぶなんて。やっぱりあの時殺しとけばよかったって後悔してる?」

白夜叉はイスに座り机に肘をついて窓を眺めていた。こっちを見向きもしないで。

「後悔はしてねーよ。…お前に頼みがあんだ。これで貸し借りはなしにしようや」

「どんな?」

「俺の記憶を呼び覚まして欲しいんだよ」

自ら望むたア…。

確か赤憶郷は記憶を書き換え以前の記憶は二度と戻らない強い薬。記憶を呼び覚まそうとすると体が拒み覚醒する。大抵の人はそれに耐えられず死に至る…。

「記憶が戻ったら…どうする?」

彼はこっちを向いて笑った。

「…そんな時はそんな時だ」

「アンタ…記憶を失っても変わらないよ。記憶が戻っても変わらない。それに今のアンタとじゃやり合えないからね」

坂田銀時…奴ならきつと耐えられる。せいぜい”化け物”に呑み込まれないように気をつけるこつたね。

俺は部屋を出た。

外には阿伏兔がまっていた。

「もし、銀髪の旦那の記憶が戻ったら…やり合うのか？」

「…どうだろうね。俺は白夜叉、銀髪の侍にしか興味がないんだ。本当はあの時の公開処刑でやり合おうって考えてたけど」

「ま、俺にや関係ないこつた」

「阿伏兔、3対100の対決だ。宜しくね」

「つたく、俺アもう鉄格子ん中はおめんだ」

「今度DS付き合うから」

「んにやメガドライブだ」

3の中に、銀髪の侍。

味方に付くなんて今回限りだよ。

中央にある広場――

誰もいない。

いるのは俺と阿伏兔と銀髪の侍だけ。

「死ぬかもしれないけどいいんだね」

「いいぜ」

彼は真剣な目をしている。本気を感じた。

「別に俺アどうなっちまっても構わねエ」

「本当に…いいんだね」

念を押す。

「知りたいんだ。本当の自分を」

分かっているよ。

「阿伏兔」

「あいよ」

白夜叉の体を鎖で縛り、はりつけにした。

その時だった。

「銀さん!!」

「銀ちゃん!!」

「万事屋!!」

「銀時!!」

おや、出られたんだね。

第三十話 違う視点も大事なんだってば

団長室―

「たつ大変です！！神威が…！」

「何？」

豚蕩星の団長が席を立った。事は一刻を争う状況になっている。

「中央の広場でっ、白夜叉様をはりつけに…！」

「なんだと！？」

慌てて部屋を出る。

「神威め、ついに尻尾を出しやがったな。白夜叉を見せしめに自分の地位を上げようってか！くくく、だが残念。お前の師団はここで朽ちてもらう！お前に味方などおるまい…！」

100体ものの傭兵を連れ、広場へ向かう。

いや、尻尾を出したのは豚蕩星の団長…アンタである。

「銀さん!!」

目の前にいたのは、はりつけにされた銀さんであった。僕は今の状況が理解できなかった。

その変わり果てた風貌に、一同は唾を飲んだ。

耳が隠れるほど伸びた髪にきりつとした目つき、春雨の制服……。本当に記憶をなくして…。

「神威！お前、銀ちゃんに何したネ！！銀ちゃんを放すアル！！」

「別に俺は何もしてないさ。借りもできちゃうし…ありがた迷惑だよ」

「オイ、ガキ！万事屋をどうするつもりだ！」

土方さんは僕たちの数歩前に出た。

「記憶を呼び覚ますんだよ。白夜叉自身が望んだんだ」

「白夜叉…だと？」

近藤さんは目を大きく見開いた。

「攘夷戦争時代に一世を風靡し鬼神のごとく戦場を駆け巡り、白のふんどしに血を浴び戦場を駆る姿は…」

「いや、ふんどし違うだろ！！それは確か…なんだっけ」

つつこむ土方さん。

「違いやすぜ。急所を狙わずに痛みつける姿はまるでドSの間違いでさア」

「沖田さーん！！全く違う！なんかヤバいものが始まっちゃうし！」

「でも…まさか白夜叉が万事屋だとは…」

「銀さんは銀さんです！…白夜叉なんかじゃありません！」

「…ぐっ、あぁっ」

「」「」「！」「」「」

はりつけにされている銀さんが、急に苦しみだした。

「コイツらの面見るだけでもう拒否反応が出るたア…」化け物”に覚醒するのも時間の問題だね」

「…神威、俺がどんなに足掻こうが関係なしに…言ってっくれ…
うっ」

「銀さん！！」「銀ちゃん！！」

こんなに苦しそうな銀さんを見るのは辛い。…でも銀さんは自ら記憶を取り戻したいらしい。

僕たちは黙って見てるしかなかった…。

第三十一話 どちらかを選ぶとしたら

「今から銀髪のお侍さんの記憶を取り戻すための唯一の方法を行うから、君たちにも手伝ってもらおうかな」

「神威！何を企んでるネ！！」

僕は神楽ちゃんの前に出た。

「銀さんの記憶を取り戻すためなんだ…」

「新八…」

正直、僕も信用できない。本当に銀さんの記憶が戻るかも…。

「…銀さんを信じよう」

ただそれしか言えない。

「新八君の言うとおりだ。ここは齒を食いしばって…俺たちも万事屋を信じよう！-」

近藤さんの言葉に、皆頷いた。

「じゃあ始めるよ」

ガタアアアアン

「「「「!?!?」」」」

物凄い突風が起こった。

「神威イイイイ!! ついに尻尾を出しやがったなアアア!! 第七師団とそこにいる連中全員、成敗してくれるわアア!!」

そこにいたのは大勢の武器を持った天人がいた。

その先頭に、あの豚のような天人がいた。

「面倒なことになっちゃったね。豚蕩星の旦那、ちょっと賭けをしてみませんか?」

「賭け?」

「もし白夜叉の記憶が戻ったら俺の勝ち。もし戻らなかったら俺の負け。負けたらアンタの言うことなんでもききますよ。処刑なりなんなりと」

「何をぬかすか。オイ、白夜叉を解放しろ」

「彼自ら望んだことなんです。…それとも自信がないんですか? そうお見受けしていいんですね?」

「…よかるっ」

僕は固唾を呑んだ。

「白夜叉、心の準備はいい？」

「…ああ」

「じゃあ率直に言っと…白夜叉、アンタは天人じゃない」

僕はかすかに銀さんの異変を感じた。ピクツと少し動いている。

「アンタは地球人だ。…春雨の幹部なんて本当は嘘だよ。利用されるため、春雨に連れてこられた」

銀さんの口元が歪んだ。

「……めろ」

「赤憶郷という薬を飲まされ、記憶を捏造された」

「…やめろ！ぐっ、ぐあああああ！！！！」

銀さんの呻き声が、轟く。

「銀ちゃん……」

苦しそうな銀さんを見るのが耐えられず、神楽ちゃんは涙を流した。

「こらえよう、銀さんは今…自分と戦ってるんだよ」

「連れのガキやその他の関わりを持つ人間全てを忘れてしまった」

「…やめろ、神威。ククク…俺ア、白夜叉だ。他の誰でもねエ…クク」

全身鳥肌が立った。

目の前にいるのは…銀さんなのか？強張った顔、獣のような目、不気味に笑う口……。

「…”化け物”に覚醒しちゃったか」

『どうなっちまっても構わねエ』

『俺が足掻こうが関係なしに言ってるだけ』

「分かってるさ。俺は嘘はつかない主義なんだ」

「ガキは人質に、アンタは利用された。…全て豚蕩星の旦那の意図で」

「やめろ、やめろオオオオオ！！」

その時だった。

「銀ちゃんは毎日いつもいつも怠けてて仕事もしないで、おまけに死んだ魚のような目をしてぐーたら生きる屍のような男だったアル。給料も口くれないネ。…でも銀ちゃんは私たちを護ってくれる、誰よりも強い銀ちゃんだったネ!!」

神楽ちゃん…

「…そーですよ。しかもいつも僕をダメガネとか言ったりして…。糖尿寸前の甘党で万年金欠で…。でも僕たちはいつも3人一緒だった。僕たち3人で万事屋でしょう!!」

「万事屋、お前は男が惚れちまう男の中の男だ!」

近藤さん…

「テメーにゃきっちり借りを返してもらう。…こんなことでくたばるタマかよ」

土方さん…

「またポーカーフフェイス気取りでさア。旦那、アンタは俺と同じドSの匂いがプンプンしまさア。ドMに転向なんざ、嫌ですよ俺」

沖田さん…

いや、あんまり関係ないよね。

「銀時。俺はお前が嫌いだ。だが仲間だと思っている。昔も今もだ。そしてこの件が落着いたらきつと俺は真選組に連行される。そしてら…手綱をよこせとは言わん。その間…エリザベスの面倒を宜しく頼む」

お前は黙ってるオオオオ！！最初のどつかで聞いたことあるぞ！何、
アンタいつもそう言って説得してんの！？毎回同じフレーズなのか
よ！！てかなんで自分の心配しかしてないんだ！！誰もエリザベス
の面倒なんか見ねーよ！！

「ぐあああああ！！」

…もしかして桂さんのが一番きいた？

第三十二話 タイトルから楽しさを醸し出さない！（前書き）

途中の回想シーンに関して、多少の間違い等ございますが、気にしないでくれるとありがたいです。

では本編をどうぞ

（・・・）

第三十二話 タイトルから楽しさを醸し出さない！

「やめろ、…俺は白夜叉だ。ククク、早くこっから解放しろオオオオオ！」

「ありやりや、まったくきいてないのかな」

銀さんはもう戻ってこないのか？あのまま”化け物”に呑み込まれてしまうのか？

―嫌だ。

「銀さアアアアん！！」

「銀ちゃアアアアん！！」

叫ぶしかなかった。

＊――＊――＊――＊――

「屍を食らう鬼が出ると聞いたが…君がそっ？」

”その人”は俺の頭に手を置いた。

「己の魂を護る為に」

「…これまでか。敵の手にかかるより最期は武士らしく潔く…腹を斬ろう」

「バカ言ってるじゃねーよ。立て。…美しく最期を飾り付ける暇があるなら、美しく最期まで…生きようじゃねーか。行くぜ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だ」

「行けエエエエ！！新一イイイ！！」

「新八だボケエエエエ！！」

「お前らバカですか？私車ではねられたくらいで死なないネ」

「ご飯にボンドかけて食ってんですか？」

「江戸とても怖い所。故郷帰りたい」

「バカだなー。この国では赤い服着た女とパンチパーマには気をつけてるんだ」

「痛いよーっ、お母さん！！痛いよーっ」

「痛いよーっ、人一人くらいくるめるくらいの絆創膏持ってきてーっ」

「んだよお前ら！打ち合わせでもしたのか！！」

「万事屋、アイツを連れて逃げてくれ」

「悪りーな。あっちが先決だ」

「バカか。3人掛かりでもヤバい相手だ」

「足手まといアル。さっさといけヨ」

「足手まといですよ銀さん！！神楽ちゃんに僕が護ります！！」

「次会うときは」

「日の下で」

「…上等だ」

「ヅラじゃない…カゝ、カゝ、カーツペ！…なんだっけ」

「確か…カミュピタンとかなんとか言ってなかった？」

「そうじゃ、カゝ、カゝ……」

「狙うのは大砲の肛門だ、ヅラ」

「ヅラじゃない桂だ」

「見知りおけい」

「コレが本当の…」

「「ゲートボールじゃアアアア！」」

—*—*—*—*—*

「白夜叉、アンタの本当の名前は……」

坂田銀時」

第三十二話 タイトルから楽しさを醸し出さない！（後書き）

銀：あー甘いモン食いてー。本当バカだよなア…まさか甘党まで記憶を失うなんて。

新：僕たちのことは思い出してほしいですけど甘味は忘れたままで。

銀：よくねーよ！！いいか！俺から甘味をとるってことはな、お前からメガネを取るようなもんだよ！！チャームポイントなんだよ！！

新：こらアアアア！！僕と一緒にするなアアアア！！

銀：そんなわけで、これからも甘党銀さんにダメガネ新八くんに胃拡張娘神楽ちゃんをよろしくね。

第三十三話 簡単に自分を曲げるな

「白夜叉、アンタの本当の名前は

坂田銀時」

ピキ…

ピキ…ピキ…

ガシヤアアアン

「「「「！」「」「」

白夜叉を繋いでいた金具が、割れた。
鎖はちぎれ、自由になる。

白夜叉は、ゆっくりこっちへ向かって歩いてきた。

「銀さん…？」

「銀ちゃん…？」

ガアアン

ガアアン

「「「「！！？」「「「

白夜叉は、なんと自分の額を何度も壁に叩きつけている。
血が流れていても気にしない。

緊張の糸がさらに硬直する。

白夜叉は顔を上げた。

「……やっと思い出したぜ。…新八、神楽…」

少し笑顔だった。

「ぎ…銀さアアアアアんん！！」

「銀ちゃああああんん！！」

ガキ共は白夜叉…銀髪のお侍さんに抱きついた。

「ヒュー、こいつア参ったね」

俺は拍手を送る。

「…すまねエな。もう俺アどこにも行かねーよ」

「よ、万事屋。俺たちのことも分かるか？」

「あん？ゴリラに多串君に総一郎君にジミーだろ？なんでこんなところにいんだよ、この税金泥棒！」

「誰が多串君だアアア!!」

「旦那ア、総悟でさア」

「ジミーはないよね!？」

俺は振り返った。

…この勝負、俺の勝ちだ。

「くそっ…」

豚蕩星の旦那は後ずさりした。

「お前ら…本当にすまなかったな」

「銀ちゃん…」

銀髪のお侍さんは前に歩いた。そして、豚蕩星の旦那に吐いた。

「…だが、お前だけは許さねエ。豚野郎」

怒りに震えていた。

第三十三話 簡単に自分を曲げるな（後書き）

銀：次回、銀さん白熱の大活躍！絶対見るよな！！

新：………

第三十四話 R15指定タイムだ

「お前だけは許さねエ。この豚野郎」

——侍。

奴は”侍”の目をしていた。鋭く光った紅色の瞳は神々しい。

さア、お楽しみの時間が始まる…。

「銀時、いやボス！我ら攘夷志士の要！ご指示を！！」

「誰が攘夷志士の要だコノヤロー！てかヅラ！なんでいんだよ！！」

「ヅラじゃない、桂だ。ちよいと野暮用でな」

「どんな野暮用だよ！」

俺は銀髪の侍に話しかける。

「これで貸し借りはなしだね。今回だけは…今だけは、アンタ側だ」

「お前…」

俺はニヒルに笑う。

「…新八、神楽、オメーら…いくぞ!!!」

地球の侍たちは皆一斉に刀を抜き、構えた。

「殺れエエエエ!!! 白夜叉も、ガキも真選組も神威も第七師団全員
皆殺しだアアアア!!!」

向こうの大群が攻めてくる。

「「「うおおおおおおおおおおおおおお
!!!」」」

ガキイイイイン

鎧を削り合う。

「白夜叉の首は俺が捕るウウウ!!!」

「！」

キィィィイン

「…ゴリラ！」

「万事屋ア、ここは俺に任せてお前は豚の首を捕れ！！」

「…悪いな」

ガキィィィイン

「幕府の犬公わんこうが調子にノってんじゃねエエエエ！！」

「調子だア？おあいにく様ア。俺たち犬公はいつもでつかい遠吠え上げてるんでねイ。まア本気で調子にノってんのは土方さんでさア」

「調子ノってんのはお前だろ、総悟オオ！！」

ズサアアアア

「なんだこのガキ共！つ、強エエエエ！！」

「新ハイ！背中は預けたアル！！背後宜しくネ！」

「おう！神楽ちゃんも頼んだよ！！」

「桂ア！ついでに貴様の首も捕ってやらア！！」

「フン、捕られるのは貴様らの方だ！」

ドガアアアアン

ドガアアアアン

「爆弾だアアアアア！！逃げろオオ！！」

地球人のクセになかなかやるじゃない。
俺も負けてられないよ？雑兵といっても所詮軟弱の塊みたいな連中
だ。一発で仕留めてやるよ。

第三十五話 今日のディナーは豚カツだ

血飛沫が飛び交う中、俺は自分をこんな目にさらし、大切な仲間を危険な目にさらした黒幕を斬るため、歩いた。

斬っては進み、斬っては進みと無駄に体力を消耗する。

一瞬でも隙をつかれるとやられる。

「く…、まさかここまで来るとは…」

息が上がりながらもやつと黒幕の豚野郎と対峙できる距離まで来た。

「さすが白夜叉と言ったところか…。だが俺は他の天人と一緒にされちゃあ困る。こつ見えても攘夷戦争の生き残りだね。幾多の修羅場をくぐってきた猛者さね」

「お前と一緒にされたかねーよ。それと…その名前で呼ぶんじゃない
エ」

”白夜叉”の一言でもまた吞まれそうになる。

気をしっかり持て。

「どうした、白夜叉」

ドクン

「くく、ヤベーよ。また吞まれちまいそうにならァ…。なァ豚野郎！」

ガキイイイイン

「オイ、豚野郎！テメエ七草粥の七草全部言えるか！？」

「はァ！？…えつと、せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな…アレ！？後一つ何イイイイ！？」

「すずしろだァァァァ！！」

ギイイイイン

「岡田准一と堤真一、どっち派だァァァァ！！」

「お、岡田准一！」

「俺は堤真一だァァァァ！！」

こうでも言っつてねーと気をもてなくなる。

ザシュッ

「ぐっ…」

誰かに背中を斬られた。急いで振り返り、そいつを斬る。

血が滴り、意識が朦朧とする。息が上がる。

ギィィィン

「…血が出ているぞ、白夜叉」

ドクンッ

また胸の鼓動が高鳴る。

奴は俺の傷口を押さえつけた。
血が滲み出る。

「ぐあっ…」

ヤバい。また浸食されそうだが、そうはさせねエエエー！

「うるアアアア!!」

ドオオオオン

一太刀で奴の体は向こうの壁に叩きつけられた。

「ハア、ハア、ハア…」

血を手で拭う。

「銀さん!!」「銀ちゃん!!」

新八と神楽が寄ってきた。辺りを見ると、幾つもの天人が倒れていた。

「お前ら…」

「私じゃないネ。…ほとんど税金泥棒と神威がやったアル」

「…さん、許さんぞ!! 神威! すべてお前のせいだ!! 計画もめちやめちゃだ!!」

奴は起き上がった。

「ありやりや、起き上がって来るたア。タフですな、旦那」

「めっちゃめっちゃだア？バカ言ってるじゃねーよ。そいつアこっちのセリフだ。てめエのせいでこっちはやらんでもいいことやらされるは勝手に記憶捏造するは…ホント散々だったわ」

「銀さん!!」

俺は新八から愛刀を受け取った。もちろん”洞爺湖”入りの。

「オメーら！今日のディナーは豚の角煮か！？それとも豚カツか！？」

木刀を構える。

「「豚カツだアアアア!!」」

これで

シメーだ。

第三十六話 キャベツの千切りおかわり自由だ!!

「豚カツだアアア!!」

銀髪のお侍さんは木刀を振り上げ、豚濤星の旦那めがけて走る。

「うおおおおおおおお!!」

「木刀ごときで何ができる!!」

木刀と剣しるしが交わる。

剣筋が消えた。

ポタ…

血が垂れた。

銀髪のお侍さんから。

ドサアアア

「
」

「ハア、ハア、ハア」

倒れたのは

豚濤星の旦那。

だが銀髪のお侍さんもひざまずいた。
血が垂れる。頭から、背中から、横腹から。

「銀さん!!」

「銀ちゃん!!」

「「万事屋!!」」

「旦那!!」

「銀時!!」

連中らが駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

「…ああ、俺ア大丈夫…だ…」

「銀ちゃアアアアん!!」

「いでで、ちょっ強すぎだつて！！！」

「救護の船も来ている！さア、行くぞ！！桂、お前も屯所まで来てもらう！」

「銀さん、行きましょう」

「…悪いな、先行つててくれ。後で追いつくからよ」

「てめエ、必ず来いよ。後で洗いざらい聞かなきゃいけねーからな。攘夷戦争時代の異名とやらもな」

「わあーつたよ、とつとと行けよ多串君」

「だから多串じゃねーよ！！」

この場には俺と銀髪のお侍さんだけになった。

「…何か、俺に用があるみたいだね。今日はアンタとやり合う気はないんだ。簡潔にお願いできる？」

「…最初からくだるとてめエが俺達を春雨に連れてきてこうなっちまったが…結果的に助けてもらうハメになったな」

「元凶は俺だよ？…もう貸し借りはなくなつたんだ。好きにすればいいんじゃないかな」

銀髪のお侍さんは黙り込んでしまった。

「…地球に帰りな。君の顔はしばらく見なくていいや。…怪我、ちゃんと治しておいてね。じゃ」

俺は銀髪のお侍さんに背中を向け、歩き出した。

俺が興味あるのは強者のみだ。白夜叉と異名を持つ銀髪のお侍さんにも興味がある。…だけど今はそうは感じない。何故かって？奴は今は血を求めてない。修羅場にいない。白夜叉という人格は端から奴にはない。周りが勝手に決めつけた理想凶だ。奴の周りには護り護られる連中がたくさんいる。ただの…いや、奴は坂田銀時という侍。

やり合うのは…また今度っていうことで。

それまで俺の魂は干からびたまんまかもしれない…。

それでもいいや。

また会うその日まで。

「人生つてのは一期一会だぜ、神威。いいのか？」

陰から出てきたのは高杉晋助だった。

「また会ったね。ずっと見てたの？」

「高みの見物客つてとこかな」

煙管を持つ姿はム力つくけどやっぱり様になる。

「侍つてのはいいね」

「ククク、ちげーねエ」

第三十七話

第二章といきたいところですねー…あ、キャベツの千切りはも

万事屋――

「…なんでお前がいるの？」

「看病です」。新ちゃんに頼まれて来ました」

拷問だ、と思った。

「チェンジで」

「ダメです。新ちゃんと神楽ちゃん今出てるんで」

はア？アイツら俺に何も言わず出てくなんて、いい度胸してんじやねーか。あ、別にどうでもいいか…。

「どこ行っただよ」

「屯所です。近藤さんに呼ばれたらしくて」

「ふーん」

あそこなら心配いらねーな。事情聴取か？取り調べか？なんで俺じやなくてアイツらなんだよ。

「怪我の具合が良くなったら、銀さんも呼ばれますよ」

「死んでも行かねーよ」

真選組屯所――

「だから！銀さんは攘夷活動なんてしてませんって！！」

「そうネ！あのアホがんな難しいことやるわけないアル！！」

「じゃあなんで桂と知り合いなんだ？それに奴は”白夜叉”なんざ異名を馳せてんじゃねーか。白夜叉は攘夷戦争時代の武神の一人、死んだかと思つてたらまさか奴だなんて」

土方さんは煙草の煙を吐いた。僕らの説得じゃきかない。確かに銀さんは攘夷戦争には参加していたが今は全く活動なんてしていない。

「桂さんとは戦友で！」

「その辺にしときやせんかい？土方コノヤロー死ね」

「語尾が弱くなってるけどどういう意味だ総悟オオオオ！！」

「旦那は攘夷活動なんて参加してやせんって」

「俺は納得できねー」

どうしたらいいんだろう…。

コンコン

「副長！今万事屋の旦那が…」

「銀さん！？」

「分かった、山崎。通せ」

銀さんは僕と神楽ちゃんの間座った。

「…お前にゃ色々聞かないけねーことがたくさんある。洗いざらい、全て吐いてもらう。いいな」

銀さんは静かに頷いた。

「いいぜ」

部屋の空気が緊張感で硬直する。

「…攘夷戦争に参加していたのは本当か？」

「ああ」

「白夜叉、という異名を馳せていたのも事実か？」

「ああ」

銀さんの顔色は何一つ変わらない。

「…現在、攘夷活動に参加しているか？」

「…してねエ」

安堵した。当たり前だけど。

「本当か？」

「本当だつて。俺ア二度とあんな面倒くせーことしねエよ。それに、白夜叉なんて呼び名、とうに俺ん中で朽ちてるぜ」

いつもの銀さんだった。仕草、姿形も、改めて感じた。

「…それに、呼ばれる権利も呼ぶ権利もねーよ」

「…そうか。分かった、帰っていいぞ」

「てめエ、人を疑つといて疑いが晴れたから帰れたア？ふざけんじやねーぞ！罪も犯してない人間取り調べて何様だ、あん！？パフェぐらい奢れや！！」

「はア！？だいたいテメーら俺たちが助けに来なかったらどうなつてたと思うだ！？」

「別に助けに来てなんて頼んでねーし」

「こっちも願い下げだったーの！！あーもうテメーの面見んのは懲り懲りだ」

「それはこっちのセリフだ！」

「二人ともやめてくださいって！！」

いつものてんやわんやな風景が、嬉しかった。

「銀さん、怪我…大丈夫ですか？」

「あー？こんなの痛くもかゆくもねーよ」

僕と神楽ちゃんは足を止めた。

「どうしたんだよ」

…正直不安だった。

また銀さんがどこか行ってしまうんじゃないかって。

「…俺アどこにも行かねーよ」

銀さんは向こうを向いたままだったが、言い終えた後こっちを向いた。

「けーるぞ」

少し笑っていた。

僕らは走った。銀さんのもとへ。

「銀ちゃん、私豚カツ食べたくなってきたアル」

「僕、味噌カツでいいです」

「バカ言ってるじゃねーよ。…しょーがねエな」

豚に勝った。

豚カツだけに。

第三十八話 第二章突入！！飽きたと言わな！い！（前書き）

めでたく第二章突入です。本当にありがたいことです。長寿小説目指して頑張ります！これからも「KAMUI」をよろしくお願いいたします！！

第三十八話 第二章突入！！飽きたとか言わな―い！

春雨とある宙船――

「やっぱ体動かさないと鈍っちまわア。この歳になると…歳のせいにしちやいけね―よなア、すつとこどっこい」

「まアまアそんなに気にしなくても今動かせばいいんじゃない？」

「そ―だよなア、団長の言うとおり…ってオイ！どう考えても無理だろ！！だって俺たち鉄格子の中だものオオ！！」

「…また、捕まっちゃったね」

…そう、俺たちやまた鉄格子の中…振り出しに戻っちまったのさ。理由は？1話から読み直せ、すつとこどっこい。え？69分も読んでも読めるかって？…なんやかんやでこうなったんだ。

「元老もぬるいなア。あれだけの騒動起こしておいてコレだけの仕打ちなんてね。処刑でもなんでもすればよかったのに」

「そう言ってるけど、もし本当に処刑になったらそんな時に元老もろとも皆殺しにする魂胆でもあんだろ？」

「さすが阿伏兔。分かってるじゃないの」

「すつとこどっこい。何年アンタと付き合ってたんだ」

「あーあ、お腹空いたなア。まアいざとなったら阿伏兔、お前を食う」

俺は聞いて驚かない。

3358回目だものってコレじゃあ本当に振り出しに戻っちまうって？…いいんだよ。ここは大人の事情ってことで通用しちゃうからね。ん？テメーみたいなオッサンはいから神威出せて？オイオイすつとこどつこい！出さねーよ、出てこねーよ、出しません！！記念すべき第二章の幕開けをこんなオッサンが出しゃばるなってる？じゃあここはヒターンした方がいいんじゃないの、もっと素晴らしい小説家のところに行けばいいじゃない！クロスオーバーとかの方がいいよ！！灘さん家でも陸さん家でも総威さん家でもどこにでも行けばいいじゃない！

「阿伏兔、長いよ」

「団長は黙ってるーい！！」

まア確かに喋りすぎた。だからと言って鉄格子の中で何かできることもない。

一つ変わったことは団長から銀髪の侍の影が薄くなったことだ。それはありがたいね。

読兄の諸君、こんな幕開けですまない。オッサンの独り言…愚痴に付き合ってくれてありがとう。

次話から…ザ・シリアスで。

第三十八話 第二章突入！！飽きたと言わな―い！（後書き）

銀：オイいいいい！！どーなつてんだよ！なんだよこの幕開け！！
最低だよ！作者チェンジいいいい！！

神：…足掻いたところでどうするネ。

新：そうですね。僕らもう出番ないですよ。出るところは…前書き
か後書きぐらい…。

銀：…え？

第三十九話 親子ってもんはなかなか上手くいかないもんだ（前書き）

この話からの提供は星海坊主にかかります。初登場です。それでは神威の過去編スタートです。

第三十九話

親子ってもんはなかなか上手くないもんだ

——数年前

ポツ、ポツ

小雨が降っている。

その雨は次第に強さを増していったのを覚えている。湿気の匂いも、分厚い雲も。

「…ってよ、待ってヨ！兄ちゃん！どこ行くネ！！私も…」

「ついてこないでよ。…弱い奴に興味はないんだ」

奴はもう自分の妹でもなんでもない。涙を流していたが、拭きに行こうなんて思わない。

このまま…いや、この先自分は何もいない。師である鳳仙にも手をかけた。

いない

弱い精神は返って己から欲求を奪ってしまう。俺が必要とするのは強さだけだ。この血が流れている限り、もったいないじゃないか。

＊――＊――＊――＊――＊――

「悪いな神威。また仕事が入っちまってよ。母ちゃんと…神楽を頼んだぞ」

「分かってるよ。いつてらっしゃい」

神威…俺の自慢の息子だった。

優しくて家族思い…。いつも笑っていて神楽にとっては頼りがいのある兄だった。

幼いながらも家のことは全て任せていた。もっと小さい妹の面倒を見て、病気の母親を看病していた。毎日毎日…。あの事件が起きるまでは。

「兄ちゃん、マミーいつになったら良くなるネ」

「…もうすぐ良くなるさ。だから心配なくていいよ」

俺が事件から帰ってくると、いつも神威と神楽は母ちゃんが寝ている布団の横に座っていた。悲しげな顔をした神楽の頭を神威は撫でていた。その姿は初々しく、どこか寂しげな雰囲気もあったが、”家族”を感じていた。

「…ありがとうな、2人とも。交代だ。夕飯買ってきてあるから食べなさい」

「行こっか、神楽」

「うん」

なんとなく湿気った感じが、俺たち家族の一片だった。たとえ明るくなくとも、俺は好きだった。

”親殺し”

そんな風習が流行ったのはしばらく後のことだ。親を殺せば真の強さを手に入れれる。

そんなバカバカしい慣わしだ。一体どこのバカが言いふらしたのか分からねエが…皮肉なもんだ。こんなことで一気に家族が崩壊されちまうなんて。

神威はそんな噂に手を染めてほしくなかった。今となっては”他人”と考えた方が楽な気がする。でもそれは卑怯な方法だ。神威がそうなったのも…全て俺のせいかもしれねエ…。

第三十九話 親子ってもんはなかなか上手くいかないもんだ（後書き）

星：あの時…どうしてもっと大事にしなかったのか、俺の髪イイイ
イ！！

あん時はもつとフサフサでサクセスでちゃんとシャンプーしてたの
に！！

銀：うつせーよ！！つかハゲ！テメーみたいなサブキャラがこの
こと後書きに出てくんない！本文で充分だろうよ！！

星：リーブ21にしよっかな…。

銀：俺だつて縮毛矯正やりてーよ！ストレートになりてーよ！テメ
ーは縮毛矯正じゃなくて育毛強制だ！

神：一度死んだ毛根は還つてこないネ。

第四十話 マルチ商法にご注意ください

ドンドン

「いい加減にしてくれよ。星海坊主の息子だからってナメてたらイカンぜ。借金くらいちゃんと返さないかね」

いつもの借金取りが俺のいない時間にやって来ることを俺は知らなかった。

「すみません。来月にはちゃんと返します」

「ああん！？俺たち何ヶ月待ってんだと思ってんだよ！！」

神楽は怯えて神威の後ろに隠れている。

「すみません」

少ない齡ながらも神威はいつもいつも頭を下げ続けた。

やっと借金取りがいなくなると、決まって神楽を抱きしめ「大丈夫」と言っていた。

「兄ちゃんはいつも笑っているネ。どうしてアルか？」

「困った時も悲しい時も笑っていれば忘れられる。ニコニコしてた

方が損なことはないんだよ」

自分の息子でも何を考えているのか皆目見当もつかなかった。辛い時には泣けばいいとか、ちゃんと本音を言えとか、ウザったく思われてもいいがどうして神威には言わなかったのだろうか。奴を一目置いていたのか？だが、あの頃の神威は強い精神を持っていたのは確かだ。

”夜兎”という戦闘一族だったから周りからは恐れられていた。だが神威は気にしていなかった。だからほんのわずかだが友達はいた。その友達が神威にとって人生の選択肢だったのかもしれないエ…。

俺が1日家にいる時は神威や神楽は外へ遊びに行く。二人ともひとりぼっちになるのは嫌らしい。それは夜兎の血を引いているからなのか、それとも普通の子どもとして他の子と遊びたかったのか…その答えは両方ともだ。子どもながら、考えていることは膨大だった。笑っていたら人が寄ってきた。ひとりぼっちじゃない、と神楽はよく言っていた。でもそれはお手本がいたから。神威は神威の友達、神楽は神楽の友達がちゃんといた。それには安心していた。

が、その日は違った。

「じゃあ行ってくるね」

いつものように神威は家を出た。

奴の本当の”笑顔”を見たのはコレが最後だった。

この日は神楽は家にいた。俺と母ちゃんと神楽、三人で…。

「神楽は…いつも友達と何をして遊んでるんだ」

「万引き」っこしてるネ」

「なんだよ、その遊び……」

「実戦の日は近いアル」

「やらなくていいから……！てかやらないで……！絶対に……！」

「……パピー、今日もふりかけご飯？私……卵かけご飯が食べたいネ」

その表情は悲しげだ。

小さい子どもに……親として情けない。低収入……低身長に低学歴……3
Tがこの通り揃っている。……情けねエ。

神楽の小さな頭に手を置いて「すまねエ」と吐くしかなかった。だが
が神楽は黙ってふりかけご飯をもくもくと食べていた。

第四十一話

一生のうちの半分は金稼ぎの時間って考えると自由が欲しくな

夜になったがまだ神威は帰って来なかった。

いつもならもつと早い。おかしい…。迎えに行くか？待つか？葛藤が芽生える。

でも今思えばどうして迎えに行つてあげなかったんだろうか。いや、でも一緒か…。俺は待つ選択をしてしまったのだ。

時刻は夜中の12時を回った。神楽は兄を心配していたが寝てしまった。

俺は苛立ちを隠せなかった。座卓にあぐらをかいて腕を組み、組ませた足は貧乏揺すりでゆれている。

眠い。時々睡魔が襲ってくるが、まばたきを何度もしたりして起きていた。

ガタッ

物音がした。

帰って来たかと思い、俺は玄関へ歩いた。

驚きの光景が目映った。

そこにいたのはゆらっと立っていて血にまみれた神威だった。

「どうした！！何があつたんだ神威！！！」

俺は奴の体を揺さぶった。

「……ない」

何か呟いた。

「…弱い奴に用はない」

啞然…茫然とした。

殺気立った目をした神威。…神威なのか？全くの別人に見えた。

―その目をしてはいけない。心のどこかでそう感じた。”夜兎の本能”…。言えばそれに当てはまる。その目は…俺の目にそっくりだった。

地を求めるだけの獣の目…。何故、今……。

構わず神威は俺に殴りかかって来る。”夜兎の本能”…それが殺し合いとなつて始まる。表へ出てお互いの血の呻きが止むまで。親子という関係は消えてしまった。ドス黒い何かに吞まれ、打ち合いを繰り返した。

ドウウウッ

「！」

奴の一撃で片腕が吹っ飛んだ。

だが、こんなことでくたばれない。優しくて家族思いだった神威が……一体何があったって言うんだ、という考えをすぐに戦闘本能が断ち切ってしまう。

その時

小さい影が見えた。

「何してるネ！やめてヨ！！パピー！！！！」

……神楽だった。

必死で俺の足にしがみつки、抑えようとする姿は泣いていた。騒音に起きてしまったか。

「やめてヨ！！パピー！！」

その時、はっとした。

息が上がる中、目の前にいたのはうつぶせに倒れている神威だった。

第四十二話

反抗期は急に始まる（前書き）

訂正です

41話

地↓血です。

申し訳ございませんでしたm（
——
）m

第四十二話 反抗期は急に始まる

これ以上やったら奴は死ぬ。

ようやく体が止まった。急いで近寄る。

「神威！オイ！！しっかりしろ！！」

神威の目は普段に戻っていた。

奴を起こそうとした時

「さ…さわらないでよ。俺はやっと…見つけたんだ。夜兎の本能を…」

”親殺し”

そんな噂を流した野郎を殺したいと何度思ったことか。だが違った。俺はあの時、神威を黒く染めちまったんだ。自分も黒い。せめてガキだけには…染まっただけじゃなかった。

ケガが治ったかと思うと、とっとと出て行きやがった。鳳仙の元へ行ったらしい。奴本人から師弟になったと聞いたとき、俺は引き連れて帰ろうとはしなかった。

そんな奴が一度だけ家に帰ってきた時があった。それは母ちゃんが死んだ時だった。母ちゃんが死んだ日は雨が降っていた。

奴は母ちゃんに一言も言わず姿を消す。

その後を神樂が追っているのを見て、俺も後ろからついて行った。

バシャバシャと水溜まりを踏む長靴の音。

「待つてヨ！！兄ちゃん！！どこ行くネ！！私も……」

「……ついてこないでよ」

神樂の足が止まった。

「弱い奴に興味はないんだ」

傘ごしで神威が最後に言った一言。

そのまま振り返ることなく歩いて行った。

何故その時止めなかった。やっぱり俺は奴から逃げていたに違いね
エ。

——*——*——*

「……で、俺たちにどーしろってんの？」

「親子ってというか家族の問題ですもんね」

「だいたい親子喧嘩に首突っ込むなんざ野暮だっつったのアンタだ
ろ」

TPOは変わってここは地球の江戸にある万事屋。
神楽ちゃんが住み込みでバイトしている場所だ。

しかし…相変わらず憎たらしいな。銀髪天然パーマに死んだ魚のような目をしてオマケにチャランポランなこの若造…。

あーあ、こんな奴死ねばいいのに…なんて思っていない！だって依頼しにきたんだもん！まア…サンタの借りもなくはないが…。

「で、依頼つてのは親子喧嘩の仲介ってか？ワリーがその依頼、受け入れねーや。…面倒なことは嫌いだからよ」

そう言い捨てる。つーか端から分かっていた。野郎の面に「嫌です」って書いてある。

「…神楽は…以前のような兄に戻ってほしいと思っている」

「お父さんよオ。…人つてもんはそう簡単に変わらねーよ。黒く染めちまつたんなら仕方ねエ。誰かが白く上から被り塗るか黒いモンを流し落とさなきゃならねエ。だがその誰かが…俺でいいのかよ」

「……」

確かにそうだ。自分がした責任を人になすりつけるなんざ…最低だな。

俺が…綺麗さっぱり洗い落とさなきゃならねー…か。

「…すまなかったな。このこと…神楽ちゃんには…」

「言わねーよ。…だが、多少の手綱は持ってきてやらア」

俺は席を立った。

コイツならやりかねんと感じていた。

ピシャン

「銀さん…星海坊主さん大丈夫ですかね」

「心配はいらねーよ。親父の方が強いに決まってる」

万事屋を後にした俺は、神威の…春雨へと目指した。

このままではいけないと、感じていた。

第四十二話 反抗期は急に始まる（後書き）

銀：出れたアアアア！！もう出番ねーと思ったら…出れたアアアア！！！！

新：悲願が叶いましたね！！

神：オイ！！2人で何喜んでるネ！！私出でないアル！！おかしーネ！！

銀：何言っただよ神楽ちゃーん。お前ハゲの回想シーンで沢山出てんじゃねーか！それに万引きごっこなんて…どんだけ非難浴びれば気がすむと思っただ！！

新：あれは確かに…やりすぎじゃない？てかヤバくない？

銀：そーだよ！？全国ネットで何やらかしてんだよ！？

神：過去のことは気にしない！前だけ見てればいいネ！！

第四十三話

あの…ヘルメット傾いてますよー！いや、そんなことより大切な

辺境の星、地球――

「またこの地へ来れたね、阿伏兔」

「あーあ、嫌いだよ俺。この間は銀髪の旦那とつかまえるだけだったけど…今回ののはちと骨が入るな」

――天導衆。今回、俺たちの狙いはそれだ。

連中は江戸を治めているお偉いさんで相当強いらしい。

そいつらに何の用かって？うーん、難しいことは分からないけど…確か侍の排斥について？

まアこれもビジネスの一貫だけど俺はこの仕事、やらない。

だって”侍”という強者を…もったいない。刀一本で武士道とやらを極め己の魂を強めていく…どんな具合か試してみたいじゃないか。

「団長オ、今回ばかりは…元老じゃなくて天導衆。逆らったら即打ち首だぜ？」

「そんな時は皆殺しにするけどね」

「オイ！！これまた第1話からのクダリとほぼ一緒じゃなーか！」

「確かにね、俺しばらく銀髪のお侍さんに会いたくないし」

「オイ！！話聞けよ！！すつとこどつこいー」

俺は阿伏兔を無視して天導衆の連中がいるターミナルへ向かった。
何をしに行くのか自分でも分からない。挨拶？

ターミナル――

「…少し時間にルーズだな」

12人の天導衆が輪になって向き合っている。
円の中の映像には神威が映し出されている。

「このガキが春雨第七師団団長…」

「この前の白夜叉の件で失敗したとか」

「ククク、バカだな。端から無理に決まっている。白夜叉はな」

巨漢な網笠の男が言う。

「…意味深な発言ですな、黑夜叉様」

「ククク…」

万事屋――

「離すネ！…この変態オヤジいいいい！！」

「神楽ちゃん！お父さんに向かって変態はないだろ！え、どの変態が変態か言ってみろ！」

「全てアル！！」

「マジか！分かった、お父さん直すから！！」

「うるせエエエエ！！」

その場が静かになる。
俺の一声で。

「親子喧嘩は外でしやがれ！！」

さつきからこの調子。

このハゲ、相当なバカで神楽が帰ってきて早々に「息子と仲直りする」なんて自ら言っちゃうもんだからこうなったが…路線から外れぐつたぐたな展開に銀さん疲れちゃったわ。新八、パス。

ええ！？いきなり振らないでくださいよ！！ずっと銀さんの提供でよかったですか！

バツカ、オメーただでさえ出番ねーのに今出とかな次いつ来るかわかんねーぞ。

えっ…じゃあ…

「パピーひとりの問題じゃないアル。神威は…私の兄貴ネ！！」

「神楽ちゃん…だが危険すぎる」

「私が止めなきゃ誰が止めるネ！！」

なんか路線戻ってるし！！

第四十四話 偉人って素晴らしい人のことだとは思えない

ターミナル――

「遅いではないか、神威」

「すみません。時間にルーズなもんですから」

俺は天導衆の連中らを見上げた。まア随分と高い位置にいますように。身分を表す象徴かな。

「…で、用件は何でしょう。江戸壊滅ですか？白夜叉狩りですか？侍の全滅ですか？」

「ククク、小僧…分かっているではないか」

そいつは他の連中より極めて巨漢な男だ。獣のような目…あの時の白夜叉を思い出すな。

「辺境の星、地球…。全てに置いて豊富な地…野蛮な猿共にはもったいなかろう」

「…全て天人に浸食するつもりですか。無理ですよ。だって…アンタ確か攘夷戦争中に江戸城を大砲ででっかい穴を開けたって名が上がったらしいが一人の侍相手に重傷を負ったらしいじゃないです

か」

そいつは微笑した。

「ククク、よく知っているな」

「で、その侍っていうのが白夜叉」

「小僧：何が言いたいんだ」

微笑したまま、見下ろした。

「ビジネスで来ているだけですから」

目をそらした。

夕方、夕焼けを背に行く宛もなく歩いていた。

宇宙の掃除屋と名を馳せていても裏を見ればただの四十代のオッサンだ。年頃のカギを二人持つ親父でもあるが：何一つ分かつちやいねエ。

『誰かが白く被り塗るか黒いモン洗い流さなきゃならねエ。だがその誰かが俺でいいのかよ』

野郎の言葉が脳裏を過ぎった。ちくしょう、と自分に腹が立つ。

万事屋を後にしてただ歩く。

神楽ちゃん…。

奴を止めに行く。

事は早い方がいい。

第四十五話 少年よ、大志を抱け

不気味に笑う黒い陰がより一層不気味さを増していた。

不気味…一言で言ったらそれだ。だって不気味じゃないか。こんな所で12人のオッサンが談義してるんだから。当てはめて天導衆ね。

俺と阿伏兔はただ見上げる。そろそろ首が痛くなってきた。

「神威、貴様は刃向かう気か？」

不気味に笑う男は苛立ちを示しだしている。

「刃向かう気なんてさらさらないんですけど？黒夜叉さん」

そいつの名前は黒夜叉というらしい。白夜叉と対照的でおもしろいね。

「ただ、排斥してどうするってんですか。俺にはもったいない気がするな」

「やはり刃向かう気か」

「ないってさっきも言ってるけど」

「小僧…」

黒夜叉の奇立ちが増す。滑稽だね。

「じゃあ俺はこれで」

ま、このまま戦闘になれ込むのもいいんだけど。
だが連中は止めなかった。

「…おもしろいものが見れそうだ」

万事屋――

「神楽ちゃん…今日も押し入れですか」

「ったくよー、押し入れに引きこもるなんて聞いたことねーぞオ。
ほっとけほっとけ」

「そうですね…。ま、ご飯の時間になると」

ちょうど7時で、銀さんは夕食を食卓に出していた。
その時、神楽ちゃんが押し入れから出てきた。

「テメーご飯の時だけ何ちゃっかり出てきてんだよ」

「……」

何も言わず神楽ちゃんはご飯を黙々と食べる。

星海坊主さんがあんなこと言ったんだから、気持ちは分かるけど…。

銀さんは箸を止めた。

「いただきますぐらい言ったらどうだ」

「……銀ちゃんに私の気持ちなんて分かんないアル」

その言葉に銀さんはむっとした。

「…分かんねーよ。テメーの気持ちなんて。だけどよ、ご飯くらい
楽しく食おーや」

そう言うと再び銀さんは箸を持ち、ご飯を食べ始めた。

神楽ちゃんは黙って食べる銀さんの姿を見た。

「…ごめんなさい。銀ちゃん、新ハイ…ごめんなさい…。私、嫌だったアル。パピーと神威がまた喧嘩するのは…」

「神楽ちゃん…」

大粒の涙を流した。

「失うのが…嫌アル。誰も、いなくなつて欲しくないネ」

銀さんは箸をお椀に置いた。

「誰もいなくならねーよ。いなくなつたらいけねエ…」

その言葉で僕も何故か涙が溢れた。
なんでだろう…。

「うん…」

この日の万事屋は静だった。

第四十六話 なんてだろう、電車での立ち揺れは気持ちいい

「団長、やっぱりまずかったんじゃないか？」

「ん？何が」

「何がって、すつとこどつこい。天導衆の命令を受けないのかつて聞いてんだ俺ア」

侍排斥——…。

銀髪のお侍さんの他にも強い侍はいっぱいいるはずだ。確かあの件の時にいた真選組に桂という侍…。強者揃いだ。

「やんないよ。天導衆（奴ら）とやり合う策も考えてんだから」

「団長オ——…」

万事屋——

「なんなんだよ。うぜーんですけど」

「…すまない」

俺はまた万事屋に戻っていた。恥ずかしいことに、寄れる場所がなかったのだ。コイツらに頼るしかねエ…。男、プライドを捨て殺したくなるような若造に物申しに…。

「てか臭いんですけど」

「…すまない、昨日風呂に入っていないもんで…」

ぐぎゅるるる

腹の音が鳴った。

ぐぎゅるるる

ぐぎゅるるる

「てかうるさいんですけど」

「…すまない、昨日から何も食ってなくて」

ハアっとため息をつく。

「もう…何もかも壊滅的だ。いい年して…情けねエ」

「壊滅的？頭が？」

「どーいう意味だ」

「そーいう意味だ」

ム力つき過ぎて涙もでねエ…。確かに、今の俺は髪も家族も神威も…3Kを失っている。あ、うまいこと言った！

「何自画自賛してんだよ！丸聞こえなんだよ！！」

若造のツッコミ。

「ちよつ、銀さん！落ち着いてください！」

その時、神楽ちゃんが入ってきた。

「パピー…」

「神楽ちゃん」

俺をしっかりと見つめている。

「私…パピーがなんと言おうと私も行くアル」

その目は真剣そのものだった。父親として、神楽と一緒に行かせるのか…不安もある。そして葛藤…。

「神楽ちゃんが行くなら…僕も行きます。神楽ちゃんは…大事な家族ですから！」

眼鏡は言った。

「新八…」

「しゃーねエよな。手綱渡すって言っちゃったからよ」

「銀ちゃん…」

”家族”――。

俺はこの3人からそういう繋がりを感じた。血は繋がっていないが、目には見えないとてつもなく強力な絆を…。
神楽を家族だなんて野郎たちは考えている。

「…一緒に行くことに關しては何も言うまい。だが、死ぬ覚悟はできてんだな？特に銀髪」

「前にもそーいう忠告してくれたな。…大丈夫だ。誰も死なせねエよ」

ニヒルに笑う銀髪の姿を前にも見た気がする。口だけ悠長で達者なところも…。

神楽…。

お前は幸せな奴だ。

こんなにお前のことを思っている連中らがいてよ…。

はじめを付けるんだ。

第四十七話 親父の背中是世界一

ターミナル――

天導衆の12人は円の中の映像を見ていた。

そこに映るは星海坊主、銀時、神楽、新八がターミナルへ歩いてくる姿。一同無精に笑みを浮かべる。

「クク、あの銀髪…忘れもしない白夜叉ではないか…」

ほう、アレが。とざわつく。白夜叉…銀時はかつて攘夷戦争中に黒夜叉と対峙したことがある。

黒夜叉は銀時が最も恨むべき相手…恩師、松陽を暗殺した天人。

「…何をしようと考えているのかは知らんが…」

「侍排斥計画の邪魔はさせまい。こちらには既に春雨と手を組んでいる」

ターミナルの外には春雨の紋章が描かれた宇宙戦艦が到着していた。

「神威は拒んでおったが関係あるまい。いずれ、江戸は我々のもの

になる…」

春雨宇宙戦艦内部――

「はははっ、また鉄格子の中だね」

「ずっとこどつこーい！！」「KAMUI」始まって何回入れられりや気が済むんだったく。元老、天導衆に逆らっちゃまったらおとがめなしじゃいられないことくらい団長ももう分かり切ったことだろ？」

「分かってるけど」

俺と阿伏兔はまたまた檻の中なう。あ、今なうって使ってみたかったんだー。流行りじゃん。

「どーでもいいわア！！」

「あり？聞こえてた？」

「丸聞こえだつっの」

…このクダリどっかであったね。まア気にしないでくれ。

「こんなんで俺たち身動きもできない。こうしている間にどんどん侍は排斥されていくのかな」

「さあ…。少なからず…実行じゃないの。あーメガドライブやりてエ」

「えー、3DSがやりたいな。戦国武将やりたい。でもレイトン教授もやりたい」

「アレさ、ゲオで試し用やってみたけど感動したねって何の話してんだよ。すつとこつこい」

「尺埋め」

「団長オ！！作者の素性を言っちなやー！」

「ん？何のこと？」

しばらく沈黙が続いた。

「団長、アンタ…確か親父さん星海坊主って天下の掃除屋らしいな」

「それがどうしたの」

「いや…別に。でも妹もいたよな。団長とは反対に夜兎の血を恨み血と戦う妹…」

……

「俺は共食いは嫌いなんだ。団長…アンタは」

「阿伏兔。それ以上言うと殺しちゃうよ？…言っただろ？もう関係ないって…。俺が求めているのは剛なる者だ。家族なんて弱い精神に捕らわれる奴らは醜いよ。それに…もったいない。夜兔の血の風上に置けないよ」

「……」

冷たい隙間風が吹いていた。

第四十八話 家族を超えた強い絆だってあんだよ

ターミナルの上空には春雨の宇宙戦艦が浮かんでいた。
なんてこった。時期が悪すぎる。

「オイオイ、なんだよあの戦艦。お迎えか？」

あの中に…神威がいる。

「万事屋ア！！」

「！！」

後ろを振り返ると、真選組がいた。

「アレ、何だよ。テメーらもう出番なくね？第二章には必要なくね？」

「んだとオオオオ！？」

「落ち着け、トシ」

以前世話になった真選組。どうしてその輩が…

「ただのしゃばりでさア」

「何の連絡もなしに江戸にやってきたんだ。密約か陰謀か何かに違
いねエ」

「はア!？」

事態はややこしくなっていた。俺たちは神威との喧嘩に終止符を打ちにやってきたが、偶発的に春雨の戦艦が現れ、それが密約だなんだので幕府の犬、真選組も現れる。

「あ、ややこしやゝややこしや。あ、ややこしやゝややこしや。ポ
ン」

「ポンじゃねーよ!何なだき武やってんだよ!」

銀髪の蹴りが入る。

「星海坊主さんじゃありませんか!あ、サインください!」

「何やってんすか近藤さん!」

収集がつかないな。

「…野暮用でな。俺たちは先行かせてもらっ」

「あばヨ、税金泥棒」

俺たち4人はターミナル内部へ向かった。

「ククク、あの4人…逃げられるとでも思っなよ」

黒夜叉は呟いた。

「白夜叉ア。貴様も今日で見納めだ」

ターミナル内部――

「手分けして神威が乗っている戦艦を探そう！」

ターミナル上空に浮かぶ戦艦の他に、数隻ターミナルの中に着陸させてあった。

俺と神楽、銀髪と眼鏡で別れた。

「行くぞ、新八！」

「はい!!」

「よし、神楽。俺たちも行くぞ」

「……」

「どうした？」

「…パピー、絶対…死んじゃだめアルヨ」

「当たり前だ」

必ず神威を以前のような奴に……。だが無理かもしれない。でもやっぱりこのままじゃだめだよな、母ちゃん…。

第四十九話

お父さん！私の隣に座らないでよ！！臭い

「銀さん、ここ…どこでしょう」

「あ？知らねーよ。俺に聞くなバカ」

ターミナルとは思えないほどの汚くて暗い廊下。僕と銀さんはその廊下をただ真っ直ぐ歩いていた。

「…なんか不気味ですね。幽霊とか出そ…」

……

その場で銀さんは頭を抱えてうずくまっていた。

「…何してんスカ」

「いや…あの、アレだ。ゆ、ゆゆゆ幽霊に敬意を払ってんだよ」

「………」

分かっている。銀さんが幽霊嫌いってこと。

けどあまりにも何とも言えなくて蔑んだ目で見てしまう。

「…なんだよ」

頭を抱えて僕の方を見た。僕は後ろを向いて笑いをこらえる。

「大丈夫ですよ銀さん。幽霊なんていませんから」

「バツ…幽霊じゃねエ、スタンドだ」

その口調は怯えている。

「怖いんですか？」

ついついにやけてしまう。

「怖くなんかねエよ！！むしろ楽しいくらいだ」

また見栄張っちゃって。

「アレ…なんですか、この扉…」

目の前に建つ大きな扉。黒く漆塗りされていて、かなり頑丈そう。

「って銀さん！何開けようとしてんですか！！」

「開けようとしていて何が悪いんだよ」

銀さんはそのまま扉を開けてしまった。

ガァァン

扉の開く音が鳴り響いた。かなり広そうだ。

「ククク…待っていたぞ、白夜叉」

「「!?!」」

奥から声がした。

低く、落ち着いた。

大きい影が近づいてくる気配がした。

コツコツと鳴り響く靴の音…。

「誰だテメー」

暗くてよく分からないがその姿が次第に露わになった。

「アレが白夜叉か」

「隣のガキは誰だ？」

どこからか数人の声がする。この場にいるのは一体何人…。

パ
ア
ア
ア

「「！！」」

今度はいきなり明るくなった。

不思議な空間だった。

広い部屋に長細い鉄塔がいくつかあって、その上に人が座っている。

「銀さん…ここ…ヤバくないですか？」

だが返事はない。

「銀さん…？」

僕は銀さんの方を見た。

銀さんは大きく目を見開いて、呆然としていた。

「ククク…ワシに見覚えはないか？白夜叉」

「く……黒夜叉……」

第五十話 面舵一杯で急カーブ!? (前書き)

皆様の応援で50話までいきました!!
これからも宜しく願っています><

第五十話 面舵一杯で急カーブ！？

「パピー！いたアルか？」

「いや…いねエ。神楽は？」

「だめアル。どこももぬけの殻ネ」

神楽の表情は落ち込んでいた。そう簡単に会えるはずもない。もしかしたらターミナル上空に浮かぶ戦艦の方に乗っている可能性だつてある。

「あいつらは…」

「銀ちゃんたちは分からないアル」

と言っていたがここにある戦艦は残り一隻。確率的にも低い。この戦艦にかけるしかねエな。

神威…

いてくれ。

ターミナル外――

「近藤さん、怪しいですぜ。こいつら…全く動きを見せません」

双眼鏡で総悟は春雨の戦艦の様子をうかがっている。

確かに、攻撃も提示も何もない。おちよくってんのか？俺は一服した。

「奴らも様子見か？」

「近藤さん、気を抜いてはダメだ。いつ何をしてくるのかわからねエ」

「分かっている、トシ」

「今回の件に高杉は関わってないのは確かだ。鬼兵隊に動きはねエ」

ゴオオオオ

「！！」

後方からエンジンか何かの気風がした。

「とつつあん!!」

空に浮かぶ船は警察庁のものだった。

「近藤オ!!なんかえらいことになってんなア!!おじさん心配になっちまってよう、見に来たんだってばよ!!」

スピーカー越しで警察庁長官松平片栗虎の声がした。

「無言の対峙かア!?!よし、分かった!まっちゃん砲用意!!」

「とつつあん!!!!空気読んでエエエエ!!!!冷静になってエエエエ!!!!」

「なんでだ近藤オオ!!男は黙って潔くド派手に戦しやがれエエエエ!!!!」

「何嵐にしがれみたいなりふりで言ってるだよ、とつつあん!!」

「ザ・セット回転しやがれエエエエ!!」

「とつつあん!!!!それとつつあんの言うところじゃなアアアア!!!!」

俺は呆れた。

収集がつかねー。

もう一度ターミナルの方を見た。

万事屋^{あいつら}…

何の目的か知らねーが…生きて帰って来いよな。

第五十一話 網笠を被った奴には気をつける

——*—*—*

数年前――

「先生、先生は毎晩何コソコソ書いてんの？」

「知ってたんですか、銀時」

俺は頷いた。

先生は少し驚いていたけど再び俺の頭に手を置いた。先生の膝枕は気持ちいい。

「…大切な人に…手紙を出しているんですよ」

「もしかしてラブレターってヤツ？」

「違いますよ。たくさんの人に出しているんです。みんなが幸せに暮らせるような世界になることを願い…」

先生は長々と話していたが俺は眠ってしまった。

まさか…これが先生と交わした最後の言葉だなんて思いもせず。

数年後――

攘夷戦争後期

侍の敗戦は決定づけられる頃。

ドガアアアアン

ドガアアアアン

江戸城の天守閣に大砲がぶち込まれた。

「…そうか、お前…あの時の…！」

高杉の目からは大量の血が出ている。

向こうの一太刀を俺は割って止める。

「銀時！」

「コイツあ俺が!!」

しばらく鎬を削り合う。

「ククク…確か白夜叉と言ったな。…で、松陽の師弟…」

「テメーか」

「？」

「テメーかって聞いてんだよ」

意識が高ぶり、荒い呼吸で自我が飛ぶ。

「は？」

「松陽先生殺したのテメーかって聞いてんだよ!!」

一気に周りが静かになった。

奴は笑い出した。

「だったらなんだ？」

何かが切れた。
俺の中の何か。

「ワシは黑夜叉。松陽を殺したのだよ…白夜叉」

その後のことは覚えてねエ。

気づいた時には奴は血まみれでうずくまっていた。

「銀時…」

「アレ…高杉…？」

「テメー今理性ぶっ飛んでただろ。テメーの悪い癖だ」

「…」

俺がここまで…

——*—*—*

「覚えているな？白夜叉…」

「く…黒烏龍茶」

「ちげーだろ！！」

ひっくり返る新八と黒夜叉

第五十一話 網笠を被った奴には気をつける（後書き）

新：なんでそうなるんだよオオオオオ！！アンタは本当にシリアスム
ードぶち壊すの好きだな！！

銀：噛んだんだよ

神：これだから銀ちゃんは銀ちゃんアル。もつと緊張感持たんか！！

新：お母さん！？

第五十二話 尾形の発言に100%共感してしまう

「新八…てめーは下がってろよ」

「銀さん…」

銀さんの腰には木刀と真剣をさしていた。
真剣の方に手をかけた。

これから何が始まるのか分からない。

銀さんとこの男が知り合いつても驚いた。

「黑夜叉、てめーには聞きたいことが山ほどあつた。一つたりとも残さず答える」

「いいぞ」

「松陽先生とはどーいう関係だった」

松陽先生…？誰のことだろう。

「白夜叉…お前は知っているか？松陽が手紙を書いていたことを」

「！」

「その手紙の相手…このワシだ」

銀さんは目を大きく見開いたままだ。

「装ってたんだよ。だが、おかげで松陽の居場所が分かった。だから殺しに行く事ができた」

『みんなが幸せに暮らせるような世界を――』

銀さん……？

銀さんは俯いたまま、低い声で言った。

「……せねエ、許せねエ、許せねエ！」

殺気立った銀さんの目からほんの少しの水滴が落ちた。

松陽先生……。

僕には一体誰のことか分からないけど銀さんにとってはとても大切な人のようなのだ。

「許さなかったらどうする？この場でワシを殺すつもりか？」

黒夜叉は不気味に笑う。

ジャキーン

銀さんは刀を抜いた。

「てめーはここにくたばってもらっぜ」

銀さんは構えた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

ガキイイイン

「白夜叉と黑夜叉の戦いか…面白いな。白黒はつきりつけてもらおうか」

他の男たちは笑いながら銀さんと黑夜叉の死闘を眺めている。

ガキイイイン

ガキイイイン

「剣腕はまだ鈍ってないようだな。だが…白夜叉（お前）の本気はこんなもんじゃないだろう?」

「ちげーねエ。だが俺はあん頃の俺とは違う。もう鈍っちまったわ」

「ククク…ならば消えてもらおうか白夜叉。目障りなんだよ…。侍も剣も全て消えてしまえばいいのだ!!」

「最初っからそーいう魂胆だろ？表にでけー戦艦が浮かんでんのも、真選組がいるのも、全部てめーらが仕組んだことだろ？」

ガキイイイン

「察しがいいな。だがあの親子は違うだろ？」

「神楽とハゲか？けじめ付けてくるってよ」

「神威か…」

ガキイイイン

すごい…互角で戦っている。

でも体力的に限界が来ているのは銀さんだ。見て取れる。時間の問題か…。

「うおりゃあああー!!」

ガキイイイン

「ククク、一筋縄ではいかんよ…」

「ーしまっ…」

ブシュウウウ

血飛沫が飛ぶ。

「銀さん!!」

相手の剣が、銀さんの横腹を刺している。

「ぐあああああ!!」

ザシュッ

「!!」

銀さんの刀も黑夜叉の肩を貫通していた。

「…分かってるに決まってるだろ? てめーはそんじょそこらの天人とは…違う。一筋縄じゃいかね…ってことくらい」

「くっ…」

お互い離れた。

息が上がっている。

僕はこのまま呆然と眺めているだけなのか？

——いやだ。

第五十三話

メリットとデメリットを大切に

息が上がる。

鼓動が速い。

意識を持ってかれそうだ…。

どうかしちまいそうだ…。

傷口から大量の血が出ているが気にしてられない。

「銀さん!!」

新八が心配そうに駆け寄ってくるが、来るなと止めた。

「俺…だけで充分だ」

コイツのために他に犠牲を払うなんてバカげている。

傷口を抑えた。

「もうおしまいかな？白夜叉」

「…その名で呼ぶんじゃねエ。英雄気取りは俺には向いてねエ」

ガキイイイン

一瞬の隙を与えるな。
息をさせるな。

「うおおおおお!!」

気張れ、気張れ!!

あん時は理性がぶっ飛んじまった。

そんなの弱い証拠だ。

護り通せ

己の魂を

「うおおおおおおお!!」

これが最後の船…。

神威が乗ってる可能性は極めて低い。が、乗ってることを信じたい。

「パピー」

「どうした？神楽」

「なんでもないアル」

「そうか…」

神楽も神楽なりに精神を落ち着かせたいのか…。

ガダンッ

「「！」」

鉄が響く音がした。

——ピクッ

「パピー」

「ああ、神楽」

この反応…。

間違いない、夜兔の…

神威か？

「星海坊主の旦那とお嬢ちゃんじゃないかい？」

「…阿伏兔！」

暗い鉄格子の中にいた。

「おめーさん親子がいるってことはここは地球か。てことはあの計画は遂行されてんだな」

「あの計画？」

「知らないで来たのか？ だったら別の理由か。まあいい。教えといてやるよ。…侍の排斥だ」

「…！！」

「俺と団長は時期尚早？ みたいな感じに思っただけに計画に逆らっちゃまった拳げ句この様さ」

俺は鉄格子の奥に目をやった。そこには背を丸めて横になっている神威を見つけた。

「神威…！」

「団長も疲れきって…ここ数日話もしてねーや。あーやって寝たつきりで…最初はうるさかったがいざ黙れば寂しいもんだ」

寝ているのか…いや、きっと起きているな。

「神威。聞こえてんだろ？」

「……ほつといてよ。今は誰とも話したくないんだ」

そう言った神威の背中がとても小さく感じた。

こういう時、銀時^{ヤッ}ならなんて言うか…。そんな想像も虚しく消え、沈黙が続いた。

親子…父親としてのけじめを付けに来たっていうのに…自信消失か？らしくねーな。本当に自分が女々しいくらいだ。弱いな、とつても…。

『黒く染まっちまったんなら、誰かが上から白く塗りかぶせるかキレイに洗い流せばいいじゃねーか。でもその誰かが俺でいいのかよ』

野郎に言われた言葉。

父親として恥ずべき対象だ。他人からごもつともなこ言われて…俺は恥ずかしい。

だが、こんなところでベソかいてる暇なんざねーさ。

「ダメだ、神威。ちゃんと…お父さんと神楽の方を見なさい」

息子が父親に勝てる訳ないことよりも、もっと大切なことがある。

それでも神威はこつちを向こうともしない。まるで引きこもりの息子を引きずり出すかのようだ。

「いい加減にしないで！！神威！！てめーはお父さんの言ったことも聞けん無能な奴か！！」

ピクツと動いた。微かにだが。

「てめーは！！勝手に家を出て行きやがって！！好き勝手やりたい放題！！バカヤロー！！お父さんにそっくりじゃないか！！ダメだ！！こんなクソ親父に似るな！！てめーは強くなかねエ！！」

ガキだな…親父は。

こんな廃れた説教しかできねー。

「…それと…これだけは言っとかねーとな。…」

『兄ちゃんはいつも笑ってるネ。どうしてアルか？』

『困った時や悲しい時に笑ってた方が忘れられる。ニコニコしてて、損はないんだよ』

神威……。

「……すまなかったな」

親父の顔は涙でクシャクシャだった。

第五十四話 最初はグーと言っておきながらパーを出す人は策士策に溺れる

「…すまなかつたな」

息子に頭を下げる父親

顔面鼻水でクシャクシャになる父親

家族さえ守れない父親

情けない父親

それでも父親バビって呼んでくれる娘…

だけど神威は向こうをむいたまま。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ」

「ハア、ハア、ハア」

刃が立たねー。

黒夜叉…。

「…疲れただろう？白夜叉。お前も今すぐ松陽の元へ行かせてやる」

「それはこっちのセリフだ。…てめーみたいな年寄り…いつ死ぬかわかんねーだろ？どうせ後先短いんだから今日逝かせてやんよ…」

「ククク…いいさ。殺せるなら殺したまえ。だがワシ一人殺したところでなんになる？お前も気づいてるようだが侍の排斥計画は遂行される」

「そんなのどうでもいいよ。俺ア」

「！」

「侍が滅ぼうがどうでもいいんだよ。だが、俺の大事なモンに手エ出すようなら…たたっ斬る！」

息が切れる。

鼓動が高ぶる。

血が滴り落ちる。

そんなの関係ねエ。

走る。

走る走る走る走る

木刀を振りかざす。

「魂”がある限り、俺の肉体も、大事なモンも松陽先生も…滅ばねエ!!」

「――!!」

松陽先生……。

第五十五話

今一番大切なモノはなんですか？と聞かれてすぐに答えられないな

「星海坊主の旦那、今団長に何言っても無駄だと思つぜ。」

俺は拳を握った。

「それでも…いい」

「オイ！神威！！こつち向くアル！！お前のそのねじ曲がつた性格叩き直してやるネ！！」

神楽も叫ぶ。

「あんまり騒ぐと見張りが気づいちゃう」

「邪魔はさせないアル」

「神楽…」

神威は動かない。

頑なに…。

「…銀髪のお待さんとやり合うまでは…あんたらの話なんて金輪際聞かないよ」

銀髪の侍…野郎か。

確かに神威は野郎を気に入っている。

強いと認めている。

ガッシャーン

「「「「！！」」」」

「俺とやり合ったらハゲの話聞くんذار？出てこいよ」

「銀ちゃん！！新八！！」

傷だらけの野郎が眼鏡の小僧に肩を借りてやって来た。おまけに、鉄格子まで両断しやがって。

「どうしたネ！銀ちゃんその傷！！」

「あ？なんもねーよ」

隠すつもりか……。だが天導衆とやり合ったな。あまのじゃくな奴め。

「銀さん、あんま動くのはよしてくださいよ」

「わぁーってるよ」

「親子喧嘩に首突っ込むたア野暮じゃねーか」

「それもわぁーってるよ。だが、関係なくはないだろ？」

「違エねー」

相変わらずな男だ。

「…俺を侮辱しに来たってわけだ」

神威がこっちに向かって歩いてきた。笑顔で

「神威…」

奴の目は”殺意”そのものだった。俺の話なんて全く聞きやしない。

「団長、ここは星海坊主の旦那の話を聞いた方がいいんじゃないか？」

「阿伏兔、アンタまで俺に刃向かうんだ。もういいや、殺しちゃう」

「口では利かねーってワケか」

だからと言って体でぶつけ合ってどうのこうのなるはずもない。だが、俺たち夜兎の説教はこうなのかもしれない。

もう一度奴を黒く染めちゃうのか？

いや、そーいうんじゃない。

俺は父親だ。

黒く染めちまつたんなら、一年かけても十年かけてもいいからキレイさっぱり洗い流す。無理なら別の色に塗り替えればいいだけだ。

「来いよ、神威」

奴は俺を父親だと思っていなくてもいいかもしれないが…俺は息子だっと思っている。

神威の一撃が向かってくる。

だが、あの時とは違う…。

「父は強しって言うからな」

「バーカ、ちげーだろ」

野郎の言葉もはつきりと聞こえる。

神威の軌道も。

「パピィー!!」

神楽が叫ぶ。

あの時の恐怖心が蘇ったのだろうか。
でも大丈夫だ。

親父は負けねエ

第五十六話 誰よりも強い拳

「!?!?なんだ!?!?戦艦が…!?!?どんどん引いていくぞ!?!?」

近藤さんがさけぶ。

俺は双眼鏡ですつと見ていたから察していた。

「万事屋か…」

「幕府中央暗部…天導衆に何かあつたに違いない…。きっと、侍排斥計画は白紙になったのだろう」

俺の背中に手を置いた。近藤さん…。

ターミナル（なか）で万事屋が…。

「隊を引け」

くわえ煙草で言う。

「後は…星海坊主の旦那…アンタだけだ」

「団長、やめろって!?!?」

ドカアアン

激しい突風。

これが夜兎の喧嘩ってわけだ。前にも神楽とハゲでやった時と同じ。

「いい加減にするんだ神威！お前はっ、こんなことをしてなんになる！！殺しばかりして、何が得られる！！」

「分からないの？同じ夜兎のクセに…。殺して得られるものは血と恐怖心と恐怖心と強き精神…そして修羅となる」

ドガアアアン

ハゲはガキを壁に叩き付けた。

「弱い奴に用はないんだ。どいてくれよ…俺は銀髪のお侍さんとやり合わないといけないから」

顔を押しつぶされてもなお落ち着いていた声。

グツとハゲの腕をつかむ。

「お前は銀時^{ヤツ}にかなうわけねエ。神威、お前も弱い奴だ！！」

こっちから見ていても、ハゲの力み方はハンパなく強い。夜兎の力…鳳仙との戦いで感じた、あの恐怖。

「銀ちゃん…このままだと…神威が！！」

神樂が震えながら言っている。しかもハゲの心配じゃなくて兄貴の方の…。

「…皮肉なもんだな。夜兎も、お前も、あいつらも…。こんな親子喧嘩しかできねーのか。しみつたれた説教を正座させられながら長々と聞いている方がマシだ。あんなんじゃ…変われねーよ。本当に強い奴ってのは何でも受け入れられる耐久力も必要なんだよ」

「確かに…そうですね。アレじゃ…ただ相手を傷つけるだけです」

「だが、アレが夜兎のやり方なら…誰も止めねーよ。なア？新八」

「はい、そうですね」

今…一番重要なのは神樂…てめーだ。

自分で考え、行動する。分かるだろ？お前なら…。

分かってるネ。銀ちゃん、新八。

「私が止めるネー！」

夜兎だからどうのこうのって関係ないアル。
変わらなきゃいけないのは自分自身…。

夜兎も、みんなと同じ。

「神樂ちゃんが止めるってなら…僕も手伝つよ！」

「新八…」

「言っただろ？俺は共食いは嫌いなんだ」

「阿伏兔…」

「しゃねーな、ったく」

「銀ちゃん…」

「ちよつ、銀さんはあくまで怪我人ですから！無理しないでくださいよ！！傷口開きますよ！！」

「わあーってるよ！！」

パピィ

神威…

”家族”と思ってる。

銀ちゃんも新八も…みんなみんな大切な”家族”。

第五十七話 何度でも何度でも言っよ

「神威イイイイ!!」

押さえている。

必死に抵抗しているが、俺も必死に押さえつける。

まただ。

この感覚…。

ガシッ

「!？」

後ろから誰かに抱きつかれた。
振り返る。

「か…神楽」

「パピー！もう止めるネ！！こんなんじゃ…前とおんなじアル！！」
真っ直ぐな瞳で訴えている。

「邪魔しないでよ」

「かつ…」

一気に力が抜け、神威が神楽に襲いかかった。

ガンッ

「!?!」

その一撃を銀時^{ヤッ}が木刀で止めていた。

「銀ちゃん!?!」

「ったくよー、本当に蛙の子は蛙だな。妹までに手エ出すなんざ野暮じゃねーの? 兄ちゃん」

神威の手が止まった。

「こんな弱い奴ら…いなくなつて当然だろ? 家族なんてしがらみにとらわれてるから弱いままなんだよ」

平然と神威は言う。

「パピーも神威も間違つてるネ!! 変わらなきゃいけないのは自分自身アル!! 夜兎も銀ちゃんも新八もみんな…同じアル。戦

わなきゃいけないのは自分自身アル」

神楽のその言葉…。

前にも一度聞いた。

一度聞いているにも関わらず…俺は…。

『私の力、人を傷つけるだけじゃないヨ。人を護ることもできるようになったヨ。そういうふうにしたらネ、いっぱい友達できたヨ。もう誰も私を恐がったりしないアル。もう一人じゃないネ。戦って戦って夜兎滅びたネ。戦って戦って夜兎一人ぼっちになってたネ。パピーも兄ちゃんもみんな…。戦わなきゃいけないのは自分自身アル。このままじゃみんな一人ぼっちになってしまっヨ』

「…神楽ちゃん…ごめん。お父さん…一番大切なことを忘れかけていた」

ほんの少しだけ、神楽は微笑んだ。

決してわすれやしない。その言葉…

忘れそうになったら、何度でも何度でも自身に問い続けるんだ。

「…なるほど、戦う気のない奴も興味ないよ。俺は一人で充分。だってその方がいいじゃないか。護るものがない…こんなに気が楽になる、まア…必要ないってこと」

「…それはちげーよ」

「違います」

「
違
う
ネ
」

第五十八話　生きてる限り明日は来る、生きてる限り今日がある

「…それはちげーよ」

「武士道って奴だね。護り護られるものがあるから強くなれる…。それでアンタは戦場を生き延びた。だが…アンタも心の中に少しはあるんじゃない？荷物がない気楽な感情が。前にあるものを斬って斬って、血を浴びて…それでも何も残らない”無”の感情」

「お前…なんも分かってねーよ。神楽がどれだけめーを信じたか、ハゲがどれだけめーを護ろうとしたか…。お前…なんも分かってねーよ」

「余計なお節介はいらないよ。もう赤の他人なんだ。聞きたくないよ、お説教なんて」

「てめーだって本当は分かってるはずだ。本当の強者は…誰もいねーよ。んなこたア分かってる。だから喧嘩したり戦争おっ始めたりしちまう。だが、人によって強者の見方は違う。俺アそんできいと思っ。でも…家族に手をかけ弱い奴を片っ端から殺していくお前の姿勢は…強者だとのたまう資格はねエ」

銀時^{ヤッ}は持っている木刀を腰にさした。

しばらくの沈黙。

次神威が何をするのか…。もう奴を攻めるのはやめる。

「俺の血は渴いてるんだ。夜兎は戦うべき修羅。この血を愛で…俺は生きる」

シュッ

「!!」

その瞬間、神威は銀時^{ヤッ}に襲いかかっていた。

「やめろ!! 神威!!」

だが、動きは止めない。

「説教は聞きたくないよ」

木刀で必死に抵抗している。

「聞き分けのねエ奴だな」

「銀ちゃん!!」

「銀さん!!」

ガキ二人は言うが…

「来るなア!!」

ヤッは止める。

「コイツの相手は俺で充分だ。俺は何もしねーよ。俺はコイツを殴る権利はねエ…」

ガッ

「！！！」

俺は神威の拳を受け止めた。

「ハゲ…！」

バシッ

神威に一発平手打ち。

そして力ずくで抱きしめる。

「バツキヤロオオオオ！お前は…お前は…。神威は俺の自慢の息子だ。いつも母ちゃんと神楽の面倒を見てくれた…本当に心が広くて強いヤツだ。だけど…すまねーな。父ちゃん…お前をこんな風にさせちまって…。だが…今でもお前を息子だと思っている…今でも…お前を…愛している」

二度も涙に溺れる俺の精神が弱いばかりに…。

家族の愛も忘れていたんだな。

「パピー…」

神楽も一緒になって泣き崩れる。

「本当、厄介な家族だぜ。…でも…幸せなら…どんな形でも…いいんじゃないの」

「銀さん…僕は…ずっと銀さんの家族ですからね!!あ、別に変な意味で言ってるわけじゃないんですけど」

「腐れ眼鏡。誰がてめーの家族なんだよ」

新八の肩を借りながら言う。

「…なんつつてな」

小さく呟く。

「なんか言いました?てか酷いじゃないですか!!」

「あん?てめーは一生万事屋の雑用係やってればいいんだよ」

「はア!?!」

どんな形でも…生きてて幸せなら…

第五十九話 男なら泣くな

団長は下を向いたまま一言も喋らなかった。

そして静かに引き離し、立つ。

「行こつか、阿伏兔。今回は俺の負けだよ」

「団長…」

微かに見えた。

団長の目から一筋の涙。驚いたがあえて無視する。まア気を遣ったわけだよ。
はじめてみた…。

所詮夜兔つつつても持つてるモンは人間と紙一重だ。おんなじ感情を持つている。

「元老に報告しないとね。今回の件は（くだん）は大失敗^{うっえ}って」

「そつだな…」

意外とあっさりしている。

「…それから…銀髪のお侍さん」

「あ？」

団長は振り返った。

「アンタ…天童衆の要、黒夜叉とやり合ったらしいね。勝敗は見てとれるけど…気をつけることだね。幕府中央暗部は黙って見過ごす訳ない」

なるほどな…。銀髪の旦那のお陰で今回の侍排斥計画は真っ白になったのか。

元老も黙っちゃいねーなア。

「はいはい、忠告どーもオ」

「アンタの説教も…結構手応えあったよ」

「そーかい」

相変わらずの笑顔。

そして妹と星海坊主の旦那のもとに行く。

団長は妹の頭に手を置いた。

「神威…」

「本当に出来の悪い妹だよ」

「どーいうことネ!」

「おい…神威…」

星海坊主の旦那が呼び止める。

「…俺は過去のことなんて気にしちゃいない。前だけ見ている。でも…今でもそーいうふうに思ってくれてたんなら…。俺も強き精神を求めるさ。…護り護られる…。じゃあね」

別れを告げる。

俺も長年団長を見てきたから分かる。

団長は…団長だって強い部分はある。どんな困難にも立ち向かう勇氣。

それに惚れたから俺は団長について行っただ。え?もっついて行かないって?ずっとこどっこい。

これからが大事だろ?

妹さんの言っていたこと…納得する。

夜兎も侍も一緒さ。

「良かったなア、仲直りできて」

「オイ若造…おいしいところほとんどめーが持っていてしまった
じゃねーかア!!」

「だって…お前ずっと泣いてるか殴ってるかだけだったじゃん」

「多分パピーの説教よりも銀ちゃんの説教の方が説得力あるネ」

「神楽ちゃん！それじゃあお父さんの立場なくなっちゃうもん！
」！」

「結果はどうあれ、良かったじゃないですか」

「そーだ、新八の言うとおりだ。だからとっとと星に帰れや」

「そうネ。宇宙のハンター、グッバイ」

「え…じゃあ…もう第二章終幕？」

「「「YES」」」

「うそオオオオ!?」」

カウントダウン

開始…？

第五十九話 男なら泣くな（後書き）

以上で終了となります。皆さん、お忘れ物のないよう御退場下さい。
次回のご搭乗、お待ちしております。

What is next?

第六十話 おまけとか期待しちゃダメだよ。だって…節目だもの（前書き）

第二章のおまけです♪

第六十話 おまけとか期待しちゃダメだよ。だって…節目だもの

春雨とある戦艦――

「ねエ阿伏兔。こーいのが運命って言うのかな」

「あー？どうだろうね。辛いことでもそれが何度もありや嫌でも運命感じちゃうけど…鉄格子の中で運命感じるなんて御免だアアア
！！」

「まア、気を落とさないで」

「団長は気楽でいいよなア」

…そう。俺たちはまた鉄格子の中…なう。

なんでこんなことになったかは二章突入がどうたら言ってる話に戻りな。え？それでも分からない？じゃあ1話から読み直せコノヤロ！。え？109分も読んでられるか？すつとこどつこい！なんやかんやでこうなつたんだ！！え？これじゃあ前のフレーズと同じだ？飽きた？死ねだ？

ああああああ！！！！

「どうかした？」

相変わらずのにつこにこ笑顔の団長。

「…もういいよ。もう俺は団長を責めないよ」

「あーあ、お腹空いたなア…」

「分かったよ！食べよう！！食っちまいな！俺を食いたいんだろ！
？こんなオッサンでいいなら食べよう！！」

俺は団長の非常食か！？

ってナイスなツツコミもどーでもいい！！

俺まで自由奔放な性格になって困るのは団長オオオオ！！お前さんだ！！

「丸聞こえだよ」

無念…。

元老も元老だよなア。てつきり打ち首獄門くらの仕打ちをつける
と腹をくくっていたが…。甘ちゃんにも甘ちゃんすぎる。って言う
て俺はMなんかじゃねエ。

「なア団長。…アンタ…銀髪の旦那は諦めたのか？」

「ん？どーだろうね。二度あることは三度あるっていうから…そんな
時はそんな時でいいんじゃない」

「…そうか」

俺たち夜鬼の未来も… 明るいなア、
すつとこどっこい

第六十話 おまけとか期待しちゃダメだよ。だって…節目だもの（後書き）

以上で本当に第二章終幕です。

ありがとうございました！！

Who is next?

第六十一話 第三章突入！！二度あることは三度あるっていうからね

宇宙海賊春雨第七師師団専用戦艦内――

「ハアゝ左遷かあ……。まア逃れようにも逃れないしなア、いっぱい不祥事起こしちゃったんだから。それもあるけど……。やっぱり組織の軋轢か」

左遷……簡単に言ったら太陽系からの脱線。

地球とは遠く離れたなんたら系への移動……。

すつとこどつこいだよかった。太陽系の方が俺ア好きだった。

「ヘンテコな星ばつかの銀河系だね。俺は太陽系の方が好きだったのになア」

団長が俺の肩をポンポン叩いた。

「すつとこどつこい！全て団長の不祥事が招いた結果だ！」

相変わらずのにつこにこ笑顔。スマイル

「まあまあ。でも阿伏兔だって強力してくれたじゃないかい」

「アレはアレだ、少々免罪したんだよ」

「ふーん？」

ため息を吐く。

でも春雨の本部がある太陽系よりずっと気楽でいいか。

「今回の件、ちゃんとやったらまた太陽系に戻れるんじゃない？」

「すつとこどつこーい！そんな甘ちゃんか！？…いや、甘ちゃんか」

団長は窓の外を眺めた。

「こつから太陽系見えるじゃん。ウン、綺麗な渦巻き。それに比べてここの銀河系はヘンテコな星ばっか。ウンコじゃない？」

「住んでる奴に失礼だろ？」

「いいじゃん。どうせ全滅させるんだから」

「そう、今回の件はこのヘンテコな銀河系にあるヘンテコな星に住む戦闘種族の生き残りの全滅計画。まアその種族が面倒くさいくてねエ。」

「阿伏兔！あの星…地球みたいに青いよ」

「あの星か…」

地球みたいに青い星…今回の目的となる地。

あの星は見た目的に地球だ。しかも厄介なことにその星に住む住人は太陽系地球の住人と瓜二つらしい…が、その風貌とは真逆に戦闘本能丸出しの種族だ。安易に接触するとすぐに襲いかかってくる危険種族。

その種族は地球人に瓜二つだから…春雨の連中は皆騙され、種族達に殺されたと。

「おぞましいね」

「すつとこどつこい！アンタの方がおぞましいわ！」

「地球人に瓜二つかア…。なんか楽しみだね」

「単なるあべこべワールドみたいな感じじゃねーの？」

あ…あべこべとは違うか。

「街の造りも江戸にそっくりらしい。団長、話聞してる？」

「へえーっ、この星”血求”^{ちきゅう}って言うんだ」

「ちきゅう？」

「血を求めるって書いて”血求”」

「上手いな、…いや上手くねーよ！なんだよその名前！！気味わりい」

「まさに俺の事だ」

「おーい、仲直りしたんじゃねーのオ？」

「過去は振り返らない主義なんだ」

ハアゝとため息をつく。まア今はどうでもいいか…。
とにかくこの星に着陸しねーとなア。様子見も大事だし。

第六十二話 表があるなら裏もある

「こいつア驚いたな。ターミナルまであらア」

「阿伏兔言ったじゃん、江戸の造りにクリソツだって」

「言っただけどまさかターミナルまであるとは」

まるで本当の地球に来た感じた。

人も普通に歩いている。全く違和感がねエ。これじゃ歴戦の春雨も安易しちまうな。

「ん」

団長の姿がない。

「団長オ!!」

まったく世話のかかる野郎だ。

：

「見た感じ地球の江戸にクリソツだよ。本当に戦闘種族なのかなア」

「そんなん知るかよ」

「あつ！」

団長がいきなり道中で足を止めた。何かを指差す。

そこには”万事屋銀ちゃん”と書かれた看板だった。

「う…嘘だろ？」

まさか…いや、何かの間違いだ。クリソツって言っても…でも確かにターミナルはあった。地球にそっくりの…。じゃあコレも……？

「行ってみない？なんか楽しそう」

「え…ヤバくない？」

だが団長はスタスタと万事屋に向かう。

俺は信じない！絶対信じない！！（偽）を付けるね…！だってキーワードに万事屋（偽）って付いてたもの…！

ピンポン

「団長オオオオオ！！」

時すでに遅し。

インターホンを押していた。

「はい」

「!!!」

出て来たのは万事屋の一人…眼鏡の小僧だった。

「やあ」

団長は普通に話す。

眼鏡の小僧つても偽物だろ？いや…偽物つか瓜二つ…。

「中に入れてくれるって！」

マジかよ!!!

俺は遠慮しておきたい！まるで拷問部屋に連れて行かれそうなこの緊張感と震え…。

だが仕方なく中に入ったのである。

俺のすつとこどっこい。

「お客さんかア？新ハイ茶」

「!!!銀髪の旦那…」

「アレ？どこかで会いましたっけ」

「いや…」

目の前にいるのはまぎれもない銀髪の旦那だ。
風貌も瓜二つだ。

ちよつとまって、ここ本当に血求か？地球だろ？

「あの、万事屋にチャイナ服着たガキは働いてないんですか？」

団長オオオオ！！

何あつさり妹のこと聞いてんの！？

「チャイナ？いませんよ。万事屋は俺と新八で切り盛りしてるんで」

…なる程、瓜二つなのは地球人限定か。

「ねエ阿伏兔、聞けるだけ聞いてみよつか。この星について」

団長が俺の耳元で呟く。

「いい案だな」

俺も賛成する。

「俺達外国のメディア関係の者でして、今回ここの街を取材させてもらつことなつたんです」

団長が適当に切り出す。なる程、俺達は取材班を見立てるのか。

「へえ、外国から！すごいじゃないですか！ねエ銀さん！！」

「俺達も世界中で活躍する時が来たんだな！」

浮かれている。

本当に戦闘種族か？

「じゃあ最初の質問なんですけど、万事屋さんはいつも基本何をしているんですか？」

「そーだなア。仕事がない時は基本ぐーたらしてんなってやっぱ取材されると照れるわ」

「ちょっと銀さん！！真面目に質問答えてください！僕が答えますよ！？」

「わーったよ！！オーナーの俺が答える！万事屋は基本何でもしますよ。暗殺から死体遺棄まで」

…は？

暗殺から死体遺棄まで？

暗殺からの死体遺棄？

万事屋が？

「ん？何かおかしいか」

「基本じゃないですか。どーしても殺せない事情がある人だっていますから」

「まア、殺し方によって金額もちがってくるけどよ。圧死が一番高

いか？」

は？金額？

「暗殺が一番安いですよ？」

「後ろから一発だもんなア」

殺し方に金額設定？

俺だって歴戦の夜兎だ。幾つもの修羅場を乗り越えてきたが…。こいつら殺しに全く恐れがない！まるで当たり前のように語る。

「阿伏兎、こいつア驚いたね。…こいつら、いやこの星の住人は皆血を求める戦闘種族ってわけだ」

認めたくないが…

「俺達とんでもねー所に来ちまったな」

後戻りはもうできないのだ。

第六十三話 悪い奴が良いことをすると感動が倍になる

俺達はなんとか万事屋から出たのである。

「おもしろいね、血求人」

「すつとこどつこい！おもしろくもねエよ！！恐ろしくて気味が悪い！だって銀髪の旦那が最後に言った一言覚えてるか？」

「ああ、アレ？」

『憎いと思ったら殺すのが普通だって母ちゃんに習わなかったのか？』

「習うわけねエだろオオオオ！！いくら戦闘種族の夜兎でもそんなグロいこと習ってねエ！！」

ちくしょう、つい最近団長に向けてぐつとくるようなこと言ってた旦那があんなことをあっさりと…瓜二つなだけで別人とは知ってても、こつくるとなると…辻褄があわないような感じになってくる。

「血求人…恐ろしいや。ム力ついたらすぐ殺し合い。自分じゃできなかったら万事屋へ。じゃあ殺し屋とか始末屋はないのかなア」

「団長オ、旦那の話聞いてなかったの？始末屋は暗殺死体遺棄限定、殺し屋は肉弾戦死体遺棄限定、どっちもれきつとした職業。だが地方の公務員だから容易に雇えないらしいって」

「あー、そう言ってたね」

「ったく、じゃあ警察や真選組は何してんだって話だ」

「屯所、行ってみる？」

「マジかよ」

「取材班に装えばいいじゃない」

「ったくしょーがねーな」

ここまで来ちまったから、とことん知りたいもんだ。

普通に地球に来た感じでいいが、落ち着いて行動しなければならぬ。言動も考えないと。相手に憎まれるような言い方したら即死ぬ。

しばらく歩き、屯所の前まで来た。

本当に真選組って書いてある。幕府の犬に代わりはない。だが、何をしているかが問題だ。

「すみませーん、取材の者ですけどオ」

って団長オオオオオ！！

少しは緊張感を持って！！

何躊躇なしにノックしちゃってんのオ！？

だが時すでに遅し。

スタスタと中に入って行っちゃった。

でも地球の真選組に顔見知りはいないから少し安堵した。

「取材の方ですか！！私、真選組局長を務めさせてる近藤勲と言います！！遠いところからよく来てくださった！なアトシ！！」

黒の隊服は変わっていない。じゃあこいつらも地球の真選組と瓜二つってことか…。

「落ち着けて近藤さん。局長のアンタが浮かれてどーする。あ、真選組副長土方十四郎です」

さりげに自己紹介しやがった！まあいいか。

てか…本当に戦闘種族？普通に茶出してもらったり…てかお人好しすぎだな。

「真選組は基本何をしてるんですか？」

国民の治安を守る、とかなんとかだろ？いやでもこの星では通用しないか？いや通用する！お願い！そう言って！！

「基本？基本なことはまア国民の――！」

そつ、国民の治安を守る…。

「国民の殺し合いの治安を守ることですかね？あ、ベタすぎます！？」

ベタじゃねエエエエ！！

何！？国民の殺し合いの治安って！！そんなの治安もクソもないじゃん！！

しかも半笑いですがしく言ってんじゃねーよ！！

「後”殺し方相談会”ってのも毎月行ってますねエエ。こんな感じでいいか？トシ」

「いちいち俺に振るなよ。殺し合いしている奴の邪魔をする連中の始末が大体だ。後攘夷志士の捜査」

それだ！！大体真選組っていつも攘夷志士の追っかけをしてない！？

「攘夷志士は幕府のてっぺんの首を落とそうとする連中だ。だがあんな薄汚い連中がいきなりてっぺんをやれるわけねエ。俺達はその連中らの始末もしている」

なるほど、攘夷に関しては地球とそんなに変わらないのね。

「まア基本、憎い奴は殺す。この秩序は絶対だ」

やっぱりそれなのね！！

しかもこの星のルールだとは…一体１日どんだけの人が死んでいるのか…考えたただけでおぞましい！

とりあえず真選組を出た。

「今回はなかなか手強いね」

「…だな」

そう、俺の本来の目的はこの星を滅ぼすこと。
だが今日色々話を聞いて自信消失だ。

全員腹黒だ。

あの眼鏡の小僧すら腹黒に感じる。

誰かアアアア！！

チェンジしてくれエエエエ！！

第六十四話

生徒会長が万引きしてると見ると全て掴み取った気分になる

「これからどうしよつか」

「どうしよっかって言われても…こんなとこ恐ろしくて寝泊まりしたくねーよ」

途方に暮れていた。俺だけが。だって団長相変わらずにっこにっでさア、隣歩きたくないよ。

「ホテルでも探してみる？」

「ホテルうううっ!？」

もはやこの地で寝ると!?!まるでジャングルで野宿するとき、ハイエナの群れがひっそりと周りを囲み寝時を待つような恐怖……。

「それか、もう一度万事屋に行く？」

「いや…いい」

辺りはもう真っ暗。

だが商店街やホテル街は明るい。

「アレっ、アンタら昼間の!」

「銀髪の旦那!!」

声をかけてきたのは万事屋の旦那だった！
もう俺、心臓止まる…。

「何してんだ？こんな所で」

「今夜の寝床を探してて」

団長オオオオ!!

何喋っちゃってんの!?

「ふーん」

「万事屋さんは？」

「俺ア仕事だ。今から標的^{ターゲット}の暗殺さ。まったく、めんどーだよ」

出た暗殺!!

銀髪の旦那が!?

後ろから一発!?

「奥さんも奥さんだよ。夫の不倫がどうたら言ってたけど、どーしてそんな時に殺さなかったのかねエー。あ、確か凶器持ち合わせてなかったっつってたわ」

夫の不倫で殺し合いイイイ!!?

「万事屋さん、俺達もついて行っていい？」

団長オオオオ！！

殺人現場を目撃するつもりかアアアア！！

「え、ちょ、達もって…俺も？」

「当たり前だよ」

すつとどつこーい！！

誰かあの団長^{バカ}止めてエエエエ！！

「いいぜ。取材班なら特別について普通のことやるだけだよ」

普通うううつ！？

もうついて行けない…

「うし、ここだ」

銀髪の旦那が足を止めたのはある高級マンション。

「301号室か…。アンタらカメラとかいいの？」

殺害現場を生中継！？

普通だったら速攻逮捕だろ！！

「今日は持ち合わせてないんだ」

「ま、後ろから一発の暗殺くらいじゃ撮ってもつまんねーか」

旦那は何か取り出した。：果物ナイフだ。
よく殺害で使用する典型的な凶器…。

「鍵開いてんな。不用心だなアったく。まア首筋一突きでしめーだな」

「なんかわくわくするね」

「…しねーよ」

なんて気楽な奴なんだ団長オオオオ！！

「静かにしてろよ。あ、真っ暗だな」

旦那を先頭にひっそりと歩く。

「おっ、寝てやがるな。意外に早く済みそうだ」

旦那はナイフを構えた。

ブシューウウウッ

血飛沫が飛び交う中、俺ははつきり見えた。

旦那の不気味な笑み

なんのためらいもなく殺した。

「後始末は奥さんがやるって言ってたから俺の仕事は終了。うーし、パフェ食いに行くか。じゃーなあ、アンタら。あ、寢床ならホテル K O R O S H I ってところが安いぜ」

ホテルまでグロいネーミング！？

そう言う旦那はどこかへ消えてしまった。

「優しいね」

団長はにっこにこ。

「初めて団長より怖いって思ったわ」

「とりあえずホテル K O R O S H I ってところ行こっか」

「そうだな」

別人とはいえ旦那があんなことする姿…正直見たくなかったぜ…

第六十四話

生徒会長が万引きしてるとこ見ると全て掴み取った気分になる

銀：おいイイイイ！！なんだこの第三章！！怖すぎだろ！！読者の皆様「銀さんがあんなグロい事を…」なんて言ってるぞ！！大丈夫です！！銀さん殺しなんて絶対しません！！

ツーか…やっぱ怖ーよ。今回の話はさすがにヤバいだろ？R指定いるだろ？残酷な描写ありを普通に通り越してるだろ？

もう止めようぜ？第三章なかったことにしようぜ？第二章良かったじゃん！！ハッピーエンドだったじゃん！！評判よかったじゃん！！…なのに、コレ…。作者狂っちゃったな。分かった！なら俺もその血求って星に行く！！行ってそいつぶん殴って来る！！オイ神楽ア！お前のくじ運で宇宙船のチケット当てて来い！！

神：無理ヨ。だって商店街祭り昨日で終わっちゃったし、くじの紙全部ちり紙交換に出したアル

銀：マジかよ！！…とにかく読者の皆様！本物は今日夕方6時テレビ東京で復活します！！（泣）

新：結局宣伝かよ！！

第六十五話 残酷なラストが目に見える

ホテルKOROSHI――

「この地域はもう絶滅したんだね」

「ん？何ソレ」

団長は何か広げていた。

「血求のマップだよ。北南は逆だけど地球と経緯ほぼ一緒」

「このバツ印は？」

「全滅した地域だよ。見ての通り外国はほとんどバツ
なるほどなア」

「って！後この地域くらいしか残ってねーじゃん！」

「うん。さぞかし強いんだろうな」

強いに決まっている。

「団長は左遷からもとに戻りたいんだろ？だったらやるしかねーよ」

「ま、そうなんだけどさ。もう少し見てみたくない？血求人」

「見てどうするんだよ」

団長は不吉な笑みを浮かべた。

「銀髪のお侍さんとあの眼鏡の小僧の殺し合いとかさ」

「……」

想像もしたくない絵ヅラ……。でも相手を憎いと思っただら殺す本能があるはずなのに、ずっと一緒にいて”憎い”と感じる時はあってもいい。

仲間意識が強いのか？そこは地球人と同じなのか？

「俺達が手を出さなくてもいずれこの星は滅ぶんでしょ？」

「まあ…殺し合いをしていけば絶滅するわな」

些細なことで人を殺し殺される。

恨みを持ってない奴にでも依頼となりや殺しちまう。

団長の言うとおり、俺達が手を出さなくてもいずれこの星は滅ぶ。だったら俺達は何もしなくていいんじゃないのか？俺は何もせずにこの星が真っ赤に染まる瞬間を見ておけばそれでいい。

「明日また万事屋に行こうかな」

「マジで？」

団長がへらへら笑う。

「用もないのに行くなよ」

「うっん、あ、じゃあ真選組にしようかな」

「はあ？」

何か策でもあんのか？

「夜兎も血求人も一緒だ。血を求め戦場に立つ。この星は絶滅を避けるため地球のような秩序を作ったが種族の本能にはかなわずもうほとんど絶滅している。そう、最後につながるものは修羅場だ。だからおイタを起こせばいいんだよ」

さすががしく言いやがったな団長…。

「なるほどなあ。でもどう口実をつける？」

「うーん、果たし状とか？」

「…アンタ、3Zと^{ほんけ}同じことすんのか」

「阿伏兎もう読んだの？早いねエ。俺にも貸して」

いきなり話がズレるのである。

「じゃあ…」

団長は考え込んだ。

今までに見たことのないような真剣さぶり…。

目を閉じて、考えているのだろう。

「…zzzz」

「寝たんかいイイイイ!!」

俺の大シャウトにも関わらず寝たつきりだ。

第六十六話 一寸の虫にも五分の魂

血求、万事屋――

「銀さん、やっぱり気づいてたんですか」

社長机に足をのせ、だるそうに銀時は質問を返す。

「当たり前ーだ。一昨日と昨日からにして…あいつら天人だよ」

新八の表情が変わる。

「てことは…あの2人」

「かの有名な春雨だろ」

一気に静まり返る。

「大方、この星をぶっ壊しに来たんだろ」

銀時の表情も険しくなる。ああ、言っておくがここにいる銀時と新八はあくまで血求人であって、地球人であるそっちの銀時と新八とは全く無縁無関係であることをお忘れなく。

「銀さん…」

銀時はニヤリと笑う。

「次会ったら殺す」

血求人の本能である。

次の日――

「すがすがしい朝だね。例えるならスガシカオだ」

「どこがスガシカオだ！！すつとこどつこい！！」

ホテルをチェックインした後、また江戸（偽）をぶらぶらする。ぶつちやけこの第三章…一体何がやりてーんだよ。二章まではよかったよ。シンプルスすぎずくどすぎずいい感じでまとまれて。一章はありやダメだ、銀髪の旦那の覚醒パーティーだったもんな。最後大喜利でシメるし、豚カツだなんだでグダグダだし。まア三章よりは

マシだな。

「阿伏兔、反省会してんの？」

「してねーよ！後悔の渦が巻き起こってんだよー！」

「ふーん。てか俺決めたんだ。血求人とやり合うまで帰らないって」

「あつそ。もう好きにしてくりゃいーさア」

ため息をつく。

「で、これからどうすんだい」

「んー…とにかく、戦乱状態を作ればいいんじゃないかな。その時に一気に」

「やっぱりそれが。それが一番手っ取り早いかな」

とりあえず団員も導入すればいいか。そこで一騎打ち。

「挑発してみる？」

「挑発？」

そんなんでやり合う気になる程バカではないだろう。

とりあえず街に行く。

「何かいいきつかけないかな」

いい加減グダグダになってしまう。

「ん？」

野次馬を発見した。

「やれエ！やれエ！」

「あと一発だ！！」

どうにも嫌な予感がするが…。

ビンゴ。二組が殺し合いをしている。そこを周囲が取り囲んでいる。

やいやいあつて、ようやく静かになった。

「あーこりゃヒドいや」

「血まみれだ、ガハハハ」

ここが地球人と違うところだ。感情も何もかも違いすぎる。

「そっだよ、俺達はこのいうのが当たりめーなんだよ、宇宙海賊春雨さんよオ」

「！」

後ろを振り返ると銀髪の旦那がいた。

第六十七話

血を求めし猛者（前書き）

後書きにて

重大発表？

第六十七話 血を求めし猛者

「万事屋さんじゃないかい」

団長はにこやかに手を振る。

「よお、昨日の春雨さん方々」

「なんだ、バレてたんだ」

お互いにらみ合うかのように振る舞う。
おちよくっているのか、挑発しているのか、そんな空気が漂っている。

「隠してたみてーだけど見事にアンタらの猿芝居は見え見えだったぜ」

「もっと上手くやればよかったな」

「何しに来た」

「分かってんじゃないの？」

銀髪の旦那は何かしようという素振りを見せない。団長もだ。

「ちげーねエ。率直に言ったら殺しに来た」

顔色一つ変えず、旦那は答える。まるで何かを楽しんでいるかのよう
うに。

「君の言う通りさ。上の命令だから仕方のないことなんだけど」

「てめーらが手出ししようがしねーまいがどの道この星は滅ぶ。生き残りも数少ねエからな」

その辺の摂理は割り切ってたんだ。

「興味がわくよ、この星…そして銀髪のアンタ」

旦那はフンと鼻で笑う。風貌…容姿は地球の旦那と瓜二つだが…や
っぱり別人だな。こんなに強い雰囲気醸し出してることは地球の
旦那には感じない。やっぱり団長の言う通り、血求人はおもしれエ。
あっち

「そいつア良かったな。今度てめーらに会ったら殺しまおうかと思
ったが、やめた。てめーらの好きにすりゃあいいさ」

旦那は後ろを向き歩き出した。

「だがよ」

足を止めた。

「ここらの生き残りは猛者ばっかだ。そう簡単にくたばらねーよ、
んじゃ、俺アラスボスっつーことで」

向こうへ消えていく姿を見つめる。

「ラスボスかあ…じゃあ次会うときはサシってことかな」

「え？それって俺達死んでるってこと？オイオイ冗談よしてくれよ。
第七師団は死なねーさ」

「師団のことは阿伏兔に任せるよ」

「責任転嫁か？ずっとこどっこい」

まア俺達はビジネスで血^チ求にやって来ている。ビビったらお終いだ。

「これで見納めだね。めいいっぱい楽しもうよ、クライマックスは
盛大にさ」

「団長の好きにしゃあいいさ。宇宙の喧嘩師さんはアンタだろ」

「違うないね」

団長は更に深く笑う。

やっとならしい雰囲気^{フキ}が芽生えてきた。

宇宙海賊春雨としてではなく、ただの喧嘩師として。団長、俺はアンタに一つ聞きたいことがある。何かって？これから先、今みたいな現状が続いていくに連なって、アンタの戦う理由だ。妹さん星海坊主の旦那、銀髪の旦那が言っていたことにすべて比例するのは知らねーよ。俺はそんな答えを求めていない。団長の意志が聞きたいだけさ。

利用するなら存分に第七師団^{おれたち}を利用すればいい。

「空が綺麗だなア」

血求人は一度でも空が綺麗だと思ったこと感じたことあるだろうか。
いや、すべて真っ赤に見えちまうのか。

「腕慣らしでもしとくか」

「夜兎の底力見せてあげないと」

第六十七話 血を求めし猛者（後書き）

銀：クライマックス？さっきクライマックスって言ったよな？

新：言いましたね

神：やっと「KAMUI」終わるアルか！？やったネ！！次回作は「KAGURA」ネ！！

銀：何言っただよ、ここは折衷案で「GINTOKI」だろーが！てめーは「KAMUI」で結構掘り下げられただろーが！

新：銀さんとかは他の作家さんが結構やってるじゃないですか！「SHINPACHI」がいいです！

神：誰が眼鏡の話読みたいアルか！！

沖：ここは「SHINSENGUMI」がいいでさア

土：万事屋は出過ぎだ
おめーら

新：沖田さん！土方さんまで！！

銀：何なんですかそろそろと！でしゃばりですかコノヤロー

桂：あい大体の状況は分かった。次回からは「ZURA」決定！！

土：かゝつゝらゝ！！

桂：ぶははは！！さーらばアアア！！

新：何だったんですか

神：次回作どうするネ

銀：実はもう決めてあんだよ

新：マジですか！？

神：早く教えるネ！！

銀：新次回作はー…

次回、大発表！！

ズ
テー
ン

第六十八話 自己満にすぎない(前書き)

最初に謝っておきます。
ごめんなさい

第六十八話 自己満にすぎない

そろそろ潮時じゃないの？と思う。
それは言えない。

すべてひっくり返るからだ。

血求人滅ぼしに来たつてのに…この様だ。

「四面楚歌ていうんだよね」

「ずっとこどつこーい！！こちとら団員全滅つて時に団長は呑気で
いーよなア！！」

四面楚歌…

まさに団長の言う通りだ。

血求人相手に夜兔壊滅状態…。

なんちゅー強い輩だ。

周りを囲まれ、後は潔く腹を斬る様つてこの状況どつかで見たよう
な…。で誰かが格好いい捨て台詞言つて…アレ？

「地球人滅ぼした方がよっぽどいいな」

周りにいるのは地球人に似た獣。ケダモノ

…のはず。

「もう降参か」

表情一つ変えない銀髪の旦那が前に出ていう。

そして横に真選組の隊服を着た栗色頭の小僧が刀を抜いた。

「もうシメーにしやすい、坂田將軍」

あん將軍？

將軍んんんんん！！？

「待て、俺がやる。文句は言うな、後で奴らの血肉を分けてやるからよ」

「マジですかイ。どうせなら生じゃなくて天ぷらにしてください」

食うのかよ！！

「だったら早くしろ坂田將軍。じゃねーと俺が奴らの体内にマヨネーズをぶち込みマヨネーズ毒殺するぞ」

くわえ煙草の男がいう。え、マヨネーズ毒殺？

「マヨネーズまみれの血肉は嫌だ、いちご牛乳を使用しろ」

「銀さん、どっちも気持ち悪いです」

「新八君の言う通りだ。ここは間を取ってゴリラでいこう！その名も”ゴリラ de 撲殺！”」

「ゴリラ必要ねーじゃん！」

え、何？なんかグダグダになってるが…。

「降参する？阿伏兔」

いつものニコニコ面でいう。

あ、今のニコニコ動画と間違えた？

「冗談だろ？」

「冗談だよ。団員なかまの敵はとらないとね」

「そうそう敵…って、え？」

耳を疑ってしまう。

「俺は前しか見ちゃいないよ。だから、進むしかない。分かる？」

「…分かるさ。俺が道を切り開くんだろ？」

さあ、団長…いや、ここまで付いてきてくれたお前さん達のために一肌脱ぎますか。

第六十八話 自己満にすぎない（後書き）

新：だいぶ投稿が遅かった気がしますが…で、銀さん。分かってますか？

銀：何が？

新：何がじゃなくて！前話で言っていましたよね！？「KAMUI」の次回作発表するって！

銀：あー…それがよオ、俺も色々考えたんだけどさあ、ずっと頑張ってきたじゃん？三章出てきてさあ？あつ

新…：銀さん

銀：ありがたいことにたくさんの方々がこんな廃れた小説を100分以上も読んでくれて…その努力を台無しにするのか俺達は？って考えると思い止まっちゃうし…

新：ちょ、何作者の心境語ってんですか！

銀：でももうネタねーし。ソウリイターの方のストックが貯まる一方だよ、もう次の聖剣伝説書きちゃったからね

新：もういいです。次回作発表してください！

銀：次回作、「スケット・ダン」

新：おいイイイイ！！コラボか！？またコラボか！？

銀：でも被んなくて良かったわ。だって最初ソウルイーターがスケダンか迷ってたもんなア。で、まあまあ知識力の高いソウルイーターをとったの

新：そんな情報いらねーよ！！アレ、神楽ちゃんは？

銀：お前この状況を読めよ。無理だろ

新：あつそうか、すみません…

銀新：だって俺（僕）達血求人だもんな（ですもんね）

第六十九話 万人による万人の闘い

「団長が好きなように暴れまくりやあいぜ」

「派手にね」

ああ、と頷く。

真つ向勝負。

ハイエナに囲まれた兎が、いや窮鼠猫をかむ。

飛んで火にいる夏の虫。そんな語に当てはまる今の状況。

「敵の大將の首を討ち取れエエエ!!」

坂田軍勢が向かってくる。

てかなんで急に武將なの？

「うおおおおおおおおお!!」

先頭に銀髪の旦那が刀を構えて来る。

「阿伏兎！」

しくじった。

大量の軍勢に捨て身の戦いで刺されちまった。

当たりどころが悪かったらしい。

「団長、すまねエ……。俺の血肉はアンタが食ってくれ」

1話からずっと言っていた言葉。

団長は少し黙り、口を開いた。

「……やっぱり遠慮しとく」

相変わらずの笑顔。

俺も笑い返す。

「降参」

「……!?!」

開戦1分も経たず早々の降参に辺りは沈黙になる。団長は両手を上げて降参を示している。

「降参だつてば」

そうもう一度言つと俺に肩を貸してくれた。

「なんだよ、他の仲間が次々と斬られてったのにそいつだけ庇うつもりか」

銀髪の旦那がいう。

「俺ってホント利己主義なんだよなア、だからコレもその一つなん

だ」

団長は腕に飛んだ血の飛沫を舐めた。

「弱い奴には用はないよ。殺してただ血を求めるだけじゃ強者とは言わないって、地球のお侍さんに教えてもらったんだ。俺は、そういう奴らと戦いたい」

そう言くと、団長は俺に肩を貸し後ろを向いて歩き出す。

「団員で歩ける者は負傷者の手当て宜しく」

「逃げるのか？」

銀髪の旦那が呼び止める。

「…逃げないよ。けどもう一度言っとく。弱い奴に用はない」

「団長…」

「また鉄格子の中かな。でもそれでもいいや。血求人…面白かったし。どうせ滅ぶんだから、血求人らしく…ほっとけばいいんじゃない？」

そうだな、と呟く。

「ちょっとは強くなっただんじゃねーか、神威」

「高杉！」

目の前にいたのは高杉晋助だった。

「もう驚かないよ、アンタはどっちの高杉だい？」

「フン、こっちの方だ」

ああ、なるほど。血求の方の高杉か…アレ？
なんで団長の名前知ってんだ？

「じゃあな、神威」

「……」

後ろを振り返った。

「団長…完全にハメられたな、こりゃ」

「ウンコみたいな銀河系は太陽系だった訳か」

ふーん、と一旦落ち着く。いや落ち着けることがすごい。

「バカだなア、一章の借りを返したつもりなのによオ」

銀髪の旦那が頭をポリポリ掻いた。

「俺達をハメたわけか」

「ハメる？ハメてなんかいいよ。てめーが勝手にそう解釈したんだろ」

「いや、こっちも相当ヤバいこと言っていましたよね！暗殺が一番安いつて意味分かんねーよ！！」

「アドリブしてみました」

眼鏡のツツコミに返す。

「こっちだって近藤さんスゲーこと言ってたぜ、国民の殺し合いの治安がどうたら……」

「……」

え、じゃあ全部嘘？

血求なんてない？

すつとこどつこーい！

「この小説の集大成に相応しいじゃねーか。これでKAMUIの意味も伝わったはずだ」

「大成功ですね」

「ドッキリ大成功っ！！」

つまりコイツら団長を試していたのか。
俺、いや団員の為に自ら降伏をしたこと…。

「変わったアルな、おめでとうネ神威」

団長の妹も出てきた。

「お父さん、感動したぞ！」

星海坊主の旦那も。

「……」

「団長……」

団長は笑む、そして最後に一言。

「全員殺しちゃうぞ」

おわり

第六十九話 万人による万人の闘い（後書き）

銀：おわりっておわりイイイイ！？

神：やっと終わったネ！

銀：次回からどーなんだ？

新：こっちが知りてーよ！！

第七十話 家族や仲間に 無愛情な奴は 一生強くなかなれない

某月某日――

「あつよく来たねエ、春雨に」

出迎えてくれたのは春雨第七師師団副団長の阿伏兎さんだった。
あの日から1ヶ月、その後どうなったのか、当時の心境などの取材
に応じてくれた。

――とりあえず、第三章お疲れ様でした。ほとんどの提供でありなが
らの出演、いかがでしたか？

「あー、正直キツかったぜ。刺されても提供だった時もあったり」

――第一章はどうでしたか？

「すんなりと話も進めれて良かったんじゃない？この頃は提供少な
かったし」

――では謎の第三章はどうでしたか？

「まず設定がおかしいだろ？で最後ドッキリだったってなると腹が
立つね。まア団長の意識が少し変わったことが分かって良かったが」

――ドッキリの仕掛け人は第七師師団団員も入っていたと聞きましたが

「そーだっただよなア、最後の死闘でバンバン斬られまくってたから本当に殺されたかと思っただぜ。だが…まさか仕掛け人だなんて」

―今神威さんは？

「団長？団長なら相変わらずだよ。とにかく強者を求めてるよ」

―最後に一言言われましたよね、どうなっただんですか？

「……」

―では、KAMUIは終幕ですか？

「終わりだぜ。だって次回作出来てるもん」

―そうなんですか！？

「KAMUIシリーズは終わっちゃいねーよ、すつとこどつこい」

第七十話 家族や仲間に 無愛情な奴は 一生強くなかなれない（後書き）

サブタイトルの頭文字をとって読んで下さい。

ありがとうございました！

第七十一話 スッキリしたい時もある

「人間ってもらいアルな。なんで殴られただけで血を吐くアルか？なんで蹴られたぐらいで骨が折れるアルか？ねエなんで？なんでアルか？」

「うぜーよ、お前。二度と口がきけないようまつり縫いするぞコノヤロー」

「ちょっと、病院なんだから静かにしましょうって！」

僕はため息をついた。

元気なのはいいけどここは大江戸病院。先日あれこれで皆負傷している。だが唯一無傷の神楽ちゃんが怪我人^{ぼくら}を罵りに来ている。

「ホント銀ちゃんもみんなもダメアルな。もっと違う作戦あったんじゃないアルか」

「うっせーな、どーせお前なんかダンボール大作戦しか作戦しらねーくせに」

「ダンボールってどんな作戦だアアア！！」

僕は全力でシャウトする。

銀さんは全治1ヶ月、僕は全治2ヶ月かかるとのこと。だから1ヶ月経って銀さんが先に退院したら神楽ちゃんと二人で僕を罵りに来

るのだろう。他の人（真選組）とかも全治1ヶ月程度らしい。

死人が出なかったことが一番の救いである。

「…ようやく平凡に戻れるな」

「銀さん…」

今は確かに平凡だ。

それをベッドから思う。隣のベッドに銀さんがいること、横の椅子に座っている神楽ちゃんがいること、周りにいろんな大切な人がいること。

これが幸せなんじゃないかな。
今ある幸せを…

「ってACかよ!」

「何一人で言ってるアルか、頭も打ったアルか」

「ありがとうさぎも最近見なくなったな。アレフルで流れるの250分の1らしいな」

「マジでか！私見たネ！！いただきますカंकだったネ！！」

「どうでもいいわアアアア！！今こんな話してるんじゃないでしょう!？」

そうだったか？とぼける二人。

「とぼけるんじゃないですよ。ある意味劇的だった第三章、一人も

「やもやしている人がいるんですよ」

「はア？何を今更」

「もうスツキリあつさり終わったネ！！」

「…星海坊主さんです」

「ああ！あのハゲ！！」

めんどくさそうな顔をしていた二人の表情が一変する。

「そっぴやパピーだけ作戦会議に出てなかったアルな」

「それでこんな手紙を」

僕は恐る恐る手紙を差し出した。

それを受け取った銀さんは封を破り、中をひらける。

拝啓 万事屋の皆様

先日はお世話になった。大変ありがたく思う。

神威の事も、いい説得ができて彼なりに解釈できたと思う。

だが、一つ気になったことがある。

あの三章は一体誰の案だ。ドッキリと言ってもめっちゃくちやだと俺は思う。神威が団員を思っで退散したのは一歩の成長だと思う。だが、もっと違うやり方があつたんじゃないか？

だから一父親として考えがある。それを是が非でもやってくれ。

その考えとは、題して”ダンボール大作戦”だ。すごい案だろう。

この大作戦とは…

「うぜエエエエ！何がダンボール大作戦だアアア！ついに脳みそもハゲたかあのハゲ！！」

ビリビリに銀さんは手紙を破り捨ててしまった。まア誰も止めないけど。

「なんかうるさいと思ったらてめーらか」

「旦那ア、ここは病院ですぜ」

「土方さん！沖田さん！」

「オイオイなんですか、隣の病人がノックもせずに入ってくるたア、どーいう了見ですか、隣の隣人ですか、となりのトトロですかコノヤロー」

「銀さん、それを言うなら美しい隣人です。隣の隣人ってそのまんまです」

メンチ切りの銀さんにつっこむ。

「あんだとオ！？てめーも入院がてら頭も治してもらえや」

「うつせーな、てめーもニコチンコとってもらいやがれ」

「やめんか！ここは病院だぞ！！」

そこに現れたのは…何故か医者の格好をした近藤さん。

「近藤さん、何スかその格好…」

「これか？いや実はな、この部屋の隣にお妙さんが入院しているらしくてな。専用の医師がいると思って俺が、ふごオオオオ！！」

近藤さんがしゃべり終える前に姉上の強烈なかかと落としが入った。近藤さんは鼻から口から血を出している。

「私専用の…、ストレス発散グッズ？」

姉上は笑いながら言う。ていうか姉上は入院なんかしていない。今回の作戦は女性陣出演NGだったのだ。

その時

ドゴオオオオン

「！？」

すごい爆発音がした。

「ぶはは！！俺はこんな所で入院している暇はない！！日本の夜明けは近い！！ぶはは！！」

「ツラか？」

「かゝつらァ！！」

真選組三人称は後を追いかけていった。

今までらしい風景。

「これが俺達らしさってもんだな」

「そうですね」

「そうアルな」

KAMUI、今まで本当にありがとうございました！！

おしまい

第七十二話 第四章突入！！なんかすみません

宇宙海賊春雨――

「団長、傷は癒えたか」

春雨第七師団副団長、阿伏兔が団長の神威に声をかけた。

「うん、大分ね」

神威の傷、それは先日起きた事件の傷痕きずあとといってもいいだろう。

「丈夫なのはいいこった。あんま無茶すんなよ、すつとこどっこい」

包帯で傷の部分を巻き直し、上着を羽織る。

腹にできた切り傷。

これは誰にやられたかって？

アイツだよ、高杉晋助。仲良いと周りには思ってたかもしれないけど。

「高杉の奴、次会ったらお返ししないと」

笑いながら神威は言う。

「もうやめとけよ、元老うゑからすげえ目つけられてんだから」

「はいはい、心配性だなア阿伏兔は」

手をヒラヒラさせて神威は廊下へと出て行った。

多少の口喧嘩から始まった乱闘。高杉のあの性格を神威は理解しているつもりだった。それを平然とした態度で高杉に表したのが間違이었다のかもしれない。

悪い気はしたが、それよりも相手の嫌悪感が一層強くなった。思考は似てそうで似てない、そんなコインの裏表のような形なんだから食い違いもあるだろう。

「一匹狼か…」

そう呟いた時、ある言葉を思い出した。

高杉との乱闘で奴が言った事。

『大切な人をこの世界に奪われて、憎くならないのか。この世界を壊したいと思うか。神威、てめーだったらどうだ』

「そんなこと言われたって。分からないよ」

高杉がこの世界をどういう思いで過ごしているかなんて、神威にはどうでもよかった。むしろそんな概念、自分には関係ない。

「へー、KAMUI、完結詐欺しておきながらまた連載再開するなんて作者もセコいな。って俺には関係ないけど」

そうブツブツ言いながら廊下を歩いて行く。
その時、向かい側から誰かの足音がした。

「！」

「また会ったな」

高杉晋助だった。

煙管をくわえ、羽織を羽織っていた。
というか「KAMUI」始まって何回高杉とこういうスタンスで会っているのだ。もう違うやり方ないのか。

「こないだのお返し、今返そうか？左目のついでに右目も包帯で巻き巻きにしてあげようか？」

挑発気味で神威はいう。

「フン、てめーみたいな調子者には教えてやってもいいかもな、コイツを」

「その左目、やっぱりなんかあるんだね。ずっと気になってたんだ」
高杉はククツと鼻で笑った。そして煙管を口から外し、懐にしまった。

「…その前に、なんでまた俺が春雨に来たか教えてやる」

「どうせ勧誘されに来たのか後ろ盾を得るために来たのか、どっちかじゃないの？」

高杉は少し間髪入れた後、口を開いた。

「邪魔なんだよ。国を滅ぼす前に、まず天人^{てめーら}がな。紅桜ん時は多少利用したが失敗に終わったし、先日まんまと踊らされたしな。だからてめーらはいらない、消えてもらう。俺が攘夷戦争に参加してたのはそーいう意味もあつたしな」

「…あんたとは馬が合いそうだったのに」

「俺もそう思うよ。だが…残念だったな」

第七十二話 第四章突入！！なんかすみません（後書き）

銀：ふざけんなアアア！！何再開させてんだよこのクソ女アアアア！！

神：死刑執行ネ！！

銀：YOROROZUYA更新しろオオオオ！！

というわけで、もうちょっと（？）続きます。

第七十三話 仲がいいほど喧嘩するって…マジすか！

「は？かぶき町主催の地区運動会に出るだア？」

「お登勢さんの頼みなんですから」

「銀ちゃんいつもぐーたらしてるから、ちよーといいアル。運動会出るヨ」

かぶき町にある万事屋銀ちゃん。

いつものようにこの3人でぐだぐだしていたのだ。

「てかコレ何の小説？YOROROZUYAか？でもまだ金魂だよな」

「銀さん知らないんですか？KAMUI、連載再開したんですよ」

「デジャヴアル」

「えゝえゝえゝ！？」

新八の発言に銀時は驚く。まるで獣の叫びだ。

「でも出られたのが奇跡アル。この小説じゃ私達スタメンじゃないネ。準レギュラーポジショナル」

「いくら連載再開つってももうネタねーだろ。頭パンク寸前だろ」

「だから僕達で尺埋めようとしてるんじゃないですか」

大分話がそれてしまったので、ここで勝手ながら話を元に戻します。
本来なら後30分くらい続く雑談でしたので。

「あのババア、今月の家賃なぜかまけてくれたと思ったたらこういう事か」

「仕方ないアルヨ！私玉入れとか綱引きとかやりたいネ！！」

腕を組み、目を輝かせた神楽が立ち上がった。

「それたためーがやりたいだけじゃねーか！」

「出ましようよ、楽しそうじゃないですか」

「なんだよ、どいつもこいつも小学生ですかコノヤロー」

呆れたように銀時はいう。仕方ない、出てやるか、ぐらいの気持ちを含めての事である。

「これ、お登勢さんからもらった当日の日程とプログラムです」

新八がチラシを机に広げた。

「ふーん、玉入れ綱引きパン食い…ベタだな、ん？」

銀時があることに気がつく。それはチラシのちょうど左下にあった。

「当日將軍様もご参加…？」

將軍かよオオオオ！！

「晋助、主もこれに参加するでござるか？」

とある屋形船。そこに鬼兵隊は集っていた。

万斉が差し出したのはかぶき町主催地区運動会のチラシだ。
將軍参加に目がいったのだろう。

「当たり前ーだ。この隙に將軍の首をとる」

三味線を片腕に、高杉は煙管をくわえている。

「春雨は…」

「神威か。奴もこの行事に参加するはずだ。春雨も、天人も、一騎
打ちだ」

「随分自信があるようでござるな」

「…フン」

高杉は万斉を気にせず、再び三味線を弾いた。

勝算はともあれ、高杉の狙いはこの国を壊すことだ。どんな手を使つても、恩師松陽を奪った幕府が、天人が、それでもものうのうと生きている人間共が、憎くて仕方なかった。だが諸兄の考え通り、こんなやり方では松陽は悲しむと考える。このことは高杉だって、分かっている。きっと。今回のイベントで、高杉は今までにない花火を打ち上げようとしている。それはこの国の終わりを告げるとともに、己の欲求を満たすことに値する。

「待った？」

ヒラヒラと片手で手を振りながら神威が入ってきた。

「フン、長い便所だったな」

「用件は？まア聞かなくても大抵分かるけど」

意気揚々としている神威の態度に、少し苛立つ部分もあったが構わず続ける。

「神威、てめーはここで消えてもらう。今まで楽しかったよ」

「なるほど、やっぱりそうなんだね」

高杉は長ドスを神威に向けた。

第七十四話

やっぱり運動会には応援団がつきもの

「神威、てめーはここで消えてもらっ

ガチャ

刃の先を神威の首筋に当てる。だが、一向に神威に動揺が見られない。ただいつものように笑顔を作っている。その笑顔を崩すことはないだろう。

「あん時の借りはとくに返したし、もう何も気にせずてめーを葬ることができる」

「アンタとは馬が合うと思ってたのに」

「…フン、残念だったな。俺の舟に天人^{てめー}は必要ねエ」

「そう、俺だってアンタの舟に乗るつもりは端からなかったし、じゃあ何、勝手に俺を見切ってたんだ？」

高杉は少し間髪入れた後、口を開いた。

「…だったらなんだ」

「やっぱりアンタ、面白いね。見たかったなア、アンタの生き様を。それを最後まで見届ける事ができなくて残念」

神威は挑発しているのか、はたまた死ぬ覚悟で話しているのか、高

杉でも読めなかった。しかし高杉は試しもしていた。もし、神威が自分についていくという発言をしていたなら、事態は変わっていたかもしれない。

「…だがてめーに一太刀入れたところでくたばるタマじゃねーことくらい把握している。ここでてめーに斬りかかって、全くの無意味だ」

神威の表情が少し変わった。

「…俺を殺すんじゃないの？」

「殺すさ、必ず」

高杉は不気味に笑う。その姿が、夜空に映える月明かりが一層濃く表していた。

「俺の眼中には天人も幕府もねーからよ」

高杉の野望が最高潮に満ちたところだ。

そしてあのチラシを差し出した。

「これ、春雨も総出したらどうだ。もちろん俺も参加する。こんなチャンス、めったにない」

「かぶき町主催の地区運動会？」

「將軍の首を、大空に打ち上げてやる」

「なるほどね」

刀を鞘に収めた高杉は夜空を眺めた。海の中は、まるで宝石箱のようだった。降るような星をそれぞれの目に焼き付ける。野望とか、己の欲求とか、すべて見抜かれたように感じた。

「じゃ、その日。俺も俺で、色々考えがあるんだ」

そう言うと神威は出て行った。

「団長」

「いたんだ」

「…暇だしな」

港に着くと阿伏兔が待っていた。

「高杉…本当に面白い奴だよ。この日にでっかい花火打ち上げるんだってさ、笑っちゃうよね。無理に決まってるじゃないか」

ピラッとチラシを見せる。

「今までのクダリを覆すつもりか？高杉の奴」

今までのクダリとは一章から三章までのことである。神威の成長を描いたサクセスストーリーをすべて自分の事だったかのように、塗り替えるつもりだと考えている。

「俺の成長なんて行き過ぎてるけど」

「確かにな」

「じゃあこの小説のタイトルもTAKASUGIに変えたらいいんじゃない？」

阿伏兔はため息をついた。

「この小説のキャラクターはやたらタイトルを変えたがるな、すつとどつこい」

第七十五話 世の中すべて即興ライブ

「かぶき町主催天下一地区運動会開催イイイイ！ドンドンパフパフ」

広い空き地を利用し、天下一舞踏会…じゃなくて運動会が開催された。

司会に務めてるのはお登勢だ。

「江戸っ子は元気が一番だ。楽しく盛り上がって行くよ！！優勝したチームは豪華景品がついてるよ！！」

「てめーらアアア！！絶対優勝するぞオオオオ！！」

「おおおおおおおおうっ！！！！」

お登勢の司会の言葉を押し切って銀時は勝手にマイクを握る。

「そんで景品を手にするのは…俺だ俺だ俺だ！！」

「何タカトシのネタパクってんですか！！」

新八のシャウト。

「そしてパン食い競争のパンを全部食べるのは…俺だ俺だ俺だ俺だ！！！！」

「うるせーよ！！何神楽ちゃんもやってんの！！」

「アンタ達とつとと舞台から降りな!!」

キーンとマイクのノイズがスピーカーからこぼれる。お登勢の一声で騒ぎは収拾した。

「なんだなんだ、あいつらも参加するのか」

そう言ったのは土方。一応將軍の側近でもあるが参加チームに真選組もあつたのだ。

「万事屋チームですかイ。俺アどーにも気乗りしねーや、後は土方任せた」

「何ををををを!!?」

沖田は応援席のシートの上で寝転がり、メガホンで叫んでいた。

「おい、やめんか。俺達が騒ぎを起こしてどうする。仮にも警察だぞ」

「ていう近藤さんも何大勢の前でフルチンなんだよ!!猥褻行為で逮捕されるぞ!」つか警察俺達だった!!」

小説で分からないが今近藤は下半身丸出しの言わばフルチンな状態になっている。もちろんモザイクはかかっている。見えないけど。

「そうだ!これは見えないんだ!だからセーフだ!!」

「そーいう問題じゃねーだろ!早くズボンを履け!!」

土方に説教をされてる近藤の姿を新八の姉、お妙が少し見ていた。

「あら？不思議ね、ゴリラがいるわ」

「妙ちゃんは本当にいつも面白い事を言うな。ゴリラなんか運動会にいたはずがない」

横にいるのは柳生家の若頭、九兵衛だ。この2人は万事屋チームの応援に駆けつけている。

「やはり運動会というものはいいですね。私どもも是非参加してみたいものだ。そうですね、例えばローションをふんだんに塗りたくった男女二人組がツルツルの床を滑り先に旗をとったら勝ちという……」

ドゴオオオッ

ひょっこり出てきた東城に投げ倒しにする九兵衛。

「…そんなものはや運動会とはかけ離れた危険な夜の遊びだろう」

「なんだ、てめーらも来てたの」

ジャージ姿に着替えた万事屋3人が応援席に戻ってきた。ていうか最初からジャージ姿です。

「3人とも頑張ってくださいね、なんと言っても優勝賞品はバーゲンダッシュ100個らしいですから」

「てめーの為かよ」

「お弁当も作ってありますから、食べてくださいね」

「「「……」」」

とりあえず3人黙る。卵が黒くかわいそうに焦げた何かしか入っていないことくらい分かっているからだ。

「最初は玉入れか、おっしや、てめーら行くぞ」

「はい！」

「おうネ！」

3人はまた競技場へ戻っていった。

「ん…」

銀時はある人物を目にする。

「いいか、エリザベス。この大会に優勝した暁にはネクロゴンド行きの船のチケットがもらえる」

「そうなんですか、桂さん」

「そうだ、待ちに待ったネクロゴンドだ。エリザベス！頑張るぞ！」

なんでツラまで参加してんだよオオオオ！！
つーか賞品ネクロゴンド行きのチケットじゃねーよ！どこをどう読
み間違えたんだよ！！

心の中で叫びつつこむ銀時であった。

第七十六話 女子って最低のこと最ッ低ってよく言う(前書き)

あの、最初に謝っておきます!すみません!!
下ネタひどい><

第七十六話 女子って最低のこと最ッ低ってよく言う

「最初は玉入れっスか！よっしゃ、ここは鬼兵隊チームを代表してこの来島また子が行くっス！！」

ピンクのへそ出しジャージを着た来島また子が自信あり気に言う。

「では拙者はその次の種目に出るとするでござるか」

寺門通の新曲をシャカシャカとヘッドフォンでノリノリで聴いている万斉がプログラムを見た。

「2人とも競技に夢中になるのはいいですけどね、我々の目的は將軍の首を討ち取ることですよ」

と言いつつもジャージ姿でいかにもやる気満々な武市が腕を組んで立っていた。

「武市先輩だつてやる気満々じゃないっスか！一体何の種目に出ようとしてるんスか！！」

「ちびっ子徒競走に決まってるじゃないですか」

「ロリコンも大概にするっス！」

「ロリコンじゃありません、フェミニストです」

はあ、とため息をつくまた子。というか、運動会になってからさっきまでのシリアスをまったく感じなくなってしまってますみません。

「そっといえば晋助様は…」

あの時、高杉自身も自ら参加すると言っていた。だからここにいるはずだが、どこにもいない。

きつと高杉のことだから応援席にいるに違いないとまた子は思っていたがやはりそこにもいなかった。

「晋助なら、トイレでござるよ」

と、トイレええええ！？

絶句するまた子であった。

「最初は玉入れかア、阿伏兔、出る？」

「団長が行け」

傘をさして、いかにも夜兔ですって言うてるようだったがこの日は違った。

傘にジャージだった。黄色の線が入っている。ジャージは神威によく似合っていた。阿伏兔は地味に黒であるが。

「ところで玉入れって何？銃の弾を的に当てること？」

「そっちの弾じゃねエ、それじゃ単なる射撃だ。玉入れってのはアレだ、ボールをカゴに入れる競技だ」

「へエ、知らなかった」

楽しそうに神威はいう。というかこの2人、多分何しに来たのか忘れていていると思う…。

「じゃあ玉入れは阿伏兎よろしく」

「オイ、団長！！」

神威はスタスタと応援席に戻っていった。

「ねエ銀ちゃん、よくよく考えてみたら私玉入れのやり方なんて知らないヨ」

入場門を前に、万事屋チームはいた。

「はア？お前知らねーでよくそんなやるとか言ってるな。玉入れっつーのはよ、要はアレだ、男のキン マを女の に入れる競技だよ」

「わーっ！っ！何言ってんすか！！そんな卑猥な競技あるかアアア！！」

新八が必死になって止める。

「えー、じゃあ玉入れじゃなくて棒入れとかの方がしっくりくるアル」

「棒に関しては棒高跳びというもつと高度な技術を要する…」

「何言っただよオメーはよオオオオ！！違う意味でもつと卑猥だ！！」

「新八よオ、人生つてのは一種の運動会みてーなもんだろ。必死になつたり励ましあつたりして、一つ一つの種目ライフイベントを乗り越えていくもんだろーが。それを卑猥だのなんだの言ってるからお前は新八なんだ。いい加減目を覚ませ、次のお前のライフイベントはなんだ」

「…綱引きです」

一見格好良く聞こえる銀時の台詞だが、じっくり考えるとやっぱりそれは卑猥だった。

第七十六話　女子って最低のこと最ッ低ってよく言う（後書き）

銀：…これR指定した方がいいんじゃない？清純な中学生が読んでたらヤバいだろう、明日運動会の小学校ヤバいだろう

新：そうですね、調子に乗りすぎですよね。最近アクセスがすごいからって、調子に乗りすぎましたね

神：そうネ。私、一章みたいな誰かの人格が覚醒したり、そういうシリアスな系統が読みたいアル

銀：覚醒しなくて悪かったな！つか、そんなに覚醒パーティーしたかったら他の作家さん家の子になりな！！

第七十七話 吳越同舟

『プログラム1番、玉入れです。チームの代表者は入場してください』

放送のアナウンスが流れ、代表者達はそろそろと入場門をくぐった。

「神楽ちゃん！頑張つて！！」

「ちゃんと狙つて投げろよ！！」

応援席で銀時とお妙は声を上げ、手を振る。

それに気づいた神楽も振り返す。

ここで玉入れのルールを説明しよう。

紅白の玉をそれぞれのカゴに入れ、玉が多く入ったチームが勝ちという簡単な競技だ。

だがこの運動会は紅白戦ではなくチーム戦なのでくじで紅白に別れ、勝った方のそれぞれのチームに同じ得点が入るようになっていた。

ちなみに神楽は紅、真選組代表者の沖田は白、また子は紅、阿伏兎は白で、エリザベスは紅である。

「気合い入れてくネ！！」

「絶対勝つつスよ！！」

紅チームの中心に神楽とまた子は鉢合わせしてしまった。

「ぬをつ！なんでまた子がいるネ！！」

「お前は…！チツ、嫌な奴に会ったっス」

「相変わらずまた子のパンツは染み付きパンツアルな」

「今度は公衆の面前で侮辱するっスか！！小憎たらしいガキっス！！」

神楽とまた子の口喧嘩が始まり、紅チームは騒がしくなった。

その光景を応援席で見つめる銀時達。

「オイオイ、何やってんだア？」

「もめ事ですかね」

「ん…なんだあの白いオバQ…ってエリザベス！？」

チームを取り乱す神楽とまた子の前に、オバケのQ太郎じゃなくてエリザベスが立ちはだかった。そして白のボードで2人を殴った。

「何スカ！！このオバケ」

「何するネ！！エリー！！」

倒れた2人にボードを見せた。

「昨日の敵は今日の友っていうじゃないか」

またひっくり返した。

「今は団結するのが一番大切だ」

そのボードを見た2人は握手を交わした。

「悪かったヨ、嫌なことって」

「いや、こつちもっス」

とりあえずもめ事は終局したのであった。

「何があつたんだ？」

「さあ……」

まだ眺めている銀時達であった。

『もめ事もおさまったみたいなので、じゃあ玉入れの競技に移りたいと思いますーす』

伝え遅れたがアナウンスは結野アナである。

『それでは一人玉を3つ持ってください！』

言われ通り、皆玉を持ち、投げる体制になる。

狙うはあのカゴ。

『では、よい…スタートオオオオ！！』

ピストルの爆音と同時に玉入れが始まった。

「ほあちゃアアアア！！」

神楽はカゴ狙って豪速球を投げる。

見事3つ入ったのである。よっしゃあとガッツポーズをキめる。

「やるっスな！でも的狙いなら射撃と同じ！！負けないっスよ！！」

また子も神楽に続き、玉を見事3つ入ったのである。

「ヘン、チョロいもんスよ」

エリザベスも見事3つ入ったのである。

一方白チームは…

なんと沖田がバズーカを紅チームに向けていた。とつくに3つ入れた沖田は暇だったのだ。両チームのカゴを見るとだいたい互角…。こつちが有利に勝つ方法は、と考えた挙げ句、バズーカで相手チームを吹き飛ばそうと考えついたのである。

阿伏兔はまだ玉入れをしていた。

「この玉を全部入れる選択肢は二つ…右手で投げるかあえて不安定な左手で投げるか…、いやでも右手の方が可能性は高いぞ。でもなあ…」

「あばよ、紅チーム」

ドガアアアン

紅チームのカゴが吹っ飛んだ。

「総悟オオオオ！！何してんだアアアア！！」

応援席で土方が叫ぶ。

「こっしねーと勝てねーでさア」

「思っきし不正行為だろーが！！不正負けだぞ！！」

「何しやがんだアアアア！！」

神楽の蹴りが入る。

「ふごおうつ」

「なんでサドがいるネ！！ていうかアレ、何さらしてくれとんじやアアアア！！」

神楽のパンチをひょいと沖田はよけた。

「チャイナじゃねーかい、つーことは旦那もいるんだ」

「お前コレ不正ってわかってるよな!!」

神楽は沖田の胸ぐらを掴んだ。

「そーいうテメーこそ、相手チームに負傷させていいのか？テメーも不正行為だ」

「上等だヨ、こんちきしょー!!」

神楽は白チームのカゴを支えの棒の根元から思っきしへし折った。

「「あゝあゝあゝ!!」」

その場にいた人皆絶句する。

『おつとオ！ここでまたもめ事か！？このまま続けるのは危険ですね！！はい、中止になりました！玉入れ中止イイイイ！！』

玉入れは両チーム0ポイントで終わったのである。

第七十八話

便座に座りすぎると痔になるって尾木ママが言ってたっけ（前書

全国のホンマ　　つかTVのファンの皆様に謝ります。私も尾木ママ
好きです！

第七十八話 便座に座りすぎると痔になるって尾木ママが言ってたっけ

「始まってるな…」

トイレ（？）から帰ってきた高杉が賑わっているグラントに目をやる。

「遅かったな、晋助。どっちの方でござるか」

万斉が訪ねる。

高杉は少し黙った後、口を開いた。

「…フン」

「晋助は何か種目に出るでござるか」

「種目ねエ…、刀の打ち合い…チャンバラみてーな競技があれば話は別だが、とりあえず俺は出ねー。銀時やヅラも来てるみたいだしな、連中と会っても面倒な事になるだけだ」

と、言いつつも高杉は紫の線が入ったジャージを着ていた。というか物凄いサービス…。

「將軍の首を手土産に、今日は祝宴を開きたいもんだ」

あぐらをかいて、グラントを見つめていた。

「次は騎馬戦か」

銀時はプログラムを見た。

「2人か…。誰が行きます？」

騎馬戦は知つての通り、敵のはちまきを取り合う競技だ。だがこれ
はおんぶをしてやる競技なのでかなりの体力を有する。

「神楽、新八行け」

手をピッピッとやる銀時。それにムツとする2人。

「私さつき玉入れ出たネ！だから銀ちゃん行けヨ」

「はア！？てめー怪力だろーが！！こっちは優勝目指してんだ。だ
から能力があるモン勝ちだ。世の中楽して勝ちゃいいんだよオ」

「最低だ、大人のくせに最低なこと言つたよ」

新八は蔑んだ目で銀時を見る。

「もういいです、行こつ、神楽ちゃん」

「そうアルナ。コイツがやってもダメなのは受け合いネ。コイツ
に頼んだ私がバカだったネ」

2人はスタスタと行ってしまった。その姿を後ろでイジイジしてる銀時。

「…わぁーったよ！！俺が出る！出ます！！神楽ちゃん俺と代わってくださーい！！」

2人は足を止めた。

「仕方ないアルナ」

という神楽だった。が内心はラッキーと優越感を感じていた。

「次は騎馬戦っスか…。誰が出るんスか」

一方鬼兵隊チームも騎馬戦の出場者を決めていた。

「騎馬戦…。面白そうでござるな、拙者が出よう」

グラサンをくいつと上げた万斎が言う。

「…武市先輩、どうっスか」

「騎馬戦は肩車を有する競技です。まアおぶるのもありですが…、でも本来肩車は大人を乗せるものではない。3歳くらいの子供を載せるのが基本のスタンスです」

「要するに、武市先輩は子供しか肩車しないってことっすか」

「まアかいつまんで言えば」

また子はいよいよ怒りをあらわにした。

第七十九話 名前に惑わされるな

「騎馬戦か…馬に乗る騎士とも言つが、俺達はちげーだろ。馬に乗る鬼…鬼馬戦だろ」

そう言つたのは高杉だった。

「晋助様…。え、もしかして」

「万斉、お前下になれ。手慣らしに俺が出る」

「ええええええええ！？ま、まままマジっスか！！」

一同どよめく。

あの高杉が、あの冷徹精神暗黒高杉が、競技に参加する？ないない…じゃない！

「全員の首、俺がすべてとる」
はさむき

「晋助様…」

高杉の言つた言葉でまた子はまた惚れ直した。

『それではプログラム2番、騎馬戦を間もなく行います！出場され

る方は入場門にお並びくださいー!!」

アナウンスが入り、そろそろと出場者達が集まってくる。

「新八、俺が下になるからちゃんとはちまき取れよ」

「えっ、でも取れるかな…。見た感じ強そうな人ばっかだし…」

「何怖じ気づいてんだよ。じゃあ、てめーのはちまき、誰にも取られんなよ」

「…頑張ります」

銀時&新八は逃げ作戦で行くことにした。だがそれを土方&沖田チームは聞いていた。

「なるほど、あいつらはそーいう作戦か。普段の奴独り身なら逃げはしねーと思うが今日は眼鏡がいる。ならこっちはとっとと奴らのはちまきを取る。聞いてたか総悟」

「…すいやせん、聞いてやせんでした。もう一度大声でお願いしやす」

「大声で言えるかアアアア!! 読み直せ!!」

「いいじゃないですかイ。大声で言って、勝ってどや顔すればいいんですから」

「黙れドS!!」

この二人の言い合いを、高杉&万斉が見ていた。

「真選組がいるでござるな」

「フン、大方、將軍の護衛だろう。しかし呑気だな。こんな時にのうのと」

大勢で込み合ってる中、誰も高杉がいるとは気づかなかったが、神威&阿伏兎チームだけは見ていた。

「あれ、高杉じゃない？」

神威が高杉に指をさした。阿伏兎も神威の指の先を見る。

「…本当だ。こんな所にいけシャーシャーとしゃしゃり出て、仮にも過激派攘夷志士だろ」

「案外気づかないかもよ？」

「それが一番いいんだが」

『それでは入場してくださいーい！！』

アナウンスに応じて、皆そろそろとグラウンドに入っていく。だが、一番目立つはずの桂&エリザベスには誰も気づかなかったが。

第七十九話 名前に惑わされるな（後書き）

次回、運命の騎馬戦が始まります！

第八十話 騎馬隊より歩兵、歩兵より船艦のてこぎ

鬼馬戦：

馬に跨る兵は鬼神の如し強い。その鬼がつかむものは敵の首…。その首を多くとつた者が伝説の鬼となる——！！

「って何言つてんだアアアア！！鬼じゃねーよ！！何戦国風に言つてんだよ！！」

銀時がつっこむ。

すみません、ちょっと盛つてしまいましたね。ではちゃんと騎馬戦のルールを紹介したいと思います。てか要はアレです、首のところをはちまきに替えてもらえば説明オツケーです。

「かいつまみすぎだろ！！はしょってんじゃねーよ！！何分かけてもいいからルール説明しろよ！！明日運動会で騎馬戦出るんだけど、何かいいテクニクありますか？って聞かれたらどーすんだよ！！」

遠足シーズンなのにそちらさんはもう運動会ですか。早いですね。え、騎馬戦の必勝法？そうですねエ、はちまきを何かに例え見ればいいんじゃないですか？好きなものや嫌いなもの、殺したくなるような人とか。人それぞれですが…、ん？父ちゃんだと思つてやる？いやゝそんな泣きながら言われても、そんなに父ちゃんのが好きなんだね。アレ、今むっとしたよね？…よくわかんないけどあんまり他人の家庭の事情に首を突っ込みたくないですねゝ。

「いいからさっさと騎馬戦スタートさせろオオオオ！！」

すみません。

それでは運命の騎馬戦、いよいよスタートです!!

『はい、じゃあスタンバイしてください!!』

それぞれ肩車をし、はちまきを頭に巻いてスタートが切れるのを待つ。

「銀さん、頼みますよ」

「ああ、任せとけ」

「土方さん、しっかり足持ってくださいエ。あ、ついでに右足のふくらはぎんとこかゆいんでかいてくだせエ」

「自分でかけ!!地面に叩き落とすぞ!!」

「エリザベス!ネクロゴンドは見えてきたぞ!」

「つーかネクロゴンドってどこ?」

「万斉、俺ア中途半端は嫌いだ。思いっきりやれよ」

「もちろんでござる」

「はちまきだつて、楽勝でしょ」

「また団長の悪い病気がでるかこりゃあ」

全員準備は整った。

『——それでは……よい……スタートオオオオ！！』

パアアン

ピストルの合図と共に鳴り響く激しい熾烈な戦いの爆音。砂埃が激しく舞っている。

「銀さん、これははちまきを取られたら即終了。やっぱり最初の例の案で通しますよね!？」

「…フツ、ぱつつあんよオ。俺アそーいうのタイプじゃねーんだ、あれは策士だ。敵を侮らせる為の布石にきまってんだろーが!!」

銀時の顔つきが一気に変わる。

「…え？」

逃げ勝ちの案を捨て、捨て身に出る作戦へと変更したのだ。いや、銀時が勝手にそういう方向へ持って行った。

「旦那ア!!旦那方はここで落ちてもらいますぜ!!」

現れたのは土方&沖田チーム。最初の案を盗み聞きしていた2人だ。

「新八いいいい!!」

「なっ…!!」

銀時が声を張り上げ、土方達に向かっていく。

ガシッ

新八と沖田は互いの腕をつかみ合った。

「どうしたんですかい。さっきまで逃げ勝ちする作戦じゃなかったんですか？」

「僕も最初はそっちに乗ってましたよ。でも沖田さん、残念です。アレは銀さんの策だったみたいですから！」

お互い力任せにつかみ合っている。下も下で低レベルな言い争いが始まっていた。

「観念しろ、万事屋。てめーんとこの眼鏡とウチの総悟は桁が違う」

「なんで桁で割り切っちゃうんですか」。見くびるのも大概にしてほしいなア、ニコチン野郎」

「なんだとオオオオオ!!」

張り合いが続く。

「スキありイ!!」

「もらったア!!」

新八と沖田のはちまきを狙う輩。だが…

「どはア!!」

「げふう!!」

スキ入れず、新八と沖田は狙ってきた敵のはちまきをとった。

「ナイスだ、新ハイ！！おめーはやればできる子だと思ってたよ！！」

「総悟！何もたついてんだ！！とつと眼鏡のはちまき取らねーか！！」

「今取り込み中ですよ」

なんやかんやで周りから狙ってきた敵のはちまきを数本手にしていた。

が、しかし

パシッ

「！！！！」

2人の頭から何かが取れる感触がした。

「エリザ…桂さん！！」

「あっ…」

いつの間にか2人の頭からはちまきはなくなっていた。

「フン、灯台下暗し。いつ大敵にかかるか分かんのが戦いつてもんよ」

格好つけながら桂は言った。

「おらアアアア!!」

銀時が股ばーんを桂にお見舞いした。すると桂はエリザベスから地べたへと落ちた。

「何をするか銀時! 貴様のせいでネクロゴンドへの道は閉ざされたのだぞ!？」

「最初っから閉ざされてるわ!! ねーよ!! そこに行ける賞品なんて!」

「桂ア!! てめーの行く場所は警察だアアア!!」

沖田&土方チームは逃げる桂&エリザベスチームを追って行ったのだ。

「…新八、はちまき頭につける。落ちてるはちまき全部かつぱらえ」

「……」

はい、と言えるはずもなかったのである。

第八十一話 鰻を食べ過ぎると鼻血が出るよ（前書き）

銀 新 神：祝！81話突破！！色々ありましたが、ありがとうございますスペシャル！！

銀：いやゝ、もう100話突破かア…長かったな

新：81話突破だアアア！！何をどう間違えたら100話なんですか！！

神：いいじゃないアルか。だって完結詐欺とか、R指定がいるのに規制すらしなかったとか、散々だったネ

銀：81話だろうが100話だろうが変わんねーだろ。100話向かえる前に完結するかしんねーし

新…では、本編をどうぞ

第八十一話 鰻を食べ過ぎると鼻血が出るよ

「なんかあつちが騒がしいね」

神威を肩車している阿伏兔が見た。

「んにゃ、関係ないこつた」

「そーだね」

神威達は既にほとんどののはちまきを取っていた。銀時&新八チーム、土方&沖田チーム、桂&エリザベスチームは前話のようないことがあったので強制的に途中退場させられたのだ。

「フン、まだ生き残っていやがったか」

「おつ」

現れたのは高杉&万斉チームだった。

「ここで決着つけるか」

「いいね」

圧倒的に神威の方が力は上だが、今回の場合は違う。上半身しか使えないため、なかなか思うように動けないリスクがある。

「下半身は使えねエ。今だったらお互い力は互角なはずだ」

「正々堂々と勝負ができるわけだ」

「フン、將軍の首の前にてめーの首から取^{はちまき}つてやらア」

「そいつぁ楽しみだ」

神威、高杉両者とも不気味な笑みを浮かべにらみ合う。仲がいいのか悪いのか、分からない2人である。

ガシッ

お互い腕をつかみ合う。ギシギシと、筋肉のきしむ音がする。

「…なかなか手強いな、手がはちまきに届かねエ」

冷静な素振りで高杉はいう。

「こつちだって、そう簡単にはちまきを渡さないよ」

少し余裕な表情を見せる神威。さすが夜兎の力ってわけか。改めて高杉はそう実感した。

ぐっぐつと押し、押される。

「いい加減諦めたら」

神威がいう。

「…フン」

高杉も諦める気はさらさらないのだろう。
やはり余裕の表情。

『残り1分でーす！皆さん、ねばってねばって！ー！』

アナウンスがあり、残ってるチームは歯を食いしばったり逃げたりと様々だ。

パアアアン

終了を伝えるピストルが鳴った。

「終わったでござるな」

万斉がほっと一息ついた。

『それでは残ってるチームの皆さんは獲得したはちまきの数を数えてくださーい！』

高杉は万斉から降りて、とったはちまきの本数を数えた。

「7本か」

「結構とれたでござるな」

「…いや、もつととれても良かったな」

と言いながら顔を神威に向ける。

「俺は7本だったよ」

一緒か…、と呟く。

「次は容赦しねーぞ」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

とりあえず激闘の騎馬戦は終焉したのである。

一方万事屋チームはというと…

「強制退場ってどういうことですか、銀さん」

拳をならしながら、お妙は顔の影を濃くして銀時の前に立ちはだかった。

「お、おおお落ち着け、まア落ち着け！あん時は仕方なかったんだよ…！」

「これ以上新ちゃんを汚すのは許しませんから」

「そうアルヨ、やっぱり私が行けばよかったネ。そうしたらもって大人な対応がとれたネ」

神楽もお妙の横に並んでいう。

「今回は水に流してあげるわ。…ただし、次巻き上げなかったら…殺すぞ」

「…あの、幻聴が何か聞こえたんですけど」

「銀さん、幻聴じゃありません。てか、次…遂に將軍様ご参加の障害物リレーですよ!!」

「マジかよ!!」

潔く新八からプログラムをとる。やはりそこには”將軍様ご参加”とあった。今まで將軍に数々のご無礼をしてきたことや…。そのツケが今日すべて降りかかってくるな

良かったな

「良かったな、じゃねーよ!!何提供のふりしてさっきから刺すよ
うなことを言うてくんだよ!!將軍がなんだ!!なんぼのもんじゃ
ーい!!」

銀時はシャウトする。

「いよいよ將軍っスか」

プログラムを片手に、固唾を呑むまた子。

鬼兵隊はこの時を待っていた。將軍、あの將軍の首がついに手には入る。そしてこの世界に終止符を打つ。

こんな素晴らしい日はない、きっと美しいものになる、と高杉の胸の内がうずく。長年秘めていた野望が、ついに…。

次回、障害物リレー！

第八十一話 鰻を食べ過ぎると鼻血が出るよ（後書き）

銀：新八！何勝手に進めたんだコノヤロー！！

神：中途半端は嫌いヨ！！

新：あんなグダグダ、收拾つかねーだろ！！

銀：というわけで、KAMUI100話目指してるんでこれからもよろしくお願いしまーす

新：銀さんだつて勝手に進めてるし！！

第八十二話 連携プレーは大切

「障害物リレーって罪だよな。まるで罰ゲームじゃん、なんもしてねーのにバットでグルグル回ったり網に引っかかりたり、やる意味あんのかよ。しかもそれに参加する將軍はドMかよ」

「將軍家は代々ドM嗜好だ」

將軍いたアアアア！！

銀時のどうでもいい独り言を、將軍に聞かれていたのだ。

土壇場で。障害物リレーに誰が出るか決めていたのだ。そして平等にジャンケンをやった末、銀時がジャンケンに負け出ることになったのだ。

そして一人ブツブツ愚痴つてるところを將軍が通りかかった。

「いや、そーいうんじゃないんです、誤解しないでください！事実俺も超がつくほどのドMなんで、毎日Mを満喫してるんで」

「…貴殿とは…どこぞで会ったか」

將軍はあの真っ直ぐな目で銀時を見つめる。

短パンに半袖のTシャツ…小学生の全国共通体操服かよ！ってツツコミたくなる將軍の格好に、正直銀時は顔をひきつらせた。

「…会いました？いや…覚えてないっすね」

「不思議だな。一緒に水練をやった覚えがあるのだが…人違いか」

覚えてやがる！！銀時は心の中でシャウトする。

プールでのご無礼は一生忘れることのできない不覚…！そして恥じらいを受けた將軍もきつと忘れることができないだろう。

「しっしかし、よく障害物リレーに出ようと決心しましたね」

「うむ、武士たるもの如何なる出来事にも俊敏に行動をすべしと、多種多様な競技がいっぺんにできると聞いてな、参加することになった」

「それは素晴らしい志で」

頭がグルグルと変に回転する。また何かしでかしそうな不安と緊張…。

今更ながらやつぱりそれ相応な対応ができる新八が行くべきじゃね？と思う銀時。とにかく何もなく無事に競技が終わることを願うばかりであった。

ほとんど丸腰状態の將軍は本当に大丈夫なのか？

入場門にスタンバイしている障害物リレー出場者達。いい加減、毎回同じフリースは飽きましたか？大丈夫ですか？ついていきますか？運動会は基本的入場門から入場して競技をやって退場する、そういう流れですからね。

ちなみに…

万事屋チーム代表

銀時

真選組チーム代表

近藤

鬼兵隊チーム代表

高杉

春雨チーム代表

神威

攘夷チーム代表

桂

『はい、それではルールの方を簡単に説明したいと思います。まず第一関門は綱くぐりです！綱の長さは5メートル程あります！続いて第二関門はぐるぐるバット！10回回って、20メートル走ってください！続いて第三関門、一問一答競争！問題に答えられないと前に進めない超難関コーナーです！そしてラスト、第四関門は借り物ゲーム！引いた紙に書いてある物を誰かに借りて、それを持ってゴールしてください！以上です』

第八十二話 連携プレーは大切（後書き）

中途半端で終わってしまつてすみません！

家に帰ったら手洗いうがい

アナウンスが終わり、第一走者第二走者とそれぞれのコースへ出てくる。銀時と神威は一番目、近藤と桂は五番目、高杉と将軍は最後のレースと必然的な組み合わせとなった。だが容易には気づかなかった。

「一番目がアゝ、くじ運いいのか悪いのか微妙なところだな。まったく、かったりイし」

肩を回しながらだるそうに銀時は呟く。

1レースに銀時、そして6レースに神威だ。応援席にいる新八達は反対側なので、神威には気づかなかったのが救いである。

「えっと、クラウチングスタートって何？」

「団長、横の人を見る」

「ああ、なるほど」

こつち側の応援席にいる阿伏兔が神威の質問に答える。

『それでは位置について…よい…スタートオオオオオ！』

パンと銃声が鳴る。最初の関門は網くぐり。皆一斉に網に潜り込む。

「おらアアアア!!」

銀時は他の走者を強引に除けるなどして、なんとかトップでくぐり抜けた。それに続き神威もくぐり抜ける。

続いて第二関門、ぐるぐるバット。

…は、難なくクリア。

第三関門、一問一答競争で銀時は一気に差をつけた。

そして最後の借り物ゲームは…。

「青い水筒かよ…」

「眼鏡かア…」

銀時が引いたのには青い水筒、神威には眼鏡と書かれていた。

辺りを見回すがなかなか水筒はあつたとしても青色のは見つからない。眼鏡は眼鏡っていうよりもグラスンをかけている人がたくさんいた。

「グラスンじゃダメなのかなア」

「青じゃなくて赤に偽造するか」

一方応援席では…

「銀ちゃん青色の水筒探してるアルか」

「青色の水筒なんて僕ら持ってないし…」

心配そうに新八はいった。

「何諦めたように言うアルか…！」

ドゴオッ

神楽のパンチが新八の顔にクリーンヒットする。その弾みで新八の眼鏡が飛んでいった。

「ちょ、何すんだよ神楽ちゃんん…！」

鼻血を手で押さえる新八。

「気合いが足りないネ、ぱっつあん…！」

「そーい問題じゃないでしょ…！アレ、僕の眼鏡は？」

「ん？新八の新八がどうかしたアルか」

「新八の新八ってなんだよ」

「本体アル」

「本体こつちイイイイ！！」

とりあえず辺りを探すがない。どこまで飛んでいったんだろう。

バキッ

「ん？」

神威は何かガラスが割れるような音に気づいた。しかもそれは踏んでいて、足の下にある。

「あつ、眼鏡だ」

神威が拾ったのは新八の眼鏡だった。ラッキーと、片方レンズが割れてしまったが持つて行った。

「青い水筒、青い水筒…あつ」

銀時は応援席にある青い水筒を発見した。
やっと巡り会えたのだ。

「俺んだアアアア!!」

一目散に駆け寄る。

貸してくださいとか関係ねエ!!アレは俺の水筒だアアアア!!

ぱつと手を伸ばす。

取ったアアアア!!

銀時はそのまま水筒を手に、ゴールを目指す。

「ありや、俺の水筒どうしたかな」

応援席にトイレから戻ってきた阿伏兔がいた。

―そう、あの青い水筒は阿伏兔の物だった。

無論、その水筒の姿はない。

トトトトト

『一位の選手が走ってきました!』

アナウンスがして、最高潮に盛り上がる。

『アレは…万事屋チームの坂田選手です！！あっ？横にもう一人…
春雨チームの神威選手がいます！！接戦です！！』

「どこアルか、めがね新八」

「本体こつち！！」

銀時の応援よりそっちのけで新八の眼鏡を探す二人。アナウンスの声なんて気にしていない。

「あんな半透明だからこーいう時に見つかりにくいアル！！伊達眼鏡に替えるネ！！」

「なんで伊達眼鏡なんだよ！！」

一方阿伏兔も青い水筒を探していた。

「うおおおおお！！」

銀時はラストスパートで追い込みを見せる。

一位で突破しないと、お妙に殺されるとお経のように唱えていた。だから周りなんか見えない、見えるのは先にあるゴールテープのみ。となりで神威が走ってることも気がつかない。

勝つためなら手段は厭わない、それが銀時の偉業である。

そしてついに…

『ゴール！！』

「ん？」

「あり？」

「ああああああ！！」

銀時は横を見て絶句する。

『これは…同時にゴール！！坂田選手と神威選手、同時にゴールです！！』

「なっ、ななななんでここにいんだよ！！アレ、ちよっ待つ、え！？」

「成り行きだよ。あ、心配しないで、今日はオフモードだからさ」

「ええええええ！！？」

結局鉢合わせしてしまったのだ。

割れた新八の眼鏡と阿伏兔の水筒は落とし物預かりコーナー行きに

な
っ
た。

目には目を、歯には歯を（前書き）

お待たせしました！！

目には目を、齒には齒を

「ああゝっ、何か緊張するなア。俺出番初だし」

自分の出番を今か今かと待ち、緊張する近藤。

「どうしよう、あまりにも緊張しすぎてウンコ漏らしちゃうとかそーいうのは避けたい！」

今までバブルス王女の見合いなどで数々の醜態をさらしてきた近藤。今回ばかりは小説だが、絵には見えないが上手い言葉を使って精密に漏らしたことを文章で表現されるのだけは嫌だ！

ポエム読むような感じで表現されても困る。

とにかく、一刻も早く緊張をとき競技を終わらせたい。できるならお妙に格好いい姿を見せたい。

「土方さん、次近藤さんの番ですぜ」

「本当だ。…てか、なんかそわそわしてねーか？」

「近藤さんがそわそわしてるってことは大方アレでさア」

「…ウンコか」

はアっとため息をつく土方。行く前に下剤でも飲ませてすべて出させときゃよかった…、と後悔先に立たず。もう悔やんでも仕方ない。

「そついや土方さん、桂どうなりやした？」

「総悟が追いかけてったろ」

「俺は土方さんが追いかけて行くのを見送りましたぜ？で、近藤さんに報告しようとして忘れやしたけど」

「…チツ、取り逃がしちゃったか」

「しつかり働けよ土方コノヤロー」

土方はもう一度舌打ちをする。だいたい今日は將軍の護衛で招かれただけだ。

桂なんて相手にできるわけねエ、と正直なところこつこつ心境である。

『それでは第5レース始めまーす！位置について、よいい…スタートオオオオ！！』

銃声の後、一気に走者達は駆け抜ける。
近藤も負けじと齒を食いしばり走る。

「オイ総悟、見張り行くぞ」

「へーい」

たるそつに沖田は言った。残念ながら、見張りの為に近藤を応援することはできなかった。

『おっと！真選組チーム、近藤選手速いです！！みるみる他の選手を抜いています！！網くぐりも難なくクリアしました！！』

そして第三関門、一問一答に差し掛かった。

『問題、今から言う言葉を訳しなさい』

「英語か？どーしよなア、俺英語無理！」

『ウホ、ウホウホウホホウホ？ウホ』

分かるかアアア！！

俺、ゴリラって言われるけど人間だもん！！
まずいな…、ここは適当に言っとくか。

「バナナ食べていいですか？いいですよ」

『正解！！では続いての問題です。今から言う言葉を訳しなさい』

また！？

いや、でもゴリラ語だったら有利かもしれん。

『
○ ■ & # = \$ % ● □ * ☎ 』

もつと分かるかアアア！！最早語でも何でもねーよ！！

「ふむ、これはアレだな、カムチャツカ語だな」

「！！！！」

顔は板で見えないが隣の人も同じ問題を解いている！？

隣の人は桂であるが近藤は気付いていないようだ。つかカムチャツカ語ってなんだよ！！

「語尾が若干上がっていたな…だったら…」

ゴホンと桂は咳払いをした。

「答えは”私のお気に入りの映画はポニョです。特に、ポニョがそうすけにでつかーい！そうすけ、。。。、でつかーい！ポニョ、好きー！！”って言うシーンです”だ」

長エエエエ！！

ジブリにピー音入らねーよ！！ポニョちゃんと見てねーよコイツ！！

『正解！別回答で”もののけ姫の美輪明宏がよかったです”も有りです』

正解したアアアア！？

別回答と全然意味違うよね！？

「……」

近藤はなんとかクリアしたのだった。

そして最後の借り物ゲーム。

近藤が引いたくじはこうだった。

「長髪の男？いるのか？こんな奴」

桂が引いたくじはこうだった。

「ゴリラみたいな男？ゴリラでよいではないか」

ドンッ

「あつ、すいません」

「いえ、こちらこそ」

「紙、落ちましたよ」

「あつ 本当だ。そちらさんも……」

落ちた紙は借り物ゲームのくじだ。

そのくじには長髪の男、ゴリラみたいな男とあった。

お互い顔を合わせる。

「「あああああああああああああああああ……！！！！！！」」

政治家達は己を信ずる者なりつてだから仲悪いのね

近藤はそのまま桂を追っていった。もう競技とか関係ないが…。

「ねエ、銀髪のお兄さんは何でこれに参加してんの？」

すべてのレースが終わるまで並んで待機だったので、神威は隣にいる銀時に話しかけた。

「こつちが聞きてーよ、俺、殺されるんじゃないかってちびりそうだったよ」

「…まア色々だよ。特に用はないけど」

「暇なのかよ」

「気楽にね」

何がだよ、と呟く銀時。妙な感じだった。

あれだけ自分を殺す、と言って色々あったが結局こうして生きている。

奴は戦闘オタクだ。

諦めたのか？

色々考えたがやめた。

「…なんだよ」

神威はさっきから銀時をニヤニヤと見つめていた。

「なんでも」

それでもニヤニヤ見つめている。

「うぜーよ！気持ちワリイんだよー！！」

「笑顔は殺しの作法なんだ。つまり殺意がわいてるってこと」

「はア！？俺に！？なう！？」

「そ、なう」

「今日はオフモードだったのてめーじゃねーかー！！」

銀時は立ち上がりあたふたしている。

「ふ、ふざけやがってクソガキ！ここを殺人現場にするつもりかー！！」

「殺人現場ってより、血の海？」

「皆殺しにするつもりかー！！」

「なーんてね」

「大人をからかうんじゃないよー！」

「たくよーと銀時はしゃがみ込んだ。」

「血の海にするのは俺じゃないけどね…」

「あ？」

銀時は聞き直した。

「ううん、なんでも」

「もうすぐか」

最後の順番を待つ高杉。隣には將軍がいる。

しかし真選組もバカだな、過激派攘夷志士がすぐ横にいるってのに、気づきもしねエ。

確かにこんな所にいるとは普通思わないものな。いるとしたならば
穩健派のヅラくらいだ。

フン、と鼻をならす。

策はちゃんと用意してある。

將軍を亡き者にする…いや、この江戸を血の海にすること。

俺にとって、あの人がこの世界の秩序だった。

だがこの国はその秩序を覆した。ただの無能な輩が足掻き、ただの
助長にすぎない。

「いい天気だな」

將軍は高杉に話しかけた。少し焦ったが、冷静を装う。

「…そうですね。特に今日は一段と空が澄んでいる」

「江戸の空はいいものだ」

だからなんだ、という気持ちになる。

国を捨てた將軍が、何戯言を…。

冷やかな目で將軍を見る。

「江戸は…すっかり変わってしまったな。だが、大切なことは何も変わっていない。人は、昔から変わっていない」

「…それは、將軍あなたの独断と偏見ですよね」

「そうかもしれぬな。江戸城も、今となればただのお飾りにすぎぬゆえ、ある意味がない」

「壊せばいいんじゃないですか」

高杉の言葉に、將軍は少し寂しそうな顔を見せた。

「余には壊せまい。こんな世の中でも笑って過ごしている城下の者達がいるなら、それはちゃんと意味があるからだ。だから今日はそれを見に来たのだ」

高杉は間髪入れた後、また口を開いた。

「笑っている者と、そうでない者がいたら？」

「……」

「この世界を憎んでる者がいたら？」

政治家達は己を信ずる者なりってだから仲悪いのね（後書き）

神：最近「KAMUI」更新してないと思ったら、作者テスト期間
だつてさ

阿：へえ、どうでもいいわ。ずっとどこどこい

賽は投げられた

「この世界を憎んでる者がいたら？」

高杉の質問付けに、言葉が詰まる。

「それは…どういう考え方が」

もう一度聞き直す。

「分かりませんが、いや、分かるハズありませんよね」

少し微笑する。

呆れたように、何も求めてないように。

「もうすぐだな」

順番は迫っている。

そして、高杉が將軍の首を討ち落とす。

「…もし、この世界を憎んでる者がいるなら、余はその者に何ができると思つか」

「さあな」

少し將軍を横目で見た高杉の目は、獲物を捕らえ食らいつく寸前の獣のようだった。

「賽は投げられた」

『それではいよいよ最終レースです！！このレースには將軍様も参加されています！！』

グランドのボルテージが上がる。

最終レースの走者達が並ぶ。

『それでは位置について…よい、スタートオオオオ！！』

銃声が鳴り、いよいよ最終レースが始まった。

「新ハイ、眼鏡見つけたアルか？」

「見つかんねーよ！どうしてくれんだよ、神楽ちゃん！！」

「仕方ないアル。あん時はイラッとしてたネ」

新八と神楽はまだ眼鏡を探していた。
銀時の結果など、気にもしなかったが…。

「あ」

「どうしたネ」

「そっぴや銀さん…結果どうだったんだろ」

「あ！すっかり忘れてたアル！どうせなんかやらかしてドベとか強制退場とかじゃないアルか」

「はアゝ、優勝はないかな…」

諦めたかのように新八はいう。

「また巻き返せばいいネ」

「巻き返すつても、もう残りの種目少ないし」

「じゃあ銀ちゃん、アネゴに殺されるアルナ」

新八はもう一度ため息をついた。

「んっ」

この時、神楽は何かの気配を感じた。

「どうしたの？」

神楽の表情が一変した。

「何か…嫌な匂いがするアル…」

「え？」

どういう状況なのか、まったく理解がつかめなかった。

「新八…」

神楽はある方向を指差した。震えながら、ゆっくりと。

「アレは…！」

新八は目を疑った。

目を大きく見開いて、呆然と突っ立っているだけだ。

「ウソだろ？なんで…あの人が…」

その時、初めて気がついた。

神楽が指差した先はブランドの方。そして新八が目にした光景は、
将軍の後ろを走っている…高杉晋助だった。

これに銀さんは気付いてるのか？

何か恐ろしい計画が始まる予兆なのかもしれない。

銀さんがあそこにいるハズなのに、どうして？

新八は目をこすった。

「銀ちゃんがないネ」

「銀さん…」

新八ははっとした。

「真選組は！？確か護衛で今日いたハズ！」

「でもマヨもサドもゴリラもないネ、どこにも見当たらないヨ」

「おかしいな…」

どうして偶然にも…。

銀さん…

トイレトペーパーは大切に使いましょう

「学校のトイレって、どーにも行く気しねーんだよな。トイレの花子さんなんてそんなジンクス、とうの昔に朽ちてんだよ」

ブツブツ愚痴りながらトイレの順番を待つ銀時。公衆トイレがないため、隣の小学校のトイレを使用することになっていたのだ。競技の途中、銀時はトイレに抜け出した。

「あゝ、やべエなコレ。もう入り口まで来そうだよ！何やってんだよ今トイレに入ってる奴！！早くしろオ！！小便ならどつか草村でやればいいだろ！？え、じゃあ何、みんなウンコかコノヤロー！！」

「ウンコに決まってるだろーが！！じゃなかったら立ちションなりするわ！！」

「んっ」

銀時の苛立ち気味の口調に返した人物、それは土方だった。

「なんででめーがいんだよ、護衛は？あん？職務放棄かコノヤロー」

「便所だ。交代してもらったんだよ、ってかお前には関係ねーだろ！！」

ふーん、と銀時は呟く。しかしこの行列。小説では分からないがざっと10人くらい並んでいる。皆、大便なのだ。

土方は銀時の数人前に並んでいる。

「やべーな、俺の肛門括約筋が後どんくらい持ってくれるか…」

銀時は腹を押さえている。

「いや、なんかスミマセンねエー！俺、昨日食ったキノコが当たったんですね、もう少しかかりますー！スミマセンねエー！」

「ふざけんなゴリラあああー！」

「桂はどうしたんだよオオオオー！」

トイレに入ってるのは近藤だった。

それに蹴りを入れる二人。

「なんだ！二人も並んだのかー！！いや待てー！！もう出るからー！」

「てめーのせいでどれだけ俺の肛門括約筋が悲鳴を上げてんだと思うんだよ」

「すまん、万事屋！」

「近藤さん…桂は」

「すまん、トシ！」

この二人はもう限界だった。

ドゴッ

「あああああああああああ！……！！！」

レースは降板を向かえていた。

「アイツ…何するつもりアルか？」

「分からない…」

高杉はレースが始まってから、コレと言って不審な行動はしていない。

普通に関門をこなして行っている。

新八と神楽は高杉を目で追っている。

「……」

神楽はある”匂い”を感じ取った。この匂いは…

「どうしたの、神楽ちゃん」

「感じるネ…夜兎の匂い…」

「えっ!？」

神楽は辺りをキョロキョロ見渡した。

束縛したいならまず自分から

夜兎の匂い…。

その言葉でどよめく二人。

一体コレは…

「神威!!」

「!!」

現れたのは神威と阿伏兔だった。

神威はニコニコ顔でこっちにやって来る。

「なんでここにいるネ」

突然の登場に、動揺を隠せない。

「ちょっと用事でね。ヘー、アンタもコレに参加してるとは。あ、だから銀髪のお兄さんいたんだ」

「銀さんと…会ってるんですか!？」

「うん、この競技でね。アレ、気づかなんだ?」

「…」

コレには黙る二人。

「お前……高杉アイツとなんか企んでるアルか？」

真剣な表情で神楽はいう。

「企んではないけど…。一つ忠告しておこうと思って。高杉を止めるのは無理なんじゃないかな」

「え？どーいう…」

神威の言ったことにイマイチ理解できない様子。

「銀ちゃんは？銀ちゃんに会ってるならどこに……」

「トイレに行つたよ」

「ええええええ!!?」

と、トイレええええ！？

あ、トイレだったからいいのね！！

「団長、そろそろ行くぞ」

阿伏兔に連れられて、神威は去って行った。

「あー、えらい目にあつた」

「てめー長いんだよ。おかげでもらうとこだったわ」

「うつせーなア、タバコでもふかしたかったんだろ？」

小学校のトイレから銀時と土方が帰ってきた。

「んあつ」

銀時は気づいた。

高杉の姿…。

「アイツは高杉晋助…！なんで奴がここに…」

土方は目を丸くしていた。

「どーいうこつた」

銀時は険しい顔をする。なんで今まで気付かなかったのか、どこにいたのか、そんなことが脳裏に浮かんだが、あれだけ大勢の人が集まれば気付かないこともある。

「くそつ、何か陰謀でもあるに違いないな。事がでかくなる前に万事屋はツレを連れて逃げる。他の人も真選組が誘導するから従え」

土方は舌打ちをした後、タバコを吐き捨てた。

「だーれがためーの言うことなんざ聞くかよ。お前らが逃げろ」

はア！？と、土方は反対する。それでも銀時は土方の言うことをきかない。

「高杉の狙いは將軍の首だろ。將軍の護衛に付いてる奴らなんて、高杉にとっちゃ虫ケラ同然だろ」

つまり相手にしないってことか、と土方は固唾を呑んだ。高杉は侮れない、それ程危険な過激攘夷志士だ。

「てめー、どうするつもりだ」

「とりあえず新八や神樂たち連れて逃げる。生憎、俺ア將軍の首とかどーでもいいんで。将ちゃんには悪いけど」

「将ちゃんって誰!？」

その時だった。

高杉がちょうど第三関門の一問一答ゲームにさしかかった時、まるでレースを覆い隠すように、高杉派の攘夷志士と思われる大勢の連中が立ちはだかった。奴らは皆、ジャージ姿に刀を構えている。

「最初から紛れていやがったか」

土方もジャージ姿でありながら帯刀していた刀を鞘から抜く。四面楚歌、周り一体は銀時達を囲む。

「俺が引きつけてる間に逃げろ」

「逃げるってどこにだ?多串君」

「誰が多串だ」

二人は背中を預け、立っている。もちろん銀時は刀を常備していな

いため、手持ちではない。

「うおおおおお!!」

攘夷志士の一人が斬りかかってきた。

ガキイイイン

土方はそれを止めた。

倒れた志士の刀を銀時は握り、そして構える。

「死んでもしらねーよ」

土方は銀時に少し微笑した。

「上等だ」

銀時も鼻で笑って返した。

故人に久闊を叙する

「どうなってるんだ、一体」

「パニックネ」

新八と神楽は、押し寄せる攘夷志士の波に呑み込まれそうだった。

「新ハイ！！アレ！」

神楽が指を指した方を見る。

「！！」

その光景は驚異だった。

將軍の背後で刀を向け、不気味な笑みを浮かべる高杉がいた。

ここからでは少し距離がある。高杉らの周りには武市、また子、万斉が囲んでいた。安易に近づけない。

「そうか、ぬしは…過激派攘夷志士の高杉晋助であつたか」

「運が悪かったな、將軍様」

それ以上將軍は何も話さなかった。

「何か…残しておきたい辞世の句でもあるか？」

「……」

「何もないのなら、ここでシメーだぜ」

冷静で低く、淡々とした口調で高杉は言う。

このままでは確実に將軍は殺されてしまう…。緊迫とした空氣が漂う。

新八と神樂は遠目で見てるしかなかった。

「何やってんでイ、てめーらガキはとつと逃げろイ」

「沖田さん!!」

後ろから声がし、振り向くと刀を構えている沖田がいた。

「でもっ!!」

神樂が抵抗するが

「足手まといはいらない、早く逃げろ!!退路はこっちだ」

沖田は二人をぐいっと押しやった。

「なんなんだ、この数!斬っても斬っても増えてやる!!細胞分裂か、アメーバかコノヤロー!!」

「黙れ、集中力が切れる」銀時と土方は前に前に進もうと背中を預

けながら少しずつ進んでいた。

「オイ、アレっ……」

土方は何かに気付いた。それは將軍の後ろから刀を向けている高杉だ。

「なんで奴がここに」

銀時も息を呑む。

すると高杉は銀時達に気付いた。

「銀時、やっぱりてめーも参加してたんだな」

「刀を下ろせ、高杉」

と言つて素直にきくような奴ではない。

「フン、相変わらずお前のやってることが分かんねーな。幕府の肩を持つなんざ」

銀時は黙る。

「世が変わるに連れ、てめーも自己の弱みに漬け込まれのうのうと生きてるとは、軟弱になつたな銀時」

「…悪かつたな」

「万事屋、もつてめーは引け」

荒い息をしながら土方はいう。

ガチャ

「「！」「」

銀時は刀を高杉に向けた。

「…ほう、俺に刃を向けるとは」

「幕府の犬は犬らしく、主人の言うことをきいたらどうだ？」

銀時は土方を見る。

つまり將軍を助け出せ、ということ。

「そんなことくらい分かってる。てめーにだけは借り作りたくねーんだ」

「わあーってるよ、とつとと行け、多串君」

「てめっ、次会った時覚えてろよ」

そう吐き捨てると、土方は銀時に気を取られている高杉から將軍を奪い、他の攘夷志士が追う中走って行った。

「大切な人質が逃げちまったな。まア、アレはただの見せしめに過ぎねエ」

ククツと不気味に笑う。

「銀時、てめーの護りたいモンはなんだ？幕府か？將軍か？時代の波に洗脳されて、昔の志は消えちまったか」

銀時はニイツと笑む。

「昔の志？なんだよソレ、幕府に將軍？いつ俺が幕府に忠誠心誓ったよ」

銀時の持つ刀に光沢が走る。

「高杉、前にも言ったよなア。次会った時は仲間もクソも関係ねエつて。てめーが俺の護りてエモン壊すなら、俺はてめーをぶった斬る」

サバサバした奴は賢く見えるけど、実際はそうでもない

「たたつ斬るだア？フン、刃をなくしたてめーが」

しかし銀時は、構わず高杉の言葉を遮った。

「てめーが曲がっちまったら、たたつ斬る」

「曲がる？くく、俺アあの頃からなんも変わってねエ。だから少し自尊心もあらア」

高杉は下ろした刀を銀時に向けた。

「曲がったのはてめーだろ。戦争が終わったと思いきや、どこかに消えて。てめーの考えることは昔から分かんねエ」

「あ？だから何だよ、人の内心が気になるのか？そんなに俺のこと好きだったの？やめてよ、俺アそんな趣味これっぽっちもねエ」

何くだらないことを言ってるんだ、と高杉は微笑する。一対一の対峙、緊迫の空気が流れる。

「…てめーはあの時、何を見た？何を感じた？あの至近距離で」

「…」

言葉…いや、胸が詰まった。

あの時、それは二人の恩師、松陽が暗殺された日である。その時、松陽の側にいたのは幼い銀時だった。

目の前で殺された松陽を見ていたのだ。気付いた時には血まみれになり、横たわっている松陽の姿。寺子屋に火をつけられ煙と炎が渦を巻く。

あの時の記憶が、今でも銀時の中には鮮明に覚えていた。

「てめーは松陽先生が幕府によって殺されたことが、悔しくないのか？憎くないのか？それとも、もとからどうでもよかったのか」

「…バカだなア。悔しいに決まってるだろ、憎いに決まってるだろ、普通はな。だがいくら憎んだって、もう先生はいねーんだよ。もう先生は死んでるんだよ。いい加減気づけよ」

「くく、平和ボケは怖エな。そんなんでてめーは満足してんのか。白夜叉と恐れられてきたてめーが、こんな浅い気持ちで満足してんのか」

銀時は真っ直ぐな目で、高杉を見つめる。

「満足さ。これが俺の気概だ」

「気概ねエ」

高杉は鼻で笑う。昔から馬が合わない銀時を相手に、慣れた様子で話す高杉。

「竹馬の仲っていうけど俺とお前、今まで意見が合ったことがねエ。いつも俺の意見を聞き流すか否定するかだったが、一度だけ合ったことがある。銀時、覚えてるか？」

銀時は黙る。

脳裏では覚えているが、口には出したくないようだ。

「攘夷戦争に参加したことだ」

「……」

「松陽先生が殺されてすぐ、てめーは姿を消した。草村の方へ駆けていったと聞いて、俺とツラは必死でてめーを探した。夜が明けるまで。で、草村ん中で寝ているてめーを見つけた出した。涙で顔がぐしょぐしょだったのを覚えている」

高杉は間髪入れた後、もう一度聞いた。

「銀時、てめーは何で攘夷戦争に参加した？」

悩んだら相対化して見てみる

「どうして参加した？」

「あん時はノリとタイミングだ。周り見て空気読んだの」

銀時は少し不機嫌に頭を掻く。

「大体よオ、んな昔の事なんてもうどーでもいいじゃねエか」

「どーでもいい？だったら死んでいった仲間はどうなるんだ？それ
もどうでもいい事なのか？」

周りは一層騒がしくなっている。もう運動会どころではない。

「ただためーは、もう仲間が死ぬのが嫌で、背負いたくないから逃げたんじゃないのか？」

その時だった。

「銀さん！！」

「銀ちゃん！！」

乱闘から切り抜けてきた新八と神楽が銀時に寄る。

「フン、銀時、それが今の護るもんか。いずれそいつらも昔みたい
に捨てちまうんじゃないか」

「…前にヅラにも言ったが、こいつらがいねーと歩いててもつまんねーんだよ。もう何度も捨てちまおうか、捨てたら楽か、考えたけどよ、こいつら見てるとどうもそーいう気になれねエ。家族とはほど遠いが、俺はそう思ってる」

「銀さん…」

家族ねエ…と高杉は嘲笑う。

「…前に確かヅラが言ってたな、銀時はこの世界を一番憎んでおかしくないと、それに耐えてると。確かにそうだな。目の前で松陽先生の最期を見たんだから。いや、もつと別な理由か？後から聞いた話だが、ためーが松陽先生のところに来る大分前、ためーの両親は松陽先生の思想と同じで幕府の命で殺されたらしいな」

「えっ…」

初めて耳にした話に、新八と神楽は動揺を隠せない。

「ちよっ、どーいうことですか？銀さん」

新八は心配そうに銀時を見つめる。

「そんな昔、覚えてねーよ」

「恩師の仇を討つのが弟子の役目じゃねーのか？親の仇を討つのが子の役目じゃねーのか？ためーの松陽先生や両親に対する畏敬の念はこれっぽっちでいいか」

「仇ならとっくに返したぜ」

「？」

銀時は少し得意気に笑ってみせる。

「俺が、こうして笑って生きてることだ。貧窮だろうが、何だろうが。周りが笑ってりゃ俺アそれでいい。周りが幸せなら、俺アそれでいい」

「それがてめーの仇討ちってワケか、随分甘ったれた仇討ちだな」

「好きに解釈すりゃあいいさ」

銀時と高杉の対峙は長々と続いた。

価値観も大切

銀時と高杉が対峙している中、乱闘は続いていた。一向に終わりの見えないこの騒動に、流石の神威も焦燥に駆られていた。

「こいつア驚いたな。ほとんどが高杉派の加勢だなんて、奴も奴で色々考えてんだ」

「すつとこどつこい、お前さん、何で地球にお呼ばれたのか、そこからの主旨が分かってねーのか？そこまで考えなしのバ力だったか？」

押しゆく軍勢を逆らうように神威と阿伏兔は歩いていた。

どこへ向かうのか、いや、とにかくこの乱闘の中心に高杉はいるはずだと考え、ただひたすらだ。

「高杉には色々世話になったしね、これで最後かもしれないんだ。だからしっかりこの目に焼き付けておきたいんだ」

そう言った神威の目は炯々としていた。

「何言つてんだよ、俺達の仕事を忘れたか？」

「…忘れてなんかいないよ」

無精に笑う神威。

真の仕事…それは誰も知ってはならない、この物語の結末へと持っていく重要な”鍵”なのだ。

「買った喧嘩は必ず売る。それは宇宙だろうが地球だろうが、どこでも同じなんだよ。倍の値段で売れるか、半額で売れるか、そこがミソなんだけどね」

「ま、とにかくにもまずこの乱闘をどうにかせんとあ」

「無駄に殺しちゃいけないよ、ザコだろうが何だろうが侍なんだから」

「侍だからって、そこ重要なの？」

神威はにっこり頷く。

「…高杉のこと、阿伏兎はどう思う？」

「なんだよ、いきなり。…どうって…人間のクセに気味悪くて、一匹狼ってどこか？俺アそんなに深入りしたくねエ奴だ」

なるほど、と神威はいう。少し黙った後神威は再び口を開いた。

「俺は寂しそうな奴だと思っよ。それから身を護る為に獣を纏っている」

「真逆だな」

「高杉^{ヤツ}を見てると微かに白夜叉を思い出すんだ。彼は分かりやすかったけど、高杉も、何かすっぱり大切なものが心から抜けたように感じる」

白夜叉の抜けた大切なものは”荷物”だった。仲間を護り護られ、

それを失うと戦場にいた白夜叉に戻ってしまう。だが結局彼は、何かを背負い込まずにはいられない性格だった。

高杉の場合はそれとは違う。仲間よりも大切な何かを無くして、ただ己の不満を満たすため他人を顧みず、気に食わぬなら殺しもいとわないさまよう獣である。

「そこに違いなんて、本当はないかもしれないのにね……」

すべてを悟ったようにぼそりと呟く神威。

誰かに情けをかけられたら別の人にその情けをかける（前書き）

お待たせしました*。

誰かに情けをかけられたら別の人にその情けをかける

辺り一面は血の海と化していた。

「…もうシメーにしようや、高杉」

溜め息を尽きながら銀時は少し落ち着いた声でいう。

「いい加減気付よ、もう松陽先生はいねエ。俺達の戦は終わったんだよ」

高杉はフンと鼻をならす。

「…新八、神楽、さがってるよ」

「いやです」

「!？」

予想もしてない返答に、銀時は焦る。

「何言ってるんだよ、とつととさがってる」

「いやアル。さっきから色々聞いてたら何アルか、仇討ちとか攘夷戦争とか意味分らないアル」

「神楽ちゃんの言うとおりです。僕らは間に割って出ることは無理ですけど、でも銀さんにとって護り護られるものはなんですか？僕らじゃないんですか？自分だけ背負い込むなんてズルいですよ、僕

らにも分けてくださいよ」

新八と神楽は銀時の前に出た。

「銀時、女子供死なせるつもりか？」

余裕を見せる高杉に、銀時は戸惑う。

「…死なせるつもりはねエよ」

「銀ちゃん、難しい事は分からないアル。でも、銀ちゃんはひとりじゃないネ。家族だっているアル」

「僕らがいます」

「おめーら…」

「それに、銀ちゃんがなくなったら酢昆布が食べれなくなるネ。銀ちゃん（捨て駒）は必要アル」

納得したように神楽は頷く。

「捨て駒って何だよ、せめて手駒にしろよ」

「駒でいいのかよアンタ」

新八の軽いツッコミ。

「無駄なお喋りはその辺にしろって…銀時、そろそろ断ち切るか。この長い長い因縁を」

高杉は再び銀時に刀を向ける。

「俺の言ってること分かんなかったのか？」

「言っただけだ、俺アただ壊すだけだ。この黒い獣の呻きがやむまでな」

瞳孔の開いた快々たる瞳が、その強い意志を表していた。高杉の足の俊敏さは既に銀時の目の前まで迫っていた。そして懷から太刀を入れようとする。

「なっ……」

高杉の素早さに目を追う銀時ら。

新八と神楽が出る幕は今の状況ではなさそうだ。

キィィィン

かろうじて銀時は高杉の太刀を止める。

ぐぐつと筋肉が、骨がきしみ合う。

鎧を削る音が、響く。

「チッ……」

銀時は高杉の剣筋をよけ、後ろに周り込む。そして上から高杉に振り上げるが、余裕の笑みを浮かべる高杉は簡単に受け止める。

またギシギシときしみ合う音が体内から喚いている。

「…こんなもんか？銀時。白夜叉と呼ばれたお前が、随分落ちぶれたもんだな。くく、そんなんじゃ昔のテメーが笑うぞ」

「笑って結構だよ、俺だって昔の自分^{テメー}に向かって大声で笑えるね。この大バカ者が！って正座させちゃうからね」

「フン、根拠は」

「根拠？根拠なんかねーよ、普通に考えてみる。斬って斬って斬りまくっていた自分は、ただの大バカ者だって」

「むやみに斬りまくっていたのはテメーの意志じゃねーのか？」

「え…」

言葉に行き詰まった。

意志？

意志じゃなかったらなんなんだ。意志だったら、どうしてなんだ。

銀時が考えているその瞬間、高杉は動いていた。

「こうして考えてみると分からなくなるものだな。俺がテメーを襲っている今も、意志なのかなんのか分からねー」

銀時は高杉の太刀を止める。

銀時は恐怖を感じていたが、ある確信を得ていた。

取り調べからの恋バナからの別れ話

「副長、もう一般市民は安全な所に誘導しました!」

「そうか、じゃあ後は攘夷浪士共と真選組の隊士か…」

ひとりの隊士が土方に報告する。

「いや、まだ残ってる市民がいますぜ」

向こうから沖田が駆けて来た。

「どういうことだ」

「万事屋の旦那と2人のガキでさア」

「!!!何!?あの野郎、どこ行きやがったんだ」

くわえてた煙草を地面に吐き落とし、土方は辺りを見回す。
だが、この騒動の中、3人を捜すのは無理があった。

「…高杉と絡んでる可能性、ありますね」

沖田が静かにいう。

「この騒動も鬼兵隊絡みだしな…洗う必要があるな」

ドガァァン

ドガァアン

「「!!」」

向こうから激しい爆発音がした。

「あれは…」

土方は目を見開いた。

そう、爆弾といえは…

「桂!」

穩健派攘夷志士、桂小太郎が驚くことに他の仲間を連れ、真選組に加勢していたのだ。

土方達は目を疑った。

「…どーいう…」

「桂アア!!」

沖田は桂に向かって叫ぶ。それに気づいた桂はこちらへ切り抜けて来た。

「…桂、てめー、どーいうことだ? 今更罪滅ぼしか?」

桂は持っていた爆弾を懷にしまった。

「フン、罪滅ぼしなどではない。これは俺自ら下した名案だ。国を憂う気持ちに変わりはないが…高杉のやり方は氣に食わん。俺達にも高杉を止める理由がある」

「どうしやす、土方さん。俺は構わないですけど、隊士も少ないし」

「…」

土方は少し沈黙した。指名手配の桂が真選組の肩を持つと言っているのだ。色々吟味した末、土方が出した答えは…

「しゃあねエ、癪に障るが…今回ばかりはな」

「決まりだな」

「待て、今から近藤さんと連絡をする。まずそれからだ」

土方は懷から携帯を取り出した。

近藤は土方達とは違う位置で將軍の従者をしていると聞いていた。

「…なかなか出ないな」

結構コールをしていたのだが、出ない。

「この騒動ですぜ？うるさくて着信音が聞こえないんじゃないです」

「かイ」

ああ、なるほどと思ったが先に何かあったら連絡しろと言ったのは近藤の方だ。何か嫌な予感がした。

「近藤さん……」

と、その時近藤の携帯の着信音が鳴った。

ピロリン

ピロリン

土方はまだ携帯をかけっぱなしにしている。
この近くに近藤がいるはずだ…そう悟った。

「電話の発信者はどうやら君みたいだね」

「「「!」」」」

着信音が鳴る携帯を片手に、神威が目の前に立っていた。

「誰だ、てめー」

土方は少し威嚇気味でいう。

「そんな怪訝そうにしないでよ。こっちは拾ってあげたってのにね」

神威はニコニコ顔でひょいと携帯を上げる。

「お前っ、それ…」

いかにも近藤の携帯だった。

「てめー、近藤さんはどうした？」

「近藤さん？もしかしてこの携帯の持ち主？」

「そっだ」

「俺は知らないよ、落ちてあるのを見つけたただだ。感謝してよね」

そう言うのと携帯を土方に投げ渡した。

「じゃあ近藤さんは…」

嫌な汗が噴き出る。

「総悟、俺近藤さん探しに行くから、この場を頼んだ」

「えっ、ちょ、土方さ…」

土方は近藤を探しに乱闘の中へ消えていった。

「どうせまたウンコじゃないんですかイ」

沖田は呟いた。

オケラだって生きてるんだ、友達なんだ？いや、さすがに友達結構です（前書

高杉…不気味ですね。まアなんせ、黒幕的ポジションですから

オケラだって生きてるんだ、友達なんだ？いや、さすがに友達は結構です

銀時のジャージに、血の飛沫が飛ぶ。

ガギイン

ギイン

刃と刃の激しい削り合いが続く。

「銀さん……」

竜虎の衝突を眺める新八と神楽。どうにかして止める策はないのかと考えている余地もない。

「……殺れ」

誰にも聞こえないような声で高杉は仲間に合図を出した。それに銀時は気付いてないようだ。

「新八イ！」

何かに気付いた神楽は叫んだ。

「……」

隙を狙われ、新八は鬼兵隊の攘夷浪士に後ろから鳩尾されてしまった。それに気を取られていた神楽も束の間、後ろから頭を思いっ切り殴られ、さすがの夜兎でも気を失ってしまった。

「……！！」

浪士らに担がれている新八と神楽に気付いた銀時は高杉との交戦を捨て、新八たちに走り寄る。

「てめーらア！そいつらを離……」

高杉に背を向けたのが運の尽きだった。

ズサアアアアッ

「！！」

背部を大きく斬られた。

「ぐあっ……」

背中に激痛が走り、足が不安定になる。

「高杉……、てめエ……」

中腰状態で高杉を睨む銀時。背中から出ている血が、ポタポタと滴り落ちる。

その顔を高杉は嘗めるように見る。
どうやら留めは刺さないようだ。

「そこを、どけエ!!」

浪士に担がれた新八と神楽を追う銀時。だがその足取りはのろく、息は荒く、途中で倒れてしまう。

「晋助様ア、いいんスカ?逃げちゃいましたよ」

また子が心配そうにいう。

「フツ、問題ねエ。刃に毒を塗っておいたんでな、野郎はほかつとけばそのうち死ぬからな」

「ガキ2人は…」

「俺アな、味わってもらいたいんだよ。俺のこの苦しみを」

そう言うが高杉は姿を消した。

最初からそれ(・・・)が目的だったのだ。
人の大切なもんを奪い、この世界が狂乱の渦に吸い込まれれば、なんと美しい世界になるのだろうか…それが高杉の狙い。

「…銀時、結局てめーも分かんねーのな…」

そう呟いた高杉は、行方をくらます。

銀時は少し離れたところで気を失いかけている。

新八…

神楽…

その（・・・）意識は闇へ崩れ落ちてしまった。

遠い日を思い出す。

あの時、仲間と共に刀をとり戦場に立ったこと、戦で仲間をたくさん無駄死にさせたこと、戦が終わって途方に暮れていたところをババアに拾われたこと、そして今の自分があること…。

一つ一つが走馬灯のように駆けていく。

背中側のジャージに、幾度となく流れ染み出る血、もつろつとする中で光は見えなかった。

オケラだって生きてるんだ、友達なんだ？いや、さすがに友達は結構です（後書

銀：…これ、もうすぐ終わるんじゃない？野球で言うなら八回の表が裏だろ

神：いや、こーいうふわふわした状態を作り出すのが奴の特権アル。今私たちが後書きで時間稼いでる間も、いっぱい悪いこと考えてるネ

新：悪いことって何だアアア！…んなこと考えてる暇があるなら勉強しろ！

銀：そう、新八の言うとおりだ。こんな最悪な小説書いてる暇があったら勉強しろ勉強！じゃねーと大人になってから後悔すつぞコノヤロー

神：この小説も私たちがなんとかして完結まで持っていくアル。だから心配しないでいいネ

？…え？

光のない精神とは

何かが烧ける匂いがする。

辺り一面は荒涼で、人の気配を感じない。

ところどころで煙が上がっているのがぼんやりと見える。

空は曇天で覆われ、もうすぐ雨が降りそうな湿った匂いがする。

どこか、懐かしい…いや、けして忘れることのできない場所にいる。

ここは、

”アレ”が降誕した地。

自分の中に佇む”アレ”が、目を覚まそうとしているのか？

見覚えのある鎖が無造作に足下に置かれている。

こいつをだどればいずれ逢える。

逢いたくない、逢いたくない逢いたくない。

だが鎖を手に取り、鎖に導かれるままに歩く。

やっと自分がどのような立場にいるのか悟った。

俺は…

銀時はやっと鎖につながれた”アレ”に辿り着いた。

「…まだいやがったのか、白夜叉」

白夜叉は鎖に首、手足を拘束されていた。

顔は下に向いており、白装束は古い返り血で多少汚れている。

「いい加減俺から出て行けや、俺アこんな凶犬飼った覚えはねエ」

そう吐き捨てる白夜叉はゆっくりと顔を上げ、口を開いた。

「…じゃあ、てめーが引きちぎればいいじゃねエか、この鎖を」

「……」

銀時は自分と同じ顔の白夜叉を見上げる。

「引きちぎったら、逃げるだろ？…もう戦は終わったんだよ。とつと俺から消えてくれってんだ」

そう言い残すと、白夜叉に背を向けた。

その言葉に白夜又は驚いていたが次第に冷静になり、不気味に笑い始めた。

「…くく、てめーが生み出したくせによく言っなア。…鎖を外せ」

「！」

銀時の体が凍りついた。白夜叉の鋭い眼光に身震いしたのだ。ゾクゾクと鳥肌が立つ。

「一度作った感情や狂気は、もう壊すことはできねエ。そして、再び現れる」

ドクンッ

鼓動が大きく鳴った。

その途端に、激しい頭痛が銀時を襲う。

「うつ…」

体は地面に崩れ、ひざまついてしまう。

「ハア、ハア」

息苦しい。

「護るモン護れなかった、てめーの弱さが招いた結果だ。…白夜叉」

いつの間にか入れ代わっていた、いや、最初から”アレ”は自分だったのかもしれない。

—*—*—*—*

「!—!」

ガバッ

銀時が目覚めたのは、見知らぬ場所だった。

「チッ…嫌な夢見たぜ…。…どこだ、ここ…」

目の前は真っ白い天井が広がっている。

「いででっ…」

傷が全身に響く。

「気がついたか」

聞き覚えのある声に顔を向けると、そこにはくわえ煙草で窓辺でたそがれている土方がいた。

「てめーは…」

「お前が倒れてる所を隊士が見つけたんだ。礼はいらねエ」

その時、ガララツと戸が開く音がした。

「土方さん、頼まれた物でさア。アレ、旦那、気づいたんですかイ」

入ってきたのは沖田だった。

銀時は一息落ち着いた後、あることを思い出した。

「そついや新八と神楽は」

ハツとし、起きあがろうとしたが傷が痛む。

「…残念ながらガキ共は知らねー。…こつちも拉致られたんだ、近藤さんを…」

深刻な表情で土方は吐き捨てる。

近藤も同様に鬼兵隊の攘夷浪士共に連れて行かれたのだ。

「高杉の野郎…」

はらわたが煮えくり返る程、銀時は腹立たしく感じた。

「どうやら、目的は皆同じのようだな」

「ヅラ…！」

銀時のベットの前に、桂が座っていた。

「なんだよ、ずっといたのか？」

「ヅラじゃない、桂だ。貴様の齒軋りから何まで見ていたぞ、フツ」

「何がフツだよ！クソむかつくんですけど！！っ！かここに攘夷志士がいんのなんで捕まえないんだよ！！っいでっ」

大声を張り、また傷が痛む。

「…今回はそうできねエ。気に食わねーが、こいつの協力も必要だ」

「銀時、俺も貴様らと同じだ。高杉の連中らに…エリザベスが…」

「エリザベスもオ！？え、嘘だろ？」

「エリザベスが密偵に行っている」

「おいイイイイ！人選考えようぜ！なんであんな目立つオバQにしたんだよ…！」

「エリザベスを愚弄する気か…！」

「愚弄とかそーいうんじゃない」

ハァーっとため息をつく銀時。

「とにかくだ。高杉のアジトを探り出さねーと」

「……そーだな」

男なら考える前に行動

『神威、てめーはここで消えてもらっ』

ガチャ

刃の先を神威の首筋に当てる。

『あん時の借りはとづくに返したし、もう何も気にせずてめーを葬ることができる』

『アンタとは馬が合うと思ってたのに』

『…フン、残念だったな。俺の舟に天人^{てめー}は必要ねエ』

『そう、俺だつてアンタの舟に乗るつもりは端からなかったし、じやあ何、勝手に俺を見切ってたんだ？』

高杉は少し間髪入れた後、口を開いた。

『…だつたらなんだ』

『やっぱりアンタ、面白いね。見たかったなア、アンタの生き様を。それを最後まで見届ける事ができなくて残念』

神威は挑発しているのか、はたまた死ぬ覚悟で話しているのか、

『…だがてめーに一太刀入れたところでくたばるタマじゃねーこと

くらい把握している。ここでためーに斬りかかっても、全くの無意味だ」

神威の表情が少し変わった。

「俺を殺すんじゃないの？」

『殺すさ、必ず』

高杉は不気味に笑う。その姿が、夜空に映える月明かりが一層濃く表していた。

「俺の眼中には天人も幕府もねーからよ」
てめーら

* | * | * | * | *

「確か……高杉^{やつ}はあんなことを言っていたね」

やつと騒乱が落ちていた広場は閑散としていて、その隅に二人、神威と阿伏兔がいた。

「言っていたが、いねーじゃねエか、すつとこどつこい。怖じ氣づいて尻尾巻いて逃げちまつたんじゃねーか」

「奴は怖じ氣づいてなんかいないよ。今回姿を消したのも、俺らを殺す策の一つなんじゃないの？ま、俺が奴だったらこの騒乱で一騎打ちにしちゃうけどね」

神威はケラケラと嘲るかのごとく笑う。

「まア賢いってこったね。餌を撒いといて獲物が食いつくまで待つ。そしてその獲物を狙う獲物も食いついてくる、言わば漁夫の利ってやつかね」

「じゃあその獲物は俺ってことか」

「高杉の野郎は餌として銀髪のだんとこのガキ二人と真選組局長を連れ去ったらしいなア」

「…妹まで手を出すとは、本当に卑怯な奴だな」

砂をいじりながら神威は言った。

「団長、オメーさん…いつの間にシスコンになった？」

「ぶっ殺すよ、阿伏兔」

相変わらずの笑顔。

この場所に銀時も真選組もいない。

その場所に、何の目的もない神威は提案をそろそろ実行しようと思意する。

「ねエ阿伏兔、もし自分が最大のピンチに陥った時、目の前で…うーん、そーだなア…、あつ、阿伏兔の彼女が殺されそうになってたらどーする？」

「はア？なんだよ、その質問」

神威の突然の質問に、戸惑う。

「もしもの話だよ」

「…俺はできることなら助けるね。でも無理だったらその現実を受け止めるさ」

「なるほどね…、引き気味なんだ」

その時、少し神威の表情が曇った。

人は誰でも内心に猛獣を飼っているから、くれぐれも逃がさないように

真選組屯所――

銀時らが最初にいた場所は大江戸総合病院だった。銀時の毒も引いたので医者の上承を得てすぐに退院したのだ。

「てめー、傷は大丈夫なのか」

普段の着流しを着ている銀時の胸元から少し包帯が見え、土方は気になった。

「俺の心配よりゴリラの心配をしたらどうだ？」

少しにやけた銀時に腹立ち、前言撤回したい気分になった。

確かに、近藤も新八も神楽も心配だ。だが焦燥に駆られている奴はいなかった。絶対に生きていると、確信していた。

「流石に近藤さんがいなくなると、寂しいものね」

「！？アレ！？なんでてめーが……！！」

当たり前のように呟いたのはお妙だった。

「なんでって、一応新八の姉ちゃんだし当事者だし」

普通に話す銀時。

「まア姐さんもいた方が心強いんじゃないんですかイ？」

沖田も続ける。

「だいたいこの甲斐性なしが弱いから新ちゃんと神楽ちゃんが連れ去られるんです。まアあのストーカーゴリラはどうでもいいですけど」

「…なんかすみません。ザックリ刺された気分なんですけど」

「何にせよ、早く高杉の居場所を察知しねーと、安否確認は無理ですぜ。本当に桂のオバQが役に立つのか、皆目でさア」

「オバQじゃない、エリザベスだ！」

つかさず桂がつっこむ。

「アラ、髪の毛とってもサラサラですね。何のシャンプー使ってるんですか？」

お妙は桂のうざったい長髪を撫でた。

「え、あ、俺は椿です」

「まア、ようこそ日本へってヤツですか。ラックスおすすめですよ」

「どーでもいい！また風呂の回になるぞ！..」

土方が場の收拾を鎮めようと試みる。

「今は高杉だろーが。もしかしたらてめーの弟…大変なことになってるかもしれねーぞ」

少し脅し気味に土方はお妙に向かっている。

「それは心配だわ。でもきつと大丈夫よ、だって近藤さんがいるもの。いざとなれば近藤さん（ゴリラ）を盾に逃げればいいんだから」

みがわり

ニコニコ顔でいう。

「なんか送り仮名凄いいことになってんだけど。え、ゴリラ死ぬの？」

恐ろしいものでも見てるかの表情の銀時が聞く。

「わーったよ！もういい！てめーは喋んな！！話の路線がズレてしやーねエ！！」

「土方さんも黙ったらどーですか？」

「お前はいちいちうるさいんだよ、総悟！！」

「総一郎君の言うとおりだね、総合的に見て土方が一番うるさい！」

銀時はビシッと土方に指を指した。

「オメーも黙ってるイ！！」

唾が出るくらいのツッコミ。と、その時だった。

「静かにせんかアアア！！！！」

本当の事に終止符を打ったのは桂だった。

桂は腕を組み、難しい表情で眉間にシワをよせ、座っていた。

いつもこつち側の桂が、真面目なのに辺りは静かになった。

「武士たるもの瞬時に冷静な身となり事をすぐに改めるのがしきたりであるっ」

「ッラ…」

「桂の言つとおりだ」

ピピピッ

何かの機械音が鳴った。小さな機具を桂は懷から取り出す。

「エリザベスからだ！」

その知らせは、高杉の居場所だった。

第九十九話 神出鬼没（前書き）

途中からまた銀さんの夢です

第九十九話 神出鬼没

ピピピツと機械音が小さく鳴っている。

その機具はエリザベスの手にあり、赤く点滅していた。エリザベスは機具の赤い点滅を眺めている。

『よいかエリザベス。高杉に気付かれぬよう気をつけてな。奴の在処にたどり着いたらこの盗聴器を仕掛けて来てほしい』

そう桂に頼まれた盗聴器を、エリザベスが今いる軒下から気付かれないように飾り物の花へ投げた。見事に小さな盗聴器は花びらに付いた。

江戸から少し離れた、閑散とした田舎町に高杉の在処があった。エリザベスはバレないよう、江戸の市街へ走って駆けていった。

だが、その姿を奴は見ていた。

その夜は寝苦しかった。

—*—*—*—*

あの夢の続きがあるかのように、また同じ景色の中に銀時はいた。

だが鎖は無くなっていた。
臭い焼けるような匂い、誰もいない荒涼、厚い雲に覆われ、景色一
体は鉛色そのものだった。

自分、銀時はいつもの着流しで佇んでいた。

またかよ…

この風景は攘夷戦争と全くといっていいほど似ている。この景色は、
自分の中の”闇”なのだ。

嫌というほど見てきたこの景色。いつか自分の心は狂ってこいつに
蝕まれるんじゃないかと恐れていた。

どこにいくか宛もないのに、足が勝手に動く。

次第にそれに近づいていた。

「！」

それを見て目を大きく開いた。

「新八…神楽」

2人は地面に横たわり、うつすら目を開けていたが、瞳に光はない。

「オイ！しっかりしろ！！」

銀時は2人の体を抱きかかえ、揺するが反応はない。その時だった。

「…銀さん……」

新八の口元が緩んだ。

「銀さん…、いつも一緒にいますけど…、まだこんなところで足が止まってしまうんですね。…どうして…僕ら…護ってくれなかったんですか？」

「え……」

新八の目に光はない。体もぐったりしている。

「銀ちゃん…、何で？…私たち銀ちゃん信じてたのに……」

神楽も続ける。

2人とも意識はあるとは言えない。逆に話しかけても、何も答えてくれないさそうだ。

銀時は何も言えない。

「銀さん…疲れたでしょ？…いいですよ、僕らを捨てても」

「何言ってるんだよ、意味分かんねーよ」

「ずっと…我慢してきたんじゃないアルか？…いいネ、銀ちゃん…」

「私たち背負うの…もういいネ」

言葉弱々しく、途切れ途切れだが、その言葉一つ一つが銀時の心に冷たいナイフが刺さるように突き詰めてくる。

「バカいつてんじゃねーよ…」

次第に自分の気持ちさえ薄れていく。疑心がわいてくる。こいつらを護れなかった自分が、こいつらを背負うなんて、もう無理なのか？どうして今までこいつらを背負ってきたのか？

当たり前のようで当たり前じゃない日常茶飯事を送って来たのだから、ますます不安と恐怖が芽生えてくる。

これは誰かが自分に見せている悪い夢だ、俺は見せられてるんだ、と心の中でお経を唱えるかのように繰り返し呟く。

その時、新八と神楽はゆらっと立ち上がった。

「もういいって言ってるネ」

「銀さんには…幻滅しましたよ」

「は？何言って…」

銀時の言葉は遮られてしまう。

「お前が護れるものなんてないアル…、白夜叉」

「荷物を背負う資格もありませんよ…、白夜叉」

「お前ら！」

銀時が2人に触れようとしたが、ふっと交わされた。

「白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉白夜叉」

永遠と続く”白夜叉”。

この2人が夢にまで出てきて言いたかったのは「白夜叉」と呼ぶことだったのか？わからない。

こいつ（・・・）を断ち切らないといけない。

そう心に誓った――…。

第百話 慟哭なる者、アディオース（前書き）

銀新神：祝！１００話記念！！チキチキ反省＆懺悔大会イイイイ！！

パフパフドンドン

新：いやゝ、目出度く「KAMUI」も１００話行きましたかア。
あつと言つ間でしたね本当

神：完結詐欺にR指定越え、パクリ疑惑など色々な不祥事があつたアルな

新：いや、ないから！完結詐欺はあつたけどパクリはないから！！

神：パクリっていうより、他の作家さんを名指ししてたアル。感想とかで嬉しいとか言ってたけど実際にはいい迷惑だ、なんて思ってるネ

新：もつとないから多分それ！いや絶対に！！そんな腹黒くはないです！！いい作家さん達です！！懂れてます！！

神：いやア、ぱつつあん、人つてのは怖い生き物アルぜ。ああ、人生は辛いよう

新：何寅さんみたいになってるの？あ、BGMいりませんか……つてアレ？銀さん？さつきからなんで黙ってんスか？

銀：てめーら空気読めよ。誰も前書きなんざ読まねーよ！はい、つーことで後書きで仕切り直します！じゃ、本編へどうぞ

第百話 慟哭なる者、アディオース

「神威、なぜデミーがここにいるか解ってるか？」

「ん？何で？」

「知ったかぶりか……」

ここは高杉の在処となる邸宅だ。

そう、エリザベスが盗聴器を仕組んだ場所である。

そこに、神威と阿伏兔は高杉に呼ばれたのだ。

「……誰かに尾行されたとかはあったか」

「ないよ、何かいやらしいことでも？」

「フン、まあてめーみたいなアホについてくようなアホがいるわけねーよな……」

高杉は悠長に煙管をくわえ、ゆったりと壁にもたれかかり、足を伸ばしている。

「どうしてかな、その余裕っぷりは。さては何かゲットしたの？それとも誰かを殺したの？」

フン、と鼻を鳴らすと高杉は立ち上がった。
そのまま襖を開ける。

「話は終わり？」

キョトンとした表情の神威に目をやった。

「…終わりじゃねーよ。こっからが本題だ」

高杉の眼球は、ギロツと神威に向く。別に神威はそれに畏怖嫌厭の情を起こさせることはなく、普段通りだった。

「今回のこの騒ぎ、俺はアンタにつくのか、銀髪の侍につくのか、迷ってるんだ。今までの借りは返したし、どっちにつくかは俺次第」

「何戯言抜かしやがる。てめーがつくとかつかれるとか、そんなの関係ねエよ。言っただろ？俺の舟に天人はいらねーって。状況を察しやがれ」

高杉は立ったまま壁にもたれ掛かっている。

一服すると、また話し続ける。

「俺ア壊すだけなんだよ、この世界を。この江戸を更地に変え、俺の中の獣の呻きが止むまで、ただ壊し続ける」

「別にさ、地球が滅ぼうが江戸が滅ぼうが俺にはどーでもいいんだけど。あっそう、頑張ってねくらいしか言えないよ。天人を排除してどうするの？地球人を殺してどうするの？それでアンタの魂は満足かい？」

「…神威、てめーもなんだかんだ言って平和主義なんだな」

神威は高杉の言葉で少し黙った。殺すが夜兎の宿命…。血を愛でる

あまり、自分を見失い、家族にまで手をかけた自分。そんなんでは真の強さは得られない、護り護られるものがあつて初めて強くなれる。けして平和とは言えないが、夜兎の絶滅阻止も含めてだが、余計な血は流さないようにしているのが自分の考えだ。これを曲げる必要はないと思っている。

「さすが破壊王と恐れられるわけだ。でも、今まで何か壊した？」

「土台にひびをはやしたただけだ。これが耐えきれなくなった時、すべて崩れ落ちる」

「たとえじゃわかりにくいなア」

「…簡単だ。一角ずつ壊していけばいい」

「…？」

「根絶やしにするだけのことだ」

高杉は気味悪く笑う。

根絶やし？一体何を…ああ、アレか。そう感づいたが、そこまで驚かない。

「神威、てめーだけは捨て置いてやらア。今すぐに地球から出ていけ。そして二度と来るな。春雨の命でもだ」

「俺だけは見逃してくれるってこと？」

「…てめーの舟にいた時はドアホと踊れて楽しかったぜ」

「ふーん」

高杉の言いなりになるのは御免だった。近々江戸は戦争になる。天人も含めた大規模な戦争…。つまり高杉一派が火種の、倒幕戦争に…。

第百話 慟哭なる者、アディオース（後書き）

銀新神：祝！１００話記念！！チキチキ反省＆懺悔大会イイイイ！！

新：はい！ということで記念すべき１００話の本編はいかがでしたか？…ん、神楽ちゃん？

神：ふざけるな１００話アアア！…なんでヒロインの私が１００話に出てないネ！なんで神威アルか！！しかも何アルか！１００話なのに全くインパクトないネ！もっかいやり直すアル！！

新：確かに…最近僕ら出番ありませんよね、忘れられてんじゃないかな

銀：うつせーんだよ、てめーら。俺なんか最近夢ん中ばっかだぞ。鬱になりかけてるんだぞ！

神：夢ん中だけでも上等ネ

新：一応僕ら出てましたけど…

銀：それに高杉の野郎ばっかおいしいとこ持っていきやがって。全部の章でム力つくんだよ！

神：三章のネタバレも奴のせいアルな！

銀：ちきしょう、こうなったら打倒高杉！チキチキ殺し合い大会の始まりだアアア！！

新：何鬭争心燃やしてんだ！！

銀神：壊すだけだ、あの包帯野郎を

新：ちよつと！路線外れてる！！反省&懺悔大会はどう收拾つけん
スカ！！

どこ行くんですかちよつと！！…アレ、これまた僕一人が反省して
ない？

えっ、ちよつ…

えゝえゝえゝえゝ！？

第一百一話 落としても何度だって拾え

「まったく、団長の野郎はどーこ行っちゃったんだか。もう高杉は部屋から出てってるし、戻ってきてもいい頃だろ。だいたいこの家広いんだよ、すつとこどっこい」

高杉の家に一緒にいた阿伏兔が神威を捜していた。

「俺だって最近出番ねーけど暇じゃねんだよ」

そうブツブツ言っていると、さっきまでいた廊下とはガラリと変わった雰囲気、薄暗く埃っぽい、まるで牢獄のような場所に出た。

「アレ、いつの間にか変なところに来ちゃった。つーかどんだけ広いんだよこの家」

引き返そうとした時だった。

「ん？」

人の気配がしたから、いくつか連なっている牢屋に目をやった。

「アレは万事屋んこの…」

中で横たわっている新八と神楽に気付く。

「高杉の奴だな、まったく、ひでーことするなア」

前にも春雨の船で捕らわれて牢の中に入れられていることを思い出す。

「餌ってわけか…」

この場をどう退けていいのか正直焦る阿伏兔。

「オイ、意識あるか？」

鉄格子を揺すってみるが、何も反応がない。

まるで屍のようだった。とりあえず団長を呼ぶか、と思い、その場を引き返した。

しばらくして、阿伏兔は神威を連れて戻って来た。

「へエ、こんな所に」

漠然とする空気の中、神威はしゃがみ込んだ。

「息はあるみたいだ」

「…どうするよ、団長」

この選択肢をどう切り抜けるのか、考え難い。

「…もう高杉と同じ船にはいないんだ。だから俺も高杉に用はない」

ドガァァアアン

鉄格子が崩れた。
神威が壊したのだ。

「団長…」

「阿伏兔は眼鏡君をよろしく」

「あ、ああ」

神威はよいしょ、と神楽を背負った。意識はあるが目を覚まさない。

「…今度は護つてあげないと。一応兄だし、コイツにとっては…銀髪のお兄さんや眼鏡君の方がいいかもしれない。だって俺はその家族には入れないから。捨てるのは簡単だけど、再び拾うのは難しいから」

団長…、ともう一度呟く阿伏兔。神楽を背負う神威はまさに”兄”だった。夜兔の血を愛でる兄とその血を嫌う妹が再び兄妹に戻ったのだ。

「格好いいぜ、兄ちゃん」

新八を背負った阿伏兔が優しく言った。
入れるさ、ちゃんと家族なんだから。

「面構えが変わった」

薄々とそう感じていた。神威は以前のような傍若無人にただ闘いを

求める性情ではなくなった。

誰のおかげだって？

一話から読み直しな、すつとこどっこい。

二人を抱える神威と阿伏兔の前に、怪しい影が動いた。
強烈な殺気を感じる。

「…随分と勝手なことしてくれるな、神威」

ペタペタとゆっくり近づく足音の主は

「高杉…」

煙管をふかし、不気味に笑みを浮かべ、眼光がギロリと鋭く光っていた。

第一百一話 落としても何度だって拾え（後書き）

銀：おーい、みんなよく聞け。今日は100話突破を記念して特別編をやるぞオ

新：いや、あの、銀さん…もう101話終わっちゃいましたけど

神：今回もあつけないアルな

銀：え、終わったの？

新：はい

銀：マジかよ！てつきり俺ア出られるかと思つてずっとスタンバつてたのによオ！！

神：銀ちゃん最近出まくりネ。少しは控えろつて意味があるアル

新：もう特別編じゃなくて、ただのグダグダ雑談ですよ、このスタンス

神：作者特有の前書き後書きで時間を稼ぐ秘策アル！だから喋つてたら本編にプラス一分されるネ。描写を書くのが苦手な作者にオススメネ

銀：知らねーよ、作者の事情なんて！俺達の事情を知れコノヤロー！

桂：俺を出せ！カツラップを歌わせろ！

銀：JOY！！何いけしゃーしゃーと出て来てんだよ！
ジョーイ

新：桂さん！！

桂：俺だつて色々言いたいことは山ほどある。貴様らも度々この場で愚痴っているが、正直ズルいと思う。だからこの場を借りて俺も愚痴らせてもらう

銀：オイ！いつから愚痴談義になつたんだよ！！

神：ツラあ、愚痴なら私に任せるヨロシ

桂：何、リーダーにも愚痴があるのか！じゃあこのマイクに向かって全力でシャウトしてもらおうではないか！

新：アレえ！？何でいつの間にマイクが…

神：じゃあ行くネ！

最近ピン子がテレビに出てこないネ！！

新：どーでもいい！死ぬほど！！

桂：この間美容室に行ったら髪巻かれた上にエクステ付けられた！！

新：完全に女子と間違えられてるよね！！

神：まだあるアルか？エクツラ

新：合体した！いや、どーでもいい！！

桂：この間美容室行ったらお気に入りの受付さんが代わっていた！！

新：おめーは美容室のことしかねーのかよ！！

銀：シャラップううう！！！！

しーん

銀：てめーらしい加減にしろ！！後書きでどんだけ使ったコノヤ
ロー！！

これじゃ永遠に収拾がつかねーだろ！！今てめーらに足りないモン
はなんだ？よく胸に手を当てて考えてみる！

作：大人になれ！！

銀新神桂：てめーが言つなアアア！！

第二百二話 困惑

「随分と勝手なことしてくれるな、神威」

「高杉……」

目の前にいたのは高杉晋助。煙管をふかし、こつちへ歩いてくる。

「銀時んとこのガキを助けてこつちから逃げられると思ってんのか？」

「逃げる？俺が？」

「言ったよな。俺は天人もすべてぶっ壊すと。だがテメーだけは捨て置いてやるとな」

「そんなこと言っただけ？覚えてないや」

驚くわけでもなく、ただこの緊迫とした空氣に身を任せている。

「フン、その馬耳東風の癖、いい加減直したらどうだ」

「……その左目を見せてくれたら直そっかな」

これか、と高杉は自分の左目に巻いてある包帯に手をやった。だがその包帯を取ろうとしない。

「ガキどもは好きにしろ。いずれにせよ、てめーらはここから出ら

れないからな」

そう残すと、再び闇へ消えて行った。

「こっから出られないってどーいうことだろ」

「さアな、要塞かなんかが施されてんじゃねーか？」

二人はとりあえずここから出ることにした。

高杉という蜘蛛の巣に引つかかった、哀れな胡蝶どもが羽を一枚ずつ剥がれ落ち、身だけとなった体を蜘蛛に喰われる。いわゆるこういうことか、と浮かぶ。

「きつと彼らは来るよ、飛んで火に入る夏の虫っていうけど、彼らなら断ち切ってくれるんじゃない？高杉がずっと引きずって来た何かを」

高杉を縛って来た何か、心の内から頑なに捨てようとしなかったその信念、己が信じた証を。

「そうさ、万事屋は…真選組の連中は必ず来る」

「「！」「」」

奥から声がした。

その声の主はだんだんと姿を露わにした。

そう、新八達と同じくここへ連れて行かれた近藤だった。近藤は簡単に自己紹介をした。

「高杉は…以前真選組を根絶やしにする計画を企てていた。きっと今回の件も、俺を殺して真選組もろとも潰す気だ。だが俺は今ちゃんと生きている…」

片腕を抑えながら、おぼつかない足取りで壁にもたれかかった。

「高杉には知れてない？」

「いや…よくわからん」

片腕を負傷しているってことは、きっと必死で抵抗して逃げたんだろ。

「ここを容易に動けないのは確かだ」

さすが真選組局長というところだ。冷静さを保っている。

「腕、大丈夫？」

「これしきの怪我、何の問題もない。お前ら…確か春雨の団員だろ？なんでここに…」

とりあえず三人は目立たないような場所で腰を下ろした。

「新八君とチャイナ娘は起きんのか…」

「薬を打たれてるかもしれねーなア」

阿伏兔は新八の首筋に手を当てた。どうやら脈を計っているようだ。

「そういう知識は俺にゃないんだがな」

近藤は腕を組んで薄く笑う。神威は神楽を見ていた。

「どーした、団長」

「ん？別に何も無いよ」

「今更罪滅ぼしか？」

「どんなタイミングだよ」

近藤はつつこむ。

ああ、この二人は兄妹かと改めて思う。

「俺たちやまた元老うえからの命で地球こゝへやって来たのさ」

「聞いちゃいかんかもしれないが、どんな？」

少し黙る阿伏兔。これを自分で言ってよいのかと目線を神威に移す。

「アンタは過激派攘夷志士の高杉に敵対心があるからいいんだけどね」

それってどういう…と、困惑する近藤。

春雨が一体高杉に対して何をしようとしているか、こいつらは何の用でここにいるのか、まことは一体なんなのか、それがすべて明かされる時だった。刹那、空気が緊迫する。風音も足音も生気も感じない、真空の部屋に閉じ込められた感じさえする。

ゴクリと喉をつたる唾、暑くもないのに滲む汗。

「…敵討ちみたいなモンだよ、俺は殺された弱い奴が悪いと思ってんだけどね。天人だって地球人とおんなじような心があるんだよ。攘夷志士が国を憂うように、天人が戦で死んだ仲間を悔やむようにね」

「そんなことが…」

攘夷戦争は天人達が勝ったことで終焉した。
地球人は天導衆の配下^{あた}に中るようなモンだ。將軍は傀儡のような堅物となっている。

それでも天人は地球人を、侍を憎むのか？

「怒り狂った天人がたくさんいるよ。まアそのほとんどが春雨団員だけど」

「…また、攘夷戦争の火種を切る可能性はいつでもあるってことか？」

「そーいう案も出たけど、その前にやるべきことがあるんだ。それが、俺達の命」

神威の表情が変わった。

「その命が…」

「高杉暗殺」

第百三話　いかにでか（前書き）

お待たせしました！

第百三話　　いかでか

「高杉暗殺だと!？」

思わず大声を出す近藤。すぐに口を抑えた。

「幕府には都合がいいから誰も否定はしないよ」

「もう幕府に知られているのか…」

「ま、將軍なんて傀儡だからね、今の江戸じゃ」

天人に支配されつつある今の江戸。かつて我が国を護らんと旗を上げた侍達も、廃刀令が出された今では無力同然。

それには近藤も心の隅で嘆いていた。どうして人間同士が争わないといけないのか…。

幕府の”汚れ”を担っている真選組。自分達が護ってるものは一体なんだと考えさせられる。

「…銀ちゃん…」

「「「!」」」

神楽の口元が緩んだのを三人は気づいた。

このまま目を覚めますかと思いきや、また緩んだ口元は固く閉じてしまった。

「…こいつら、本当に万事屋を信頼しきっているんだな」

「切っても切れない絆みたいなのがあるんだよ」

「兄妹だって、切りたくても切れない絆ってもんはあるのさ」

優しげに近藤は言う。

「高杉が死のうが真選組には関係ねエ。問題は万事屋だ」

「…銀さんなら、全部…救い取って…くれますよ…きっと…」

「新八君」

「…アイツは、全くの考えなしと…言ってもいいアル…。でも、…
本当に…一番、大切なことを…知ってるネ…」

「チャイナ娘」

二人は意識がもうろうとする中、自力で立ち上がった。

「立ちましょう」

「立つアル！」

力強い二人の言葉に胸がくすぶった。

「銀さん達が来る前に、僕らがやれることをしましょう！」

「いつもオイシイとこ持ってたね。今回はかりは私達がいいト
コ取りするネ!」

「お前ら大丈夫なのか?」

近藤が不安げに二人を見上げる。だが二人は首を縦に、強く頷いた。

「大丈夫です」

「意識しっかりしてるネ」

「よし」

二人の真剣な表情に近藤は安心した。

「それと…僕ら助けてくれてありがとうございます!」

「ありがとうネ」

照れながら神楽は神威の方を向いた。

「礼なら阿伏兔に言ってよ。阿伏兔が見つけたんだ」

「…まったく素直じゃないねエ、すつとこどっこい」

5人は脱出ルート、襲われた時の突撃体勢を練ることにした。
だが、今ここで喋っていたことを、あの男はずっと聞いていた。
怪しげな陰が、刻々と刃を向け始めているのをまだ誰も気づいちゃ
いない…。

第百三話　　いかでか（後書き）

銀：なんか最近俺出番なくなね？

神：気のせいアル

新：そうですよ

銀：いやいやいや、気のせいじゃねーよコレ！完璧にシカトされてるよね！イジメだよコレ！

神：何言ってるアルか！今まで散々出てきてるネ！自分で勝手に有給取ったんじゃないアルか

新：小説に有給取れる制度なんかあったっけ？

銀：有給ならまだマシだ。けどよ、俺の場合もうリストラ候補になっただよ！！この危機をなんとか回避する方法はねーのか！

新神：…ない

——次回、銀時がついにリストラ！！？

銀：…なんか別の小説になっただね？

第百四話 吉本のホンワかってアレ、ジャズだよ

「ご苦労だった、エリザベス」

高杉の居所から万事屋に戻ってきたエリザベスは、仕掛けた盗聴器を繋ぐ機具を桂に渡した。

万事屋にいるのは銀時、桂、土方、沖田の四人である。後エリザベスも。

「つーか、よくそんなに見つからなかったな」

ポンポンとエリザベスを叩く銀時に、フリップで「いたい」と出すエリザベス。

「ずっと気になってたんだが…、そのエリザベスって生物、桂のペツトか？」

煙草の煙を吐き捨て、襖にもたれ掛かっている土方が尋ねた。

「ペツトじゃない、エリザベスだ」

「ちげーよ、エリザベスはな、宇宙最悪と呼ばれる変態ステファンだ」

「ステファンじゃない、エリザベスだ！」

「違いますぜ。オバケのQ太郎でさア」

「オバQじゃない、エリザベスだ！！」

その瞬間、その場は静まり返った。
そう、足りないのだ。

いつもならここでピリオドを打つのは新八だった。だが今はいない。
一緒になつてボケたり悪態をついたりする神楽もない。

「どうした、らしくねーなア。やっぱりガキがいねーとモチベーシ
ョン上がらねーか？」

寂しそうな表情を浮かべる銀時を察した土方が少し意地悪く微笑し
た。

「うるせーよ。てめーこそゴリラがいなくて寂しいんじゃないの？」

「俺ア別に…」

「二人とも素直じゃねーですねィ。寂しいって正直に言っちゃえば
いいじゃん？」

「「言うか!」「」

銀時と土方は見事にハモリ、お互い顔を見合わせ顰めっ面をし、す
ぐ背ける。

「シンクロ率ヤバイじゃないですか」

にたつと嫌らしく笑む沖田にうるせえっと吐く土方。

「さて、行くか」

桂が腰を上げた。

新八、神楽、近藤さんが待っている。

「言つとくが桂、てめエ…この件が済んだら……」

土方は言葉に行き詰まった。この件が済んだら、てめエを必ずしよっぴくからな、と言おうと思った。

「なんだ？」

桂が振り返る。

間髪入れた後、口を開いた。

「…いや、なんでもねエ」

沖田も立ち上がった。

だが、銀時はソファに座ったまま、動こうとしなかった。

「どうした、銀時」

「なんでもねエ」

不安だった。

また、護れないことがあったらどうしようか。

そんな風に自分を責め続けていた。

「まだ、チャンスはあるはずだ」

「旦那、大丈夫でさア。一度取りこぼしちまったんなら、また何度でもすくえばいいんでさア」

ここにいる奴らは、みんな分かっていた。

人は誰だって、一度や二度……たくさん失敗してしまう。完璧な人なんていないに決まっている。

護り抜けなかったら、また護ればいい。

自分を責めることなんてない。自分がそうだ、と思った道を行けばいい。銀時はゆっくりと立ち上がった。

あの日見た夢は、本当に大切なものは何か、改めて分からせてくれた。

白夜叉なんて、もうとっくの前から、自分の武士道を決めた時から、もういなかった。

第百五話 漁夫の利（前書き）

さかのぼります。

第十二話のことです。

第百五話 漁夫の利

『神威、何かにやけてるな。いいことでもあったか？』

『いいこと？常に俺は笑顔を絶やさないよ、常時殺気立ってるからね』

今から遡ること数ヶ月前、あの事件の時。

春雨の戦艦で、神威と高杉は偶然鉢合わせしたのだ。

『これ』

神威が胸ポケットから血のような真っ赤な液体の入った小瓶を取り出した。

『…”赤憶郷”か』

『銀河系から離れた辺境の星で採れる草の液を搾った薬だよ。貴重だから効き目も凄いんだ。一度使ったら…そうだなア、治らないかも』

変わらず笑顔を絶やさない神威。

『記憶捏造兵器とも言われる薬をよく持ってるもんだ。だが、真の記憶を呼び覚ましたら薬の効果は消える作用だろ』

『偽りの記憶は消えるけど、本当に存在したモノだったら…』

『消えないね』

戦艦の中での重みのある空気。高杉がふっと鼻を鳴らした。

『てめーが、銀時の何を知っている？フン、奴をてめーなりに解釈するのは勝手だがな。まアせいぜい気をつけるこつた、白夜叉にはな』

そう言うたスタスタと歩いていった。

”白夜叉”という二つ名は知っていた。攘夷戦争後期の英雄——と。

”白夜叉”は存在する——

口が更に横に歪んだが、今となれば別のものだった。

”赤憶郷”を使って得る益は”操り”からの”独裁”だ。まさに漁夫の利……。

「武市先輩、正直……今回のことで晋助様が一体何を考えてるか分からないっス……」

高杉の邸宅の廊下で立ち往生しているのはまた子と武市だった。

「大江戸青少年健全育成法に関わる重大なことでしょう、大方」

「ないスよ、そんな法案！ていうか質問に答えて欲しいっス」

「打倒、幕府！壊滅、日本！藤岡弘、！」

「いや最後の藤岡弘、はいらないっスよね！？」

鬼兵隊といっても、銀魂らしからぬボケる時はボケる。ボケないのは高杉くらいだ。

「晋助様の狙いは…一体なんなんスカね。最近口先ばかりで…」

「口先ばかり気にしてはダメですよ。彼を信じて付いてきたんですから、今度も彼を信じましょう」

「先輩…」

少しカッコ良くキメる武市だが、また子は再び険しい表情に変える。

「とにかく晋助様の指示は必ずこなすっス。先輩も署名署名言っていないでちゃんとすることやってくださいっスね」

グルグルと短銃を回しながら、また子はその場を後にした。武市もまた子とは反対方向へ歩いていった。

「行っただか」

「大丈夫ネ」

その死角の影に、神楽、新八、近藤、神威、阿伏兔は潜んでいた。近藤が確認した後、足音を立てず目指すは高杉の所へと歩んでいた。

第百五話 漁夫の利（後書き）

銀：あー、もう世間は夏休みかア。早エな、つい最近まで正月じゃなかったか？

新：最近時間の流れがハンパなく早い気がします

神：お前ら何ジジ臭い事言ってるアルか！夏休みと言えぱやっぱり海にスイカにかき氷ネ！！

銀：ビールに枝豆！

神：船越英一郎早い火サス！

新：いや、最後の夏に関係ないじゃん！！

銀：新八に眼鏡！

新：アンタはうるさいわアアア！！

銀：わあーったよ、要はアレだろ、夏休みに関して時間稼ぎしろと作者のむちゃぶりだろ

新：いや…そーじゃないと思うんですけど

銀：じゃあ何だよ

神：本当に作者は人使いが荒いアルナ。だからみんなから嫌われてるネ

新：それはさすがに可愛いそうだなー！だいたいこのコーナーを設けたのも、僕ら万事屋が好きだからに決まってるでしょ？この小説のタイトルは「KAMUI」だけど、ちゃんと僕らのことを忘れないように…そんな意味が込められてると思いますけど

銀神：…（照）

新：意外に可愛げあるな！

銀：しゃーねえな、そこまで言われちゃったんだからよ、悪い気はしねえ

神：そうアルナ、次もいい気分でこのコーナーを盛り上げていくネ！！

第百六話 人の役に立つとは

「しかし…こんな町外れに集落があるたア、江戸も広いですねイ」

銀時、桂、土方、沖田、エリザベスは新八達を助けるべく、高杉の在処へと向かっていた。

「のどかな…」

ピーヒョロロと、銀時は葉を鳴らした。相変わらず呑気な奴め、と桂は銀時を脇目に覗いた。

「武州を思い出すな」

「意外にセンチメンタルなんですな、土方さん」

にたつと嫌みに笑う沖田に舌打ちをする土方。

「俺達の育った所も、こーいう風に田んぼのあぜ道が並ぶ田舎だったな」

桂が銀時の方を向く。

「え、俺に言ってるの？ いや、知らねーなア」

「貴様ア…」

わざとらしく言う銀時に沖田は質問した。

「そーいや、旦那って…どこ出身なんですかイ？」

「え…」

沖田の質問に答え難い銀時の様子を桂はすぐに察していた。当たり前だ。こいつを昔から知ってるのは多分…俺と高杉くらいだ、と。銀時は自分が身よりのない捨て子だったから、どこで生まれたとかは全く覚えていない。いろんな場所を飄々と生きていた？いや違う。自分は戦場にずっといた、そこから松陽先生と運命的な出会いをする。

「なんか…聞いちゃいけねーことでしたか」

桂は口を開こうとしたが、銀時の方が早かった。

「…覚えてねーなア、物心がついた時には…もうかぶき町で万事屋開いてた」

「どんだけ物心つくの遅いんだよ！！てめーに青春時代はなかったのかよ！！」

土方がつっこむ。

少し場に笑いが起こる。

「攘夷戦争に参加してたんじゃないのかよ！」

「攘夷戦争の話はやめておこう…」

桂が遮る。別に語られても銀時は何とも思わないが、今なお攘夷志

士と指名手配されている桂なのでその話をするとなんか癪に障る。

「ん…」

桂はあることに気づいた。一瞬眉間にシワを寄せた。

「…なんで真選組の貴様らが、銀時が攘夷戦争に参加していた事を知っておるのだ？」

「え…」

あれ、ちよつと待てよと銀時は考えた。

あの事件…確かヅラも関わってたよな？まア途中参加のようなもんだったが…。

あの事件とは第一章の事である。

「か、桂君…。君…一章に出てなかったっけ」

「確か…あの時に居合わせていやしたよねイ、爆弾持って」

桂は一瞬虚空を見ていた後、銀時達の方を見た。

「…ああ、あれか」

グッジョブのサイン。

と同時に罵声を浴びられる。

「あれか、じゃねエ！！てめーは今まで何を見てたんだ！アホ！電波！」

「重罪かけるぞこのバカ！」

蹴りやらパンチやらジャスタウェイやら、のどかな田舎町に響き渡る桂の雄叫びと銀時達の罵声は、景色に異物だった。

一旦場を落ち着かせる。エリザベスがフリップをあげた。

「あそこの家です」

「何？」

エリザベスが指した方向に目を向ける。

そこにあつたのは広々とした庭に、大きな邸宅。そこらの道場よりも、何倍もの敷地を有している。

「あそこに高杉が……」

息を呑む一行。

「見つかる前に作戦を立てておこつ」

桂はいった。

「プランBで」

銀時が適当に流した。

「まだ何も言っていない！人の話はちゃんと聞け」

はいはいとこれまた適当に流す銀時。

桂の作戦には乗りたくない土方と沖田だったが、有数の攘夷浪士を掌握する力があるのは確かだ。ここは頭脳派でもある土方も食いしばった。

とりあえず決まった作戦は二手に別れること。

たった4人で高杉に立ち向かうのは危険だと考え、新八達の助けを先決とした。

土方と沖田は裏口から、銀時と桂は表口からの侵入だ。

「高杉とやり合うことは考えるな。くれぐれも気をつけてな」

「分かってる」

そう言うのと、4人は二手に別れた。それぞれの健闘を祈った。

「そついえば銀時」

2人になった時、桂は不意に銀時に話しかけた。

「あ？」

「あの事件の時…確か赤憶郷という薬を入れられたらしいな」

「…知らねーよ」

「しらばつくれるな。俺もその薬に関しては調べた事がある。銀時、

気をつけろよ。あの薬に解薬剤などない。記憶捏造兵器とも読んでいいだろう。だが、捏造された事柄はなくなっただとしても、貴様の奥底に眠る獣を呼び覚ます作用は残っている。その獣はなんせ、自分で生み出したものだからな」

「何が言いてーんだよ」

頭を掻く銀時。

「自我を、己を見失うなよ、銀時」

「…わぁーってるよ」

第一百七話 引き金（前書き）

最初に…

私は世良公則さんの
宿無しが好きです

第一百七話 引き金

また子と武市がいなくなった後、新八達は見つからぬように行動していた。高杉連中を潰すのではない。一刻も早く、ここから逃げるのだ。

「相手に尻を向けてただ逃げるのはつまらないア、連中を潰す方向に変えない？」

ぼそつと神威は呟く。

「すまないな、君達の目的は…高杉を…だったけど、こんなことになってしまった」

もし、ガキ2人がいなかったら方向は変わっていたかもしれない。だが、ガキがいる以上…配慮するところは配慮してもらいたい、と近藤は考えていた。

「…じゃあ話は早い」

ニコツと笑う神威。皆一様に驚いた。

「危ないタイミングになったら、俺が引きつけ役になる」

「お前…」

「やれやれ、また団長の悪い癖が始まったア」

隣で肩を回す阿伏兔。

「待つアル。だったら私も神威と同じ意見ネ。そのタイミングになったらお前ら足手まといアル。私に任せるヨロシ」

「神楽ちゃん！」

思わず声を上げてしまった。

「場を慎めヨ、新八」

「ごめんなさい…」

神楽に注意されて屈辱的だったことより、神楽を心配する気持ちの方が大きかった。

「足手まといはアンタだよ？」

神威が神楽の方を見る。神楽はぷくつと膨れっ面を見せる。

「銀髪のお兄さんの所で少しは強くなったの？いや、でも俺が見る限りそうは感じないな。ガキは一瞬でお陀仏だよ」

カッチーンときた。

「んだとオ！？この戦闘オタク！！」

「ちよっ、静かに！」

いきなり始まった兄妹喧嘩を止める新八。

しかし、この2人を止めることは不可能に近い。

「オイ、やめとけやめとけ。奴ら止めるんならいつこの命と腕一本犠牲にならア」

阿伏兔が新八を宥める。

「でも誰かに見つかったら…」

「オイ！そこで何をしている！！怪しい奴らめ！！」

「「「！！」」」

誰かの声に近藤、新八、阿伏兔は気づいた。
そこには一人の浪士が立っていた。

げっ、早々に気づかれた！！

焦燥に駆られる新八。

慌てふためいても遅い。

「アンタらのせいで気づかれちゃったよ！！」

「オイ！怪しい奴らめ！！…ふごオっ！」

神威の強力なパンチが浪士にクリーンヒットした。実はこのパンチ、本来は神楽に向けられ交わされたものだった。

「あり？」

無様に鼻血を垂れ流して倒れた浪士に気づいた神威。

「あり？じゃねーよ！気づかれたんだって！！」

「だから私言つたアル。新八、場を慎めって」

「それじゃねエ！！アンタらの喧嘩が引き金だよ！！」

「ひきがね？ひきがねってあの Tonight Tonight
Tonight Tonight 今夜こそオマエを落としてみせ
ーる」ってヤツアルか」

「ちげーよ！それは銃爪ひきがね！！なんで昔の曲覚えてんだよ！！」

「世良公則は永遠の引き金アルヨ」

「何もつまかねーんだよ！意味分かんねーよ！！」

新八はため息をついた。見つかるのも時間の問題だ。

「む！！怪しい奴らめ！！」

「げっ！」

今度来たのは大勢の浪士だった。手には刀を構えている。

「タイミングってこれか」

なるほどな、と感心する近藤。

「何呑気なこと言ってますか近藤さん！早く逃げますよ！！」

「あっちにも！」

「げっ！」

挟み撃ちにされた。

「新八、さっきからげっが多いネ。慎めヨ」

「うるせーよ！！」

この窮地、一体どうやって切り抜くのか！？

第一百七話 引き金（後書き）

土：もう27時間TVの時期か…。こないだまで紅白じゃなかったか？

近：時間の流れは早いなァ。気づけば…もう三十路のオッサンじやん！！

土：去年の紅白は嵐とゲゲゲの女房が司会だったな。嵐なんかメンバー全員司会とかあればなかったな

近：嵐とかんなチャラついた連中知らん。どっちかって言うと俺アあっちゃんがイイ

土：AKBかよ。あの軍団も正直どこがイイのか分かんねーな

近：俺達も真選組なんてイモい名前やめてSSGとかどう？SSG48とか！

沖：じゃあセンターは俺でさァ

近：総悟！いや、お前にあっちゃんポジションは渡さん！

沖：俺は正直、AKBとかチャラついた連中どうでもいいでさァ

土：じゃあ話に乗ってくんなよ！！てかこのコーナー、万事屋達進行じゃねーのか？

沖：後書きの後書きがありますァ

ねーよ!!

第百八話 強行突破（前書き）

お待たせしました！

いつも読んでくださってる方々、本当にありがとうございます。

第百八話 強行突破

「ここどこですかねー」

土方と沖田は牢屋が並ぶ、一口に気味が悪い空間にいた。

「高杉の野郎も趣味が分かんねーな。家にこんな牢屋を作って…一体何がしてーんだ」

その牢屋は近藤達がいた場所だった。

「おーい、土方さん、来てくだせエ」

沖田が何かを見つけたようだ。手を挙げ、土方を呼ぶ。

「なんか見つけたか？」

「これ見なせエ。誰かが強行突破かなんかして鉄格子がへし曲がってまさア」

「本当だ」

誰かが、と言って大体予想はつく。

「土方さん、こりゃ…」

「まったく、面倒な奴らだ」

そして安堵。

あいつらは無事だ、と。

「どうしやす？もう近藤さん達は自力で逃げ出したんでさア。ここは闇雲に捜すより、とっととトンズラしやせん？」

「どんだけ面倒くさがりなんだよ!!」

まア確かに、総悟の言うとおりただ闇雲に捜すより外で待ってた方が…とも考えたが、アレ？と何か引っかった。

「オイ総悟。お前さっきどっから来たか覚えてるか？」

「はア？何言つてんですかイ。こんな所で方向オンチになるたア、土方さん、そろそろ脳みそ腐敗してきてません？」

「腐ってんのはてめーだろ？」

キレ気味に土方はいう。

「仕方ないですねイ。俺について来なせエ」

癪に障るが方向に迷ってしまった以上、沖田に従うしかなかった。

「…あり？」

突然、沖田が立ち止まった。

「どうした？」

「あ、こっちか」

「？」

土方の問いにも応えず、また歩き出す。
廊下の角にあたる度に少し躊躇しがちに曲がる。

「ん、こっちか」

沖田の言動に少し不安感を持つ。

あれ？

こいつもしかして…

「あり、戻って来ちまった、テヘフ（＾―＾）」

「テヘじゃねーよ！！おめーも方向分かんなくなってるじゃねーか！！しかも顔文字使うとは、てめーの方が脳みそ腐ってるア！」

「読者に表現が伝わりやすいようにわざわざ配慮してやったんでさア
（ノ・”・）ノ」

「ちゃぶ台ここにねーだろ！！使い難エ！！」

「現代の携帯は怖エでさア」

そんな携帯やら顔文字やらの談義をしている場合ではない。

「こっから容易に動けないのは事実、総悟、勝手な行動するなよ」

だが、さすが沖田。

「って総悟オオオオ!!」

沖田は違う廊下へ行ってしまった。

「てめっ、勝手に動いてんじゃねエ!」

ぐつと肩をつかみ、沖田を引き寄せる。

「さっきから声が大きいですが、土方さん」

「…チツ」

ごもつともだ、と思い土方はその場に座り込む。だが、土方は様子が気になった。

「…変じゃねーか？さっきからどうも人気がしねエ」

「確かに、まるでここにいるの俺達だけのようですよ。絶好のチャンスだ、ここで用を足すか」

「おいイイ！いくらなんでもここで小便はねーだろ！？例え敵である高杉の家でもだ」

沖田は更ににやける。

「よくあるじゃないですかイ。ム力つく野郎の家の前に犬のウンコ置いてくとか。ベタですけど、これが結構ききまさア」

「てめー、ウンコもする気か」

「いいえ、土方さんのウンコの方が臭いでさア」

「いいや、総悟の方が確実に臭い」

牢屋の前で汚い雑談になってしまったが、土方はふと人気を感じた。

「どうしやした、土方さん。やっとウンコする気になりやしたか」

「しっ」

急いで沖田の口を止める。

誰か、俺達の他にここにいる…

そう悟った。

一人…いや二人か？

大勢ではないのは確かだ。

向こうの影で、怪しい二人が何やらもめていた。声があまり聞こえないので土方と沖田は気付かれないように影へ近づいていった。その声は次第に大きくなってくる。

敵であつたら、何か情報が得られるかもしれないと思つたのだ。

「…だからよ、それはやっぱりお前の方がデカいから強みになるつて」

デカイ？

強み？

もしかして武器か何か！？

「いや、俺よりお前の方がデカイ。お前のは…そうだな、スリッパくらいまるまるあるだろ」

スリッパくらい？

スリッパくらいの大きさの武器なのか！？

「ねーよ、そんなにデカかったら切れるだろ！」

切れる？

武器は刃物か！？

「いいから、ここでしろと言っておるのだ。ムカつく野郎の家の前にウンコすると心も体も気持ちいいだろう？」

「気持ちよくねーよ！！最悪な嫌がらせだろ！やったことあんの？誰にも言わねーから俺にだけ教えるよ！」

「貴様、声がデカイぞ！」

「んなのどうでもいいだろ？さっきから人気ひとけねーんだし、最高のしやべり場じゃん」

「仕方ないな。誰にも言うなよ？」

……多串君んちだ」

「だから多串って誰だアアアア！」

土方の蹴りが入る。

もうお分かりであろう、この二人は銀時と桂である…。

「なんで旦那方がここにいるんでイ？表口から入ったんじゃないんですかイ？」

はア？と銀時は眉を寄せる。

「表口から入るのはてめーらだっただろ？なんだよ、せっかくヅラが立てた作戦台無しじゃんかよオ」

鼻をほじりながら銀時は言う。

さて、どっちの言うことが正しいか迷うアナタは戻って確認してみてください」

「チッ、これじゃあ作戦もてめーの言うように無意味だな。しかも雑談の内容まで同じだとはバカ過ぎにも程があらア」

牢屋のまえで座り込む四人。土方がため息をつく。

「同じじゃねーよ」

「俺達は臭いでしたけど旦那方はデカさでイ」

「これだから端折る奴は嫌いなんだよ、なあ？沖田君」

「まったくでさア」

「このドSコンビ…」

土方の怒りが頂点を越す。

「まア落ち着きたまえ！また別の作戦を考えなければならぬ」

場の鎮静したのはいつもボケてばかりの桂だった。

「なんか、ヅラって高杉が絡むとボケキャラからシリアスキャラに変わんのな」

「ヅラじゃない、シリアスキャプテン桂だ」

「キャプテンいらなくね？」

銀時がつっこむ。

「…他に作戦はあるのか、桂」

険しい顔をした土方が尋ねる。

「色々浮かぶが、さっきから俺と銀時はここを旋回しているようだな。どうやら方向に迷ったらしい」

「……」

第百九話 地デジ完全移行！！

窮地に陥った新八一行。

両側から挟み撃ちにされ、四面楚歌だ。

「どうしましょう、こっちには武器はありませんよ！！」

慌てる新八に落ち着けと宥める近藤。

「こんなの、チョロいもんだよ。俺達が引きつけてる間、アンタ達は逃げな」

「神威…」

戦闘態勢に入る神威と阿伏兔。それをしばらく見つめた後、近藤は頷いた。

「すまない」

その一言で、全員聞き入れたかのように把握する。近藤は新八と神楽を強く引っ張った。

ドオオオオン

激しい激突に、襖が突風で吹き飛ばされてきた退路を近藤、新八、神楽は走った。

自分らを捨て身にさらすことに、内心神楽はムカついていた。

自分だって…と思いながらも、齒を食いしばって逃げるのに専念した。

「近藤さん！！僕達、どこに向かって走ってんスカ！？」

「…分からん！」

「はいイイイイ！？」

まさかの回答に驚く新八。だが足はいずこへと無我夢中に走っている。

「大丈夫アル！きっと逃げ切れるネ！！黄泉の国という国へ！！」

「それ死んでる！！」

「人はどこに向かって生きているのか？それは死だヨ」

「ごもつともだけれども！そんな話いらないでしょーが！！」

ひたすら走る三人。

近藤を真ん中に、新八神楽は一步後ろを走る。

「…何この絵ヅラ。万事屋じゃないんだから」

「万事屋ゴリちゃんてのはどうアルか？」

「嫌だよ！んなゴリラが何でも屋をするなんて！！」

「新八くんヒドイ」

そんなやり取りを行ってるうちに、三人はさつきとはまた雰囲気の違い場所に来ていた。

襖が何重にも並んでいる、まるで大奥のような構造の部屋。

あちらこちらに高貴な装飾が施されている。

「ここは…」

新八が息をのむ。

いつの間にか辺りは静かになっていた。

この邸宅から、二度と外へ出られない…そんな不安が頭を過ぎった。

「あつちもこつちも襖だらけネ。切りがつかないから三つに別れるアル」

「ダメだ！単独行動は危険過ぎる」

近藤が止める。

「じゃあどうするネ」

近藤が考え込む。

しばらく黙った後、新八が口を開いた。

「…ここで、待ちますか？」

「待つって…」

一体誰を？

近藤と神楽はそう思ったが、すぐに思い当たった。

「…銀ちゃんアルか？」

近藤も同じだった。

だが、ここへ来る可能性は低い。例え既にここへ来たとしても、だ。おそらく自分達と同様、迷子になっているだろう。

「下手に動くより、いいんじゃないですか？」

襖四面に挟まれ、もうどの襖から入ってきたかは分からない。

「新八君の言うとおり…待つか」

「銀ちゃん、来るアルか？」

「銀さんを信じて待とう」

頷きはしなかったが、嫌だと言う者はいなかった。

第百九話 地デジ完全移行！！（後書き）

銀：デジタル放送完全移行アナログ放送お疲れ様スペシャル！！
ドンドン、パフパフ

新：…え？何ですか、そのスペシャル

神：アナログ放送は終わったアル！それがどうかしたアルか？

銀：てめーら何落ち着いてんだよ。地デジ完全移行ってことはな、俺にとって一大事なことなんだ

新：銀さんにとって一大事？

神：もしかして…銀ちゃんのテレビアルか？

銀：ピンポン、それなんだよ。今日の正午からいきなり青い画面に変わっちまってよ、その後ずっとアナウンスがエンドレスに流れてんの！もう耳障りだから定春に砕けさせたんだよ

新：ちょうど潮時じゃないですか？

神：私も横長のテレビがいいネ！！

銀：うちの家計を考えろー！替えれたらとくに横長のテレビになつてゐるわ！！

新：明日から結野アナが観れなくなるんですよ

銀：はっ！

神：ピン子が観れなくなるネ！！これは一大事アル！

新：買え時ですよ。どうしますか？

銀：金ねーしなア…あ

神：どうしたアルか？

銀：今後の銀魂次第だな

新神：ええええええ！？

第一百十話 怯臆

とある一室――

ここに一人の男が入ってきた。

左目を痛々しく包帯で巻き、煙管を片手に持つ男、高杉である。

長年、考えてきた答えが出たのだ。

自分の中に蠢く獣、

消えないあの時、

仇討ちへの想い、

仲間への想い……

その答えが

納得いく答えが

高杉の中に浮かび上がった。

それは酷く悲しい現実を見せるものだ、と。

自分は何がしてエんだ？

何のために生きている？

自分が見ているものは一体何なんだ？

あの頃から、

何も変わっちゃいねー。

俺の見てるモンは、あの頃から変わっちゃいねー…。

高杉は長ドスの鞘を少し抜いた。
鋭く光る筋を、嘗める。

こんなモンに、俺たちは縛られていたのか。
いや、縛っていたのか。

誰もいないこの部屋に、高杉はただ虚空を見ていた。

俺が見てるモンはただ一つ、

松陽先生だけだ。

匂いがする。

かつてあの日、共に戦い共に血を浴びた匂い。

何かを叫んでいる。

俺の名前ではない。

「ーぱちィー！ーらァ！」

アイツの目には、もうそいつらが映っているのか。

声の主はだんだんと高杉がいる部屋へと近づいてくる。

「新ハイ！！神楽ア！！！」

ガラッ

襖が潔く開いた。

「よオ、銀時。こんなところで会えるなんて奇遇だなア」

「高杉…！」

銀時は驚いていた。
いきなり高杉が出てきたから。目を大きく見開いて、息を切らせている。

「なんでデメーがここに」

「なんでって、ここは俺の家だ。逆にこっちが聞きてーよ」

「新八達はどこだ？」

高杉は微笑した。

「連中ならとつくに逃げ出したぜ。まア、この家から出ることはできねーだろうに」

銀時は腰にある木刀ではなく刀に手をやった。

「フン、剣も腕っ節も、まだまだ現役のようだな」

「余計なお世話だコノヤロー。てめーの面見ると胸クソ悪イんだよ。先に言っとくが仲直りはしねーからな俺ア」

銀時は少しうつむいた後、また高杉を真剣な表情で見た。

「昔は仲間だと思ってたが、今はさらさらねーよ」

「思っでなくて結構。仲直りもだ」

そう言うと思ってた煙管を床に落とした。カランと鈍い音が鳴った。

「てめーと切磋琢磨努めてきた時間も、今となっちゃただの時間の無駄だったようだな」

高杉は自分の刀を抜き始めた。

「てめーが余計な手エかけるから、手こぎ（神威）が消えた」

銀時もグツと刀の柄を握った。

「奴には裏切られた。

俺は孤立無援の

「一匹の獣だからな」

眼光を光らせ大きく見開く。

「孤立無援だア？じゃあてめーを護って死んでった仲間はどつなるんだ？

この世界より

てめーの頭の方が

腐ってやがらア」

その銀時の言葉が合図だったかのように、高杉は銀時に切りかかった。

ガギイイイン

鐔迫り合いが始まる。

ギシギシと互いの刀が削りあう。

「ほオ」

相変わらず我流で滅茶苦茶だと下に見る高杉。

「！」

次の瞬間、高杉の剣は銀時の顔の真横を向いていた。

ドゴオッ

思いつきり何かが壁に叩きつけられる音。

間一髪、高杉の剣は銀時の顔の真横を貫いていた。壁がメリメリと軋んでいる。

ギリギリのところではけた銀時は一気に反撃にかかる。

ズシャアアアア

互いの剣が、互いの肩を貫いた。
血飛沫が飛び交う。

「ぐっ」

少し苦しそうな銀時が、少しでも衝撃を抑えようと高杉の剣を素手で握る。

「どうした？」

てめーの本気はこんなモンじゃねーだろ？」

——鎖ハモウ、千切レタンダヨ——

あの時の夢が
連想された。

『赤憶郷によって、いらん記憶まで蘇ったのか。
気を付けろよ』

銀時
』

桂が銀時に忠告したあの時。

「あああああああああああ！！」

ダメだ、意識が飛んじまう。

自分の危機に直面し、縦横無尽に刀を振り回す銀時。

何がこうしたんだ。

誰がこうしたんだ。

白夜^{アイツ}又は攘夷戦争で生まれ、攘夷戦争で消えたんだ。

ガツと銀時は自分の頭を片腕で抑えた。

攘夷戦争で暴れていた自分が連想される。

目の前の敵を片っ端から斬って斬って斬りまくって何が残った？
敵であるうが、殺すことに躊躇はなかったのか？

「銀時、

てめーは…

ズルいよな。その薬はスゲーよな。過去から目エ背けてても嫌でもその記憶が呼び覚ませれるからな」

もはや限界だった。

「銀時、

てめーは

ここで死ね」

苦しみに耐えられず、しゃがみこんでる銀時に刀を向けた。

第百十一話 岐路の中にも岐はある

「オイ、何してんだ桂」

「いや、別に何もない」

土方と沖田、桂はやつとの思いで四面襖に囲まれた部屋に辿り着いた。

「万事屋の野郎はまだか？」

「さっき厠に行つたつきり帰つて来ないな。やはり道に迷つたか」

銀時はついさつき、厠へ行くと云つた後一人で勝手にどこかへ行ってしまったのだ。

きつと厠ではなく、何かに感づいたのだろう。
そう桂は悟っていた。

「よくもまア単独行動がとれたもんだ。旦那のことだから大丈夫なんじゃないですかイ」

「どっかでもらしてんじゃねーか？」

まさか、と嘲笑う沖田。

「すまぬが…、俺は銀時を探しに行く」

「はア？何言つてんだよ。こんな迷路みてーな所、お前も迷子になるぞ」

そう桂を止めるが、やはり銀時が気になった。何か嫌な予感がする。

「すまん！」

そう言つと桂は銀時が出て行つた襖を開け、走つて行つた。

「あーあ、テロリストが逃げちまつたじゃねーかア土方コノヤロー」

「黙れ。それとこれとは別なんだんよ」

土方は煙草をくわえた。

桂の考えることだ。
大丈夫だろう。

「じゃあ…俺達はこれからどうしやす？ここで佇んでたつて、時間だけが悪戯に流れていくだけでさア」

「分かつてるだろ」

「…何が？」

土方は舌打ちをした。

「悟れよ！！何が？じゃねーよ！」

へいへいと沖田は軽く流した。そして襖を開ける。

「分かってまさア。ここで佇んでたって、俺達らしくありませんもんねィ」

土方はくわえていた煙草を床に落とし、靴で火をもみ消した。

「これが目印だ。この部屋に戻ってこねーようにな……」

そう呟くと、土方と沖田は桂とは反対方向の襖へ出て行った。

「阿伏兔、終わった？」

荒い息を上げる神威が阿伏兔を背中に預け戦闘態勢を保ち続けている。

「ずっとどこつい。俺ア若くねんだ、もう限界が近づいてらア」

同じく阿伏兔も神威以上に息を上げている。

「侍どつても、しょせん地球人。夜兔の力に及ばないのは確かだが……、やっぱり侍。おじさんにはきつちいや」

「ははは、年は取りたくないもんだ」

目の前にあるのは地にひれ伏している大勢の浪士たちだ。その中に神威と阿伏兔が立っている。

「じゃあ俺達も行こうか」

「行くってどこに」

「また銀髪のお兄さんに手柄とられたくないもん」

「ったく…」

やれやれと額に手を当てる阿伏兔。

長年付き合っている上司がこんなだと下はしっかりするもんだ、と最近よく思う。

「高杉のところにも行つて首でも狩つてくかア？」

「首かア…、俺だったら奴の首を狩る前に元老^{うづえ}の首を狩るよ」

そう胸を張って言い張る神威にけつと笑みを浮かべる。

「俺は俺が正しいと思った道へ進んで行くから」

にっと笑みを向ける。

すつとこどっこい、とまた呟いた。

第百十一話 岐路の中にも岐はある（後書き）

神：銀ちゃん、せっかく夏休みに入っただからうちもどっか行こーヨお！

銀：なーに言っただよ。今俺たちはデイズニーランドに来てるじゃねーか。なア？新八

新：……来てねーよ！！何文面だから読者騙せると思っただよ！騙せねーよ！僕らいるし！！

銀：ホラ、次何乗るか？ビッグサンダーマウンテンか？スプラッシュマウンテンか？

新：まだ言っただよ！もう騙せませんよ！！

銀：チツ、だって旅行に行く金なんてうちにはありません！

神：えー、じゃあどうやったら旅行に行けるネ

銀：そうだなア…あつ

新：どうしたんスか？

神：何か思いついたアルか！？

銀：旅行行く前に地デジテレビ買う金貯めねーと

そっちかい！！

第一百十二話 そこは黙って話し合い

「くっ…」

圧倒していた。

高杉の刀身の先が銀時に向けられている。
快々とただ悪戯に刀身が火照っている。
どこからか日の光が漏れているようだ。

これを一突きすれば心臓を貫き死に至らせる。

クククと不気味に笑う高杉の暁光。
それとは反対の銀時。

「高杉よオ、オメーは…ずっと俺を殺したかったのか？」

刀身はすんでのところで止まっている。

「俺がテメーを生かすまいが殺すまいが勝手だろ？…それとも今の状況に瀕して足掻いてるつもりか？」

銀時はへつと口を横に歪ませる。

「…やっぱり黒幕はすげーなア。流石の知恵者だよ、見事だよ、高杉くん」

意味不明な銀時の言動に高杉は少し動揺する。

そしてやけに腹が立つ。昔からの幼なじみのコイツが気に食わないとずっと思っていたことがようやく分かった。

戦を捨て、

仲間も捨て、

牙をなくしたから？

先生を奪ったこの世界にのっのっとしているから？

全部違う。

臆病だから？

違う。

他人の武士道なんて
どうでもいいんだ。

銀時が何を思つて
生きているか、

ツラが何を見て
生きているか、

すべて違う。

「今いいところなんだよ。銀時、口ばつか達者なのも相変わらずだな。…もういいだろ？」

その顔は、どことなく疲れ果てているようだった。

「よくねーよ」

「！」

やっと苦しみが治まった銀時は片腕を上げ、高杉の刀身を掴んだ。
腕に血がつたるが関係ない。

「お前…昔の俺みたいになつてゐるぞ」

ケラケラと笑う銀時。

「臆病だったから今もこうして生きてんだろ？ テメーの武士道があったから自分の正しいと思った道歩いてんだろ？ それでいいんじゃないの？ てめーは俺のこういふところが気に食わなかったんだろ？ 悪かったな、コイツぁ一生直らねェ」

銀時はゆっくり立ち上がった。刀身をもった左手からは流血が止まらない。

「もう苦しくねーのか」

「まったく？ ちょっとむせただけだよ。歳は取りたくねーもんだ」

「フン、よく言っぜ」

高杉は刀を引き抜こうとしたがビクともしない。

そして高杉に刀を向ける。

「前にも言っただよな、俺の護りてエモン傷つけんなら、俺アてめーをぶった斬るつてよオ」

「哀れ高杉」

「！」

ガチャと、背後から刀を向けられる。

「ツラか」

「ツラじゃない、桂だ」

そこに立っていたのは桂だった。

「おっせーよ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だ！まったく、結構深手を負ってるではないか」

銀時と桂はにっと笑った。

第百十三話 昔の思い出は人を成長させる（前書き）

銀：作者殺す！！！！

新：どうしたんですか銀さん！！

第百十三話 昔の思い出は人を成長させる

「あれっ…」

「どうしたネ、新八」

「今…銀さんの声がしたような…」

「万事屋が近くにいいのか？」

「それは…。ただの幻聴かもしれません」

四面襖に囲まれたとある一室に新八、神楽、近藤はいた。

「お前、どんだけ銀ちゃん好きアルか。シスコンの次はホモアルか」

「そんなんじゃないよ！！そしたら今度こそR指定付くぞ！！」

「まアまア、落ち着きたまえ新八くん。もしかしたら本当にこの近くに万事屋がいるかもしれんな」

近藤は新八の肩に優しく手を置いた。

「銀さんはいつも一人で突っ走って一人で何もかも背負いこんじゃうんだ。それで銀さんが…、僕、不安で…」

「大丈夫だ。俺たちは万事屋信じて待ってるんだ。だから…」

「ちょっと待つアル！」

神楽が近藤の言葉を遮った。

「どうしたの？」

「…血の匂いがするネ」

その言葉に二人は驚く。

「この近くアル」

三人は神楽の嗅覚を頼りに、その血の匂いがする方へ走って行った。

「久しぶりだな、高杉」

桂の言葉に、フンと鼻を鳴らし睨む高杉。

「今日は会いたくねー奴とよく会ってもんだ」

「銀時、貴様廁へ行くと言ってなんだその体たらくは」

桂は高杉をまたいで向こうにいる銀時に目をやった。

「うつせーなア、ここの廁はウオシユレットじゃなくて狙撃銃が施されてたんだよ」

「そんなウオシユレットがあるか。そんな物使ったら股間が血まみれになるではないか」

「大丈夫だ。俺のS M A Pは健在だ」

どうでもいい茶番を繰り広げると高杉はつつこむことなく刀を鞘に収めた。

「お前らは相変わらず仲良しだな。今でも攘夷活動しているヅラと何もしてない銀時が、よく話がかみ合うもんだ」

「言っとくけどコイツ、攘夷志士だけど攘夷活動みたいなことはしてねーよ。テロリストの風上にもおけないね」

うんうんと頷く銀時。

「何を言っておる。毎日毎日試行錯誤して倒幕の期日を練っている」

「無理無理、諦める。お前の頭じゃ少なくとも100年はかかるね」

「なんだと！そんなにかかっておれば死んでるではないか！」

「バカだ、本ッ当バカだよコイツ！」

さっきまでのシリアスな空気はどこへいったのやら。

「てめーらは漫才師にでもなったらどうだ？」

そう言つと高杉は襖を開けて、出て行つた。

「ちよつ、待ちやがれ！高杉！！」

二人は高杉を追つていった。

第百十三話 昔の思い出は人を成長させる（後書き）

銀：何が俺のSMAPは健在だアアア！！もう打ち切れ！！そして永遠にこのサイトから消えろ！！

新：あー、あの言動ですか。でも銀さんが言ってるじゃないですか

銀：俺は言ってるエ！！

神：でもご本人様も自分で言ってたアル。大丈夫ネ

銀：何を根拠にだよ！

神：こち亀100回見れば大丈夫、問題ないネ

新：なんでこち亀なんだよ！

銀：どっちかって言うと俺はNARUTOの方が見たい！

新：あーもう黙ればアアアア！！？

第百十四話 初心に戻りなさい（前書き）

お待たせしました！

第百十四話 初心に戻りなさい

畳を歩く音。

ギシギシと木の軋みが体を通じて体感する。

「どこにもいないね」

「もうこの屋敷にや誰もいなかったりしてな」

「だったらもう俺たち用無しじゃん」

神威と阿伏兔がまったく人の気配がない四面襖に囲まれた部屋にいつの間にか来ていた。

「高杉暗殺も元老になんて言い訳すんだよ。もう檻ん中程度じゃ済まねーよ、すつとこどっこい」

「ま、そうなたらまた宜しく頼むよ」

ポンと阿伏兔の肩に手を置いた。

やれやれと思った瞬間、目の前の襖が開いた。

「どういふことっスか」

「晋助殿暗殺とは…これまた残虐な策略ですな、神威殿」

現れたのはまた子と武市だった。
どうやら聞こえたらしい。

ありやりや、聞かれちゃったかと微笑む神威。

「いくら春雨でもこんなこと…許さないっス」

また子は両脇から短銃を取り出した。

「力ずくで止めるしかありませんねエ」

武市も腰にさしてあつた刀を引き抜く。

だが神威達はさっきの乱闘で結構消耗していたし、この場で戦いをする。という気でもなかった。ましてや高杉を暗殺する方針でもない。

「別に俺は高杉を殺そうなんて思っ
てないよ。まアやり合っく
らいはしたいけど」

「どっちなんスか!!」

「だから、暗殺なんてやらないよ。
やるなら正々堂々と真っ向勝負
がいい」

神威はニコニコ笑っている。

「だからどっちなんスか!!」

苛ついてるまた子が神威に銃を向ける。

「ちゃんと話してください、神威殿」

武市は刀を下ろした。

神威は頬に付いていた返り血を手で拭った。

「バレちゃったなら仕方ないか。うん、俺たちが地球^{こく}に来た本来の
目的は元老^{うえ}から言われた高杉暗殺だよ。でも俺は、まだもつたいな
い気がしてね。元老^{うえ}に逆らっちゃうけど俺は高杉を暗殺しない」

もつたいないという言葉にムカツときたまた子だったが、神威の言
ってることには嘘がないと見抜いていた。

「そうっスか。以前、第七師団には世話になっ
たっス。それに免じ

て今回はアンタの言ったこと信じるっス」

そう言うともた子も短銃を下ろした。

「でもなんでここにいますか？」

「…借りを返そうと思ってね。高杉にじゃないよ。ずっと借り作られっぱなしだったから、あの人の護るものを俺が手助けしようと思っただよ」

あの人、

それがまた子たちには分からなかった。
だがだいたいは見当がついていた。

「そうっスか。でも容易にはここから出られないっスよ！」

ニヤリとまた子は微笑した。

「晋助様の狙いはこの地下に埋まっているエネルギーを使ってターミナルを大爆発させることっス。端から將軍なんてどーでもよかつたんスよ」

「ふーん、まア江戸が滅びようが俺には関係ないことだけどね」

「我々の計画を邪魔するってなら、生きて帰すことは無理っスよ」

なるほどね、と感心したのも束の間、いきなり床が小刻みに震えだした。

「始まったようですね」

武市は小さく呟いた。

第百十五話 空は一つ

ガタガタ

床が揺れ始める。血の匂いがすると神楽が言うので、三人はまた別の部屋に来ていた。

そこには神楽の言う通り、血の点滴や襖についた返り血、そして壁には何か衝突したかのような窪みができていた。

「これは…」

息を呑む新八。

「誰かがここで戦ったようだ…。だが死体も何もないってことは、逃げたか移動したか…」

近藤が血の点滴を見る。その血は、ある方向へつながっていた。襖が開かれた形跡がある。つまり、ここから…。神楽はいてもたってもいられなくなった。

「銀ちゃん…。きつと銀ちゃんネ！！この先にいるはずネ！！」

床は次第に大きく揺れ始める。

ついにバランスが取れなくなり、床にしゃがみこんでしまった。

「地震…？」

「いや、違う!」

地下から何か大きな物が動いてる感覚。

と、違う方向の襖が開いた。

「近藤さん!!」

「トシ! 総悟!」

そこにいたのは土方と沖田だった。

「お前らも一緒だったのか。…万事屋は?」

新八たちに目を向ける土方。

「まだ…です。でもきつとこの先に…」

血の点滴が付いた畳を見る新八。
なるほどと思う土方。

「しかし、この揺れは何でしょうねィ」

沖田は襖にしがみつき、必死に立ってる体制を保っている。

「地下にでかいエネルギーがたまってたんだ。恐らく、高杉の目的はこのエネルギーを使って江戸を壊滅することだろう」

「！！」

江戸を壊滅！？

その言葉に一同声が出なくなった。

「止めないと」

新八が口を開いた。

「止めないと。…嫌ですよ、壊滅なんて。僕は…江戸の街が…みんながいる江戸を、壊されたくありません！！」

新八のその素直な意見に皆同意した。

「江戸がなくなってしまったら、かぶき町の女王の意味もなくなってしまうからナ」

「江戸の市民護るのが、俺たち真選組の役目だからな大義を見失っちゃ、真選組の名折れになっちまう」

土方が力強く言う。

「土方さん、格好付けんのは全部終わってからにしません？見苦しいでさア」

「黙れ総悟」

「俺もお前らと同じだ」

近藤がうなづく。

「じゃあ行くか！」

一同頷く。

第一百十六話 類は友を呼ぶ

小刻みに揺れる床。

高杉を追う銀時と桂。

「待てつつつてんだろ！」

高杉の肩を引き寄せる銀時。振り向いた高杉の表情はどこか哀しげに見えた。

「おめエ……」

言葉をなくす銀時。

「……ここでテメーらが俺を殺しても、だ。いずれにせよ江戸……いや、この世界もろとも全て地獄と化する」

それほどのエネルギーがこの地下に貯まっているとも言えるのか？桂は吟味したが高杉の魂胆は事実全うである。

「ヅラあ、俺前にも言ったよな。昔、てめーらが国のためだア、仲間のためだア剣をとった時も、そんなもんでもよかったと。剣の使い方、生きる術すべを教えてくれたのは紛れもなく松陽先生だ、と。じゃあその時俺は何のために剣をとったのか。……そう、己自身のためだ。反面、松陽先生の仇討ちと言った部分もあるがそんなの建て

前に過ぎねえ。てめーらにもあつたはずだ。仲間のためでも国のためでもなく、松陽先生のためでもなく、己自身のためだと」

部屋の一角で足を止めた三人。

「…確かに、高杉の言うとおり、国のためとか仲間のためとかはただの建て前かもしれん。本当はそのことを意思表示している己自身のためだ。だが、それも、たとえ己自身の欲望だとしても、国を守るうという意志は本物だった」

真剣な表情の桂とそれを聞く高杉だったが、銀時はかぶりを振った。

「どうでもいいじゃねーかよオ。過去の、終わったことをいつまでもグダグダと。何、てめーら歴史の先生にでもなりたいの？高杉はともかくヅラ、てめーは無理だ」

「ヅラじゃない桂だ。誰が歴史の先生になりたいだ。俺は攘夷志士だぞ」

はいはいと適当に流す銀時。

と、その時

ドオオオオン

激しい爆発音がした。

「何だ!？」

ゴゴゴと、漫画でよくある表現をイメージして頂きたい。

「オイ作者アア!何一人だけ楽しようとしてんだよ!」

まあ黒字でぶつとく書かれたゴゴゴである。

「フン、いよいよか」

今までの表情と一変して、それは不気味な微笑みだった。

もうすぐ江戸は、地獄と化す。

「高杉イ、貴様…心中するつもりか」

「心中?俺はこの世界が滅ぶまで見届けなきゃ死んでも死にきれね
エからな」

「高杉よオ」銀時は口を開いた。

「この国が滅ぶがどうでもいいんだよ。俺ア、みんなが生きてり
やどこにいたって構やしねエ。壊せよ、とつとと」

「銀時…」

今の銀時は桂でも読めなかった。挑発でもしているのか?

いや――

また違う部屋

「俺は江戸が滅ぼうが関係ないけど、それを止めようと今必死で足掻いてる連中がいると思うよ。俺はその連中を見逃すよもちろん。アンタらは知らないけど」

神威は笑顔を見せる。

「さっきからなんなんスか。何が言いたいんスか」

「また子さん、もしかしたら…」

「——！？」

分かった。

桂はやつと把握した。

そう、銀時は時間稼ぎをしていたのだ。

おそらく新八たちは地下のエネルギーを止めようと、向かっている。

「高杉よオ、そう簡単に滅びないぜ？」

俺たちはな」

銀時は円満の笑みでニタリと笑った。

第百十七話 百人力

「ここが一番音がでかい」

土方が畳に耳を傾ける。

新八たちは考えた。

闇雲に部屋に入っては出るより、もっとエネルギーに近づける方法——それは床の下を狙うことだ。

一番エネルギー音が大きい場所を選び、床に穴を開ける。

「よし、行くぞ！」

近藤の合図と共に、大きな爆発音が鳴った。
埃が部屋を舞う。

「！」

床の下から、巨大なタンクのような物が現れた。

「こんな物を高杉の野郎、持っていやがったのか…」

固唾を呑む土方。

「とりあえず下に降りるネ」

ぴょんと神楽は下に飛び降りた。それに引き続いて新八らも降りる。

うまく着地した後、巨大なタンクを動かす動力室があると考え、探し回った。

——しばらくして、新八が不思議なスイッチを発見した。

「ちょ、皆さん！来てください！！」

すぐに散らばっている4人を集めた。

「何アルか？」

「こいつア、何かのスイッチですか？」

——ポチッ

沖田は何のためらいもなくスイッチを押した。

「総悟おおお！！何押してんの！？何押しちゃってんの！？」

土方が沖田の胸ぐらをつかみ、体を交互に揺さぶっている。

「実は俺、あーいう突起見るとつい押しなくなっちゃうんですア。乳首とか」

「何最悪なこと言ってるんですか沖田さん！！もはやドSという次元を通り越してアブナイ次元に入り込んでますよ！！」

「お前いつも私の乳首狙ってたアルか！？うぎゃあああ！！変態ア

ルう！お巡りさん！！」

「いやお巡りさん俺たちだから！」

なんてギャーギャー騒いでいると、さっきまでの揺れが収まった。

一同、やったのかコレと安堵な表情をみせる。

が、

『倍速モードに転向します。残り5分』

え？？

皆、表情が一変し青ざめる。

「ウソおおお！！え、ちょ、マジでかアアア！！」

「お前が押すからいけないネ」

神楽が沖田を睨む。

「なんで俺のせいなんデイ。だいたいこのスイッチを見つけた眼鏡

「が悪いんでさア」

「僕のせい!!??てか何責任逃れようとしてんですか!!」

「警察官が汚職たア、ちとイタいで」

「言ってる場合か」

土方は冷静だった。

「このスイッチを押したおかげで管制室の場所が分かった」

「本当ですか!!」

「ああ」

土方は煙草をくわえ、一服した。

「してトシ。その管制室はどこに?」

間を空けた後、こう言った。

「タンクの肛門辺りだ」

第百十七話 百人力（後書き）

銀：寿限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク㇗フェザリオン アイザツク㇗シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情 裏切りは僕の名前をしまっているようではないのを僕はしまっている留守スルメめだかかずのここえだめめだか…このめだかはさつきとは違う奴だから池乃めだかの方だからラー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペおあとがよろしいようにで これにておしまいビチグソ丸

つて長エエエエー！！

神：みんなは噛まずに言えるかな？

新：……

第百十八話 空を写メすることは精神が疲れてる証拠

「肛門…？」

新八が引きつった顔で問う。肛門、ではないがどんな例えだ、と。銀魂らしい表現ではあるが…と思うのだが、冒頭一発目で”肛門”はないだろう。この場をお借りして謝罪します。すみませんっした。

「そうだ。さっき気になった箇所が一つあってな。この、エネルギータンクの後部の先端の穴」

全員、土方の言われるがままタンクの後ろに回った。巨大なタンクを一回りするのに、結構時間がかかる。

「この穴…何かと不思議だったが、コレは管制室の入り口だ」

「こんな小さな穴が、ですか！？」

「トシ、その確信は？」

土方は煙草の火をもみ消した。

「スイッチを押した瞬間、あの穴が光ったんだ」

「本当にここが管制室なんですかイ？」

「四の五の言ってる場合じゃねエ。チャイナ、この穴を壊せるか」

「任せるネ」

神楽は勢いを付け、床を蹴った。

「ほあたアアアア!!」

——ドガアアアアン

神楽の一撃で大きな穴が空いた。

そこにあつたちよつとした空間に、大人の腕くらいあるレバーがあった。皆、察していた。

——このレバーを引けば、止まる——

「俺たちは、誰一人、壊せねエよ」

もう銀時は高杉に刀を向けていない。

「高杉、貴様は己がために刀を抜くのか」

桂も刀を向けていない。向けているのは高杉だけだ。

「フン、偉そうに。昔の志はどこ行っちゃったんだ？二人仲良く時代と共にその志も変わっちゃまって」

「はあ？何言ってたんだよ。俺たちは何も変わってねーよ」

「変わったのは高杉、貴様だろう」

その言葉に少し動揺する高杉。だが、そう簡単に丸め込まれるような性格ではない。一番プライドが高い男だ。

「俺は松陽先生を奪ったこの世界にただケンカを売るしかあるめエよ。お前らも俺の気持ち^{なにゆえ}が解ると思ったよ。まあ少しはな。だが、何故邪魔をする」

銀時と桂はにっと笑った。

「そこに護りたいモンがあるからだ」

「？」

簡単な答えだった。
だが、理解し難い者もいる。

「それで剣を抜くんだよ」

銀時が言った瞬間、今まで揺れていた床が収まった。

『システム解除に移ります』

そのアナウンスと同時に、周りの機能も低下していった。

「……やった」

「止めることができたんですね、僕ら……」

ホッとして新八は地面に崩れ落ちた。

「情けないアルな、こんなことで」

「いや、こんなこと、じゃないでしょ！」

皆、安堵の笑みがこぼれる。

「まだ安心はできんぞ。まだ万事屋たちがいる」

「行くか」

五人は銀時らを探しに駆けて行った。

第百十八話 空を写メすることは精神が疲れてる証拠（後書き）

新：いよいよ「KAMUI」、第四章もクライマックスですね！

神：長きに渡る戦いもついに終わるアルか！長かったアルな。四章が一番長いんじゃないアルか

新：確かに…40話は越えてるかな

神：ほお！そんなにもグダグダやってたアルか！終読時間250分もあつてふざけんじゃねーよ作者アアアアっていう批判もたくさん頂いたネ

新：ないから！そんな批判ないから！いつも感想くれる、作家の皆様！ご登録してくださった皆様！本当に支えになっています！！ありがとうございます！！

神：いい子ちゃん振るの止めるネ。アレ、そっいや銀ちゃんは？

新：そーいや…

銀：そんなこんなでこれから「KAMUI」をヨロシクね

新神：いたアアアア！！

普通に横にいたアアアア！！

銀：てめーら殺すぞ

第百十九話 灯台下暗し

「はい、もしもし。…知りませんよ」

ピツと、携帯電話を切る神威。

また子たちと離れ、出口を見つげるために歩いている。が、一向に見当たらない。

「団長、誰と話してたんだ？」

「うん、元老と^{うっえ}」

「元老オ！？」

意外な電話相手に戸惑う阿伏兔。元老と話しているのに、緊張感が全くない神威にも呆れるが。

「何の話だよ」

「うん、高杉はまだ暗殺していないのかって。マメだね。もう俺に対しての信頼度ないのかな」

ないだろうね、これっぽっちも。と口にはしなかったがそう思った。

「で、団長はなんて答えたの」

「だから、知りませんよって」

「オイオイ」

まあこれで俺たちも春雨から追撃を食らうな…と阿伏兔は確信した。

「で、切ったの？」

「うん」

すがすがしく答える神威。

「穏便に持つて行きたいけど無理だな。リクルートで就活でもしようかな」

「大丈夫、元老^{うゑ}には俺がちゃんと言っておくからさ。とりあえず出口探そ」

やれやれとかぶりを振る阿伏兔。

俺は一生この傍若無人？自分勝手？な団長についていくわけか。

「…悪くねーな」

そう呟くと神威の後ろを歩いた。

「あり？」

神威が何か違和感を感じた。その場で足踏みする神威の不思議な行動に、阿伏兔は問う。

「どうした」

「よつと」

いきなりしゃがみ込んだと思いきや、畳を持ち上げる神威。

「何してんだ？」

「見つけちゃった」

「何を？」

「出口」

にこつと笑う神威の下にあるのは地下に続いている階段だった。

「こいつア…。でも本当に出口か？」

「うん。だってホラ」

そう指差す先に、畳の裏に書かれた”出口”の二文字。

硬直する阿伏兔。

いや、まさかと思うがそのまさかだ。

「もしかして…」

神威は隣の部屋に行った。そして一枚一枚足踏みして空洞があるか確認する。

「あつ」

また一枚の畳に違和感を持った。

ひょいと畳を持ち上げるとそこには階段があった。

「なるほど、こういう構造だったのか。で、中心部分になる部屋の地下には、エネルギータンクが設備されてるのか」

「まさに灯台下暗しってヤツだね」

「ま、これでやっと出られるってんだ。参ったもんだぜ、ったく」

一息つくと、神威は出口の階段を降りた。

「これで江戸はまた侍のおかげで救われたんだ。地球つてのは図太いね。国が滅びようが、星が墜ちようが、それを止める侍達がいる。この星に侍がいる限り、春雨は地球をおとせないね」

「…どこ行くんだ」

「春雨に戻って現状報告」

リズミカルな足取りで階段を降りていく神威。

「待ってる鉄格子」

阿伏兔はそう小さく呟いたが、神威に聞かれていたようだ。

「今回は鉄格子で済むとは限らないよ。処刑、打ち首獄門なんでも来いってね」

そうにこやかに言うが、阿伏兔は引きつる。

「かぁーっ、気楽でいいよなア、アンタは」

やれやれとかぶりを振り、阿伏兔も神威の後を続いた。

「遠路はるばるご足労であつた」

新しい提督が、ある人物を歓迎した。

「いや、こつちは宇宙をまたいでやっている。そう気にしんでもらいたいきに」

その人物は小柄で、網笠を深くかぶっている。

「それは失礼した」

網笠を少し上げ、ようやく顔が見えてきた。
地球人、であつた。

「こつちも商いをしておる。宇宙海賊なんて危なっかしい組織に手は出さん。わしらが欲しいもんは利益じゃ」

その人物は快援隊副官、陸奥だつた。

「利益を損付けることとなつたら話は別じゃがな」

第百十九話 灯台下暗し（後書き）

新：え、最後のつて、快援隊イイイイ！？

神：コミックに便乗して、あ、もっさんも出しとくか。みたいなノリで登場させたワケじゃないらしいアル

新：え？どういうこと？

銀：つまり野郎はジャンプを読んでねーってことなんだよ

新：ええええええ！？ジャンプ読んでないのに小説書いちゃうんだ！

神：そうヨ。だって考えてみるアル。「ぬら魂」の話、ぬら孫の方の原作と話があってないネ。ACのネタだって、実際どっちが先にやったか野郎は分からない状態でブルブル震えてるネ

銀：パクったみてーな感じに言われたらどうしよう的なアレだよな。今日41巻見てヒヤリとしてたし、掲載がいつだったか分かんねーし

新：つまり、自分が先だろうが後だろうが、パクったりしてませんと言いたいんですね

神：そうアル。快援隊が出てくるのも連載前からストック作っておいて、出すタイミングがなかったから今になってになっちゃったネ

銀：まどろっこしいな。恥ずかしくねーのか。所詮俺たちなんざ井の中の蛙だ。でも井戸の中でも楽しけりゃいいじゃねーか

新：そうですね。せっかく読んでくださってる方に申し訳ないですもんね

神：心機一転して、また次回からも頑張るアル！

第二百二十話 トライアスロンに俺はなる！（前書き）

すみません、お待たせしました！

後書きにて、

お知らせがございます

第二百二十話 トライアスロンに俺はなる！

神威たちがいなくなった屋敷に残っているのは銀時、桂、新八、神楽、土方、沖田、近藤だった。

「…おさまったか」

桂は辺りを確認した。

「つーわけだ。高杉、俺たちはもうここに用はない」

「フン、それはどうか」

高杉は鼻で笑うと片腕を挙げた。何かの合図みたいだ。

ドオオオオオン

合図と共に旋風が巻き起こった。

「鬼兵隊だアアア！！」

「「！！」」

鬼兵隊の衆が、一気に銀時らを囲った。

「高杉イ…」

また面倒くさいことになったと心の中で呟いた銀時。だが鬼兵隊の衆は、次々と襲ってくる。

「わたアアアア…！」

「！」

銀時達の正面から、知ってる姿があった。

「銀さーん！桂さーん！ここにいたんですか…！」

「新八！神楽！」

どつと目の前の浪人を倒し、新八たちが現れたのだ。

「これまた面倒なことになってまさア」

「チツ、厄介な奴らだ」

真選組の三人もいる。

「おめーら…」

突然の再開に、安堵する銀時。だが、安心している場合ではない。

「万事屋アアアア！！ここは俺たちに任せててめーらは高杉を追え
！！」

近藤が叫ぶ。

「…悪ーな」

そう吐き捨てると、銀時と桂は高杉を追った。

ゴオオオオオ

「！！」

いつの間にか銀時達は外に出ていた。

ものすごい突風と、激しい爆音。

銀時達の頭上に、巨大な船が浮いていた。
そこには高杉がいる。

ニヤリと不気味な笑みを覗かせる。

「貴様はまた、逃げるのか!」

「坂本に会ったら聞いてみな」

周りの音が大きくて、高杉の声が小風のようだ。

「？」

だが、笑みは消えない。

——坂本に会ったら
聞いてみな

「辰馬、か？」

銀時と桂の頭が混乱する。

混乱の最中、高杉の乗った船は瞬く間に空へ上がり、消えてしまった。

「……どーいうこった」

「なぜ高杉が坂本と関わりがある」

「……」

険しい表情になる二人。

「いででっ」

気が緩んだせいか、斬られた肩に痛みが走った。

「そんな体でよくもまあ動いてたものだ」

「せーな、それどころじゃなかったろーが」

また空を見つめる銀時。

高杉が最後に言い残した言葉がやはり耳障りになるほど残る。

「銀ちゃん!!」

「銀さん!桂さん!」

振り向くと、神楽、新八、真選組の三人がいた。

「高杉は」

ハッと思った近藤だったが、聞くまでもない。

銀時と桂は、虚しく空を見つめていた。

第二百二十話 トライアスロンに俺はなる！（後書き）

銀新神：「KAMUI」第四章、完結ありがとうございました！！！！

銀：…完結つても、後味悪ーな

新：ムズムズしますね

神：鼻が？

新：ちげーよ！そっちのムズムズじゃない！

銀：作者の嘘あらずじには参ったな。何が因縁に決着がつくだ。なんも決着してねーよ！

新：でも銀さんの説得は結構よかったじゃないですか

神：そこだけネ。しかも怪しいこと匂わせたのはいいけど、まったくその話にも繋がらないネ。どんだけ私たち泳がせたいアルか

銀：確かに、これで終わっちゃ嘘になる。だが、そうはいかねーよ

つーことで、次回から新章スタートです！

第百二十一話 五章もコシヨウも変わらない(前書き)

第五章、スタートです

第二百一十一話 五章もコシヨウも変わらない

「どうも、宇宙をまたにかけて商いをやっています、快援隊の坂本辰馬と申します」おえっ

小袋を抱え、吐き出す。その坂本の横で、引きつった顔をする陸奥。坂本がいる場所は春雨の本拠地である。

あくまでも商談である。

「おえっ」

相手の幹部も、坂本の止まらぬ嘔吐に引き気味である。

「おえっ」

「おえっ」

「おええええええ」

「いい加減にするじゃきー。迷惑にもほどがあるっ」

陸奥が坂本の頭を殴った。嘔吐の次は喀血。

「あの、さっきからゲロしか出してないよね」

相手の幹部も焦り始める。

「申し訳ない。うちの頭、快援隊の舵を任しとるが船酔い持ちなんじゃ」

陸奥が代わりに詫びる。

「そんなんでよく船に乗ってますね！」

「利益があれば自分の体調そっちのけで優先するじゃき。気にしないでほしい」

「はあ…」

と言っても、相変わらずおえっおえっ、と苦しそうだ。

「頭、喋れるか」

顔をのぞかせる。

「おお、大丈夫じゃき」

真っ青な顔の坂本だったが、話し始めた。

「わしらが今日、ここへ来たのは他でもない。そちらに、投資できる利益があるっちゅう儲け話を聞いたんじゃ」

坂本は、口についたゲロをぬぐった。

「それはまことか？」

「…はい、双方とも儲かる、こつちの話ですが」

と、幹部はこつつい指でマネーサインを出した。

この幹部、喋りは敬語だが、見た目は凄く強そうな武闘派だった。

まあ今は商談の話であるので関係ない。

「わしゃ、手柄がとれんとも金^{もと}がとればいいんじゃない。その辺の尻拭いはそちがやっとうくれればありがたいのう」

「それは大丈夫です」

ニヤリと笑う幹部。

「信用しい」

坂本もニヤリと笑う。

そのキメ顔も、長くは持たなかった。

「おぼろろろっ」

「「……」」

「やっぱりゲエエ袋は必需品じゃのう、アハハハ」

「まったく…」

商談も終わり、春雨の艦隊の中を歩く坂本と陸奥。周りの天人は珍しい目で、ジロジロ見る。

「…頭、やはり気になる。ここ、宇宙海賊春雨ちゅう組織は本当にヤバいらいじゃき。手を引いた方が身のためじゃ」

陸奥が坂本を横目に見たときには彼の姿がなかった。

「わしは快援隊というカンパニーで商いをやっております、坂本辰馬と申します！」

サツと名刺を差し出しては天人に強引に押しやる坂本。なんとも言えない脳天気野郎にため息をつく陸奥。

「何をやっとなるんじゃ」

裾を引っ張り、坂本を回収する。

「緊張感のない奴じゃ。コレじゃ成功する話もないきに。元も子もないじゃろっ」

「わかつとる、わかつとる。ちゃんと考えておるから安心せい」

陸奥はそのまま坂本の髪を掴み、強引に引きずって行った。

「あり？」

「どうした、団長」

その光景を神威と阿伏兔は見ていた。

「アレは…地球人だよな。初めて見る顔だなア」

頭のアホ毛がピクンと動いた。

「アレは侍ではないらしい。えっと、商人？」

「へえ」

「おら、さつさと行くぞ」

グイツと神威を引っ張った。

「さあ、元老様のゲンコツを頂に行くぞ」

「…そうだね」

第二百二十二話　ぶえんぎゅいんって何かわかる？（前書き）

お待たせしました！

第二百二十二話　　ぶえんぎゅいんって何かわかる？

「なぜ頭はあの春雨と商談を持ちかけたんじゃ？」

艦隊の操縦室にいる坂本と陸奥。

「なぜって、なんでかのお」

「理由を忘れたじゃき？」

「うん」

全力でピースする坂本。

それに応じて蹴りを入れる陸奥。

理由を忘れた？んなアホな回答がくるか、と呆れる陸奥。

「理由はわしらはどうでもいいじゃき。利益になれば口出しはしん」

「アハハハ、頼むき」

坂本は舵に戻った。

方向を変え、目指す星は地球だった。

「…前も、地球に戻ったのう」

「やっぱ地球はよいのう。なんちゅーか、空気がうまいというか」

「…あの男、なんじゃ？」

陸奥は険しい顔をした。

「ああ、気にすることはないぜよ」

「そうか」

そう言い残すと陸奥は操縦室から出て行った。

あの男、とは察しの通り、高杉晋助である。

名は知らない。

ただこの間、高杉に用があつて地球に戻ったのだ。

そして、また今回も地球に戻る。

「特上の酒を用意せんとなあ」

「坂本辰馬？」

「こないだ商談に来た地球人だよ。快援隊つー宇宙をまたにかけた商いをやってるんだと」

春雨艦隊の長い廊下を歩く神威と阿伏兔。

「春雨もあこぎなことをするね。自分たちの利益の為に向こうの商売を根こそぎ奪おうなんて」

「んなこと俺たちにや関係ないだろ。会社が一つ倒産するのと同じだ」

「侍の次は商人かあ、面白そうだな」

そのまま神威は阿伏兔の前を歩いて行つた。

「団長お、聞いている？俺の話聞いてた！？」

あとを追う阿伏兔。

相変わらずの自由奔放な性格き呆れる。

「あ、そうだ。元老^{うえ}から何言われたんだっけ」

「はあ！？ずっとこどつこい！聞いてなかったのかよ！！」
「たく、しょーがねエ奴だな」

「難しい話とか、耳からすり抜けちゃうようになったんだよ
ね」

「とんだ言い訳だな」

ため息をつく阿伏兔。

「その、あこぎを俺たちが汚れ役で買ったんだよ」

「…そっか」

神威は小さく呟いた。

「頼むから帰ってくんないかな。」

うつとうしいんだよ、そのもじゃもじゃ？ 一体何本鉛筆刺せれるんだよ。

つか小学生の頃、絶対クラスの奴とかにやられただろ」

「…銀さん、それてます」

「駄目アル。銀ちゃんのもじゃもじゃは全く鉛筆が多く刺せないネ」

「てめっ、アレ？ なんか頭が重いなと思ったら何鉛筆大量にぶっ刺してんだよ！」

「お嬢ちゃん、昔のコイツならもつとたくさん刺せたきに。昔のコイツの頭のもじやもじやは凄かったのう。それは今となればすっかり退化しよって。一体何があったんじゃ、金時」

「ツツコミ切れるかアアアア!!」

ドゴオオつと坂本の頭を床に殴りつける銀時。
場所は変わって万事屋。

色々あつて、坂本と陸奥が万事屋に来たのだ。
まあ銀時たちにとってはただの厄介者というかお邪魔虫というか。

「いだい、いだい!金時」

「金時じゃねーよ!」

「すまんのう、金時」

「どこに濁音付けてんだオメーはよオ!!」

銀時にこびつどく叱られても全く反省しない坂本。

「つーか、何しに来たんだよ」

肘をつく銀時。

もうこの際、金時と呼ばれようが構いやしないと諦めたのだ。要件を聞いて、とつと帰ってもらおう、もしくは要件も聞かずとつと帰らせようという魂胆を考えた。

「うん、要件があつておんしらに会いに来たんじゃが、何だったかのう」

ホラ見ろ、忘れてやがると銀時は舌打ちした。

だが、イライラしていたのは銀時だけではない。横に座る新八、神楽、陸奥もイライラしていた。
ていうか、この人相手にイラつかない人っているの？

「頭、ここで死ぬか？」

ガチャと銃を向ける陸奥。

ドオン

ドオン

「わアアアア！！ここを殺人現場にしないでください！！」

「この弾…間違いない、もっさんのものアル。ガイシャはピストルを使ったネ」

「そうか、ワトソン君。なら手始めにもう一発もっさんに撃つとか」

「ちょっと何コント始めてるの！？ていうか坂本さん、死んだ設定！？」

倒れている坂本の横で、探偵ポーズをキメている銀時と神楽。

もう辺りは收拾がつかなくなっていました。

10分後――

「で、要件は何」

改めて聞き直す。

「金時、昔のことになるんじゃないが中岡修太郎って覚えちよるが？」

第二百二十二話　ぶえんぎゅいんって何かわかる？（後書き）

銀…金時じゃなくて銀時な

第二百二十三話 人生はすぐろくだ（前書き）

過去編スタートです。

第二百二十三話 人生はすぐろくだ

「あ？中岡修太郎じゃて？」

「あ？じゃねーよ。テメーの昔のツレだとか言ってたじゃねーか」

時は攘夷戦争最中。

飯を片手に、銀時は坂本と束の間の休息をとっていた。

「全く思い出せんのうち」

首を傾げる。

「最低だな。絶対友達なくすぞ」

銀時は持っていた茶碗を床に置き、よっこいせとだるそうに立ち上がった。

「あ、そっぴや手紙がきてたわ。ホラよ」

懷から手紙を出し、坂本に渡した。

「すまんのう。誰じゃき」

ヒラッと手紙の宛先欄が書かれてある裏面を返した。

”坂本辰馬殿”

の一字しかなかった。

「ラブレターじゃ！」

舞い上がる坂本。

「バカ、ちげーよ。置いてったんだよ、その手紙。中岡修太郎って奴が」

「ほお」

坂本は文字を眺めた。

しばらくの沈黙した後、急に坂本は声を上げた。

「思い出したきに！修太郎じゃ！修太郎！！おうい、金時！酒を用意せんかー！！」

ドゴンと蹴りを入れる銀時。

「金時じゃねーよ！そんなに俺の名前難しいか！！濁音の意味知ってる！？」

「すまんのう、シルバータイム」

ガツと坂本の胸ぐらをつかむ銀時。

「殺されたいのか？え？殺してほしいんだな」

「冗談じゃて！」

「テーマの冗談は通用しねーんだよ、まったく」呆れたかのように、胸ぐらを離した。

「…今日の指揮官は俺だ。辰馬ア、ためー今日は来なくていいぜ」

「わしゃピンピンしとる。わしもいくぜよ」

反抗する坂本に少し怒りを覚える銀時だったが、まあいいかと大目に見た。

指揮官とは志士をまとめるリーダー的な役割である。主に銀時、桂、坂本が中心になるが、時によって高杉率いる鬼兵隊も加勢する。

「足引つ張んなよ」

胴着を付ける銀時。

坂本も支度し始めた。

「大丈夫じゃ。ホレ、これ何か分かるか？」

坂本が懷から取り出したのはピストルだった。

「なんでこんな高価なモン持ってたんだよ」

「もらったんじゃ。ウェッソンなんちゃら？ちゅう西洋のおっさんに」

クルクルとピストルを回した。

「どーでもいいけどよ、引き金引いたら一発じゃねーか。俺アそー
いうの向いてねーなア」

「時代に乗り遅れちよるぞ銀時。天人が増えれば戦のやり方も変わ
ってくる」

そーだけどよ、と頭を掻きながら呟く。

「そうだ、手紙はいいのかよ」

「後で一人で読むじゃき」

にたつと笑う坂本を無視し、銀時は刀を腰にさし、真っ白な羽織を
羽織った。

そして前髪を勢い良く上げ、鉢巻を縛った。

その光景を不思議そうに見つめる坂本。

「銀時」

「あ？」

「その鉢巻、どうせならこう木の葉マークを付けてみるぜよ。した
らモチベーションも上がるじゃろう」

そう言いながら坂本は銀時の鉢巻のちょうど真ん中部分に木の葉マ

ークをマジックで書いた。

「俺は火影になるんだってばよ！じゃねーよ！！」

そのまま坂本の頭にかかと落とし。

「忍者になりてーのかテメーはよオ！よし、修業して来い！んでお色気の術マスターして戻って来い！！」

「アハハハ、キャバクラに行きたいのう」

鼻血を垂らす坂本。

「何がキャバクラだ！…行くなら俺も連れてけよ」

ボソツと耳打ちすると、銀時は講堂を後にした。

坂本も手紙を懐にしまうと、銀時を追った。

外に出ると青空が広がっていた。こんな綺麗な空の下で、何故血が流れるのか。神様も残酷なことをするな、と誰もが思った。

——梅太郎。

「？」

坂本は足を止めた。

小風と共に耳元がざわめいた。

第二百二十三話 人生はすぐろくだ（後書き）

銀：今日の銀魂はスケッチダンスとのコラボ回だったな

新：原作に付け足されたシーンもあって、面白かったですね！

神：ボッスンと銀ちゃんの引っ張りだこだったネ！ヒロイン同士の戦いもやりたかったアル。新八だって、スイッチと眼鏡キャラ被っててム力つかないアルか

新：いや、眼鏡キャラなんてありがちでしょ

銀：あの話も一つの教訓だよ。お互いのこれからの事を考えてのオチだったじゃねーか

新：全く考えてませんよね

神：股間がカナヅチになっただけアル

銀：銀魂しからぬオチだよ。コレでいいんだよ

新：アンタが言いって言う筋合いないんですけど

神：次はスケッチダンスに乗り込みアルな

新：そっちも楽しみですね

神：次回予告で色々改ざんされてたことは確かアル

新：余計なことはいらぬよ神楽ちゃん！！

神：木曜夕方6時ネ

銀：…元はといえ木曜夕方6時は俺たちの枠だったんだ。てめーら！殴り込みに行くぞオオオオ！！

神：おおおお！！

新：まだ根に持ってたのかよ！！

第二百二十四話 手紙

「しかし、昔の馴染みがこうやって今でも交流があることはええことじゃのう」

「けっ、てめーみたいな能無し友達なんて、よっぽどの物好きだな」

「物好きは失礼じゃな、銀時」

日が暮れ、そろそろと兵士達が隠れ家としている講堂に帰ってきた。その足取りは重く、怪我人を背負ってる者もいれば、もう既に息絶えていた兵士をせめて弔おうと担いできた兵士もいる。そしてまた一段と人数が減った。

今日の戦術はどうだったとか、皆笑顔を見せているが胸の内は暗い現実だ。そして皆で掲げた志も、昔年の面影としてはだいぶ薄れて来た。

皆、辛いのは分かっている。でもそれを耐えるのも侍としての気概だった。

「仲間の士気を高めんのも俺たちの役目だ。弱音は吐かねえ」

「ほんと、銀時は強がりじゃのう。わしは別に弱音を吐くことは恥ずかしい事だとは思わんきに。人間、思い通りにいかない時の方が多いからのう。それを頑固に耐え続けるよりも、ウサや弱音を聞い

てもらえる友を持った方がいい。誰にも言えない悩みなんて、みんな持つちよる。持っていない人間なんておらんよ」

「…辰馬にしては随分いいこと言ってるな」

坂本の言葉が、かなり胸に染み込んだのだ。

「アハハハ、わしゃ戦終わったらセラピーにでもなるかのう」

「誰もてめーには相談しねーよ」

また冗談を口ずさむが、これ以上は何も言わなかった。

「戦が終わったら…か」

銀時は朽ちた壁をぼんやりと眺めた。

夜もふけ、兵士達がすっかり寝静まった頃、部屋の隅がぼんやり灯火で明るかった。

昼間銀時から渡された手紙を読む坂本が壁にもたれていた。

隙間風で灯火が時より優しく揺れる。

「……」

丁寧に書かれた文書。

拝啓 坂本辰馬殿

お元気にしてますか。

近々遠征でそちらに顔を出すと思います。

中岡修太郎

と書かれていた。

行や内容は少なかったが、坂本は嬉しそうに笑った。

「わしゃ覚えちよるよ」

優しく呟くと、灯火を消した。

そして床に就き、目を閉じた。

『このままだと日本は滅ぶじゃき。梅太郎さん、アンタはどう思う

「?」

『わしも同感じゃ。そうじゃ、修太郎。おんし、ちくと一緒に革命を起こすきに。日本を洗濯するぜよー! アハハハ』

『呑気じゃな、梅太郎さんはまっことに』

はっと目が覚めた。

坂本は体を起こすと真っ白に霧がかかった空を襖越しから眺めた。

「懐かしい夢ば見たのう」

「坂本」

どこからか名前を呼ばれた。声のした方に目を向けるとそこには腕を組み、壁にもたれかかっている桂がいた。

「なんじゃ、ツラか」

「ツラじゃない桂だ。坂本、貴様にお客さんだ」

そう言うと桂はその場をどいた。

「久しぶりじゃのう、梅太郎…じゃなくて辰さん」

「修太郎!」

網笠を被り、また身長の高い青年が目の前に現れた。清純、
とも言っ
てもいいだろう。
彼が坂本の旧友、中岡修太郎である。

第二百二十五話

出会いに別れはつきもの（前書き）

お待たせしました！

第二百二十五話 出会いに別れはつきもの

「お久しぶりだのう、辰さん」

土佐弁を流暢に話す中岡修太郎という人物。
その場にいる志士たち全員が、注目した。

「おお、修太郎。元気じゃったか」

「まっことに。辰さんは」

「わしゃ、この通りピンピンしちよる」

久闊を叙している二人の中に、銀時が割って入った。

「へえ、あんたが辰馬の友人の」

珍しいものでも見るかのように、修太郎を見つめた。

「辰さん、そちらは…」

「コイツはきん——」

「坂田銀時だ。よろしくな」

どうせ坂本はまた金時と間違える、と思い銀時は先に言ったのだ。

「中岡修太郎じゃ」

そついいながら手を差し出す。銀時は口を歪ませ、手を強く握った。

「珍客だな」

また違う声がした。

その声のした方へ体を向けると、そこにいたのはちょうど講堂の入り口にもたれかかった高杉がいた。この頃の彼の左目にはまだ包帯は巻かれていなかった。

「なんだ、高杉か」

「なんだはねえだろ。坂本の昔のツレか」

高杉も銀時らの話に加わった。同様に自己紹介を済ませた。鬼兵隊の話を持ちかけると、興味本位がわいた。

「凄いのう。わしら田舎でしようもない戦続けてただけしや」

「こつちも地の利を考えてあちこちでゲリラ戦を続けてる。戦力的には同等だろ。ま、最近は手榴弾を使ってるがな」

「なるほど。やはり人ん集まるところは勝手が違ってくるのう。勉強になるじゃき」

高杉と修太郎は馬が合ったかのように話し出した。難しい内容で、銀時は流していた。

「固つ 苦しいことはおいといて、パァーッと飲むじゃき。おいヅラあ！」

酒瓶を片手に、もう酔っ払いのような坂本が顔を乗り出した。

「ヅラじゃない、桂だ」

一緒にいた桂も加わった。

戦争中、酒を酌み交わすのが志士たちにとっての唯一、心身を落ち着かせることだった。

久しぶりだな、と酒瓶を眺める銀時。元服してからすぐに戦争に参加し、なかなか酒を飲むことはできなかったのだ。

お国の為に兵士になり、夷荻から幕府おかみを護ることに、この頃は当たり前だった。

侍たるもの、武士道を極めんと刀を抜かない者はいなかったのだ。銀時らも、その中の一人だった。いつ死んでもおかしくないこの環境に、震えながら身を寄せ合い、互いに背中を預け、夷荻を斬って斬って斬り進む。血を見ることに慣れてしまった彼らの目は、殺すことに迷いがなくなった彼らの腕は、戦場にいる彼らの姿は、今となれば苦悩の塊だ。

でも時たま見せる談笑によって、本来の彼らに戻るのだ。自分たちでも知れたことだ。だから、仲間を大切に。当たり前のように、なかなかできない。そして、すべてなくなってしまう。護りたいものも護れず、手からすり落ちてしまう。待っているのは苦しみと絶望。戦争とはこういうものだ。

突きつけられた現実を、明日もそれを引きずっていくのだ。

第二百二十五話 出会いに別れはつきもの（後書き）

新：…そう言えば、今日10月10日は銀さんの誕生日ですよ！

神：マジアルか、私知らなかったネ。だってこの世界、サザエさん方式で永遠に歳とらない設定じゃないアルか？だったら誕生日とか、無意味ネ

新：そんなこと言わなくても！とにかく今日は銀さんの誕生日なんだから、何か用意した方がいいんじゃない？

神：用意って何アルか

新：ホラ、ケーキとか！

神：ケーキっておま、ベタだなアオイ

新：何銀さんみたいに言ってたんだよ神楽ちゃん！早くしないと銀さん来ちゃう！

神：ケーキはいいとして何か他にないアルか？

新：他って…

新：だいたい銀ちゃん、年齢不詳ネ。ろっそく立てるにも数が分からないアル

新：確かに…。適当でいいんじゃないの？

神：あつ、こんなところにケーキとろうそくが！さすが小説ネ！叙述トリックアル！

新：いいから、銀さんが来る前にろうそく立てちゃおう！

銀：おーい、帰ったぞーって今まで俺はどこにいたんだコノヤロー

新：何自分を叱咤してるんですか！…まあいいや、銀さん！誕生日おめでとunggざいます！！

神：いくつになったかは知んねーけど、ケーキは私が頂くネ

銀：わりーな、…ん

新：どうしました？

銀：いや、別に。（つーか、ろうそくの数が29ってリアルすぎねーかコレ。アイツら俺にお情けでもくれてんのかコレ？一体どういう意味の29だよ！もうコレ火消していい？見ると悲しくなってくるよコレ！）

神：あつ、ろうそくまだ残ってたネ！

銀：（38になったアアアア！アラフォー突入じゃん！片足入れちゃってるじゃん！！）

新：？早く火消してくださいよ

銀：あつ、ああ（マジかよ！38本消すの？コレで認めたってことになっちゃうの！？）

神：ろうがケーキに垂れるネ

銀：（もう知らねー！ウェルカム中年男おおおー！）ふうー！
っ！！

新：…なんで泣いてんすか

銀：…なんでもねえし

第二百二十六話 紅く繋がった鎖は

すっかり意気投合した5人は日が明けるまで、ずっと飲んだくれていた。

だが、今は戦時。

気を抜いては死んでいくだけの時代だ。

「もう行くのか、銀時」

白装束を身にまとっている銀時。刀の刃こぼれをチェックしていた。

「おちおち眠っちゃいられねーよ、こんな時によ」

刃を鞘におさめると血に汚れた羽織を肩にかけた。これを羽織り、刀を抜けば白夜叉と化す。

自分でも恐ろしく思っていたが、仲間を護る為には仕方のないこと。

「なあ銀時」

不意に、一人で行く銀時を辰馬は呼び止めた。

「なんだよ」

振り向くまではいつもの、死んだ魚のような目をしてやる気のなさそうな銀時だった。

だが、また向こうを向けば冷たい夜叉の目に戻る。どちらが本当の目なのか分からなかった。

「…なんでもないじゃき」

「あつそう」

思った通り、背を向けてしまう。

「銀時」

「あ？」

呼ぶとちゃんと振り向いてくれる。

「なんでもないじゃき」

「…あつそう」

「銀時」

「しつけーんだよ！用があんならさつさと言えや！この毛むくじやら！」

「ハハハ、おんしに毛むくじやら言われたかないのう」

笑顔で返す辰馬。

「せーな！だいたいテーマと天パ被ってんだよ！ハゲろってんだ！」

「白髪頭に言われたかないのう」

「てめ…」

そう冗談を言い合い、銀時は寝ている桂たちの方を見た。

「…戦が終わっちまったら、どうなるんだろうな」

そう吐き捨てると、銀時はまだ薄暗い霧のかかった外へ姿を消した。

「わしもそろそろ準備をするかのう」

よっこいせ、と戦の疲労でだいぶ重たくなった体を起こした。

「辰さん…」

と、声がした。

「…起きちよったか」

壁にもたれている修太郎はいつの間にか起きていた。

「ハハハ、だいぶ前にじゃ。銀時とも少し話をした」

「そうか。わしより先に起きちよったんじゃな」

坂本はぐつと背伸びした。朝は気味悪く静かだ。小鳥のさえずりや、虫の声もまったく聞こえない。戦争とは、生を感じさせなくなるのも事実だ。

「さアて、わしらも行くとするかのう。手始めにUNOから…」

「する必要あるが？」

冷たく笑い返す修太郎に、坂本も黙ってしまふ。

「…アイツの言うとおり、戦が終わればどうなるんじゃ」

「辰さん…わしゃあ」

と言いかけたところで黙った。

「ん？」

「戦が終わったら、またおんしと共に…」

——旅がしたい。

故郷で初めて出会って一緒に旅をした、あの時みたいに。

だが、戦を前にした坂本を見るや否や、その思いは段々と薄れていった。今生きることに精一杯な時に、こんな信念を持っていたらひん顰しめく蹙しめくを買っただけだ。

「…なんでもないじゃき」

「またそれか」

ハハハと笑った坂本は、刀を腰にさした。

微妙に繋がった鎖は、血の色のように紅かった。

「ッラあ、低杉。おんしらも起きとんじやる。さっさと行くじゃき」

「ッラじゃない、桂だ」

「誰が低杉だ」

「やっぱり起きちよったか。盗み聞きの好きな奴らじゃ」

桂と高杉も起き上がった。

「銀時の足引つ張らんようにせなканのう」

「アイツはいつも先行ってバカやらかしてるだけだろ。俺達は違うルートで攻めるぞ」

高杉は素っ気なく言う。

「あはは、かわいそうじゃのう銀時の奴」

「ほつとけほつとけ」

と言った時だった。

「大変ですぜ!!」

一人の志士が、慌てて入って来た。寝ていた志士達も起き上がった。

「どうかしたか」

桂が冷静に、慌てている志士に対応する。

「た、たつた今、江戸城上空に天人の乗った戦艦が現れ、天守閣に
大砲を撃つたみたいで……！」

「何！？幕府は天人の手中おかみってことか！」

攘夷戦争もいよいよ終盤に近づいて来たのである。

第二百二十六話 紅く繋がった鎖は（後書き）

神：…いい加減出番出せヨ

新：いい加減鬱憤溜まってきましたよね

金：作者もとんだクソ野郎だな。俺としてはみんな公平に出番があつてもいいはずだ

神：さすが金ちゃんアル！

金：かわいいお前らを野放しにしとくクソ野郎は俺が叩き斬ってやらア

新：本当、金さんは頼りになるな

銀：オイちよつと待てちよつと待てエエ！何、こつちでも原作引つ張るのか！？

神：なんだヨ、お前。妙にレギュラー面しやがって。私達は金ちゃん、新八で万事屋アル

新：うつつとうしいんですよ

銀：ちよつ、なんだよお前ら！

金：悪いな。次話からすべて金色に塗り替えちまうから

銀：小説まで塗り替えるつもりか！オイ！どうなってんだ作者アア！

——ついに銀時はこのおまけコーナーも金時に乗り換えられてしま
うのか!?

銀：うぜーよ!

神：仕方ないアルな。銀でも糞でも変わらないネ

銀：いやめちゃくちや違うけど!

新：あ、金さん。また何かあったら宜しく願いしますね

銀：お前らぶっちゃけ金でも銀でもどっちでもいいんだろ!?

神：ま、出番さえあれば青の被魔師でも銀の被魔師でもいいネ

新：サダハルダンスもいざとなれば無理矢理入れればいいだけです
から

銀：芦。愛菜と鈴。福をなんだと思ってるんだ

神：闇にかゝれて生きる俺たちよーかい人間なのさ

銀：うぜーよ!もうわかったから!もう金さんとか口にしないで!
俺頑張るから!!

第二百二十七話 バカの背中

「…ついに敗戦の時が来たか…！」

その知らせは誰もが驚くものだった。

あちらこちらでゲリラ戦を繰り広げていた兵士達にとって、無力さを痛感させたのだ。

嘆く者もいれば反発する者もいる。

「今外はいつもより危険極まりない状況下だ。容易に出るな」

桂の指示に兵士達は皆、従った。

「でも銀時が…」

この状況下で銀時だけが外へ出た。報告もまだだったし、いつも一人で勝手にどこかへ行くから誰も今日に限ってなどと気にとめなかった。

「奴は大丈夫だ。すぐに察知して戻って来るだろう」

「いや、戻って来ねーよ」

そう挟んだのは高杉だった。

「何故そう思うんだ」

「アイツに逃げる、なんて法論ないぜ」

微笑する高杉に怒りを覚えた桂だったが、今もめても時間に猶予がない。

「まあ、逃げるっていうか、敵に背を向けないってことだ」

確かになとここにいる3人は思った。

「すごいんだな…」

修太郎は銀時の行動を勇敢だと思った。

「驚くことはない。アイツがバカなだけだ」

桂はポンと修太郎の肩においた。

「俺たちは…そうだな」

「わしらもバカの内じゃろ」

「バカは一人で十分だ」

坂本、桂、高杉はそろそろと出て行った。

——バカは自分だけで十分だ。
と背中から伝わった。

「かなわんな…」

修太郎は遠くなっていく背中を見つめた。
戦は終わる。

だが彼らはまだ戦う。

そこに理由なんてない。

目の前に護りたいもんがあるから戦う。
侍が刀を抜くことに理屈なんてない。

ドオオオン

ドオオオン

敵の戦艦から容赦なく発砲される。

江戸城は、すでに穴だらけでところどころ煙が上がっている。
天人の兵士達が、次々と城に攻め込んでいた。

少数の攘夷志士達はそれを見切って、城内に潜んでいた。

銀時もその中の一人だ。

「いいか、おめーら。俺の合図で動けよ。抜け駆けは許さねー。つ
ーか茨木、てめっ何エ口本なんか読んでんだ」

指揮をとっているのも銀時だ。銀時らは、城の地下にいた。ミシミ

シと敵が床上を歩く音がする。

「そつだ茨木！空気読めつて」

他の志士にも言われるが、茨木は震えていた。

「い、いや、なんかコーフンしちゃって…」

「そうか、茨木、次俺に貸せ」

「ちよつ坂田さんんん！！何アンタも読もうとしてんすか！！」

「っせーな、怒んなくても次貸してやるからよ」

「いや、そーいう意味じゃなくて！」

「っせーな、俺もコーフンしてーんだよ」

「何をををを！？」

茨木の脇からエロ本を覗き込む銀時。

時折見せるやらしい表情に、他の志士達も一緒になって覗き込む。端から見たらただの変態軍団である。

「その通り、俺たちは攘夷志士でもなんでもねエ、変態志士だ」

「何乗っかってんすか！っーか俺たちって、なんで巻き込んでんだ
！」

「茨木を中心とする数十人の軍団だ」

バサツとエロ本をひろげ、鼻血を垂らす銀時。

「そんな軍団、絶対嫌ですよ」

と言う志士たちも、どくどくと鼻血を垂らしている。

ドオオオン

「「「「「！！」」」」」

いきなりの爆音で、ようやく卑猥な話は終局した。

「ここにいたってバレるな…、攻める覚悟はできてんな」

落ち着いた声で銀時は言った。皆は応じて頷く。ここにいる誰もが、今生最後の別れになると覚悟した。

第二百二十八話 心底

一方修太郎は、三人の背中を見送った後後悔の渦に吞まれていた。

——銀時たちは何も言わず、ただ前へ進んだ。

自分は何故、歩こうとしない？自分が弱いから？足手まといだから？

辰さんと共に旅をした時に語った熱い思いはもう冷めてしまったのか？

『——おんし、どうじゃ？わしと一緒に旅をしないか？おんしもわしと同じ意志じゃろう。日本の未来を考えたいっちゅう』

そうだった。

同じだった。

攘夷戦争に参加した理由も、同じだった。

「何やってるんじゃ、わしゃあ……」

ぼそりと呟いた。

そして立ち上がった。

みんなに近づけれるなら、一緒に歩いて行けるなら……

修太郎は坂本たちの後を追った。

ドオオオン

ドオオオン

「見ろっ！アレ…」

高杉が江戸城を指した。

天守閣を突き抜ける大砲。もはや壊滅的だった。

「中の人間は…」

桂は辺りを見回した。

江戸城の瓦の上にうじゃうじゃいる天人。

その中に数人、攘夷志士とおぼしき姿。

「ありや、銀時…！」

坂本の叫んだ方向に、一際目立つ白い侍。

——そう、銀時が多数の天人と鏖迫り合いをしていたのだ。

「何やってんだアイツっ」

高杉は銀時を一目確認すると城内へ入って行った。

「坂本、俺たちは裏から攻めよう」

桂の指示を仰ぎ、坂本と桂は方向を変え走った。

ドオオオン

ドオオオン

大砲の音は終わりを見せない。

「ぐほっ」

銀時は血を吐いた。

いくらなんでも天人の割合が大きすぎる。

そろそろ限界が近づいてきた。

「くそだらア、埒があかねエ……」

目の前にいる敵を斬って斬って斬りまくる。

銀時は自分の周りに、仲間がいないことに気づいた。

——死にしまったか…みんな…

一気に力が抜けるのを感じた。墮落、絶望、暗闇が銀時を襲う。

——俺は、ただ刀を振り回して躍起になっている夜叉おになんだ…

死ぬ覚悟で死んでいったんだ。妄執にとらわれ臆病になる自分よりマシな様だ。

「…は」

「…ハハハ」

血を拭って笑うしかなかった。

「ハハハハハハ！」

周りの天人が銀時を気味悪く思った。

もはやそれは白夜叉になっている証拠なのだ。

今まで気づかなかった、いや気づかないフリをしていたが、そうだったのだ。

ドオオオン

「…！」

一発の爆発音で、正気に戻った。不意に爆発音のあった方向を向いた。

高杉…！！

屋根の上で誰かに刀を向け、顔を抑えているようだ。

「…そうか、お前…あの時の…！」

刀の向けた先には忘れたくもない姿。

「松…陽…先生…」

銀時はその姿を見るなり、誰にも聞こえないくらいか細い声で言った。

松陽の顔と共に蘇る、あの姿こそが黒夜叉。
次の瞬間には、銀時は動いていた。

ガギイイイン

黒夜叉の一撃を、高杉の前に出た銀時が止めた。

「銀時！」

何かが嘖き出る黒い塊。

これが仇討ちをしようとする感覚なのか。

「コイツあ、俺が！」

キインと、黑夜叉をはねのけるが勢い増して、気圧される。

なんとかして二人は踏み堪えた。

「るっせ！てめーは引っ込んでろ！」

「うるせエー！」

二人は言い合っが目的は一緒。

「弾数が少なくなったな」

「弾切れじゃないかが」

「さあ……」

桂と坂本は鉛色の空を見上げた。戦艦の数も徐々に減っている。

目的が無くなったに違いない。だがこの有り様。負け戦も甚だしい。

「坂本、とりあえず今は敵を排斥することが優先だ」

「わかつちよる、わかつちよる」

アハハと笑い飛ばす坂本。刀を構え、背中を預け合う。

いろんなところに転がっている人の死体。
どれも昨日まで生きていた人間なのだ。

「天人の奴らめ…」

ただ憎むばかりだった。

第二百二十九話　　ちゃあさーって何の略？（前書き）

銀：ちゃあさー？なんだよソレ

神：前もあつたアルな。確かぶえんぎゅいん？

新：気になる方は後書きで！

第二百二十九話　　ちゃあさーって何の略？

「大丈夫か、銀時」

「せーな、少なからずテメーよりは大丈夫だ」

ぜえぜえと荒い息をする銀時と高杉。

肩で呼吸することは、よほど体力を使ったという証拠だ。

黒夜叉との対峙はなんとか終止符を打つことができたが、

「…情けねーなア」

銀時は自分に嘆いた。

意識がなくなるなんて、弱い証拠だ。完全に白^{ヤッ}夜叉に喰われちまったのだと。

「立てるか」

座り込んでいた銀時に手を差し出す高杉。

「テメーの手なんか借りなくたって立てるよバカ」

と言いながら白い布を渡した。

「汚エけど、ないよりマシだろ。これで目エ抑えとけ」

高杉の左目から大量に血が流れている。

自分の怪我なんぞより、そっちの方が気掛かりだった。
高杉は少し照れた素振りで布を受け取った。

「…余計なお世話だ」

「そついや…ツラと辰馬は？どうせアイツらも来てんだろ？」

「途中で別れたぜ。どこに行ったかは知らねーけど」

「なんで聞かねーんだよ。普通よ、何時に帰って来るだとか何処行くとか誰と一緒にとか言うだろ」

「小学生じゃねーんだからよ、聞かねーだろ」

「時間になっても我が子が帰って来ない母親の気持ちを知れコノヤ
ロ」

いつもの茶番を繰り広げる。いつしか、大砲の音もなくなった。

「…やけに静かだな」

「銀時——！」

どこからか声がする。

「高杉——！」

二人は辺りを見回した。

「修太郎！」

声の正体は修太郎だった。修太郎は二人のところへ駆け寄った。

「お前…、来たのかよ」

ボロボロの二人を見上げる修太郎。

「おんしら、その怪我…。無理しよって」

ああ、これくらい大丈夫だと適当に流す銀時。

「わしも、少しはみんなと肩を並べたくてのう」

「…十分並んでんじゃないか」

銀時と高杉は浅く笑った。

ゴゴゴゴゴゴ

「「「？」「」」

急に頭上が騒がしくなった。

「なんだア？」

空を見上げると、さっきの戦艦とは違い、堅い鎧で覆われたような巨大な戦艦が浮いていた。そして見たことがある紋章が画かれている。

「春雨の戦艦だ…」

高杉は息を呑む。

「あーあ、敗戦決定ってわけか」

「…もう廃刀令も公布されとるじゃき。このままじゃったら…幕府は天人と不平等条約を交わし、江戸は天人達によって傀儡政治になっってしまう」

頭を下げる修太郎。

「知ってたのか？」

低い声で高杉は尋ねた。

「なんで黙ってた？」

「オイ高杉！」

高杉の表情は憎悪と化していた。修太郎に対してではなく、幕府に対してだ。それを銀時は止めた。

「そんなん気にしてたらこれからやってけねーだろ」

「せーな」

「すまん…、知っておきながらずっと黙っておったのは…」

「もういいって」

銀時はため息をついた。少し精神的にも疲れているようだ。

高杉は春雨の戦艦を見上げたままだった。

当時は、宇宙海賊と名の高いものではなかった。ただ夷荻の拠点として知られていただけであつた。

「とにかくここを離れた方がいいのう」

「そーだな」

三人は江戸城を後にしようとしたその時だった。

春雨の海賊達が、ワラワラと一斉にかかって来たのだ。

「なんだよ、うっぜーよ」

「今は逃げるが先決だ」

敵の群衆に吞まれないように、とにかく走った。

「白夜叉アアアア!!」

「高杉イイイイ!!」

やはり天人達は、攘夷の中心核を暴いていた。
名指しで襲ってくる。

チツと舌打ちをすると、銀時は刀を構えて振り返った。

「銀時！何をしとるんじゃ…！はよ逃げな…」

「このままじゃ逃げ切れねーだろ！俺が奴らを引きつけてる間に
めーら先に逃げろ」

高杉は銀時からもらった布を、左目に覆い被せた。

「何一人で格好つけてんだ腐れ天パ」

「はっ、格好つけてなんかいないね。むしろめーの方だろ」

高杉も刀を抜く。

「修太郎、お前だけでも逃げ切って辰馬達と合流しろ」

「奴らの狙いは大方、俺と銀時の首だろ。勝戦を記して帰っ
たいんだろっよ」

「何を…！」

修太郎は二人に辟易するしかなかったが、拳を握りしめた。

「二人を置いて逃げるなんて無理じゃき」

「言ってる場合か！救えるモンも救えなくなるぞ！」

銀時の発言は最もなことだった。だが、自分だけが逃げることで救える命があるとするなら、何故目の前の命を救おうとしない？

「わしもおんしらと共に、共に戦いたいんじゃない」

——辰さん、わしはアンタに付いてってよかと思いたいんじゃない。

『胸張って言うじゃき。わしや仲間がいるこの国を護りたいってなあ』

ふと、昔坂本が口にした言葉が蘇った。

「泣きべそかいても知らねーぜ」

にっと銀時は口元を歪ませた。

「行くぞ」

高杉の合図で、三人は一斉に斬りかかった。

第二百二十九話 ちゃあさーって何の略？（後書き）

銀：俺アぶえんぎゅいんは分かったぜ？

神：マジでか！

新：じゃあ答えの方を！

銀：ズバリペンギンの発音を気味悪く変えたただけだ！！

ピンポーン！

神：さすがアル！じゃあ、ちゃあさーは？

銀：それは分かんねーよ。何、流行ってんの？今年の流行語大賞にでもなんの？

新：ヒントは略語です！

銀：略語お？

神：チャーシュー麺は味がさっぱり系の略アル

新：違うよー

銀：ちゃんこ鍋の味付けは砂糖が必要不可欠！

新：嫌ですよ、そんな鍋！えっと、女子がよく口にします！

神：えー、女子だけど分かんないアル

新：じゃあもう答え言いますよ。ちゃあさーとは方言が入り混じった言葉で元に戻すと「ちゃうんだって、あのさー」の略です。それを言いまくる女子はいつしかメンド臭くなり、ちゃあさーと略してしまっただよ

銀：時代は物だけでなく会話表現も略語化されるたアね

新：まあ文面では使えないけど

第二百二十九話　ちゃあさーってなんの略？「ちゃうんだって、あのさー」の略だコノヤロー

完

第三百十話 人の間にいて人間

終戦の 때가、近づいていた。

侍たちの敗北は肯けられたのだ。

「侍たるもの、死して真の武士道を貫いたことになる。…敵に言っても意味ないか」

「あつはつはつ、自分でつつこむたア、頭んおかしゅうなつたか」

「貴様に言われたくない」

坂本と桂は江戸城から離れたところで敵の群集に囲まれたのだ。

まあ確かに坂本の言うとおりおかしくなってるかもしれない。毎日危機的状況の中生きているのだから、今まで耐え抜いてきた精神も悲鳴をあげている。

「落ちてけツラ。ここは深呼吸じゃ。ほうら新鮮な空気が」

「ツラじゃない桂だ！それにこれのどこが新鮮だ！血みどろの生臭い空気だろう！」

「あはは、確かにそうじゃ。まるでわしらが二酸化炭素を吸って酸素を吐き出してるようじゃ」

「貴様が吐き出すのは汚い吐瀉物だろ」

背中を預けながら肩で息をする二人。

「…銀時たちと合流するのは難しいな」

辺りを見回す桂。

四面楚歌、周りは天人の群集に囲まれた。

「…これまでか。敵の手にかかるより、ここは武士らしく、潔く、腹を切ろう」

「ヅラああ！！おまん、ホントに頭おかしゅうなったか！」

「はっ、しまった！ここの場面は銀時とだ」

「もういいきに。ヅラ、わしゃ忘れんぞ。おまんと一緒にUNOやったことも、コンパ荒らしたことも、合コンでウ。コ漏らしたことも」

「ああ坂本。俺も忘れんぞ。貴様とチキン竜田を取り合ったことも、一緒に女子トイレに入ったことも。。。。を。。。に。。。したことも」

握手を交わす二人。

誰かつつこんでくれ、という感じだが、今惜しくも攘夷時代ツッコミ担当銀時はいない。代行で誰かつつこんでくれ。美しい思い出の一つや二つ、ねーのかよと。

だがそんなに猶予もなく、天人は襲ってくる。

「坂本」

「ん」

「これが最後だと言わないからな」

「…おう！」

「また会おう」

「おう！！」

そして二人は、天人たちの群集に消えていった。

この三人の体力も残りわずかだった。

体力が減る一方で、敵の数は増えるばかりである。

その大半が春雨で、戦闘力の高い傭兵部族がわらわらという。

鬼になるしかなかった。

心を無にして、おもむろに刀を振るだけの鬼に。

二人の鬼は、大量の死体の上にいた。

—— 生きている

—— まだ俺は死んでいない

それだけ確認すると、やっと正氣に戻る。

「銀時、てめーもしぶとい奴だな」

「せーな。昼ドラの続きが気になって死にたくても死ねねーよ」

「…フン、やっぱりバカは死なねーよ」

「バカは死ななきゃ治らねーんだ。だから死ね、高杉」

「いやお前が死ね」

「お前が死ね」

と、どっかで聞いたことのあるやり取りをする銀時と高杉。

「…修太郎は」

彼の姿がなかった。

煙と砂埃と死体。

その中に、動く小さな影があった。

二人はようやく静まり返ったこの修羅場から、駆け寄った。

「なんで子供が…」

そこにいたのは少年。

歳は7つくらいか。

少年は泣きつ面で銀時にしがみついた。

高杉はかがみ、少年を問いただした。

「お前、なんでこんなところにいる？安全な場所に非難するよう指示が出てるはずだろ」

少年は難しく思いながらも、かぶりを振った。

「父ちゃんを…探しに、来たんだ」

きつと戦争に出た父親を探しに来たのだろう。

「分かったから、俺たちから離れんなよ」

銀時は少年を背負おうと身を寄せたが、少年は抵抗した。

「オイっ」

「いるんだ！」

か細い声で叫んだ。

「父ちゃんか？」

そこでまたかぶりを振る。

「オイラを…オイラをつ」

「はあ？ ゆっくり喋れや」

「オイラを護ろうとしてっ…」

なんとなく予想はついていた。
少年が指差した方向に…。

「修太郎オオオ！！」

第三百十話 人の間にいて人間（後書き）

銀：おーい、よく聞けエ。今日は「KAMUI」第130話を記念して「カイジ」とコラボすることになった

神：マジアルか。ついに香川照之と共演できるアルか！

新：ちよつと待てエエエエエ！！

銀：なんだよ

新：なんだよじゃねーよ！何勝手にコラボしようとしてんの！？便乗しすぎだろ！！

神：だって香川照之好きだし

銀：だって明日公開だし

新：宣伝！！？つーか他の宣伝する前に自分らが頑張れよ！！

銀：つーわけで俺たちはこれからクズ共を応援していきます

新：「KAMUI」を頑張れエエエ！！

第百三十一話　クソくらえな人生（前書き）

この話にて、過去編完結！

第三百一十一話 クソくらえな人生

「修太郎オオオ!!」

銀時と高杉は少年の指した方向に横たわっている修太郎を見つけた。銀時はゆつくりと修太郎を起こした。

彼の体は大量の血にまみれていた。弾丸か、斬られたのか損傷が酷く、分からない状態。高杉はそんな彼の体を気にせず、胸に耳をあて息を確認した。

「…なんとか、まだ意識はあるようだな。急いで戻るぞ」

「ああ」

銀時が修太郎を担ごうとした時だった。

「……いい」

「え？」

修太郎の口元が少し歪んだ。

「もう…いいじゃき」

荒い息に紛れ、なんとか声を出している。

「何がだよ、何がいいんだよ」

焦る銀時。だが危険な状態であることに変わりはない。

「撃ちどころが…悪かったんじゃ。もう、いい。もう無駄じゃき」

高杉は黙ったままだった。きっと、おおそのこと把握していたのだろう。

「諦めんじゃねえよ。絶対死ぬな」

それでも銀時は、口で抵抗する修太郎に構わず担いだ。

「おろすんじゃ、銀時…。わしゃ、ほうっておいていいんじゃ」

「もう喋んな」

「わしのことはほうっておけ。…わしなんか構っちゃったら、救える命も救えんくなるぞ」

と、少年の方を見た。この場にいる全員がツラくなった。

「…分かってくれ、銀時」

その顔は優しく、銀時を見つめた。

「死んで当たり前、死んで本望な世の中なんじゃ。少年、おまんも生きるんじゃ。この先も、ずっと」

ゲホッと大量の血を吐いた。

「修太郎！」

「…銀時、頼みがある。辰さんに伝えといってくれんか。…わしゃあ人護って死ねるじゃき。これがわしの本望じゃ。それから…辰さんと旅をした時、まっことに楽しかった。ありがとうって…」

「もう喋んな」

「銀時、高杉、桂。仲間にくれて…わしゃ嬉しかった。ありがとう」

彼の口は、もう二度と動かなくなった。

一筋の涙が、地に零れ落ちる。

仲間さえも奪う、これが戦争という顛末だ。

——あれから1ヶ月。

攘夷戦争が終結し、一段落ついたのだ。

まだ各地でゲリラ戦を繰り返している時期もあったが、日に日に薄くなっていた。そして攘夷志士の思想は倒幕へと移り、現在の真選組の標的となる存在になった。

攘夷志士を辞めた浪人たちの帰省ラッシュが始まったのもこの頃だ。上り線、下り線共に混雑。豊橋インターで20キロの渋滞。

「って高速道路の情報かよオオオ!!」

久しぶりに銀時のツッコミが入った。

「何がラッシュだ。ラッシュアワーかコノヤロー」

「アッハッハッ、ええじゃき。ちなみに大阪方面の状況は？」

上り下り共にラッシュアワーです。

「ちゃんと地の文やれエエ!! 5W1Hを意識しよう! 地の文がしっかりやらねーと、この小説終わったのと同然なんだよ! 会話文じゃ成立しねーんだよ!!」

「すみません。…では気を取り直して。」

銀時と坂本は、ある別れ道の門前にいた。
季節も冬が近づき、寒い午後の日だった。

「…そーか。おまんがおりゃあ面白か漁になると思っちよったんだがの」

「ワリーな。こう見えても地球が好きでね」

と、あっさり言う銀時。

「宇宙でもどこでもいつて暴れ回ってこいよ。オメーにやちまい漁なんざ似合わねー。でけー網、宇宙にブン投げて星でも何でも釣りあげりゃいい」

「…おんしゃ、これからどーするがか？」

「俺か？そーさな…」

空を見上げてこう続けた。

「俺アのんびり地球で釣り糸たらずさ。地べた落っこっちゃった流れ星でも釣りあげて、もっぺん宙にリリースよ」

「えらいエゴイズムじゃな」

「オメーに言われたかねーよ。このエゴイスト」

アッハッハッと坂本の抜けた笑い声が高鳴る。

「…だけど、少し寂しくなるな」

「そーじゃか？わしがおらんでもヅラと高杉がおるきに」

「アイツらは俺なんぞに構わずアイツらしく生きてくんじゃねーか？だから俺もテメーらしく真っ直ぐ生きるだけよ」

すうつと冷たい風が吹いた。

「銀時、元気でやるんじゃよ」

「お前もな」

「寂しゅうなったら、いつでも呼んでええから」

「多分それはねーな」

「なんだったら、モーニングコールしてもいいきに」

「それもねーな」

「おやすみコールもしていいきに」

「絶対ねーな」

「5分おきにメールしても…」

「結局オメーが寂しいんじゃないかアアア!!」

最後にツッコミ。

「アッハッハッ、達者でなア！」

背を向け手を振る坂本。それを見届けると銀時も背を向け、反對方向を歩き出した。

第三百三十二話　そしてふりだしに戻る

――時は移り変わって現在、万事屋。

「…そいつがどうかしたのかよ」

全て思い出した銀時だったが、表情はなんらいつもと変わりはない。

「わしゃ、修太郎の死に際にはおれんかったがちゃんと覚えちやるんじゃ。金時、おんしもじやろ」

「うん、なんで俺の名前は覚えてくんないの？」

「その中岡さんって人、坂本さんの旧友だったんですね。意外です、その人のことはちゃんと覚えているなんて」

釘を刺す新八。

「…で、用件とそいつの関連性は」

あぐらをかく銀時。

「春雨」

「あ？」

銀時はもう一度聞き直した。まさかと思っただ、坂本からその言葉が出るとは誰も思ってもみなかった。

「じゃから、春雨」

真剣な表情を変えず、もう一度答える。

「春雨って、食べるやつ？」

銀時がはぐらかす。銀時自身も最近色々あり、その言葉は耳にしたくなかった。いつもうるさい神楽も黙ってしまった。

「…金時、わしゃ今商談の話を春雨に持ちかけてるんじゃ」

「マジかよ。つーか金時じゃねーって」

うん、と頷く坂本。

その表情からにして、「冗談とはいえない。

「何か目的があるんですか？」

新八が尋ねた。

「そりゃあるぜよ。コレがたんまりと入る儲けモンじゃ」

坂本はマネーサインを示した。

「なんだよ、悪の取引みてーだな。そーいうのはパス」

「報酬たんまり欲しいんじゃなか？」

「「「ほっ……」」」

報酬とかお金とか、そういうのに目がない万事屋。

「だけどよ、春雨と修太郎がどう関連してんだよ。商談持ちかけて
仇討ちか？やめとけやめとけ。そんなの飛んで火に入る夏の虫同然
だよ」

「またエリザベスみたいになるの、受け合いネ」

その時、ずっと黙っていた陸奥の口が開いた。

「…頭、ここははつきり入った方がええじゃき。余計な言い草つけ
ちよると進む話も進まないきに」

「そうだそうだ。要は何だ」

「要は…」

真剣な表情に切り替える坂本。それに応じて皆も真剣な表情。

「要は…」

固唾を呑む一同。

……

「要は」「早く家やアア！！どんだけ行数ムダにしてんだ！！」

銀時の蹴りが入る。

「すまんのう、要はわしの商いの手伝いをして欲しいんじゃ」

ドカツ

もう一蹴り入れる。

「誰がてめーなんぞのパシリになるかア！嫌だよ絶対」

「いただだっ！金ば欲しいんじゃなか？」

「喜んで手伝わさせていただきます」

金で釣られたアア！！

第百三十二話　そしてふりだしに戻る（後書き）

銀：なあ、いつ終わるんだよこの小説

神：わかんないアル。史上初のまとまりのない小説ネ。なんかふわふわして終わりアル

銀：そうだよな。あらずじ読んでバックしてく読者多いもんな。一体何がしてーんだコイツはみたいな

神：ただの馬鹿ネ

銀：実際、ここで俺たちがとやかく言ってもムダだしよ、いつそのこと作者代えたらどうだ？

神：それグッドアイデアネ！

銀：うし、じゃあ次回からは作者変更でお届けしまゝす

新：ちよつと待てエエエ！ないから！多分ないから！！

第百三十三話 マークシートをなんかの柄にして塗る奴いるよね（前書き）

銀：作者、いろんなサイトに名前隠して進出してるって

神：マジアルか。いつまでも目ざとい奴ネ

第百三十三話

マークシートをなんかの柄にして塗る奴いるよね

春雨総監督室――

「何か用ですか、ほうしゅう鵬郷大佐」

「遅いな、神威」

「何話ぶりの登場だと思って、昨日寝れなかったんです。なんてね」

鵬郷大佐と呼ばれた、春雨きつての悪党総監督。前の総監督が追放されたとかで、急遽格上げになった春雨第八師団団長である。とはいえ鵬郷大佐は神威と同位的関係にあったため、今更敬語を遣うのはおこがましいと思うのであった。

「神威、お前も相変わらずうんえ元老からの命令を逆らって好き勝手やってるようだな」

「別に好き勝手やってるっていうよりも、むしろ補正してるって感じかな」

「ふざけおつて。身の程知らずだな」

「つい最近総監督に昇格したアンタにとやかく言われる筋合いないね」

ピリリとした空気が流れる。お互いの心境が読めぬよう、笑顔で閉

ざしていた。

「…分かってないようだな、神威。今回の件については手荒な真似は許さんぞ」

「地球のカンパニーをひとつ撃ち落とす、そんな阿漕な真似は俺にはできないなあ」

「そんなこと言ってられるのか？今まで何度も逆臣しよってからに、もう後はないぞ」

「そうなったら俺がこの春雨を撃ち落とすよ」
カンパニー

鵬郷大佐は得意気に鼻を鳴らすと、神威に去れと命じた。

「…地球にでも愛着が湧いたか、神威」

愛着、ねと呟く後ろに口を横に歪ませる鵬郷大佐がいた。

地球に愛着するような、未練がましいことはない。心境にも、妹にも、ちゃんと切り替えがつかなくては春雨になんかに駐在できない。

ドアを閉め、またいつもの、判らない表情に戻る。

「鵬郷の野郎が総監督なんて、元老も何考えてんだかね」
うえ

壁にもたれかかり、神威を待っていた阿伏兔。

「元老を黙らせるには、まず根元から折らないと」
うえ

「すつとこどつこい！また団長の変な癖が始まったよ。俺ア知らないよ」

社交的にでもなったというのか、自由奔放な性格は変わっていない。

「ああ、それと」

ピタリと足を止めた。

「高杉アイツと協定を結んだって、言った？」

「はあ！？聞いてねーよ！何の協定だよ！」

いきなりの発言に戸惑う阿伏兔。

「協定、と言うよりも悪巧みって言った方がいいのかな。ウン、とにかく協定」

「え、だから何の！？」

「悪徳商法」

「ああ！？」

「なんてね」

と言うと、神威はそのあと何も言わず歩いた。

第百三十三話

マークシートをなんかの柄にして塗る奴いるよね（後書き）

新：銀さん、前書きのことって一体？

銀：その通りだよ。野郎はある野心のために。。。や。。。に進出してんだよ。きっと見てる人も薄々勘付いてんじゃね

神：ついに尻尾を出しやがったな。どんだけ次郎長に構ってもらいたアルか！

銀：そうだ、奴は忙しいんだよ！作者もいい子ぶってんじゃねーよ！

新：オイいいい！！いい加減にしろ！そして次郎長さんに謝れ！！
だいたい主旨が変わってんでしょ！作者の悪口を言うのはいいけど
他の人様を巻き込むな！！

神：うつさいネ！これを読んでも全ての読者様、およびNOS作家様は神様アル！神様なくてはイエスも成り立たないネ

新：どこの宗教？

銀：野郎の野心はどーでもいいんだよ。腐るほどどーでもいいんだよ

新：…じゃあこのコーナーを設けた意味がないじゃないですか

神：つまりアル

銀：これからもよろしく願いしますってことだ

第百三十四話　日本シリーズお疲れ様でした！（前書き）

銀：まさか中日が負けたアな

新：え、銀さんドラゴンズファンだったんですか！？

銀：ちげーよ、見てただけだよ

神：私も日本シリーズは食い入るように観てたネ！ロッテと中日！

新：いや、それ今年じゃねーから！

銀：試合長引いて俺、次の日の始発で帰ったからね

新：もういいから！本編をどうぞ！

第百三十四話 日本シリーズお疲れ様でした！

快臨丸艦隊内――

「すまんな、仕分けお願いしてもうて。人手が足りんかったんじゃ」

「仕分けっつーか雑用じゃねーかコレ!!」

快援隊用の作業着を着用した万事屋三人。

陸奥を前に、グチグチ言ってるのは勿論銀時。

「銀さん、坂本さん手伝ってくれてすぐにOKしたじゃないすか」
「だけどよーと鼻をほじる。」

「銀ちゃん、忘れたアルか。万事屋イコール雑用という公式を」

新八と神楽はつべこべ言わず、さっさと仕分け作業をこなしている。

「そうだよなー。もう教科書に出てきてるくらいだもんなー」

「何の教科だよ」

「教科書に載せたくない。。。だよ」

「知らねーよ!そんな番組!」

漫才をしている三人を背に、陸奥はため息をついた。

「とにかく、口はいいから手を動かしてくれ」

「わあつたよ。男に二言はねエ、さつさと終わらせて金庫の在処を教えてくれれば文句も何も言わねーよ。あと暗証番号もな」

「言うわけないじゃろ！」

しめにそう吐くと、陸奥はその場を立ち去った。

薄汚いカンパニーの倉庫でしぶしぶと仕分けをする万事屋三人。

大量に積み重なったダンボールの一個一個に文字が書かれているのでそれを分ける、単純な作業だ。

「一体何が入ってんだ？」

銀時は不思議そうにダンボールを眺める。

「私も気になってたネ」

神楽も足を止め、銀時の横へ寄った。

「まさかとはアイツに限ってアレとはないよなア」

「アレってまさか、アレですか？」

新八も食いつく。

「オイオイ、冗談じゃねーよ。こんなモン、犯罪の片棒担いでる様じゃねーか」

「マジアルか。じゃあ一刻も早く警察に通報するネ！お巡りさん、もっさんが麻薬運んでますよーって」

「バツカ、ちげーよ」

「え、麻薬とか白い粉とかだと思いましたよ僕も」

まさかの発言に首を傾げる新八と神楽。

「このアルファベット、一つのダンボールに”S”か”M”しか書いてねえ…。つまり」

息を呑む二人。

「Mの箱にはM嗜好のエロビデオ、Sの箱にはS嗜好のエロビデオが入ってた。しかしアイツに限ってS嗜好のビデオなんて」

「なわきやねーだろオオオ！！」

新八のかかと落とし&シャウト。

「どーいう風にそんな考えが出るんだアア！SとかMが出てきたらアンタいつもそーいう方向に考えるのか！？」

「私はしがいいアル。しの方が多いネ」

「違う！そういう意味じゃないから！」

銀時は頭をさすりながらダンボールに貼ってあるガムテープを剥がし出した。

「だったら割って見るしかねーだろ」

「ちよつ、銀さん！何開けてんすか！また怒られますよ！！」

「せーな、世の中には知る権利つつーのもあんだよ」

ビリビリとガムテープの裂ける音。

「どれどれ」

中を覗く三人。

軽くもなく重くもない。
その正体とは…

第百三十四話　日本シリーズお疲れ様でした！（後書き）

銀：俺は落合監督が好きだアアア！！

新：まだ語るつもり！？

神：CHAN投手ううう！

銀：でもよ、日本シリーズもいいけど世界バレーもきてるな

神：荒木のバックアタックに感動したネ

銀：日本もよくやったよ。俺としてはラインズマンが…

新：もういいわアアア！！いつまで語るつもり！？

第百三十五話 教科書を捨てるからバカなんだ（前書き）

後書きにて、お知らせがあります。

第三百三十五話 教科書を捨てるからバカなんだ

銀時が開けたダンボールの中には、数冊の藁本が積み重なっていた。

「なんですかコレ」

「紙じゃなくて障子紙みたいアル」

昔の古文が書かれていそうなこの本。一冊一冊を紐でくくってある。だがそれは、銀時に見覚えがある物だった。

「…どうしたんですか、銀さん」

黙ったまま硬直している銀時を不思議に思う新八。

「いや、コレ…」

一冊取り出してみる。

冷静などいらなかった。パラパラっと中身をめくる。

そして食い入るように見つめる。

「銀ちゃん、ジャンプ読む時より見入ってるネ」

傍らで神樂が呟く。

コレを知る人なんて、ほんの僅かだ。

「銀さん、分かるんですか？」

目を見開いたまま、本を閉じる。

紛れもない。

これは教科書。

吉田松陽による思想的文章が書かれた、本。

「なんでコイツを辰馬が…」

あの時の火事ですべて燃えてしまったと思った。持ってる人間は桂に高杉。それ以外の人間は…

内容も、覚えてる限りすべて同じだった。

銀時は二冊取り出すとそれを新八と神樂に渡した。

「それ、かつぱらっとけ」

渡した本を指して言う。

「ええ！？いや、ダメでしょう！？」

「盗みなんてそんな汚い真似、嫌アル！だいたいこんな古臭い本なんかいらぬネ」

拒否する二人だったが、銀時は何も言わず再びダンボールにふたを閉め、仕分けを始めた。

「……」

顔を合わせる新八と神楽。こんなものをもらって何になるんだと思っただが銀時の見せる真剣さからこれ以上のことは言えなかった。

「昼じゃき。昼飯食ってもう一頑張りじゃ」

陸奥と大量の弁当をもった商人たちが現れた。

「やったネ！お腹ペコペコアル！！」

弁当に飛びつく神楽。

「銀さん、あの」

「あ？」

新八はさっきからずっと気になっていたことがあった。

「この教本、どうして僕らに渡したんですか？」

「お前さ、その中身理解できるか？」

手渡された弁当を開け、割り箸を割る銀時。

「中身って…」

新八は改めて表紙の一枚をめくった。

行書体でびっしり埋め尽くされていたのだ。

「まさ…に、これ？学びんと…す？」

古典的な文を音読してるかのように難しい。

「わかんねーだろ？」

にやける銀時。

「難しいですね」

「その教本を創ったのは俺の師匠なんだよ」

「銀さんの…？」

驚いた。まさか銀時自身の口から出るなんて。

「戯れ言しか言わねー頑固野郎だったよ。だから俺もその教本の中身なんて理解してねーよ」

なんて師弟だ、と思う新八。まあ銀時の性格からして、先生の話を見当がつく。

「銀さんが理解しないで、僕らが理解したって意味ないじゃないですか」

「…そーかもな。だけど今の俺にや必要ねえこった」

新八は視点を教本に戻した。

「でも、なんでこの教本が世に出回るようになったんですか？そんなに偉い人なんですか？」

「どーだったかねエ、ただの田舎の学び屋にすぎねーよ」

「じゃあ何で…」

「…大方、幕府の遊離だろ。ったく、何考えてんだかわかんねーなア。攘夷志士後方支援だのなんだの、どいつもこいつも胡散臭エっつーの」

白飯を頬張る銀時。

「銀さんはまだコレ持つてるんですか？」

「あ？んなモン、ラーメンこぼして捨てちまったよ」

「ええええええ！？こんな大切なもの、ラーメンこぼして捨てたアアア！？桂さんは大切に持ってたのに！？」

「ああ、俺も持ってたら持ってたで危うく電波バカや中二病患者になるとこだったわ。捨てて正解」

ばさぁつと新八は教本を地面に叩き落とした。

「そんな危ないこと書いてあるのコレえええ！！じゃあいりません！返しといってください！」

強引に教本を押しやる。

「なんだ新八。おめエ強くなりてーんじゃなかったのか？」

ピタリと手が止まる。

「おめエら前に言ってたよな、強くなりたいて。結果強くなる方は自分自身で考えて強くなるんだと、俺らはおめエらのインストラクターだと」

「言っていましたよね。でも正直、誰からも見放されたっていうか…」

「まあ悲観的になるなよ。一応は俺もコイツを傍らに教養してたんだ。少しはそれなりのヒントがあるんじゃない？」

ヒント…

その言葉が胸に突き刺さった。

「うし、じゃあ再開すつか。今日はあくまで報酬狙いだからな」

そう言い残すと銀時はまた持ち場へ戻った。

第三百三十五話 教科書を捨てるからバカなんだ（後書き）

銀新神：「KAMUI」、20万アクセス突破アア！！

新：す、凄いじゃないですか！

神：物好きもいるもんアルな。こんなペテン師が書く小説、読むに時間の無駄ネ

銀：振り返れば色々あったもんだ。本編被りに完結詐欺、下ネタ炸裂にR指定破り、あらゆる逸材の中傷に切腹：

新：いや切腹はねーだろオオオ！！それこそ本編被りだろ！！

銀：うつせーなア。俺はな、ペテン師作者を蔑んでんだよ。わかるか？「KAMUI」だけじゃねえ、他の作品にもあった幾多の不祥事をここに持ってさらけ出し、懺悔させようという企画だ

新：いや、もうコレ20万アクセス突破記念とかから外れてるじゃないすか

神：いいアルか？ペテン師作者の小説を読んでくださる皆様にも意見を出す権利があるネ

新：は！？それってこのコーナーを飛び越えての本当の規格外！？

銀：読者の生の意見も聞くべきだ。ありきたりな感想はもういらねーんだよ

神：20万アクセス突破とかに浮かれてるペテン師作者にGYAF
UNと言わせる絶好の企画アル

銀：打倒ペテン師作者！選り優れた作家集まれエエエ！！

新：いや、作者打倒したら誰も書く人いませんよ！

神：作者の代わりなんてたくさんいるネ

新：ちよつ、本当に本編と被るつもり！？

銀：被ってねーよ。勝手に向こうが被ってきやがったんだ。ペテン
師作者を打倒する企画は100話越えてから上がってる話だし、A
Cネタも遡れば俺たちの方が先だったし！

新：まだ気にしてたのかよ！！もういい加減にしろオオオ！！いく
らペテン師作者と名指されても、小説を作って来た仲間じゃないで
すか！そりゃこの小説の代わりになる作家さんはたくさんいますよ。
でも、ペテン師作者の代わりになれる人は…誰もいないんですよ！

銀：そりゃそーだな。だってペテン師だもん

神：誰が詐欺師に肩入れしたいアルか

新：そーいう意味じゃねーよボケえええ！！

銀：もう分かってるよ！俺ちゃ所詮借り物に過ぎねーんだ。だけど、
このにじファンに生きとし生けるすべての作家、そしてそれを応援
してくれるアンタらこそがこのペテン師の糧となり支えとなっ
てんだよ

神：そーいうことアル

銀：じゃあ次は40万アクセス突破した時に！

新：これからもペテン師作者ともども宜しくお願いいたします！

第三百三十六話

マタニティーブルとマリッジブルは違っからなって知っ

お久しぶりです

第三百三十六話

マタニティーブルーとマリッジブルーは違っからなっって知っマ

「はアア！？こんなにやって報酬こんだけ！？ふざけんじゃねーよ！！ゴルア！！」

坂本の胸ぐらをつかむ銀時。それに身を任せゆらゆら揺さぶられる坂本。

「すまん金時。実は快援隊も今までにない投資をしちよったのう、赤字覚悟じゃけん。だからこんだけ勘弁してくれなア？金時達の良心に甘えたいんじゃ」

「良心なんかねーよ！！チキショー、俺達騙しやがって。しかも金時じゃねーし！」

諦めたのか、坂本の胸ぐらから手を離れた。

と、同時に出る吐瀉物。

「よ、酔い止め飲むの忘れたきに…オエッ」

背中をさする陸奥。

「でも、今までにない投資って…何をしたんですか？」

新八の問に陸奥が代わって答えた。

「…実はな、先週にある巨大組織機関と取引を行ったんじゃ。もちろん互いに利益が募る話じゃ。で、その投資話がさっきおまんらが仕分けしてくれたブツを売り、規格を宇宙彼方に広げていくこと。損失がでかい分、利益もでかい。一世を風靡する大掛けなんじゃ」

「そのブツってのがコレか」

さつき新八が地面に叩きつけた教本を懷から取り出す銀時。

「おまん…！何故それを」

「全宇宙がこの一冊に風靡されるってのか。ハッ、腐った話だぜ」

鼻で笑う銀時。

「わしもその和綴じに何が書されてるのかはわからん。ただ一つわかるのはその著者が地球人であり、思想家であつたことくらいじゃ」

「陸奥さん…、もしかしてそのある巨大組織機関って…」

「薄々勘付いてるようじゃな。描いた通り、宇宙海賊春雨じゃ」

「春雨…！」

その言葉に反応する神楽。

「辰馬ア、利益の話になるとことん目がねエのな。春雨なんて阿漕な連中が集まる所なんて」

「わしが求めちよるのは利益じゃ。だって春雨ってなんか美味しそ
うじゃなか！？うまそーな匂いがプンプンするぜよ」

酔い止めが効いたのか、悠長に話し始める坂本。

「何がうまそーな匂いだ！しねーよ！！悪臭しかしねーよ！！」

「金時、わしゃ利益のためなら、仲間のためなら、友のためなら取
引先一つ潰してもかまわん」

「？」

真剣に話す坂本に、名前の訂正なんて言えなかった。

その潰す相手が春雨。

「…バカだろ、とことんバカだろ。潰す？無理無理。命いくつあつ
ても足んねーよ」

「戦力で潰すなんて言ってないじゃき」

「あ？」

ほくそ笑む表情の裏側に、何を企んでいるのか。
春雨の内部事情は幹部だと記憶を捏造された時にだいたいは把握し
ていた。銀時でも拒む理由はじゅうぶんある。

「坂本さん、もしかしてアナタ…」

新八は薄々勘付いているようだ。

どうして万事屋で修太郎の話をしたのか。

その理由がわかった。

「月並みなこと言うじゃけん、思想家だの幕府など、もう今の世の中にはいらんきに。最先端の先頭は走らなあかんのじゃ。わしのこの船にはいらんガラクタも積んであるけど皆の未来も積んであるんじゃない。わしゃ、男として誓った約束は守らんとダメじゃ」

「辰馬ア、俺アてめーのことただのバカとしか思ってたねーよ。何考えて俺達働かせたり取引先潰すって言ったりしてんのかわかんねーけどよ、俺はてめーが間違ったことをしようとは思わねエ。だからきっちり分け前よこせよ」

「金時…」

「銀時な」

快臨丸は着々と春雨に近づいている。

第三百三十六話

マタニティブルーとマリッジブルーは違うからねって知っ

銀：ん、作者生きてたのか

神：今日、前立腺ブレーキで大爆笑してたネ

銀：ああ、拙者をスキーに連れてつての回ね

神：作者の前立腺が折れればいいのに

銀：そうだよな、そうしや一発で昇天なのにな

新：ちよつと待てエエエ！！！！作者性別女だから！前立腺なんてないから！

銀神：ええっ！！

新：いや、何驚いてんのオ！？

第三百三十七話

過去は現在に大切なことを教えてくれる

「鵬郷大佐」

「なんだ、神威か」

振り向く巨大に笑顔の神威が尋ねる。

春雨基地内――

飛び交う宇宙船が、春雨へとやって来る。

「いつ、来るんですか？その快援隊ってのは」

「フン、随分仕事熱心になったな神威。それは今までの罪滅ぼしか？」

長くて広い廊下に、ただ二人だけいるこの空間。

「そんなことはないですよ。俺が、罪滅ぼしなんて笑っちゃう」

「クク、俺はな、今までお前の惨事を陰で見に来たんだ。何を企んでるか…だいぶんかったな」

「そいつアご苦労なことで。…それより俺の質問の答えは？」

「明日だ。例のブツを乗せた快援隊がやってくる。まさかここが最後の商売になるとは思いもせず」

顔の表情はより一層濃くなる。

「例のブツって？」

「お前はしらんでもよい」

不気味に笑う横から、神威は続けた。

「ま、それが何にせよ俺には関係ないことですよね」

「お前はただ言われたことをやればいいのだ」

その時、ガタツと扉が開いた。

「高杉……！」

まさかの奴の姿があった。鵬郷大佐は目を見開いている。

「オイオイ、俺に内緒で悪口か？」

「いや、特に何もない」

しらを切る鵬郷大佐。

「また春雨に何のよう？」

「フン、武器を調達にだ。だが…ちと早すぎちまったな。まあいい。調達しやすい中継点でも探すか」

煙管を片手に煙をくゆらす高杉。

ここに用事がないとわかった高杉は部屋をあとにした。

「…相変わらず読めない男だ。おんぼろ船と言っておきながら行ったり来たり、しかも中継点に使うなんて」

神威はくるりと鵬郷大佐の方を向いた。

「そう思いませんか？鵬郷大佐」

「そ、そうだな」

いきなり振られたからなのか、何か企みをさらけ出されるようなことがあったのか。表情が焦っていた。

「そんじゃ、俺はこれで」

神威は扉へ向かった。

「神威、…ちゃんとわかってるだろうな」

「何回聞けば気が済むんですか」

「念には念をだ」

はいはいと手をひらひら振る神威。
大きな扉の錆びた音が鳴り響く。

明日、また会える。

胸がなった。

「団長」

「また待っててくれたの。いつも悪いね」

阿伏兎はケツと痰を吐くと歩き出した。

「俺たちやいつになつたらいい子ちゃんになるんだア？すつとこい
つこい」

「明日になってみないとわかんないよ」

「よく言つぜ」

二人は暗く長い廊下を進んだ。

第百三十八話 商いつてえのは難しいねえ（前書き）

お久しぶりですー！ーそしてあけましておめでとーございます
っ

第三百三十八話 商いつてえのは難しいねえ

「ちょ、辰馬ア、てめーがもたもたやってっからいつの間にか着いちまったじゃねーか！」

快臨丸で一夜過ごした一行だったが、坂本が設定したアラームが壊れていて、起床時間が1時間も遅れたのだ。あわてふためく坂本のせいで、いつの間にか春雨基地へと到着したのだ。

「ハハハ、すまんのう。わしゃてつきり時間あつちよるかと思つておつたがまさか1時間もズレちよるとは、このアラームもいい度胸じゃ」

「それはてめーだろ」

呆れる銀時。

だが着いてしまったものは仕方ない。あの和綴じが入った段ボールを運び出さなければならぬ。

「もう二度と来ることはないと思つてたのに、人生つて分からないアルな」

「まあ仕方ないよ。僕もちろん、銀さんだって嫌だと思つよ」

神楽は重く頷くと再び手を動かした。

「オイ、新八、神楽ア」

銀時は二人に何やら袋を渡した。

「バレたらまた面倒だろ。変装してけよ」

中には見たことのあるカツラ。

「……」

銀時はアフロのカツラを被った。服も商売用の着物でパツと見て気付かれないだろう。新八はバーコードカツラ、神楽はおかっぱカツラだ。

「金時パンチパーマか。似合っちよる」

「銀時な。まあこの際どっちでもいいけどな」

「そんじゃあ銀時」

「結局そっち！？つか分かっててわざと言ってやがったのか！！」

坂本の胸ぐらをつかむ銀時。

「落ち着けモジャ2（ツー）」

陸奥が割って出る。

「誰がモジャだオラ」

「春雨との取り引き時間まであと少しじゃ。さっきSとMに仕分けしてもらったが実はSには爆弾、Mには自爆装置が施されちよる」

「どつちも同じ類いじゃね!？」

つつこむ銀時。

とにもかくにも彼らの目的は春雨を潰すこと。昔交わした約束を果たすため、友がため、仲間のため。

「商いを妨げるような輩は許してはおけん。ましてや仲間を売る輩もじゃ」

真剣な表情の坂本に一躍買った銀時たち。

だが、この取り引きの本当の目的は万事屋一行は知らない。

銀時たちは変装するなり、段ボールを運び始めた。

「こりゃ残業代もでるかな」などブツブツ言ってる傍らに険しい顔をする陸奥。

「…頭、奴らこのことが高杉っちゅう男と関連しとる聞いたらどうなるじゃか」

「さあのお。わしんこと殺すかもしれんなア。アイツはよう頭の切れる男じゃき、判ればきつと理解してくれるろー」

「だといいんじゃが」

三人を傍観するのも束の間、あっという間に取り引き時間が迫ってきた。

「待つてましたよ、快援隊の坂本様」

「！」

向こうの出入口から誰かがやって来た。

「おお、こりやどうもどうも、本郷大佐」

「鵬郷ね」

第百三十九話 急がば回れ

「待つてましたよ、坂本様」

鵬郷大佐が姿を現した。

「何アルか、豚の次は牛ネ。銀ちゃん、私今晚はすき焼きがいいネ」

「バカ言つてんじゃねーよ。俺ア牛丼がいい」

「お前ら何言つてんだ！空気読めよ！！」

とつさに新八がつっこむ。鵬郷大佐は見た目は牛だ。牛の…なんつーか、二足歩行で腕をフックにしたみたいな。

「なんだよ、お前はアレか？牛タンか？」

「そつちでもいいですねってそーじゃないでしょ！！」

「ノリツッコミアル。ナイス新八」

「そこ褒めるところ？」

三人がグダグダ話している最中、坂本と鵬郷大佐は商談行っていた。

「地球からまたよくおいでになって。例のアレはお持ちで？」

「おお、言われた通り運んどいたじゃき」

「それはありがたい」

鵬郷大佐はカンパニーを見るや否や、また話に戻った。

「……ところで、アレは何に使うが？」

「それは関係ないことでしょう？もう用は済みましたので、お引き取り願いますか」

鵬郷大佐はニヤツと笑みを浮かべるとフックの腕を挙げた。

「坂本様、以前あなたのカンパニーが連邦と衝突したとお聞きになりました。見事SAGIは潰れ、連邦に自由を戻したと。だがあなた自身、攘夷派についてますよね？攘夷戦争の伝説の侍然り、攘夷志士後援然り」

「そんなこと言ったかのう？」

坂本は表情を変えない。

「あなた、春雨に何故商談を持ち掛けたのです？」

「もちろん商売のためじゃ。つまらん喧嘩のために来と思うちよるか？考え過ぎじゃ。だいたい、わしは商人じゃ。商人に喧嘩なんて売れるかのう？ましてや剣もないんじゃ」

ヒラヒラと手を振る。

「約束通り、利益は頂くきに」

何やら怪しげなやり取りを少し離れた位置で聞いていたのは銀時らだけではない。フック船長…じゃなかった鵬郷大佐の合図で船ごと打ち落とすために配置された春雨第七師団の神威や阿伏兔も傍ら、聞いていたのだ。

「ねエ阿伏兔、ホントに合図したら皆殺しにしちゃっていいと思う？」

「俺に聞くかよ。団長が決めるだろ普通」

「俺の独断と偏見か」

うーんと腕組みをする神威。

「ま、でもこいつア鵬郷大佐の命令だ。皮肉にも元は同僚、いつの間にか出世して今は上下関係だ。従うにせよしないにせよ、俺はどっちでもいいと思うぜ」

「相手は商人だよ。なんか戦うにしてもみすばらしいってのかな、つまんない」

「かぁーっ、すつとこどっこい！主旨また変わっちゃったよ」

どうしようかと戸惑う神威。合図が出るのも時間の問題。

「ねエ、じゃあここは運で決めよう。俺と阿伏兔がじゃんけんをして、俺が勝ったら指示に従う。阿伏兔が勝ったら指示に従わないで」

「すつとこどつこい！団長オ、アンタってホント適当だなア！」

「はい行くよ。最初はグー」

二人はじゃんけんの体勢に入る。

「じゃんけんポン！」

第三百三十九話 急がば回れ（後書き）

銀：なんかまた新たに連載スタートさせたな、あのペテン師

神：今度は何アルか、TAKASUGIアルか？NARUTOアルか？

新：最後の思いつきし違うから！万事屋冠連載じゃないですか！待ちに待った！

神：別に待ちに待ってないアル

銀：おせーんだよ！準レギュラー掘り下げる前にレギュラー掘り下げろってんだ！

新：お前ら普通に喜べよ！！そのうちぬら魂みたいに放置されるぞ！！

銀：放置？何を言ってるんですか。ぬら魂はな、終読時間が80分という1話のスケールがでーんだよ！KAMUIの4話分なんだよ！その辺の事情を知れ

新：そんなことしりませんよ！

神：そんじゃあまたアル！！

新：強引に終わらすな！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286q/>

KAMUI

2012年1月8日00時45分発行